おーい、柿の木よ

増補別冊

戦中戦後 ひとつ校舎に六年間

川越高校第三期生 遺稿の文集

戦中戦後 ひとつ校舎に六年間
川越高校第三期生 還暦の文集

おい、楠の木よ

増補別冊

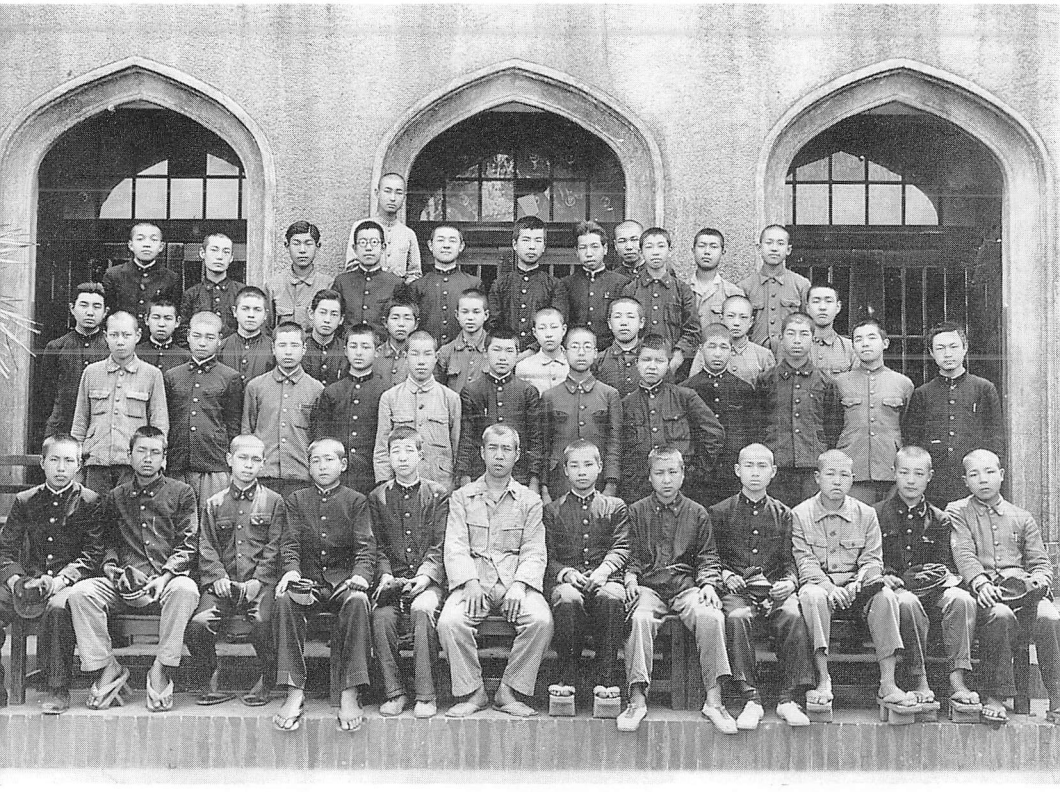
「あとから出てきたアルバム」から

木造校舎と講堂
（中　秀男撮影

「日展」見学
（S 23 1学期）上野・都立美術館前で
23.4に着任された木村先生と24.7
に定時制に行かれた松田先生が写っ
ている。大沢寛先生の作品が出展さ
れたので学校で見に行った記憶もあ
る。

11年D組　記念写真

（S 24　講堂前で）



関根憲　佐々木雄　高橋信　加藤敏
柴田　斎藤守　松本進　村山祥
阿部新　岡田和　小林堅
佐久間　牛窪（関根）西
比留間　大沢米　大沢弘　中村喜
町田　加藤康　奥平　川崎
水村哲　日新　山下　掛原先生
高橋光　五十嵐統　塩野　永島
小島　本田　沢田　原泰
飯田宏　斎木　野口　豊田
小熊　中沢　柳沢　三友
原武　喜多　中秀
根岸

各部　記念写真

郷土班

(S 21.春)…3級上の卒業記念
最後列4人と前列左右6人は他学年
中列→白井先生、内沼、君塚、小川章(1人)中秀
中列続き→赤田(2人)沢田、杉本、益子
最前列→大護先生、木村冉先生、原田先生

物理部

(S 25春)高2？　1級上の卒業記念か？
後列→(5人)森岡(弟？)、関口、○○、平岡義
前列→○○、山崎さん、大川先生、岸 智、大山

物理

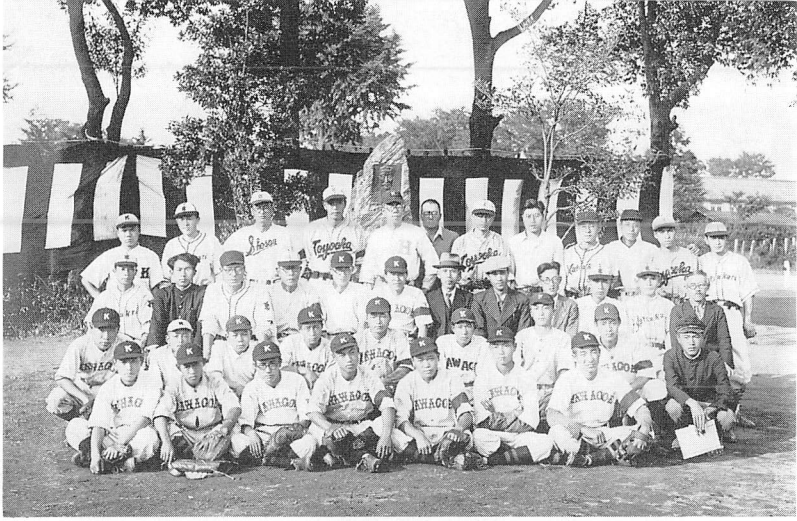
(S 24春)高1…2級上の卒業記念らしい
3列目→中沢、田中崇、奥平、○○、大沢弘、中 秀、
前列中央　山崎さん、那須先生

英語

(S 26春？)矢口、西川、野口先
生徒中央 新井澄→新井涼、小

グランドが大きく見えた青春時代

野球部

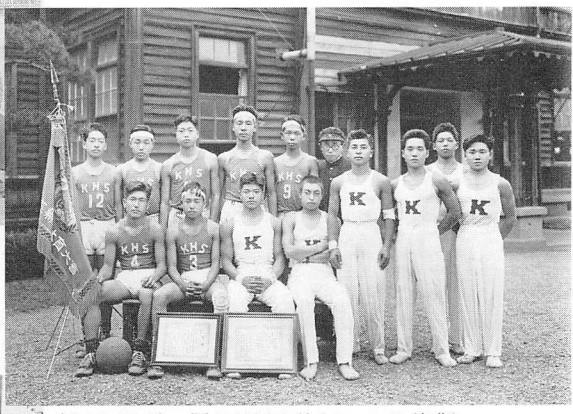


(S23秋)飯田先生追悼試合　豊岡物産その他の先輩選手の方たちと。ハンチングは白井先生
2列目左→川合(2人)、岡田(1人)、細谷
前列左→(1人)浅井、谷(2人)、柴田、小野、菅間

バレー部

(下級生) ⟶ 阿部新
熊、遠藤、桃井、○○、石川先生、中田、西海、吉田

篭球部／体操部



(S25.12.3)…同じ長屋の仲(カッコは後輩)
後左→(武田)平井、沼田(斎藤、竹内)、杉本
(毛須…)
前→石田、新井治、新井澄、長江、右端は牧田

旧ブルドックス

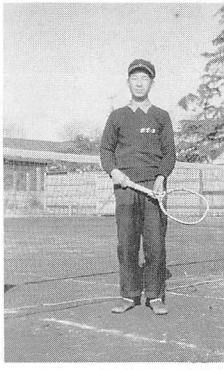
対 川越キリスト教会青年会
(S35.9) 第1中学校校庭、撮影、松村
後→府瀬川、丸田、長島、1人、斎藤、小熊
後続き→竹内、高橋光、3人 山下 3人吉崎
前→宇都野、小島、西川、1人、司祭、堀、益子

「試合は惜敗でも応援は圧勝だった」

大川応援団長（S25.7）大宮球場・対熊高戦 右端白シャツは菅間

50年後もまだまだ現役
顔振コンサートの菅間
（H9.5.10 顔振峠）

（S24頃）
高橋 阿部 長江
木村先生



（S24秋 高2）
テニス日本No.1
岡田立彦

飯田先生の碑 →峰岸、中、三友
岡田立、関根憲、水村哲

運動会スナップ →稲生、丸田（岩沢）
（25.10.7） 斎藤清、越、奥平
竹内達、橋本、斎木

塩入、中、長谷川
原島、守谷、有山

予餞会「坊ちゃん」(S25春・高2)
→森岡、根岸、菅間、小畑、奥隅、大島
大野哲、飯田清、山崎(2人)峰岸、守谷
市村　大川　川合　奥田

3→鎌田、横田、岩沢(丸田)、笛木、細谷
松平、渡辺幹　畑
村、伊藤純、町田、竹内健、津坂、根本、谷、橋本
清水正

高山恵介・ハワイアン・バンド
→高山、高山弟、阿部新、駒井昭、前田

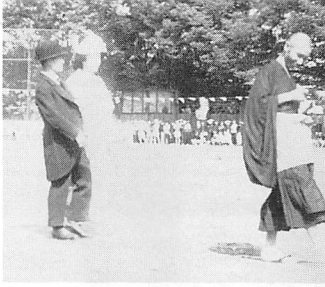
階段教室横　(S22.3.5)
→松村、西海、水村博
長谷川、中島正、村山祥
半田　市村

美術部　(高3)
→大野良、小鷹、伊藤明
秋山、大沢寛先生、小畑

花婿ドン、練習の成果？

大川夫妻

本番(左S35)と練習(右S25)



(S25 運動会)
仮装行列で優勝の
「蚤の夫婦の仏前結婚」
新郎・大川 新婦・朝久野
僧侶・川崎

11Aの教室で (S25.3.25)
→清水良 菅間 小野 内海
→大川 新井澄 青木勘 新井淙 府瀬川

卒業の日
(S 26.3.6)

校門前→小島、牛窪(関根)、中 秀、新井治、中沢、浦部、本多
岸、中島正、杉本、田口 (上・石田 深井)
講堂前→牛窪(関根)、石田、深井、中 秀、小島、岸、本多
田口、杉本、中島正、新井治、中沢

山おとこたち

岳の柳下

槍ガ岳山頂の長谷川、岸 智

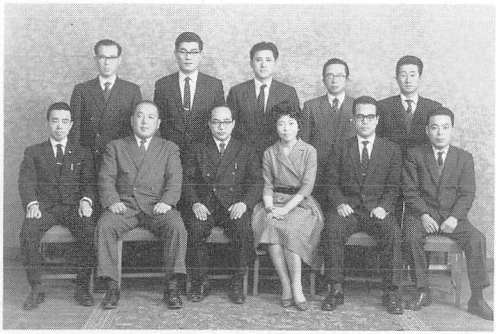
槍ガ岳と岸智

乗山（S 26.5.6）
中(秀) 豊泉 小林洋

有馬山（S 28頃）→高梨、宇都野、青木安

武甲山→新井貞、三友、中 秀

養生活の原島
構 モテてる!!
→豊泉、守谷、中(義)、東



中村夫妻と「むらさき会」（S 36）
後→高橋幸、小島、根本、柳田、塩入
前→畑、大沢米、中村夫妻、益子、宮崎敏

S46.6.6 同窓会寄せ書き
川越福登美にて

同窓会・分科会のアルバムから

川３美術展の
「美術タイムス
No.1（H7.1
No.2（H8.1
No.3（H9.1

編集・レイアウ
松岡章次・他

.2.13 川越 東武ホテル)

二年以上かかった還暦記念文集「おーい、楠の木よ」が、やっと完成。同窓会で配られることになった。当日の朝は雪が降っていた。足が滑って、いつになく遅刻者が多かったが、この文集の吸引力で百三十人！　三期同窓会の最高記録となった。

渡された文集は七百二十ページ。ズシリとした重さに皆ビックリ。当日、クロネコヤマトの竹沢が出してくれた宅急便の特設カウンターは、数をまとめて買った人たちで賑わった。

(上段遅刻)
大川　高橋幸　浦部　松木　田島　比留間　平井　吉田景　柳田

青木勘　小川司　関根(牛窪)　山下　朝久野　高山　江原　奥隅　原島　平岡義　相田　遠藤　村山祥　府瀬川　栗原先生

竹沢　武田　前田　森下　細谷　笛木　岡田　槽谷　五十嵐甫　松平　大野良　小林　山田和宏　荒田　松岡

岩澤　宇都野　荻野　稲生　青山　野口　武長　斎藤守　村山英　中田　中秀　早川　新井貞　福田　金島　奥田　青柳

新藤　潟沼　堀

Ｈ６．文集完成記念同窓

清水　内沼　浅井　角谷　新井　石井　東
小川　浅見　根岸　赤田　五十嵐　水藤　伊村　松村　柴野
池谷　小沢　山崎　君塚　豊田　西川　沼田　加藤　健
桃井　西海　半田　豊泉　柳沢　森田　柳下　丸田　塩入　益子　内海
畑　平岡　泰　橋本　守谷　吉野　小沢　昭　阿部　柴崎　建
菅間　小沼　斎藤　恒　小林　洋　丸田　謙　水口

Ｈ７．三期同窓会

（Ｈ 7.2.26 川越 山屋）

川合　岩澤
菅間　奥田　山下　金島　山崎　道又
府瀬川　浦部　遠藤　大野　中村　春
関根（牛窪）　半田　森下　竹沢　岡田　根岸　中島　平井　宇都野　宮崎　守谷　敏　小川　小熊　章　広沢　武本　根朝　久野
大野良　豊泉　中秀　小島　田島　小沼　新井貞　加藤健　石田　野口　青木
五十嵐統　柴崎建　新井治　堀　内海　新井淙　関根憲　松村　赤田
伊藤純　松岡　青柳　山田和宏　柳沢　丸田謙　大川先生　小林洋　金子武　中義　細谷　金子勇　奥隅
松平　浅見　斉藤恒　沢田　西川　森田敏　柳田　君塚　岸　水口　丸田　邦　新井澄

会場スナップ
→柴田、斉藤恒、大川先生、中村
（床の間は大川先生の隷書）

会場スナップ
→柴田、沢田、沼田、青木、青柳

Ｈ８．三期同窓会

（Ｈ 8.10.19 川越 プリンスホテル

青山幹
加畑
赤田
川合
内海
五十嵐統
山下
大野良
岩澤
小沢
菅間
青木
松平
佐々木
松村
福田
阿部
石井
豊泉
宇都野
新井涼
府瀬川
中島
竹沢
東
浅見
関根憲
水口
君塚
小熊
槽谷
柴崎建
相田
石田
青柳
桃井治
新井
武長
沼田
丸田謙
長島
野口
伊藤明
（十音）
岸
根岸
小鷹
守谷
遠藤
橋本
金島
益子
中田
中義
新藤
丸田邦
朝久野
西川
松本
加藤博
松岡
金子武
宮崎敏
森田重
岡田立
中村
原田先生
大川先生
斉藤恒
山田和宏
新井貞
中秀
加藤健

第２回 川３美術展 同日開催

目の前の県民ミニ・ギャラリーで
→柴崎、青木、手前は朝久野

先生を囲んで

→福田、岸、菅間、遠藤、君塚、中村、青
金子武、斉藤恒、大川先生、中秀、原田

Ｈ９．三期同窓会
（Ｈ 9.10.11 狭山 東武会館）

84人の大集合。写真も２班に。
次期幹事は東上線に決まった。
２次会は新所沢新井淙平のライブで。
ナント半数以上の50人が出席

山田和宏の
名司会で大いに
盛り上がった。

会と同日開催で行われた。

2回 川３美術展
10.16～22
（県民ミニギャラリー）

田、佐々木雄、内海、岩沢富

第１回 川３美術展
Ｈ７.10.30～11.4
上福岡（アート・ミレー）

街ひと話

◆川高三期同窓展
☆上福岡市
終戦の年・1945年に旧制川越中学（現県立川越高）に入学した同高3期生の有志による「川高三期同窓展」が30日、上福岡市上福岡1の画材店アートミレー内「アートギャラリー」で始まった＝写真。
画家の大野良三さん（62）＝小川町東小川＝が油絵の額展を計画しているのを同期生が聞きつけ、「オレにも出させろ」と出品希望者が続出。額展変じて初の同窓展になったもの。大野さんはじめ19人が絵画、彫写、版画、俳句など近作27点を出品した。
素人とはいえ、中にはコンクールで賞を取った人もいて、いずれもなかなかの出来栄え。メンバーは昨年、同期生から募った還暦記念文集「おーい、楠の木よ」を作成。来月4日まで。

Ｈ７.10.31 毎日新聞埼玉版

川中20会(ゴルフ)百回記念大会

四半世紀かけてホントに実現！
H8.9.6 伊香保CC(岡崎城)
9.7 伊香保（さつき亭）
ノン・ゴルフ組も交えて歓談

中村のショット

記念タグ
デザイン・松岡章次

分科会 いろいろ
文集以後のアルバムか

大野良三と川高３期生同

第２回、第３

第３回 川３美術展

H9.10.9～12狭山市
(入間三菱カープラザ狭山・青木勘輔経営)

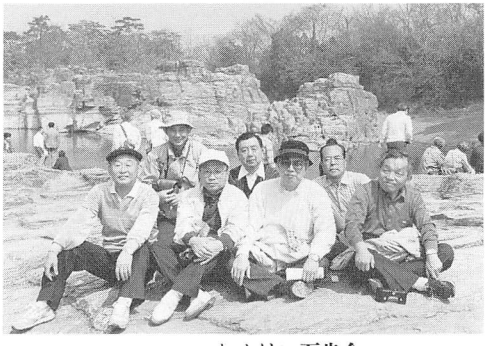
10.8 搬入日 →浅見、遠藤、松岡、宇都野、宮崎、新藤、青木
→加藤健、青柳、大野、原夫人

分科会・小イベント花ざかり。

陸上同期会
H５坂戸(大島屋)
後→中島、五十嵐、宮崎敏
前→東、大川、橋本、平岡

新井淙平宅にて　S37
→松本、吉田景
守谷、新井淙、中島喜
新井澄、平岡泰、川合

れんけい万歩会
H9.4.9（御苑の桜とNHK見学）
→堀、小熊、青柳、宮崎敏、菅間、長島
斉藤、松村、益子、松岡、宇都野



れんけい万歩会
H 3.4(長瀞)
→斎藤弘、堀、益子
宇都野、丸田邦、長島、小熊

リー・テン・マーチ
9.10.10(入間・狭山)
活「稲荷山遠足」「稲荷山歩き」
能組も加わって、14人(青柳写)

毎年10月10日10時に
武蔵嵐山駅に集合、散歩と昼食
平成10年は10時10分飯能集合、
テン覧山ならシックステンだゾ。

スリー・テン・マーチ
H7.10.10（武蔵嵐山）
→糟谷、丸田謙、岡田、西川
松岡、石井、清水、小熊、岩澤

「おーい顔振峠」大集合
H6.6.17～18（顔振峠）
新井澄夫の顔が見える

富士見茶屋旧茶屋お別れ会
H8.10.4（顔振峠）
後左→青柳、小高、大野、赤田、奥田、君塚
斉藤、松村、松岡
前左→加藤健、水口、浅見、岡田、加藤康、竹沢

顔振峠コンサート　H9.5.10
尺八＝武田 ハーモニカ＝松岡
琴＝中野恵子(生田流)
チェロ＝Martin Pabich(ポーランド)企画・司会＝青柳

母校同窓会 総会で校歌演奏
H9.5.11（顔振峠の帰路）
飛び入りで校歌を演奏
ＯＢ大合唱の盛り上がり
→松岡 Martin 青柳

そばの会実験播種
H8.5.2（顔振峠）
「蒔かぬ種は生えません」
蒔いても生えないかも？

カントリー・ウェスタン
H 9.1.22　国立(はっぽん)
大御所藤本精一のフィドル
横田基地の大佐殿も来演
道又咆哮！松岡熱演！

→松岡、道又、青柳、藤本
山田、宇都野
前列→沼田、比留間

野球押し掛け応援団
H 9.7.13～朝霞球場
7.13 対志木高　4：3勝
7.16 対春日部工3：5負
初雁へ進む前に朝霞で敗退
後→柴崎、岩澤
中→川合、浅井、松岡
前→青柳、菅間、柴田

ポーランドのチェリスト
マルチン・ホーム・コンサート
H 9.10.25　川越(阿部宅)
原夫人も伴奏に参加。15人が
生のチェロ・サウンドを堪能。

増補別冊編集会議始まる
H 9.1.18 川越(アトレ)
後→水口、金島、大野、松岡
小林 益子、岡田、松村、青柳
前→西川、阿部、斉藤恒
加藤健、奥田、中村

まえがき

増補別冊刊行委員会　代表　中村生秀

平成六年二月十三日に、川越東武ホテルで、母校の渋谷同窓会会長のご出席のもとに、私たち埼玉県立川越高等学校第三期生、還暦の文集『おーい、楠の木よ』出版記念の同窓会が開かれた。百七十名の寄稿者による多彩な本文はもとより、題字・装丁まで、三期生手作りの、七百頁を超える記念文集が誕生した。ずっしりと重い文集を手にした出席者一同は、刊行までの一年半の労苦も忘れて、刊行を喜んだ。

早速、欠席者や埼玉県内の高校図書館、購入希望者などにも送本した。予想以上に、一読の価値ありとの好意的な読後感を頂き、同窓生諸君からも、貴重な体験を集約した同窓史を刊行して良かったとの声が届いた。もとよりこの文集は、外向けのものではなく、同書の編集後記のとおり、昭和二十年四月に埼玉県立川越中学校に入学し、川越高校に進んで六年間を同じ校舎で勉学を共にした同志が、還暦を機会に、自分たちのために、本音で事実を活写したものである。

この文集を読んで、五十年後にして、初めて当時の各人の生活や苦悩を知り、同窓の輪は急速に拡がった。そして、消息が明らかになった者や、諸事情で前回未寄稿の者にも参加願い、より立派な文集にしようとの声が高まってきた。

平成九年一月には、新しい編集委員会が結成され、文集の増補別冊を刊行することになった。増補別冊は、新寄稿者の原稿を中心に、文集作成の功労者・亡平岡泰之君たちを追悼する文や、新しく消息の判明した同期生からの便り、その後の同期有志によるグループ活動の紹介などを加え、更に、文集と別冊を収めるケースも用意した。きっと創立百周年を迎える母校の記念資料にもなるだろう。

敗戦、復興、高度成長、平成バブル不況を体験してきた私たちは、今また、国際的な経済混乱による予想の難しい社会に生きていくことになると思う。しかし、私たちは健康に留意して、青春の六年間を共にした絆を大切にし、あ

の「楠の木」と一緒に二十一世紀に向け、前進しよう。

最後に、本書は編集後記にも書かれた編集委員諸氏の熱心な活動により完成されたのであり、諸氏の御苦労に対し、心よりお礼申し上げる次第です。

平成十年五月吉日

増補別冊の発刊に際して

平成九年度同窓会　幹事代表　　青木　勘輔

川越高校三期生の還暦文集『おーい、楠の木よ』は当初の予想をはるかに上回る大作となり、あるいはこの種の文集の決定版になるものかと思っていました。ところが、まだまだ書き残したことがある、書いてない人がいるということで、増補別冊を作ろうということになりました。高齢化社会とはいえ、さすがに還暦を過ぎるとぐんと老け込む人も多い中で、この熱意と若さは我が級友ながら、さすが初雁健児の意気を見る思いです。

我々三期生は、高校在学中に母校の五十周年を迎えた記憶があります。今またさらに五十年後の百周年に立ち会うことが出来ることは大変幸せなことだと思います。その大きな節目に『おーい、楠の木よ』の完結編ともいうべきこの本を手にすることが出来たことは、我々の喜びをさらに大きくするものだと言わねばなりません。

増補別冊に寄せられた三十通を超す同期生の新原稿は、増補別冊の目的そのものであり、自ずとその目的を果たし、さらに数多くのお便りを、先生、先輩をはじめ部外の多くの方々からも頂戴しました。そしてさらに驚くべきことは、それらを凌ぐほど多くの、私たち同期生の活躍中の「現況」が寄せられたことです。川高三期生はまだまだ元気です。この元気をくださった先生方、先輩方、後輩諸君、そして多くの『おーい、楠の木よ』の読者の皆様に感謝申し上げると同時に、編集委員、発起人、同級生皆様と共に発刊を喜びたいと思います。

増補別冊編集を終えて

松村祐二

還暦記念文集『おーい、楠の木よ』が刊行されてから三年。増補別冊の編集が発議され、ほぼ一年半を経て、ここに上梓の運びとなりました。まずは、刊行の環境づくりにご尽力くださった刊行委員会中村生秀代表、スタート時の同窓会青木勘輔代表幹事と幹事諸兄、並びに編集に傾注いただいた編集委員のみなさんに衷心よりお礼申し上げます。

なかでも、前回に引き続き編集を引き受けてくれた編集ディレクター青柳兄、同じく宮崎兄、そして阿部、西川、岡田、松岡の諸兄の奮闘には、ただただ感謝これあるのみ。こころから、お礼申し上げます。

同期諸兄の発意で誕生した還暦記念文集はわれわれの思いを結集させ、また再び、青春の情熱を蘇生させてくれました。これを契機に級友の交流はたちまち大きなうねりとなり、この流れの中で増補別冊刊行が発議され、今日ここに誕生を迎えることになりました。

眼目の第一は、前回の文集に間に合わなかった級友たちの原稿を掲載し「還暦記念文集完結篇」にしようとの試みであります。幸い海外に居住する人たちの分も含め約三十編が寄せられ、一応これにて「川越中学三期中隊集合終わり」となりました。

第二は、新資料の発掘、発見であります。編集委員ばかりでなく諸兄の協力により新たに珍しい資料、写真が発掘、発見されました。これにより川中、川高時代のわが「少年H」奮闘の有様がより鮮明になってきました。特に掲載をお許し頂いた当時の教頭吉川静雄先生の「戦中日記」は私たちの受験、入学式などを、私たちとは別の側から克明に記録し、級友たちの記憶を裏づける形となりました。また発掘の写真も数多く出そろいました。

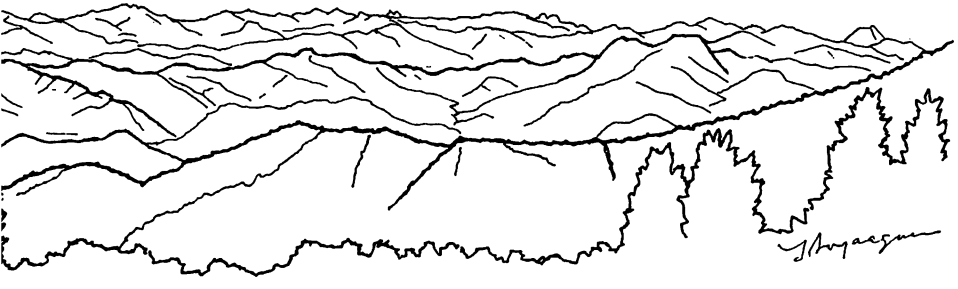
第三は、前回の文集発刊以後、級友間の交流が一層活発になり、すでに長い歴史を誇るゴルフ会ばかりでなく音楽、美術、俳句のサークルから万歩会などなどの記録であります。「日残リテ昏ルルニ未ダ遠シ」と活躍する級友たちの今様「三屋清左衛門残日録」（藤沢周平）はそれぞれの人生の輝きを、お読み取りいただけるものと思います。同窓の諸兄が出来ればこのサークルに参加くだされ、更に豊かに生きるよすがとしていただければ、と願っています。

そして最後に、この増補別冊と前回文集をケースに収め、「文集完結篇」として、母校百周年記念へのささやかなプレゼントとなれば、望外の喜びです。

戦中戦後 ひとつ校舎に六年間
川越高校第三期生 還暦の文集

おーい、楠の木よ　増補別冊　目次

口絵（アルバム）
まえがき　……中村生秀
増補別冊の発刊に際して　……青木勘輔
増補別冊編集を終えて　……松村祐二
第一部「特集・I」
——『おーい、楠の木よ』への声
●恩師の方々からのお礼状など　……8
吉川静雄先生　岡田幹雄先生
椙田英太郎先生　那須大輔先生（代）
大川明治先生　石川正明先生
鈴木睦雄先生　木村信寿先生
横田稲吉先生（代）　原田節二先生
田中正雄先生　北野茂夫先生
平山和子さん　後藤瑛子さん
間中美津子さん
●各方面からのメッセージ（敬称略）　……15
笹崎能輝　石丸　寛　鎌田　斌
島田道郎　小川　正　山田恒雄
磯貝孝子　鹿間恭子　秋山康政
小山誠三　広田一雄　西澤　孝
鈴木秀昭　小林茂吉　長島猛人
水沢　周　高橋雅雄　大山富士夫
庄山　愿　杉林　篤　松田源治
永田和夫　三友久子　越　博子
大野礼子　吉川勇一　田中　魁
●マスコミに紹介された『おーい、楠の木よ』　……30

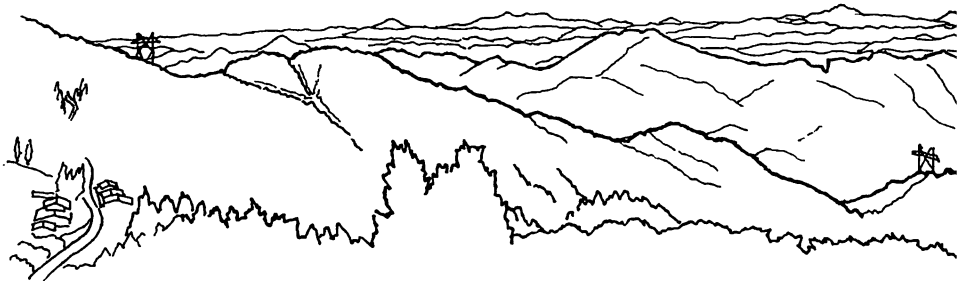


第二部「追悼篇」
——わが師、わが友

横田稲吉先生と飯能……赤田康二 36
那須大輔先生を悼む……佐々木雄司 38
佐藤徳四郎先生に逢うの記……鈴木俊雄 39
故 平岡泰之君を偲ぶ……川合敬三 40
平岡泰之君を偲ぶ……東 敏雄 43
一直線のスプリンター 平岡泰之兄を憶う……五十嵐統祥 44
思い出すこと……平岡昭子 46
(遺稿) 二人の米兵 黄粉事件……平岡泰之 48
一つの釜の茄子 新井澄夫のこと……長江不二男 50
(遺稿) 石原裕次郎のスタンド・イン……新井澄夫 52
永田 正君の追想……浅倉昭 59
永田 正君のこと……森下貞夫 62
石井精治君の思い出……水口重雄 63
小沢昭治君を悼む……清水良平 67
吉野正武君との友好接点……新井淙平 68
級友謙ちゃんの死を悼んで……丹沢鋭次郎 69
青木安さんを偲んで……新井貞夫
宇都野正章 71

第三部「続・青嵐篇」
——川越時代の私たち

仮装行列の思い出……朝久野貞郎 73
思い出……中沢益次郎 74
終戦前後、川中時代の思い出……荒田光男 75
楠の木の独白……平岡義男 77
続、芋高出…反省記……沼田芳造 79



私の中学、高校時代……角谷文昭 81
進路変更と佐藤先生……長谷川栄 82
光陰似（タリ）逝（ク）水（ニ）……安田孝一 86
ご好意に甘えて……吉川紀一 89
戦後埼玉初駅伝……木村定雄 91
青春時代……前田行雄 93
充実と感動の一年間……竹内春男 95
思い出……津坂宗茂 96
青春期の経過……柴崎明 98
美術部の思い出……小鷹邦夫 99
川中・川高の思い出……日新豊 100
川中への思い……細沼利輔 101
川越の思い出……須川賢司 102
消えたバット……菅間昭 104
稲荷山歩き……青柳安彦 106

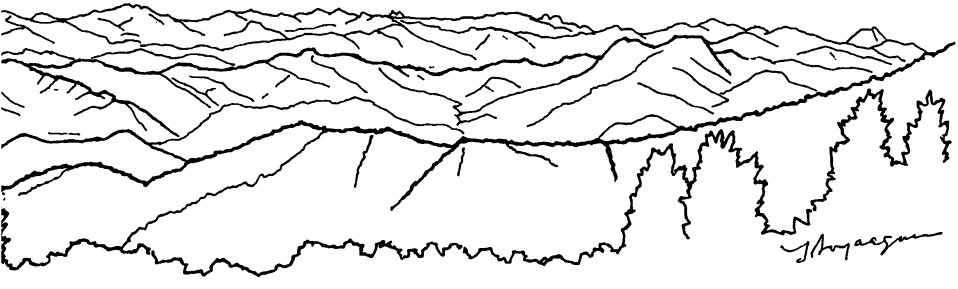
第四部「続・華甲篇」

——還暦を超えた私たち

入学時の思い出とサリン事件……石倉俊治 114
ドイツ近況……馬場尚世 118
ふるさと講座……斉藤恒 120
富める小国ブルネイ……山田和夫 125
この頃の雑感……石井保行 128
文集に寄す……橘田敏之 129
我が青春は悔い多き……原島淡 132
私の略歴……臼井龍 135
お守り……鈴木徹也 136
校歌の歌いかた、歌われかた……青柳安彦 139
俳句　遠野・浄土ヶ浜……宮崎敏昭 148
レクイエム……金島壮行 149
●カタヌマの紹介（記事）……潟沼稔 152

第五部「樟籟篇」

——最近の活動から



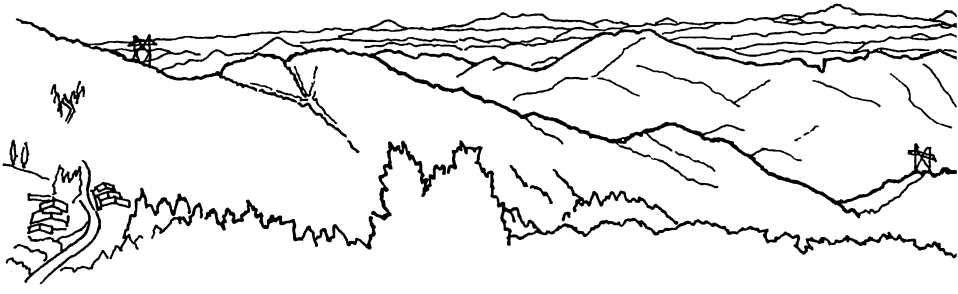
川中二〇会第百回記念大会……山田和宏 154
川中二〇会トピックス・全記録……川中二〇会 155
川高三期生同窓展……大野良三 161
"おーい顔振峠よ"大集合……松岡章次 164
武蔵嵐山スリーテンマーチ……大野良三 166
むらさき会解散の記……宮崎敏昭 166
川高三期生手作りコンサート……青柳安彦 168
れんけい万歩会のこと……宇都野正章
斎藤弘行 170
初雁球場押しかけ応援団……菅間昭 171
同期生俳句大会……宮崎敏昭 173
グループ活動年表……編集部 176
川三同好会ガイド……編集部 178

第六部「特集・II」
——先生からのご寄稿
●巡礼で訪れたエルサレム……木村信寿 180
●元教頭・吉川静雄先生の日誌から……181

第七部「資料篇」
名簿について……編集部 191
創立百周年に関して……編集部 194
川高三期生の出版物……青柳安彦 196
四行小史 旧友新発見
哀悼！ 文集以後の物故者……松岡章次 198
同期生住所別分布表……阿部新一 202
『おーい、楠の木よ』正誤表……203
編集後記……204
執筆者総さくいん……207

あのころ・豆事典……青柳安彦

（題字・青木勘輔／装丁・見返し・カット・大野良三
目次カット・AD・口絵レイアウト・青柳安彦）



カット・顔振峠展望絵はがきのためのスケッチより・青柳安彦

第二部「特集・I」――「おーい、楠の木よ」への声

恩師の方々からのお礼状など――

吉川静雄先生

元教頭先生、現在は静岡県大仁町にお住まいで、お元気に米寿をお迎えとのこと。

冠省　還暦記念文集を私にまで御恵贈に與り　唯々感謝いたしてをります　三年余の川中づとめは多事であり多難で　生徒の目には映らない　大人の世界がありました　私は八十九才になり　昨年こちらで知り合った方々が祝ってくれた時のシャシン一葉を容れました

（略）……目下は猫三疋との独居生活をしてをります

春といへば　岡村了一[注]氏が友達何名かと訪ねてくれるとの便りがありました　鶴首してをります　今はライフワークとなった百人一首を元日も平日もなく調べ続けながら　畠や山の仕事にもでてをります

（略）……いよいよ春秋に富むみな様の御健康と日々のご活躍を祈ってをります　良い記録を編み　後世に留め得たのは大きな仕事であると存じます。みな様の御精進の程を祈って擱筆いたします（私は旧カナヅカヒ論者です）

（封書に写真も同封、三月三日付。

岡村了一氏は元・本校同窓会会長）

岡田幹雄先生

川越市仙波町にお元気でお住まいです。

記念文集『おーい、楠の木よ』を小生まで贈呈にあず

かり誠に恐縮に存じます。文中には貴重な記録やなるほどと頷ける箇所に接し、懐かしく拝読しています。どうか機会がありましたら編集の皆さんによろしくお伝え下さい。先ずは簡単ですが、右御礼まで。（葉書、三月三日付）

椙田　英太郎　先生

川越市郭町にお元気でお住まいです。

このたび同窓会誌『おーい、楠の木よ』をご恵贈いただき有難うございました。ご苦労の甲斐あって充実した出来栄えの還暦記念、お慶び申し上げます。

（葉書、三月三日付）

那須　大輔　先生

川越市郭町にお住まいでした。

先日は『おーい、楠の木よ』をお送りいただきありがとうございます。父・大輔の若き日の楽しい文集に、皆さま方の青春を感じました。現在、父は療養の身ではありますが、何とか元気で暮らしております。右まずはお礼まで。（葉書、ご子息・那須雅明氏より三月五日付。

なお、先生は、平成七年三月二十七日にご逝去。）

大川　明治　先生

川越市仙波町にお元気でお住まいです。

『おーい、楠の木よ』御恵贈いただき有難うございました。単に内容が豊富というだけでなく、多方面に渡り気配りがなされており、類書にも例を見ない秀逸、皆様の気構えの程がしのばれます。当時をしのび、ゆっくり拝読させていただきます。先日、後輩の同窓会の席上小泉先生が、貴書の紹介をされておりました。以上お礼のみにて、中村生秀様にもよろしく。（葉書、三月二日付）

石川　正明　先生

大宮市風渡野にお元気でお住まいです。

本日は還暦文集を御恵贈いただきありがとうございました。まさに記念にふさわしい、みごとな出版物で、広い意味でも高く評価さるべきものと存じます。小生も川高で二十年間お世話になりました。教育人生の大半でございました。御陰様にて昨年古希を迎え、本年は短大の講師も定年となり、ささやかな趣味の生活を送っております。

川越は第二の故郷となっております。そのような意味でも、文集は懐かしく拝読いたしました。末筆ながら皆様の御多幸、御発展を祈りお礼旁々、近況まで。

（葉書、三月一日付。平成六年春の叙勲で勲四等瑞宝章を受章されました。）

鈴木睦雄先生

東京都練馬区にお元気で、傘寿もお過ぎとの由。

よくぞ集大成したものだ。感心しつつくりかえし眺め、読んだ。小生、貴君のクラスの担任はしなかったが、思い出す子もいるよ。小生、戦中応召して川中と別れ、所沢の定時制でした。貴君の還暦となる也、小生は傘寿を過ぎ、目下まあまあの元気也。「楠の木」の写真などを眺め、昔を思い出している。同じ職員の多くは亡くなったね。有り難う　お礼まで。

（葉書、三月五日付）

木村信寿先生

大宮市大和田町にお元気でお過ごしです。

本日、立派な『還暦文集』を賜わり、誠に有難うございました。「多くの方々の記念文」を結集させた集大成なので、大変ずっしりとした「ボリウム」を感じます。ここまでの企画、実行、調整のプロセスは並大抵なものでなかったものと思い、驚きかつ敬意を表します。（不思議なご縁さえも……）しみじみ「懐古もの」でした。多謝します。

①約五十年前の時代にタイムスリップしたような気持ちにもなり拝見いたしました。（半分忘我の境地で）、（そのとき、インドネシアの旅についてのメモをしていましたが、それを中断して……）

②この大作文集には、川越中・高時代の思い出のほかに、人生史・特殊力作も盛り込まれてあり、得難い貴重な『多情報・多彩記録集』でもありましょう。

（注）『おーい、楠の木よ』は実に感懐のこもる名文句なのでは！

③私については、もう七十代後半に入っており、今は静かに自由な生活（三年間）を続けております。会社時代を二つの教職時代で挟んだ異例の人生コースを辿りました。【教職（川高、楠の香る）→会社（日化薬）→教職（麻布中・高、自由度の高い）、その間約四十年】

このロングな時代を通して、いつも輝いていたのは「自由」と「旅」（山旅も含めて）の二つでした。そして現在の「晴耕雨読的な日々」を支えているのは、家族は別として、庭畑と本と旅なのでしょうか。以上「不一な所感と近況」になりましたが、これを添えて御礼まで申し上げます。

皆さんによろしくお伝え下さい。（封書、三月一日付）

横田稲吉先生

飯能市坂石町にご在住でした。

此の度は還暦文集『おーい、楠の木よ』の本をお送り下され有難うございました。

懐かしい昔の写真や文集を拝見し、感激しております。色々ご苦労なさった事と思いますが、本当によい本が出来て、おめでとうございます。……先ずはお礼まで。

（奥様より封書、三月十五日付。四月八日ご逝去）

（叙位叙勲…正五位勲四等瑞宝章、……五月五日朝刊による。）

原田節二先生

川越市豊田本にお住まいです。

春らしさを感じる今日この頃です。『おーい、楠の木よ』をお送りいただき有難うございました。返事がおくれて申訳ありません。実は二月初旬、心不全と肺炎で入院し、約一カ月の入院生活を送りました。現在、退院して家の中で静養中です。体調も順調に回復しております。

新聞にも出ていましたが、本を作ることは大変な仕事で、出来上がるまでには何回となく会合を開いたと思います。写真がよく当時のものが残っていたと感心しています。終戦当時の様子がよくわかります。当時を思い出しながら読ませていただいています。先ずはお礼まで。

（葉書、三月十一日付）

田中正雄先生

生まれ故郷の大里郡川本町にお住まいで、お元気にお過ごしの由。

前略　先般『おーい、楠の木よ』拝受。しばらくしつっこい風邪に臥せったままが続き、挨拶遅れの段お許し下さい。小生は昭和三十二年三月、楠高（♂）よりオケン高（♀）へ転勤となり、その川女にて二十二年。定年後、川越から生まれ故郷の現住所に転居した人間です。

川高第三期生諸君とは、担任でなかったので、縁は薄かったのですが、トクさんとは同じ国語科でもあり、小生も俳句（号、棲魚）の仲間に入って例会や吟行会に出かけたので、所謂徳門十哲のメンメンとは、少々のつながりもあり、懐かしくこの文集に愛着を感じて居ります。

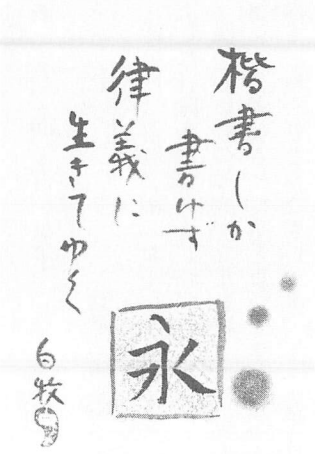
分厚いこの本、よくぞ仕上げて下さったものよ—と感心したのが、手にした第一印象。さて、それから暇が出来ると、あちらこちらに拾い読みの目を走らせ、当分は長編小説を読みかけたように、机辺から離せなくなりそうです。小生なりに、川高在勤中の思い出と重なって、記事の随所に同感したり、ユーモアの表現に笑い出したりして居ります。

青春への追憶は貴方がたよりも小生の方が……（ことし八十歳になる哀しさよ）

セイシューン　カンバック　ツーミー！

THE　END　　田中生

（封書、三月二十五日付）



北野茂夫先生

東久留米市にお住まいで、お元気の由。

前略、過日は皆様の御労作『おーい、楠の木よ』なる立派な印刷物を御送り下さいまして、誠に有難うございました。厚くお礼申し上げます。私は臨時的な講師として短い期間、皆様とご一緒に勉強しただけですが、私も川中の出身（注：三十九回卒）ですので、非常に楽しく拝見させていただきました。皆様の御努力に敬意を表します。皆様によろしく。早々　（葉書、三月二十九日付）

平山和子さん

故鈴木楽山先生のご長女、現在は蕨市にお住まいです。

（前略）……。先日は堀様には御多忙の中を記念誌『おーい、楠の木よ』を贈っていただきまして、誠に有難うございました。その節はお電話のみで失礼いたしましたが、日を追って拝読しておりまして、大変感動しております。

父・鈴木楽山の思い出を綴られた方々には感謝し盡せぬ程有難く思っておりますが、同じ世代を川越で育ったものとして、皆様それぞれ御苦労され、大変な思いをしながら勉学に励まれたご様子、ひしひしと胸にせまりました。

その後、それぞれの道で活躍され、日本経済の高度成長期に貢献されて今日還暦を迎えられ、このような立派な記念誌が出来たことを思いますと、基はあの時代に培われたものと推察され、皆様のお力の大きさと友情の深さに敬服しております。

このご本を取り寄せられた大宮のS・Yさんとは、川女時代より今日までずっと無二の友で、よく話し合う仲ですが、偶然にも電話でこのご本のお話をし、〃当時の川高生は大したものですね〃と共感しております。同窓生はもとより多くの方にお見せしたいと思っております。

読む程に立派な内容と資料も沢山載せられ、編集の巧みさもあって感銘深く、私共の宝物として大切にしたいと思っております。

私事で恐縮ですが、昭和二十四年に父が黄泉の国に旅立ち、あれから四十五年経った今日、多くの方から「楽山」を思い出していただき、文章に会話と写真まで載り、拝読して胸熱く涙がこぼれる思いでございます。本人は教師冥利に尽きると思いますが、七年前にあまり患わずに逝ってしまった母共々に見せたい思いで佛前に供え、皆様の御厚情を報告しました。

又、菩提寺観音寺の住職様と私の妹（私共は二人姉妹で）が希望しておりますので、出来ましたらおゆずりいただきたく、御願い申し上げます。

（中略）　どうぞ皆々様益々御健勝で御活躍下さいますよう御祈り申し上げます。又機会がありましたら、続編を拝読させていただきたく存じます。私も元気でこれから一日一日を大切に友情を温め心豊かに過したいと存じます。乱筆にて失礼いたします。　かしこ

（追伸　先日川越に参りました折、赤間川のほとりを歩きました。大きな鯉が群れているのがよく観られました。ゆっくりしたひとときでした。堀様の〃小江戸川越〃のご案内が頭をかすめた次第です。いろいろ有難うございました。）

（封書、三月三十日付）

後藤瑛子さん

故佐藤徳四郎先生のご息女、現埼玉県立狭山清陵高校教諭。八王子市在住。

（前略）……。過日には大変記念になるご本を頂戴いたし、有りがとうございました。なつかしく読ませていただいております。私の父も皆様にいろいろな形で、思い出していただいておりますことに、喜んでいることと思います。どうぞ皆様にもよろしくお伝え下さいませ。終わりになりましたが、皆様の益々のご活躍をお祈り申し上げます。

（葉書、三月二十四日付）

有りし日の思い出

間　中　美津子　さん
故間中鹿太郎先生のご息女、
オケンでの同期生。

第三期生還暦文集を思いがけずお送り戴き有り難うございました。

本のネーミング『おーい、楠の木よ』を何度となく繰り返してみて、とても懐かしく郷愁さえ感じさせる響きでした。校門を入って左側で、大地に根を張り沢山の枝をこんもりと葉で茂らせた大木の楠の姿が眼に浮かんで来ます。

移り変わる世代の夢多き青年像を見、悲喜こもごもの想い出を、その葉に刻み残してきたのですから、皆様の楠の木に寄せる思いは同じだと思います。

父・鹿太郎が祖父・龍吉の跡を継いで、四代目川越明信館道場の館長に就任したのは、大正十三年六月でした。直心影流を継ぎ、門弟にも恵まれ、剣道指南の傍ら、川高、川工、川商、農蚕の剣道教師として務める一方、看守教習所と川越警察署の剣道教師として、埼玉と満州の剣道対抗試合に、秩父の高野佐三郎先生率いるメンバーの埼玉の大将として渡満するなどもありました。昔から川越はとても剣道の盛んな街でした。

皆様ご承知の様に太平洋戦争中は、軍事教練や勤労動員にかり出され、その結果は敗戦と、総てが変わる激動の時期でした。ご多分に漏れず剣道も、マッカーサー指令により一時禁止される程で、学業生活も短かったせいで、皆様の中には父とは馴染みが薄かった方もいらしゃったのではないかと思います。

父は口数の少ない、お世辞の言えない真正直なそれでいて、頑固なところがあり、躾は厳しい人でした。三男四女の子沢山でしたが、戦争と当時の医療不足により五人を亡くし、下二人の女子を残すだけになってからは、人柄も気弱なあまり怒らない人に変わってしまったと、父を知る人は言っておりました。

また魚釣りが大好きで、よく自転車に乗って荒川に出かけて行きました。フナだのハヤだのよく釣ってきました。御嶽山下の芦の生えた池や伊佐沼では、エビガニや食用蛙釣りを楽しみ、私も何度となく一緒に参りました。私にはとてもやさしい人でした。

当時は食糧難で、これらは何よりの蛋白源でした。食用蛙の肉は、今はフランス料理にも使われていますが、その当時は鶏肉か貝柱のようで貴重な食材でした。またエビガニも茹でれば、今のエビと同じ天ぷらに、サラダに酢の物にと舌鼓を打ったものです。

ある時は蛙の内蔵が大きく立派なので、理科の解剖に向くからと嫌がる私に無理やり学校に持たされ、先生から喜ばれた思い出もあります。

父はとても器用な一面もあり、廃物を利用していろいろな物を作ったり直したりするのが得意でした。お酒も好きで、食べ物の好き嫌いもなく、健康だったので、何を出しても「美味しい美味しい」と喜んでくれるので張り合いもあり、勤め帰りに父の好物を見つけて買っては、父の喜ぶ顔を見るのが楽しみでした。

その父も、昭和三十七年四月十二日、胃潰瘍の手術も空しく、七十八歳で亡くなりましたが、その一年前には「師範号」取得と「喜寿」の祝いをと、関係者の方々にして頂き、どんなに嬉しかったことか。その上、父の死後明信館道場跡地に記念碑まで建てて戴き、有り難いことと感謝しております。

先日、山田和宏様から原稿を是非にと依頼され、恥ずかしながら、父に免じて皆様の文集の一ページを汚させて戴きました。

皆様と同年代を過ごして参りましたが、若い頃の無理が少しずつ出てきております。

三期生の皆様、呉々も健康に留意され、楽しい人生をお過ごし下さいますよう、お祈り申し上げます。

各方面からのメッセージ

笹崎能輝氏

日高市のサイボクハム役員、川高の十五年ほど後輩

本日は大変楽しい、『おーい、楠の木よ』をお送り下さいましてありがとうございます。多勢の先輩方の青春賦(?)に接し、心踊る思いで、読ませていただきました。小生は十八回生ですが、平先生、小泉先生、那須先生には教えてもらいましたので、大変なつかしく拝読しました。編集も入魂の一冊といった風な情熱がすみずみまで感じられ、心のこもった素晴らしい本ですね。今後ともよろしくお願い申しあげます。お礼旁々。

(葉書、二月二十六日付)

石丸寛氏

熊高の卒業生、昭和二十四年夏県下初の甲子園に出場した野球部のメンバー

私達は思い出文集（自己史）『青春の碑』が平成五年に、熊谷高校百周年誌が平成七年に刊行されました。見事に編集された大変立派な「還暦の文集」で、この中で私と少し関連ある事柄が見出されて、懐かしく、楽しく拝見しました。

熊谷高校野球部で昭和二十四年夏、二年生の時に幸運にも甲子園が実現しました。すでに好敵手だった川越高校と対戦しました。柴田五郎さん「野球部の思い出」の中に、浅井敏彦さんの「野球生活一色」には白球を追った同じ青春があります。機会がありましたらよろしくお伝え下さい。

同窓会の御発展と会員皆様の御活躍・御健康を祈念いたします。

鎌田　斌氏

元、東京都公立中学校長、船橋市在住

〝文集〟『おーい、楠の木よ』を送ってくださると妻から伝え聞きましたから、文集というイメージで頂戴しましたところ、これは紛れもなく〝本〟であり、〝書籍〟でありました。

晩御飯の、片手に盃をもち（失礼！）分厚な頁を繰っていくうち興奮してきました。それが感動にまで昇華していくには時間もかかりませんでした。真に希有な、興味津々の書物です。還暦を期して川越高校三期生の方がたが母校を思い、来し方をふりかえり昨今を眺望し、懐郷の念を敍していく、本当に素晴らしい典籍であります。知情意とも非常に秀逸な川越高校の三期生の凝集であると感服しました。有難うございました。

私も行く末は思わず、来し方をよく振り返る癖をもっております。昭和六十三年から、自伝記をそれはまことにちんたらちんたら書き記しながら、未だに完結していませんが、そこには私の歩みと共に遍歴してきた社会世相も織り込んで書いております。別段、本にする魂胆はありませんが、いずれ幾冊かにコピーして、子や孫に残していく心算です。また毎年、例えば十一月になりますと（十一月二十三日に判決のあった）東京裁判ものを本屋で漁りますし、最近の二月二十六日前後になりますと二・二六ものを探すといった按配です。歴史を探索するのが目的でなしに、その時代・時期の自分や世の中を思いおこしたい気持ちでやっているのです。そうしたことが、この『おーい、楠の木よ』のなかにはいっぱいありますね。私とはほんのちょっぴりの年の差の方達ですが、やはり同時代人ですので、この御本の中から随分共感・共鳴できるものが多いと期待しています。

阿部さんの「おじいちゃんのパソコン修業」も拝読しました。(略)あなたの孫は、いずれ来たる自分の還暦の年に『おーい、楠の木よ』を想起しつつ迎えるのではと、感懐ひとしおでした。歴史を作った御本だと思います。(略)……この御本を隈なく読む日を楽しみにしております。何れ、その感想を携えて川越に伺います。近々、これのお礼にと考えております。どうか、それも楽しみに。右、粗述ながら感謝の一端まで。余寒続く折柄御身お大切に。(阿部新の親戚。封書、二月十八日付)

島田道郎先生

現、県立松山高等学校長

『おーい、楠の木よ』の上梓、誠におめでとうございます。御贈呈くださいました文集は、本校図書館の蔵書に加えさせていただきます。名物先生方の下に戦中・戦後の混乱期の中から立ち上がった、川越高校第三期生の逞しさに感動いたしました。右受領のお礼まで。

(葉書、三月十四日付)

小川正先生

現、東松山市教育委員会教育長

(略)……本日、埼玉県立川越高校図書館の名前で、素晴らしい労作『おーい、楠の木よ』を御恵送いただきました。執筆を担当いたしました皆様の御苦労、御尽力に敬意を表すると共に、私どもにまでご高配をいただきましたこと、厚く感謝を申し上げます。

私は旧制の松山中学に昭和二十一年に入学し、新制の松山高校の第四回の卒業でありますので、皆様の一級下の年次になります。それだけに今回の還暦の文集は、自分のことのように感じ、反面これだけの方々を結集して大作品を創りあげたことを、うらやましく感じております。これから当時をしのんで、戦後の教育を読ませていただきます。川越高校第三期卒業生の皆様の益々の御健勝と各界での御活躍をお祈りして、お礼のあいさつといたします。ありがとうございました。(葉書、三月十二日付)

山田恒雄先生

現、川越市立富士見中学校長、川越市中学校長会代表

(前略)……さて、この度は還暦の文集『おーい、楠の木よ』を市内中学校二十二校にご寄贈いただきまして誠にありがとうございました。

皆様方には、川中・川高と一校に六年間在学し、今功成り名遂げられて、ここに還暦を迎えられましたこと、心からお祝い申し上げます。それにつけても、皆様が青春時代の六年間の記録、苦しみながらの楽しさを生み出

しての生活、文章の端はしから読みとらせていただきました。又ご本の装丁の素晴らしさ、当時の高校生の心の豊かさ、私たち新制の人たちと比べるべくもない程の重みを感じさせてくださいました。

最近、中学生の進学に変化が見え、私立高校への進学が高まっていますが、今なお川高は難関校とされ、中学生の憧れの的です。それは川高卒業生の諸先輩が皆すばらしい生き方をしてこられ、地域の中で活躍されて来られたからなのでしょう。

『おーい、楠の木よ』が今後ますます愛読され、又つぎつぎに語り継がれて、川高同窓生の絆が一層に強まり、川高が大きな発展につながることでしょう。いずれにしろ貴重な資料をいただきましたことに感謝し、皆様のますますのご多幸をお祈りし、お礼にかえさせていただきます。

（封書、三月十四日付）

磯貝孝子さん

浦和第一女子高校第三回卒業生

還暦記念文集の御出版おめでとうございます。私は浦和第一女子高校三期生です。朝日新聞を読みまして大変うらやましく思い、早く拝読したい気持ちで住所を伺いました。男子校と女子校では、学校生活も違うことばかりでしたが、戦後の同じ時代を生きてきたと云うことでは、共通することばかりだと思います。

編集委員の皆様の御苦労はどんなにか大変だったと思いますが、そこは男子校の強み、優秀な専門家がいらっしゃることでは女子校はかないません。同封致しました同窓会新聞の二―四ページに私達全（全日制）三回のことが記事になっています。文集の話はいつも出ますが、実現できないのです。拝読しまして感想文など、送らせて頂きます。お手数ですが、よろしくお願い申しあげます。一部五千円とは、少々考えましたが、きっと内容がそれ以上にすばらしいものだと思います。楽しみに待っています。四月に同期会の旅行がございますので、御紹介します。

（封書、二月十八日付）

鹿間恭子さん

旧姓矢沢さん、旧市街地図の●をお探し下さい

『おーい、楠の木よ』を拝受いたしました。川越小学校（旧第二小学校）や川越キリスト教会の時、出会った方々のお名前を今おもい出しております。これからひとつひとつしっかり読んでゆきます。友人や知人にもみせようと思います。六十代に入った私たち、六十歳を三度目の〝はたち〟と考えて、また新しく出発できたらと考えます。同級生の皆さまによろしくおつたえ下さい。御健やかに御活躍をと、お祈りします。（松村宛に葉書、三月十

五日付）

感想その一（増補別冊のため寄稿されました）

『おーい、楠の木よ』のタイトルも、表紙も、戦中戦後「ひとつの校舎に六年間」というサブタイトルも、心の暖かさが伝わってきます。七百頁あまりの文集はどこを開いても、すがすがしい香りが伝わってきます。ほどよい都会性とほどよい田園性とがミックスした城下町、川越の気品です。

川越高校三期生名簿をときどきみながら、本文を読んでいきますと、未知の方々が、友達のような存在にもなります。ひとつの時代を伝える百科辞典でもあります。私は机の広辞苑の隣において大切に扱いたいと思います。

多数の方々の素晴らしい記憶にもとづいた文章により、イラストや写真により、中高時代の若々しい精神にふれることができました。（たとえば、原武氏の詩も、余韻がいつまでも残ります）またそれを包みこむ師弟愛や友情に心を打たれました。その精神が還暦を迎えた今も持続していることに驚嘆しております。

かつて登り下りした遥かな山なみを想い起こすように戦中戦後の厳しい生活を懸命に生きた日々を、今は遥かな存在として、心の中に定着することができました。これからも、一歩一歩　お健やかに、よき日々をと、同世代の声援を、おおくりいたします。

感想その二

先日　ＮＨＫテレビの再放送で、「一万人の文化祭　埼玉、川越高校ＶＳ松山高校」というのを見ました。川越高校の「くすの木祭」と「松高祭」は　平和な楽しい学園生活を伝えていました。

昭和十九年の学徒出陣から、半世紀たった今も、太平洋戦争に散華した若い人たちを思うと胸が痛みます。その世代にわずか遅れながらも、小学生として戦中を、中高生から成人となって戦後の復興時代を生きてきました。この私たちの世代は、伝えるべき多くのものを持っていると思います。

『おーい、楠の木よ』は、後の世までも読み継がれて、ひとびとの心を育て勇気づけていくことと確信しております。

最後に『獺祭』の方々を追想して、中村草田男の句をおとどけします。

勇気こそ　地の塩なれや　梅真白

（松村苑に封書）

秋山康政氏

ペンネーム触虻亭、前日経事業出版社専務取締役・

元「ショッピング」編集長

ここ二・三日、拝借の『おーい、楠の木よ』を、仕事そっちのけで耽読せり。迂生、川中とは、なんの関わりなけれども、全くアカの他人の学校なれども、読むほどに、トクさん、トーソン、ぼけなす、ゲールの諸先生、ついでに、まんぐんの面影彷彿、佐々木ゆうちゃん、菅間ガンマら秀才に、山田スカチン、小野テン、ダイセンカイ、新井ターザン、川合こんにゃく、アブシンら名物男も懐かしく、あたかも川中に在籍せる如き錯覚を起こせしめるほど、身近に覚えたり。さらには、化学部の大爆発事件、憧れのオケン、オイチ……etc、川中、川高の風物、情緒も体験なけれども、いつの間にかわが記憶、わが閲歴の心地ぞする。

畢竟、この魅力は、敗色濃きヒステリー的情況の戦争末期から一転して戦後の青い山脈的民主主義の時代を背景に、思春期の少年たちの心情、行動を校内・外にビビッドに、なんの粉飾もなく描出せるところにあるべし。素描の力と言うべきか。

関東の小都邑に期せずして会した秀才たち……村の神童あり、川越の老舗の倅あり、疎開の東京のぼっちゃんあり、引揚者の苦学生あり……彼らの哀歓のエピソードはいずれも珠玉の光を放つ。貧しき友を助ける佐藤紅緑的義侠、友情美談、熱血教師の薫陶、隣の車両に乗るオケンに寄せる仄かな慕情、市内を恐怖のドン底に落とした爆薬密造奇譚、動員の製粉工場における切ない盗み、初めて見た米兵捕虜の印象、さらには戦後の米兵に通じた会話。

而して、これらのエピソードはいずれも、日本未曾有の混乱時代の貴重なる証言にして下手な小説、歴史書より面白く、巻措く能わず。なおかつ、好個の昭和史資料であり、自分史であり、迂生個人としては、広く江湖に本書を推奨したい気持ちしきりなり。

最後に徳門十哲に倣い、駄句一つ。

川越や　初雁高く　飛ぶところ

さらにもう一句

松定の　せがれの丈伸び　夏深し

触虻亭主人　拝
（松村宛に封書）

後日談

さるほどに、『おーい、楠の木よ』はますます迂生の愛読、嗜読するものとなり、カッパエビセン、韋編三絶、今まで登場人物の氏名、人となり、渾名、ついでに容貌まで、ほとんどわが頭脳にインプット、暗んじたり。

某日、松村兄の紹介により、氏の川高同期水口重雄氏のご案内により、川越市中を観光する機会あり。たまた

ま路上にて水口氏、級友と遭遇せり。迂生、もちろん、その方と初対面なれどたちまちにして類推、「失礼ながら、貴方は西川ゲール先生のご子息なりや」と。見知らぬ男より尋ねられ、その方、「然り……」と答えられ氏が、驚きの表情隠せず。迂生自身もびっくり。すなわち、その老紳士は、『おーい、楠の木よ』の巻頭写真で見覚えた西川先生そっくり、クローン人間、原寸大プラモデル的な人物、誰が見ても西川ジュニアなり。これ、奇談と言わざるべからず。

今後、川越に行く機会あれば、迂生の一方的知己に会う可能性あり、楽しからずや。

小山誠三氏

現、飯能市長、二年先輩の『遠い飛行機雲』の編者のおひとり。いろいろご協力に与る。

拝啓　突然お便りさせていただきます。実は君塚さんから『おーい、楠の木よ』をいただき、郷土部の沢田さんの〝郷土部卒業〟の文に接し、沢田さんに今手紙を差しあげたところです。そして懐かしく松村さんのこともさっと思い出し、往時をかえりみました。沢田さんがキョードって呼ばれる程とは知りませんでしたし、同時に松村さんの童顔が浮かんだ次第です。私たちも少し長い間かかって『遠い飛行機雲』を出しましたが、それが皆さんの同窓や、更に私のすぐ下のクラスに広がっているのも嬉しい限りです。

スタッフに人を得た中で、松村さんが編集のトップになり、又会計を仕切ったりと中心になられてすすめられたことを嬉しく思うと共に、改めて敬意を表します。この一冊は大きな意義を残し、輝いています。ごくろう様でした。

郷土部は、私が柿沼さん（一年先輩、現・柿沼医院長）から引き継ぎ、私は堀兼の宙水調査（これで、教科書の〝堀兼の名の如く、深井戸のみである〟という記述を一寸改めさせたのを喜んだりしたものです）をしたのと、名栗の山の民俗調査をした程度だったでしょう。名栗村は沢田さんや松村さんとご一緒したのかな、と思います。名実共に黄金時代だったとお聞きしていたし、今回の『おーい、楠の木よ』で、それを確かめた思いです。いつかお話ししたいな、などと思いながらお便りした次第です。……（略）

（松村宛に封書、二月十九日付）

広田一雄氏

川越市仙波町の広田医院（内科、小児科）院長

先日お電話したように『おーい、楠の木よ』は、大変感銘深い読み物でした。あちこち拾い読みしましのので、あるいは残りがあるかもしれんが、大体読了して何がよ

かったのかなと、ふり返っております。

一番印象深かったのは〝トクさん〟の話で、しかもそれを何人もの人が書いているのは、やはり教師のあるべき姿が、そこにあったという事ではないかと思います。教師は完全な人間でなくてよい。何よりも大切なのは、信念と熱意と、専門の実力ということでしょう。昔、西小仙波（川越市内）あたりに住んでおられたのか、西川先生の飄々たる風貌を度々見かけたことがあった為もあって、西川先生の授業も興味深く読みました。

文章として一番心に残ったのは、斉藤弘行氏のもの、ことに「ゲートルがとれた」は心に沁みるようでした。この人の文章は他の方と違う。巻末の「名簿」は傑作。誰か知った人はと探したが、阿部新一、吉崎、竹内の三氏以外に見当たらない。と思ったら荻野英夫氏がこの頃はご無沙汰だが、かつては家中でよくかかった患者さんであった。地図の中のハート印は面白い。その中に東屋（うなぎ）の武井姉妹、近所だったのでよく知っていたが、どんなお婆チャンになったことやら……。そんなに目立った？　（後略）

（松村宛に葉書）

西澤　孝氏

二年先輩の『遠い飛行機雲』の編者のおひとり

（前略）……。御礼状おそくなって申し訳ありません。何とも圧倒されました。寄稿者の多いこと、調査の綿密さ、正確さ、イラストなど驚きました。あそこまで作られてしまうと、後からの人達は大変です。私達の方はあのような形にしておいてよかったと、今さらながら思いました。

実をいうと、〝遠い飛行機雲〟も当初は、同じようなイメージだったのです。ところが、原稿の集まりが悪く、皆の暇がないので手が少なく、往時の思い出を語るときも時間がとれず、あいまいな記憶を大勢で確認することもままならずといった状態で、力及ばず結果はご覧の如き本になりました。『おーい、楠の木よ』は、以上私たちが発想していたことをよく消化されたものよと敬服いたしました。関係者のご苦労、推察いたします。

（中略）……時間がありましたら……、お話ししたいものです。読後感などその時にでも。大川解君とも、もう三十年位おあいしていないでしょう。また、私の旧知の何人かの人が、貴兄の同級生だったことを改めて知りました。

度々ご旅行をしておられるご様子うかがいましたが、……（略）……お誘い下さい。私も旅をしてみたいと思っているのですが、なかなかいけません。四月末に小学校（越生小）の修学旅行（私たちのときは戦争中で出来ませんでしたので）で、川治温泉に行くことになっています。途次、栃木の街を歩いてみようかと考えています。

ご健勝をお祈りいたします。ご本のお礼と、お礼の遅れましたこと、重ねて申し上げる次第です。

（出版関係で宮崎の先輩。宮崎宛封書、三月八日付）

鈴木秀昭先生

現、所沢市教育委員会教育長　川高七回卒

（前略）……。先輩諸兄には益々ご壮健のこととお慶び申し上げます。この度は、川高第三期生の記録『おーい、楠の木よ』をご送付下され、誠にありがとうございました。私も川高の後輩であり、胸うたれる思いがいたしました。ありがとうございました。皆様のご健勝を祈念し、お礼といたします。

（封書、三月二十日付）

小林茂吉先生

現、入間郡大井町教育委員会教育長

過日は、川越高校第三期生還暦記念文集『おーい、楠の木よ』を御寄贈いただきありがとうございました。

終戦を境に、旧制中学・新制高校と激動の間隙を過ごされた皆様が二年半という長い歳月をかけ、当時の大変貴重な資料を多数集められて、この記念文集を編集された御努力に対しまして深い感銘を覚えております。この文集を単なる記念文集としてではなく、平和への祈りが込められている貴重な歴史資料として、当町立図書館での閲覧に供させていただきたいと存じます。

（封書、三月二十三日付）

長島猛人先生

現、浦和高校教諭、同校同窓会校内幹事

冠省　本校図書館に御寄贈いただきました御著『おーい、楠の木よ』を当同窓会の蔵書として、麗和会館に保管展示し、広く本校OBに紹介したいと思いますので、よろしくご承知置き下さい。

（葉書、三月二十日付）

水沢周氏

作家

文集、おもしろく読ませてもらいました。もちろんすべてがおもしろいわけではないが、文章と、巻末の名簿を兼ねた人物紹介とを対比させつつ読むと、人生行路の曲折というようなものを感じ、さらになんとたいへんな時代を越えてきたものかというような感懐もありという具合で、楽しかったです。松岡ヘンジン氏や沈澱党の面々などとは、なんとなくもう面識もあるような気がします。

誰か（日経の社員氏？）が書いておられたけれど、疎開というのはたしかに地方文化と都市文化のシャッフル

というか、シェイクというか。そんな意味があったのですね。僕自身、疎開者として宇部という荒っぽい町に戦中・戦後の二年半を過ごしたので、とてもそのことはよく分かります。僕にとってこれは実に貴重な、そして豊かな経験でした。もしこの体験がなかったら、僕はきっともっとけいはくな都会っ子として成人し、チャラチャラと生きたのではないかとさえ思います。疎開という体験、疎開先の友人たちにはとても感謝しているのです。いつかこのことは書こうと考えているのですが。

それはそうと、顔振峠というのはどう行くのでしたっけ。……(略)……どんなところだったのか、忘れてしまいました。同期の方がソバと酒のうまい茶屋をやっていらっしゃるとのことなので、ふと、行ってみたくなりました。よかったらいつかごいっしょしませんか。(以下略)……。

(青柳の小学校の先輩)

高橋雅雄先生

元、県立養護学校長、加須市在住

突然、昼寝をしている小生の顔のところに分厚い宅急便がボンとおかれた。今頃、誰からかと案じてみると、先生からの送り物、開けてびっくりずっしりと手にした時は驚きました。

豪華な同窓会誌、学年会誌にさすが川越高校生の作だけあるわと感心もし、驚いた次第です。新聞で知っておりましたが、まさかその現物が私に届くとは思いませんでした。

挨拶が後になり失礼しました。こちらこそすっかりご無沙汰してしまい、時おり川越に行く時もあり、先生如何かなと案じたこともありましたが、実現しませんでした。……(中略)……。

パソコンの専門家としてこれから講師となり、市の生涯学習プランなどに出られたらどうでしょうか。先生一人のものとして楽しむだけでは勿体ない気がします。バレーボールの大会なども、体調を見ながら出られるとよいと思いますが、又奥様と旅行なども。パソコンの世界だけに入り込まないで下さい。

それにしても、高校生活が六年組みだったとは知りませんでした。一人ひとりの書いた内容も時代の中にもまれ、かろうじて生きるような切ないものもあり……それは当時の誰でも経験したことですが……、私にも当時を思い出させ、感無量なものがあります。又、編集も膨大な資料にも少しもまけないで立派にこなしています。

まだ、十分の一も読んでいませんが、楽しみにしております。立派なものどうも有難うございます。これからも自分の領域を広げご活躍下さい。……(後略)……。

(阿部新の上司。封書、四月十八日付)

大山富士夫氏

川中第三十六回卒

（前略）……本日、川高第三回卒皆様の還暦文集をご送付いただき拝受いたしました。七百余ページにわたる、思いの込められた綴り、一見して暖かみが湧いてきます。これからゆっくり拝読いたします。よくこれだけのものを集大成されたと、皆様の想いと行動に深く敬意を表わすところです。

終戦の年に入学された由。私には復員時の思い出があります。昭和二十一年一月三十一日、東部ニューギニアから浦賀に上陸、相模原の国立病院を経て二月六日川越に帰宅、復員しました。当日、高田馬場から西武線に乗車、本川越に参りました。途中、所沢その他から川中生が乗車、満員の電車で押され、彼らの頬っぺたと私の病的な顔（マラリア、栄養失調でのすごい青ざめたもの）がふれたことを今でも忘れません。当時の一年生が皆さんだったのですね。有り難うございました。それにしてもお仲間の皆様のバイタリティーには感服しました。ご壮健でご活躍下さい。

（KDDで小熊の先輩。四月二日付）

庄山愿（あつし）氏

旧、東京浅草区山谷堀国民学校女教諭。
東京大空襲を体験

（前略）……『おーい、楠の木よ』をありがとうございました。すばらしい本が出来ましたね。出版までいろいろとご苦労だったことと思います。ずいぶん分厚い本ですね。ゆっくり読ませてもらいます。

それにしてもあなた方が還暦とは驚き！　考えてみれば当然のことながらまだまだ若いと思っていたのです。私もまだ若いと思っているので。

（小熊の国民学校の恩師。葉書、四月十一日付）

杉林篤氏

明治生まれの開業医

（前略）……此の度は御労著、御刊行を慶祝申し上げます。大変な御苦労だったことと拝察いたします。立派なご本を私共の如きものを思い出して下され、御恵與賜ったことを感謝し幾重にも御禮申し上げます。百の銅像を建てるより一冊の本の刊行と尊敬申し上げるもので御座居ます。

（小熊へ封書、四月二十日付。平成八年十二月逝去された由）

松田源治氏

旧、川越市志義町「松の湯」で出生

（前略）……本日午前に還暦記念の文集受取りました。昨日、NHKテレビで川越高校四十六回〝くすのき祭〟の放映を見たばかりでしたので感無量です。

昭和二十年三月十日東京大空襲に遭遇し、荒川区の我が家に一時避難された折りの伯父さん・伯母さん・光ちゃん・忠ちゃん、みんな眼を真っ赤にはらして濡れた手拭いで眼を冷やしていた光景が思い出されます。（中略）昭和二十七年就職のため新潟より上京の途中、志義町「松の湯」、西町「中富」の家に立寄り、お世話になったことなど。懐かしく思い出します。文集はゆっくりと拝読させて頂きます。

（小熊の従兄弟。封書、四月三日付）

永田和夫氏

故 永田正君の長兄

拝啓　先日は思いもかけず、弟「正」の川高時代の還暦記念の文集『おーい、楠の木よ』を送付して頂き、誠に有り難う御座いました。

皆様から寄稿された文集を読み、あの時、あの時代の事が目の前に浮かんでまいり、懐かしく愛読させて頂いております。

もっと早くお礼を申し上げるべきところでしたが、体調を崩し一ヶ月前から入院しており、お礼が遅れて申し訳ありません。

ほんの気持で申し訳ありませんが、僅かながら送金させて頂きましたので、今後の活動等にお役立て頂ければ幸いと存じます。

先ずは、お礼申し上げるとともに、皆様のご健康をお祈り申し上げます。敬　具

（平成九年六月五日）

三友久子さん

故 三友善夫君夫人

立派な文集の完成おめでとうございます。松村さまからお届けいただき、以前伺ってはおりましたが、担当者皆様の情熱が伝わってくる仕上がりに驚嘆致しました。皆様によろしくお伝えください。有難うございました。

（葉書、一月二十一日付）

越博子さん

故 越克巳君夫人

（略）……過日は、立派な記念文集をお送り頂きまして、誠に有難うございます。厚く御礼申し上げます。

早速、亡夫（克巳）の遺影の前に供え、報告いたしま

した後、ただ一人の遺児である娘（と申しましても、もう三十才になりましたが…）と写真や記事を拝見させて頂き、しばし故人をしのびました。

良き友・同窓生の方々のお声が〝おーい、越よ〟と云って下さっているようで、亡夫もさぞかし草葉の陰で喜んで居りますことでしょう。もっと早くに、お礼状を差し上げるべきでございましたのに、……（中略）……気にしつつ遅れてしまい、大変失礼いたしました。

これからは文集をじっくり読ませて頂こうと、楽しみにしております。皆々様にお逢いになられます折には、どうか呉々もよろしくお伝え頂きとうございます。気候不順の折、どうぞお身体、ご自愛下さいまして、お元気で御活躍下さいますよう、心からお祈り申し上げます。遅ればせながら一筆御礼まで。（封書、三月十一日付）

大野礼子さん

大野哲也君夫人

先日は、川越高校第三期生還暦の文集をご送付くだされ、誠にありがとうございました。

（中略）編集委員の皆様方に厚く御礼を申し上げます。

（封書、三月十日付）

吉川勇一氏

拝啓　このたびは、『おーい、楠の木よ』をご恵贈くだされ、ありがとうございました。先日、小山君からの電話で、この文集の話がありましたので、心待ちにしておりました。一週間ほど旅行に出ており、留守中に頂いたため、お礼状がたいへん遅くなりました。失礼をお許し下さい。

寄稿されている同級生の多さ、そして多岐にわたる膨大な資料、驚き入りました。敗戦直後の川越の青春に関するデーターベースです。これだけの文章と資料を集められるには、編集に当たった方々のたいへんなご苦労があったことと拝察されます。でも、この本で松村さんが日経BPにおられることを知って、なるほど、とも思いました。次の文集 CD-ROM にでも入ってくるのでは？（私事ながら、小生はワープロもパソコンもその初期からつきあい、事務所には、もう使ってはいないのですがスタンドアロンの定価二百四十万円もしたワープロが骨董品のようにとってあります。『日経バイト』や『日経パソコン』の創刊号からの読者でもあります。）

とにかく大部なのでまだ拝読していないのですが、読み出すとやめられなくなりそうな恐れも抱いています。今取りかかっている仕事が一段落したらゆっくりと手に

とるのを楽しみにしております。

郷土部の活動について触れた文も多いですね。大護、原田両先生のお元気なうちに、そして小山君の暇な時期に（そんな時期は市長をやめるまではないのかな？）、あの当時の郷土部の面めんが集まれるような機会もあったらいいですね。

まずはとりあえず、『おーい、楠の木よ』ご恵贈への御礼まで。お礼が遅くなりましたことをもう一度お詫び致します。敬具

（封書、三月三十日付）

（故）田中　魁　氏

同期生の田中崇君の長兄、川越市大東在住。（平成八年没）

私は、川中四十一期、弟は川高三期の崇と、末弟は川高五期の忍。弟二人は五才、三才で両親に死別し、兄の私が農業と重労働の土方をやりながら、川高へ通わせたが、大したこともしてやれなかった。

『おーい、楠の木よ』を読ませていただきまして、一応心がなごみました。川高五期の弟と、私の長男田中剛（川高二十六期）に読ませたいと、二冊送っていただいてありがとうございます。私は崇が持参したのを読みます。

（以上の肩書き等は、お便りを頂いた当時のものです。）

他にメッセージをくださった方々

故　望月良平先生（平成九年四月二十七日没）
水野博介先生（埼玉大学教養学部教授）
江口貞夫氏（川口市在住）
沼口智三郎氏（草加市在住）
井上靖彦氏（与野市在住）

（公共機関など）
埼玉県立川越高等学校
埼玉県立川越高等学校同窓会
埼玉県立久喜図書館
埼玉県立熊谷図書館
埼玉県立熊谷高等学校図書館
川越市立博物館

（同期生……増補別冊に寄稿あるものは除く）
内海俊郎　奥平守男
小畑温治　喜多　弘
北崎昭彦　斉藤守弘
永島俊三郎　根岸　弘
根本暎男　比留間和夫
正木一男　桃井良之

豆事典

併設中学校（六・三・三制と私たち）

昭和二十二年四月、学制改革で今までいた同じ中学が高校に昇格した。我々は中学三年生だったからその高校の併設中学校の三年生ということになった。（上級生はどう呼ばれたかは失念）翌二十三年、我々が高校生になった時、高校一年生になるのかと思ったら「高校十年生」（小学校から通算した数字）という、おかしな名前になった。上級生も十二年とか何とか呼ばれていた。中学の新入生募集は停止され、従って下級生は中三の一学年しかいなかった。昭和二十五年、私達が高校三年生になり、その下級生が高校二年になり、高校に新一年生が入って来て三つの学年が揃った時、晴れて新制の「高校三年生」と名乗ることができた。そういう意味では私達が「元祖、新制高校三学年終了生」になるのかも知れないし、二級下の生徒が「新制高校貫徹第一回生」なのかも知れない。

クーレンカンプ・校内放送

校内放送というのがあった。昼休みにはラヂオ部が自主的に何か流していたと思う。

昼休みのオープニング・テーマはベートーヴェンのロマンス・ヘ長調だった。レコードを見たわけでもないが演奏は紛れもなく私の持っているドイツの大ヴァイオリニスト、クーレンカンプだった。だとすれば青か金色ラベルのキングレコードまたはドイツ・テレフンケンだったはずだ。ラヂオ部の方、覚えていませんか？　ついでに言えば、クーレンカンプは比留間君の先生の福井直弘氏の先生に当たる人だ。

オケン

川越高女をオケン、市立をオイチ、飯能高女をハンGと呼んだ。もちろん我々にとってはオケンがトップクラスで、美女、才女、名家の令嬢などがゴマンといた。戦時中の余りにも厳しい男女セパレートの反動からか、年頃になると青春の思いは一気に募り、爆発した。といってもセパレートの後遺症は思ったより重く、みんな不器用だった。

表立っての交際は依然として禁止だったし、それぞれにガール・フレンドを持っても、一部の人を除いては、せいぜい東京行き、映画や食事、あるいは付近の山へハイキングていどのたいへん清らかな付き合いだった。

堀君がある日、上級生のOさんから「ぬかるみに長靴で踏み込んだ感じだ」と聞かされて、それを教室で周囲の者に話した時にはみんなの息が止まった。

女子の方は、戦前からもそうだったらしいがS（sisterの略）が流行り「誰さんはだれさんのS」みたいに言って、上級生と下級生が文通したりなんかしていたと聞いた。そういうことは今でもあるのだろうか？

カンロク

「弊衣破帽」を尊んだいわゆるバンカラの象徴。帽子のてっぺんをわざと破りミシンをかけ、ワセリン、蠟、タバコの灰などでコテコテに固めた「ペテン帽」が「カンロクがある…」として好まれた。先輩の卒業置き土産はとくに羨望の的だった。「弊衣破帽」はハイカラの華美を嫌った風習で、一高あたりがルーツとされている。大学時代まで続いた。

川越沈澱党始末記

マスコミに紹介された
“おーい，楠の木よ”

埼玉県立川越高等学校

Saitamakenritsu Kawagoe Kotogakko

「昔の仲間に『沈澱党』ってのがありましてね……」と早口で語り始めたのは松岡章次さん。現在冷凍機メーカーの技術者を経て役員を務める六十一歳である。

松岡さんは終戦の年、旧制の名門川越中学に入学した。戦後の新制高校の発足で川越高校と校名は変ったが、二百十三名の仲間の顔触れはそのまま。伝統校の常で、市内在住組の五十名近くを除けば、大半が埼玉一円の市外から通っていた。「中には片道二時間も掛けて東京の板橋から通ってくる豪の者もいました。その前には、「魚敬」という気っぷの良い親父さんの営む魚屋が店を構えていた。

その跡取息子の高梨昌夫さんが松岡さんと川高の同学年で大の仲良しだったため、松岡さんは通学途中に毎度、「魚敬」に立ち寄るようになった。

やがて、同級生の悪ガキ仲間も一緒に「魚敬」に立ち寄り、入り浸るようになった。なにしろ、川越駅は町の南端に位置し、川高は北のはずれに当たる。駅～学校の道のりは約半里ばかり。だから、汽車通学の連中ばかりでなく銀輪部隊も、こ

たからだ。

「上がり框で、居合わせた仲間と勝手に駄弁ったり、レコードを楽しんだりしていました」

昭和二十六年に彼等川越高校三期生は卒業したが、進学組あり、浪人ありで東京への通いが増えると、魚敬にやってくる仲間の数は益々増えていった。

「家業を継いで忙しい昌夫君が留守でも、お構い無く帳場に上がり込みましてね……」と宇都野正章さん。現在は証券会社の経営者である。

松岡さんたちはこの仲間に名前をつけようということになり、誰かが「沈澱党」ってのは

夏目漱石の『吾輩は猫である』の中で、秀才水島寒月（寺田寅彦がモデルだとか）を恐れさせる旧制高校蛮カラ族の名前を借用した。魚屋に溜まる不良青年（？）たちにはピッタリだ。

春爛漫の大爆発

松岡さんは川高時代、悪童仲間たちと一緒に、とんでもない騒動を起こしたことがある。

三年生の春、化学部新米部長松岡さんは、新入生歓迎のための化学実験を思いついた。火薬を調合し、電気ショートで爆発

からしめようという目論見。

化学室から薬品を失敬する係、長い電気コードを拾い集める係、化学反応方程式の計算係、薬品の調合係、爆発物の運搬係、爆弾埋め込み係、見学団整理係等々、のちに沈澱党と名乗る仲間たちも走り回った。

いよいよ当日。桜花落英(らくえい)紛紛たる春爛漫の昼下がりの放課後、見学団約百名が遠巻きする中でスイッチ・オン。その瞬間、グラウンドの上に白い閃光が走る。そして鼓膜に突き刺さるような大音響。

地面が海面に浮かび上がる鯨の背中のようにゆっくり盛り上がる。土砂を高々と吹き上げ、白い硝煙が鼻をつく。同時に猛烈な爆風が襲いかかる。背後の化学実験室の窓の木枠が砕け、ガラスの破片が〝チャラン！ガチャン！　チャララ！〟

黄色い煙が晴れて再び静寂が戻った後も、しばし誰一人としてその場を動くことができなかった。

「その静けさを最初に破ったのはバタバタッと駆けつける先生方の足音」。先頭切って飛んで来たのは荒井実校長。第一声は

平成6年2月13日（還暦記念文集出版記念会）
1列目・左から11人目が松岡章次さん、13人目が青柳安彦さん。3列目・右から2人目が宇都野正章さん。最後部・左端が松村祐二さん。

エンジョイ同窓会

文・敷田伸雄

再結集の時至る

今昨年三月、三期生は還暦を記念して、昔の懐かしい思い出を記録に残そうと、文集『おーい楠の木よ』を発行した。面倒なまとめ役を一手に引き受けたのが元新聞記者(ネタ屋)で現在は系列会社の出版社役員・松村祐二さん。

一人でも多くの投稿を促すため、案内状には四ページの〈参考・作文のヒント〉が添付されていた。

これは宣伝ディレクター青柳安彦さんの苦心の作。「防弾ガラス」「ララ物資」等、記憶を喚起する言葉がずらりと並んでいる。そこから連想される思い出

「誰も死んだものはおらんかったか！」

騒然たるなか、化学担当のキンタこと木村信寿先生が耳元で囁いた。「松岡、これは相当の大問題になると思うが、俺がやらせたと言っていいからな！」

幸い、松岡さんは三日間の「校内謹慎」という寛大な処分。「あの一件が化学機械屋への第一歩でしたな……（笑）」

工夫は、文章を書くのに不慣れな仲間たちに大いに役立った。

苦労の甲斐あって、高梨さん談／松岡さん聞き書きの「沈澱党始末記」、松岡さんの「川越悪童風雲録―爆弾小僧物語」等、百七十二点の力作が寄せられた。

この他にも、亡くなった仲間を追慕する四行小史があり、また三十八名の消息不明の仲間にも写真やイラスト入りで呼び掛けている。「早く帰ってこーい」。似顔画の大天才！「阿川洋」く～ん。自転車（通学）部隊！飯田宏く～ん。口達者のイー公！石田一次く～ん。等々。

この文集を機に、松岡さんの沈澱党への思いが甦った。

若い頃は、研究や商売のため世界各地を巡る多忙な人生だったが、ようやく昔の仲間との交流を楽しめるようになった。

魚敬は昌夫さんが跡を継ぎ、流通革命の嵐をかいくぐって、今は駅前のビル内のアイスクリーム・フランチャイズ店として頑張っている。

「沈澱党再結集の時至る、です。アイスクリームを嘗めながら、昔を語りあいますか……」

川越高校新聞

記念誌を作成

—第三期卒業生—

川越高第三期生

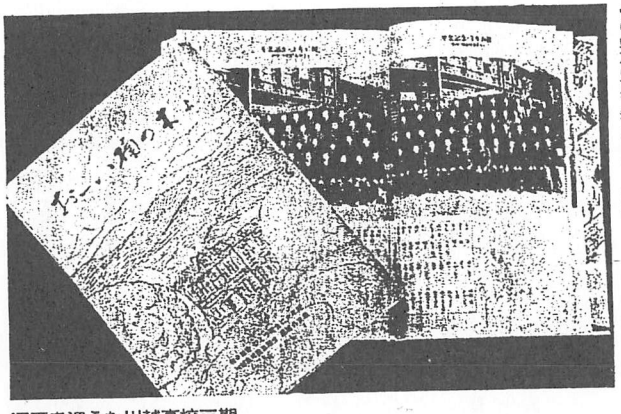
終戦の年に旧制中学に入学 青春時代に激動くぐった

いま還暦 心の起伏文集に

価値観一変 戸惑いを 克明に

軍国主義から民主主義へ、教育の理念が一八〇度転換した終戦の年の旧制中学校入学生たちが、還暦を迎えた。旧制の県立川越中学（現川越高校）へ一九四五年四月に入学し、戦後の学制改革を経て五一年の春に新制高校生として卒業した同高校第三期生たちは、激動の青春時代を記録に残そうと還暦記念の文集を出版。発行日は、入学直前に襲った「東京大空襲」の三月十日とした。これに先立って、出版記念の同窓会がこのほど川越市内で開かれた。

マスコミに紹介された
おーい，楠の木よ”（続き）



還暦を迎えた川越高校三期生たちがつくった記念文集「おーい楠の木よ」

記念文集の表題は「おーい楠の木よ」。入学した時の木造校舎は鉄筋に建て替えられ、当時の面影はない。だが、正門わきに今も残るクスノキ（楠）に、同窓生たちの青春時代の思いを寄せた。

文集づくりを思い立ったのは、九一年秋の同期会の席上。「還暦を記念して文集をつくろう」との提案がきっかけだった。その後、出版・印刷関係などの専門家を含む同窓生が編集委員となり、九二年十二月に所在が分かっている二百人余りに文集作成を呼びかけた。予想を大きく上回る百七十二人から寄

原稿を寄せた人たちは、戦中から戦後の混乱期に青春時代を過ごし、軍国主義から民主主義へと価値観が大きく転換した激動期の「生き証人」。昭和一ケタ世代が、「平和の大切さ」を訴える貴重な体験記ともなっている。

文集は、すでに亡くなった同窓生を追悼する「亡友に捧ぐ」や、同窓生の座談会「神童・悪

激動期を回想し還暦記念の文集

終戦の年に入学の川越高3期生

3/10 毎日埼玉

エッセー、詩など多彩

「おーい、楠の木よ」を手に思い出を語る編集メンバー

終戦の年、一九四五年四月に旧制川越中学（現県立川越高校）に入学した同高第三期生が、還暦を迎え記念文集を制作した。タイトルは、現在も残る同高のシンボル・クスノキに当時をしのぶ思いを込めた「おーい、楠の木よ」。戦中・戦後の激動の時期を「川高」で過ごした当時の少年たちがエッセー、詩、俳句、さし絵、写真などでつづった「回想録」は東京大空襲の十日、発行される。

同高の第三期生は、戦況の先がすでに見えていた戦争末期から敗戦、戦後の混乱、復興と激動の時代を、旧制中学、新制中学、併設中学、新制高校と学制改革の波をもろにかぶりながら六年間学んだ。「自分たちの世代だけが体験した貴重な歴史を残そう」と、九一年秋の同期会で発案。東京へ復帰した疎開生や途中で転校した同級生を含めた約二百人に声を掛けたところ、予想を上回る百七十二人から寄稿があった。

編集事務局長の短陽さん（六一）は、「中一の一学期まで軍国主義でした。夏休みも防空ごうを掘りに学校に通いましたが、ある日、作業の途中で『口をゆすいで手を洗って校長室に来なさい』と呼ばれてラジオを聞かされた。それが八月十五日、玉音放送だったんです」と当時を振り返る。

川越に生まれ育った松村祐二さん（六一）も「百五十人の定員枠でしたが、空襲で疎開した生徒が約七十人入ってきた。当時よく話題になっていたいじめもなく、東京の先端文化を持ってきた彼らと、田舎の私たちはすっかり仲良くなった。今でも誇りです」。

亡くなった同級生への追悼文、当時の学校生活の様子を生き生きと描いた「川高悪童風雲録」「疎開や引き揚げ、転校の思い出をつづったエッセー、あこがれだった「お県」（現県立川越女子高）の生徒の自宅まで書き込んだ「あの頃の川越市マップなど内容も多彩。還暦の思い出文集にとどまらず、当時の世相や時代背景がしのばれ興味深い。

「おーい、楠の木よ」はA5判、七百二十㌻。通学区の図書館、中学校、市内の高校などに配布されるほか、一般にも五千円で販売する。0492(22)3605 414編集部。

「おーい楠の木よ」の表紙

が大勢出たということで、先輩逝の構築したものは大きい。だから、川越高校にいたことを誇りに思ってほしい。それは今後の人生のエネルギーになると思う。（完成後、同窓会長談）とのこと）

したもの。松岡麻次さん（刊行実行委）の話。

卒業生約二〇〇人が全員書いた。苦労したとやっぱりしいとと、依頼達に送したい歴史だった。題名は、「楠の木はずっと見ていた」ということで、思い出をつなぐ一つのシンボルとしてこれをつけた。また、

航空機）には何人乗っているか」「十九機撃墜したらアメリカ兵何人を殲滅（せんめつ）できるか」などの問題が出されたこと。「軍事教練などに明け暮れ、いつも腹ぺこだった印象しか残っていない」といった学校生活の思い出。終戦後には、教育も一変し、強い戸惑いを覚えたこと……。

六部で構成。恩師の思い出を振り返る欄もある。

記念文集はA五判、七百二十㌻。千部印刷された。同窓生に配布されるほか、一部五千円で販売もする。問い合わせは、編集事務局の堀さん（〇四九―二二二―〇五四四）宅へ。

マスコミに紹介された〝おーい、楠の木よ〟（続き）

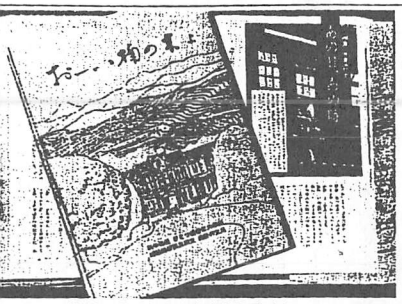
読売新聞 H6.3.10
地域ニュース 13S☆埼玉西☆ (28)

埼玉讀賣 県西

激動期の〝青春〟つづる

川越高3期生 きょう文集を出版

昭和二十年四月に旧制川越中学に入学、わずか四か月余りで終戦を迎えた県立川越高校第三期生の同窓生たちが、還暦を記念して文集「おーい楠の木よ」を東京大空襲記念日のきょう十日、共同自費出版する。教育理念が軍国主義から民主主義へと大転換した体験を味わった際の戸惑いなどがつづられており、激動期の「生き証人」たちが平和の大切さを訴える貴重な体験記となっている。



川越高3期生たちが出版した文集

文集の表題は、今も正門わきに立っているクスノキに思いを寄せた。

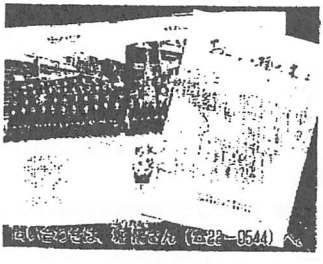
在校時に学制が改革され、昭和二十六年に新制高校生として卒業したこの人たちの文集づくりのきっかけとなったのは平成三年秋の同期会。「還暦を記念して文集をつくろう」との声が上がり、出版、印刷関係の専門家を含む同窓生が編集委員となって、懸命を重ねてきた。約二百十人の同窓生たちに呼び掛けたところ、百七十二人から原稿が寄せられた。

文集はA5判で七百二十ページ。日刷中より入式ではロ

について聞かれたこと▽軍事教練に明け暮れいつも腹ぺこだったこと――などの体験が生き生きと語られている。

また、当時の木造旧校舎、戦闘帽や運動会、修学旅行などの写真から当時の学生たちの姿も紹介、「復元川越マップ」も掲載され興味深い。

千部印刷され、同窓生や川越市内の図書館などに無料で配布するほか、希望者には一部五千円で販売する。問い合わせは、編集事務局の堀陽さん（電0492-22-0544）へ。



問い合わせは、堀陽さん（☎22-0544）へ。

激動の青春時代をつづる

昭和20年4月に旧制川越中学校（現川越高校）に入学した同期生たちが、還暦記念の文集「おーい、楠の木よ」（A5判・720ページ）を自費出版。戦中戦後の激動期に過ごした青春時代の体験や思い出、すでに亡くなった同窓生への追悼文などの原稿構成で172人が寄稿しました。同文集は、市・県立図書館などでご覧になれます。

広報川越 '94.4.10

'94 2/13 毎日新聞

戦中戦後育ちの第3期生が当時の思い出などをつづった還暦記念文集

H6.2.13 埼玉新聞

"おーい，楠の木よ"をご紹介くださったメディア

平成６年（1994）

２．13	埼玉新聞	
３．10	朝日新聞	埼玉版
３．10	毎日新聞	〃
３．10	読売新聞	〃
３．10	東京新聞	〃
３．11	NHK-FM	浦和（座談会 松村，松岡，青柳）
４．10	広報"川越"	
４月号	川越高校新聞	
12月号	ノーサイド（文芸春秋）	

中央 埼玉
あなたのニュースを東京新聞へ
50% 30% 10%

東京

戦中戦後の激動期の体験をつづる
川越高3期生が文集出版

戦中戦後の激動期に中学、高校時代を過ごした県立川越高校三期生たちが、当時の体験などをつづった文集「おーい楠の木よ」を十日の東京大空襲の日に合わせ自費出版した。終戦の年に旧制中学校に入学した三期生たちも還暦を迎える年となり、文集には百七十二人から寄せられた青春の思い出や軍国主義から民主主義へと価値観が一変した時代の体験や思いが収められている。文集出版を思い立ったのは平成三年秋。「六十歳で定年を迎える同期生もおり、還暦の記念に何か残そう」と発案。翌四年末に所在の分かっている二百人余に寄稿を呼び掛けた。

三期生たちは昭和七、八年生まれで昭和二十年四月に旧制川越中に入学。同期には三月十日の東京大空襲の被災組もいたという。空襲、軍事教練、終戦、マッカーサー進駐、新憲法——と、動乱の時代をともに生き、学制改革で誕生した川越高校の三期生として二十六年に卒業した。

文集には被災組との友情や勤労動員に明け暮れた日々、恩師の思い出、すでに亡くなった仲間への追悼文など百七十二人の文章を六部構成で収録。編集スタッフには出版社勤務の同期生も参加し、戦中戦後の雰囲気を生き生きと伝える記録文集に仕上がった。書名はいまも川越高校に残るクスノキからとった。

スタッフの一人、堀陽さん(六〇)は「平和の良さを実感として持つ世代の気持ちが次の世代の人たちに伝われば」と話す。A5判、七百二十ページ。千部作製。五千円で販売も。問い合わせは水口顕雄さん＝電0492(45)1878＝へ。

戦中戦後の体験をつづった文集を自費出版した県立川越高校三期生たち＝川越市で

川越高3期生が還暦記念文集
きょう半世紀ぶりの大同窓会

をつづった記念文集「おーい楠（くす）の木よ」を共同で自費出版した。この文集は昭和ひとけた世代の貴重な体験をつづった「同窓史」であり、平和の大切さを訴える「記録史」ともなっている。十三日、市内の東武ホテルに百五十人が集い、出版発表会と四十数年ぶりの大同窓会を開く。

第三期生は、太平洋戦争も末期の昭和二十年四月、旧制川越中に入学、戦後の学制改革を経て昭和二十六年に川越高校を巣立った。

この間、空襲、軍事教練、勤労動員、原爆投下、マッカーサー進駐、無条件降伏調印、新憲法、新円切り替えなど、戦中戦後の動乱の時代を体験した"戦中っ子"。

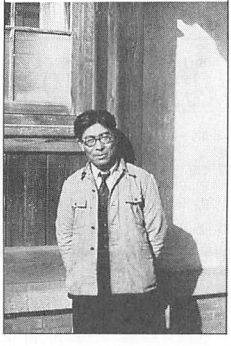
文集はA5判、七百二十ポ。内容は在校当時の思い出を中心に戦中戦後の「世相体験」、東京の空襲で転入してきた五十人以上の疎開少年との「友情」、「私の履歴書」や「交遊

出、エピソードをつづった。そのほか、その当時の写真や旧市街マップなどもあり、当時の世相や時代背景をしのぶ興味深いものになっている。また、本の名前は川越高のシンボルともなっている城址（し）の楠の木と当時をしのぶ想（おも）いを込めて命名した。

関係者が文集の発刊を思い立ったのは、平成三年の秋。同窓生の集まった席で「還暦を記念して文集を」との発案。その後、編集委員を募り本格的に動きだした。この間、十六回、延べ百六十六人による会議、打ち合わせを行い完成させたが、途中で亡くなったスタッフも。その結果、関係者二百人余りのうち百七十人が寄稿しているという。

編集関係者は「寄稿のほとんどが本音で綴られており、事実を"活写"している。今回の原動力となったのは川中・川高の歴史と先生方の『置き土産』のおかげです」としている。

第二部「追悼篇」――わが師、わが友



横田稲吉先生と飯能

赤田康二

横田先生のイメージは、理科系の先生にありがちな硬く厳しいものであったように記憶しているが、教え方には定評があった。

川中に赴任されたのは、昭和十七年のことだから、私達が教わり始めたのは四年目、三十歳半ばの一番元気な時だった。入学当時は、戦闘帽にゲートルを巻いた軍属姿から、終戦後は野球復活と共に、職員チームや上級生の中にあって、制球力にはちょっと難があったようだが、速球を投げ込んでいられた姿が想い出される。

それから二十何年かの間、吾野から毎朝五時起きして、生徒と一緒に川越の学校まで通勤されたのは、昔気質の先生だったからこそ出来たことだろうと思う。

それから、近くの飯能高校定時制教頭になられ、昭和四十七年に狭山高校の校長を引退されるまで、教職四十一年

に及んだと、お聞きしている。

しかし、それからがまた忙しく過ごされた。故郷の飯能市から、すぐに社会教育指導員や文化財保護委員を頼まれた。ことに理科系の経験者の少ない文化財関係にとって、自然いっぱいの飯能では、ことに貴重な存在で、天然記念物の保護や指定に活躍された。

公職を離れてからも、方々の公民館から引っ張りダコで、山野草講座や、自ら工夫された草木染めも講座を開講された。これらはことに、中老年の婦人に人気があり、なかなか盛況で、野外教室の場合など、いつも楽しそうに先頭にたって山歩きされ、八十歳近いとは思えぬその健脚ぶりには、一同参ったといわれる。

この間、飯能市誌の自然編も執筆されたが、最晩年の先生、最も愛された奥武蔵の植物研究の集大成として『奥武蔵の植物』を出版された。これには四百六十余種の植物のカラー写真と、分かり易い説明文が採録され、好評であった。川中時代の教え子の小山誠三飯能市長が序文を寄せている。

大勢の教え子や、市の文化関係者が出席した盛大な出版記念会の後も、山歩きを欠かされなかったが、しばらくして体調を崩され、平成六年四月永眠された。享年八十三歳。

墓所は飯能市吾野の法悦寺。嗣子は川高十六期の横田満氏。

那須大輔先生を悼む

佐々木　雄　司

七月二十七日の夜、松村氏から電話があった。「増補版に那須先生の追悼文を書け」と。考えてみると、何十年というご無沙汰。亡くなられたということも知らなかった。川中時代お世話になった者として、申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

入学式が終わって最初の時間、「那須大輔」と大声で名乗られ、黒板に大書きされた。耳から聞いた響きがちょっと妙だったのを、漢字で見て納得できたのが変に印象的で、今でも覚えている。確か、当時の国民服を着ておられただろうか。身長は大きくないが、ピンと背筋を伸ばし、大きな声で常に元気いっぱい。物理の授業も、明快であった。

中学一年から三年まで学年主任をつとめられ、当時のシキタリとして一組を担任された。そして、生徒のクラス分けにも何かシキタリがあったらしく、私は一年から三年まで一組ということになり、終始、那須先生の担任ということになった。そのためもあってか、先生には公私ともに可愛がって頂いたように思う。松村氏から追悼文の命令が来たのも、こうした由縁であろう。

大学進学後も、学生時代は時々おじゃまし、囲碁の手ほどき等をして頂いた覚えがある。当時、先生は一、二級だったのではないだろうか。こうした関係でありながら、大学卒業後は忙しさにまぎれ、全くのご無沙汰になって、近況報告にもうかがわなくなってしまった。たまたま、昭和四十年代末だったであろうか、埼玉県精神衛生センター所長時代、川高の先生方の研修でメンタルヘルスの話を依頼され、久しぶりに職員室を訪れた。当時、定時制の責任者だっ

たのだろうか。思いがけず那須先生にもお会いできてとても嬉しかった記憶があるが、ゆっくりお話しする時間もなかった。その時がお会いした最後だったのかもしれない。

実は、「今だからいう」といった那須先生と私だけの秘密が一つだけある。中学二年の時であったろうか。市ヶ谷で行われていたA級戦犯の極東裁判の傍聴が許されたことがある。川中全体で十名位だったかもしれない。当然のことながら希望者の中から抽選ということになった。二年生については那須先生がクジを作り、多勢で職員室に行列してクジを引いた。なんと先生は、私の番の時に、さり気なく、目で当たりクジを教えてくれたのである。私は、これは良くないことだと思う気持ちと、先生の好意は受けねばいけないという気持ちとの板挟みとなって悩んだが、大きな歴史の一幕をこの目で見たいという誘惑に負けて、当たりクジを引いてしまった。クラスメイトの皆さん本当に申し訳ありませんでした。A級戦犯の問題の時効が何年かは知りませんが、今まで誰にも話さなかったことです。

何れにせよ、那須先生には、お世話になりっぱなしで不義理のままお別れしてしまったことになった。東大で教えることになった時など、先生に報告にあがろうと思ったのだが、何か気恥ずかしくてうかがうことができなかった。もっと素直にご報告にあがれば、心から喜んでいただけたのではないかと思う。先生、申し訳ありませんでした。心からご冥福を祈ります。

佐藤徳四郎先生に逢うの記

鈴木俊雄

卒業後四年目頃、山手線車中で、先生に偶然お逢いしました。研修に行かれるところでした。在学中の鎌倉や館山

での吟行のことなど、語らいました。なお、私は来年定年です。

故 平岡泰之君を偲ぶ……追想あれこれ

川合 敬三

住人の居なくなった仕事部屋、愛用の机の下のダンボールに残された原稿の数々がある。『おーい、楠の木よ』の我々の原稿である。奥さんいわく「かたづけて、よいやら……」と見ると、赤線の注が無数に引かれ苦心の校閲の跡が歴然と残されている。しばし絶句し何も言えず、おそらく今もそのままと思われる。

三年前に、親しい仲間四人で、信濃路を尋ねて、大いに旅情を楽しんだ。運転をしない彼は旅館でゆっくり飲むからと言い、車の中でも文集の原稿を読みながら赤鉛筆を離さない。締切が近く寸暇を惜しむという様子に私達は何も言えなかったのが忘れられない。

今、再び増補別冊が発刊されることを、天国の彼はどう思っているのかと思いつつペンをとった。年に一度は必ず宿を共にし、語り合った友を失った寂しさは消えない。ただ冥福を祈るのみである。

あわただしく書いた葬儀の弔辞を紙上に載せていただき、皆様にもう一度彼を偲んで貰えれば嬉しく思います。

弔　辞

（所沢市妙善院の故平岡泰之君の御霊に、謹んで哀悼の意を捧げ、ここに多くの友に代わり、お別れの言葉を申し上げます。

五十年来の我が朋友・故平岡泰之君の葬儀にて）

体調を崩して、病院通いを始めたと聞いたのは、まだつい一ヶ月前のことでした。その後忘れもしない八月二十二日に所沢の防衛医大に入院とのことで会ったとき、驚くほど病弱な姿にびっくりしたのでした。しかし、仲間の内でもっとも頑健さを誇り、健康を自負していた君のこと、必ずや回復しうるものと信じていました。まさか、こんなに早く病状が悪化し、帰らぬ黄泉の道に旅立つとは夢にも思わず、余りの非情さにただ絶句するのみです。

今にして思うに、少年の頃より体力一番、病院の門をくぐることが皆無だったという健康さが、逆に自信に過ぎたかと悔やまれてなりません。

いま、ここに永久のお別れをするに当たり、しばし生前の交友の思い出を語らせていただきます。

かえりみれば、君との初めての出会いは、太平洋戦争末期、昭和二十年四月、川越中学校の入学式であり、以来五十年に近く親しい友であり続けました。この川越の学窓六年の生活は、中学・高校を通して、我々の青春時代を集大成した同窓誌『おーい、楠の木よ』が全てを物語っています。また、この本こそ、君が文学生活の最後の仕事として精根込めたものといえましょう。それぞれのエキスパートが集まり、最高の同窓会誌をと、志を同じくした結果が素晴らしい文集の完成をみたのです。君はとりわけ専門を生かして、全ての文に校正・校閲とさらに添削まで担当する地味な仕事に集中し、それぞれ投稿された仲間の文に一段と活力を与えてくれたことは、同窓の誰もが感謝しています。

私には、この六年間机を並べての生活、また陸上競技部のスプリンターとして、白地に紺の「K」のマーク鮮やかなユニフォーム姿も凛々しい、当時の大宮競技場での活躍など、昨日のごとく鮮やかに思い浮かびます。修学旅行で互いに悪童ぶりを発揮したこともありました。たった二両連結の西武線の通学も、ようやく戦中・戦後の六年の歳月の流れとともに終わりました。やがて、文学少年は文学青年のメッカである早稲田の文学部国文科に入学する。当時のザブトン帽をかぶり誇らしげに街を闊歩した姿も走馬燈の一つです。大学時代は文学への思いとともに、鍛えたスプリンターの脚を生かすべく名門早稲田のラグビーにあやかり同好会で活躍し、自慢げにバックスのプレーを聞かされたこともあります。その後のスポーツ好きは変わらず、私とスポーツ談義を交わしたことしばしばで、中学生の頃から今日まで、その童心には変わらないものがありました。

大学卒業後は、時の出版界の花形カッパブックスでおなじみの「光文社」に入社、その実力を徐々に発揮したのです。当時、会社を尋ねての帰途、池袋・新宿を飲み歩き、人生を語りつつ放歌高吟し、共に生きる喜びを満喫した仲間だったのです。その後独立の道を選び、文筆活動に、各出版社の仕事にと専念し、今日まで一貫して少年時代から文学の道を貫いた人生だったといえましょう。

思えば、ご両親の慈愛のもと、この三ヶ島の地に長兄、次兄、姉と四人兄弟の三男として生を受け、特に三人の男兄弟が当時の川中出身で、お二人の兄上は陸、海軍の将校より学窓に戻り、その後、実業界の重鎮として活躍され、君もまた好きな文学の道を貫きとおした、郷里三ヶ島の名家の一員だったのです。しかし高齢者社会を迎える現在、その人生はいささか短かったと残念でなりません。兄上のお気持ち、さぞかしと拝察いたします。また相思相愛だった奥様の昭子さんの心は察するに余りあり、言葉にもなりません。君と私は結婚式にも出席し合い、互いにスピーチをし、その後も奥様を含めた交友となり、二、三年前には家族ぐるみの還暦を祝い、これからの人生を大切にしよう

と言い合ったのでした。さらに昨年の秋には仲間四人と共に、信濃路の旅をして、この秋の旅も約束し、楽しみにしていたのに、早くも一人が欠け、まさに人生の無常を嘆かざるを得ません。

しかしながら、文学を愛し、自然を、山を好み、スポーツに親しみ、最愛の奥様と二人三脚で歩んだ人生は、平岡泰之自身としての満足感、また余人の知らざることかと察します。

いま、ここに思い出を語れば、いつまでも尽きず、お別れは何よりも辛い心境です。嗚呼、生者必滅、いまは、ただ御冥福を祈るのみです。もし許されるならば、君のこれからだった生命力は、残された最愛の昭子さんに譲り、安らかに眠って欲しいと願っております。

異例の厳しい暑さもようやく終わり、静かな秋の訪れとなりました。とめどない哀しみはここに納め、ご参列の多くの関係者、友人とともに、ただただ安らかな眠りを願い、哀悼の意を捧げ、我が友へ惜別の辞とします。

平岡大兄よ　　さようなら

平成六年九月十五日　僭越ながら、多くの友に代わりて　　川合敬三

平岡泰之君を偲ぶ

東　敏雄

あと五十メートル。武徳殿を右前にコーナーを回った。平岡が二、三歩前を走っていた。閃くものがあった。腕を引いた、腿を上げた。ゴール前、その前に紫藤研一がいた。高校三年秋のことである。これが平岡と走った最後のレー

スとなった。だが、彼がランナーであったから友人だったのではない。衝突を辞さず、自己の信念を主張する反骨の人として、私の尊敬する親友であった。反面、彼が持つ他人の淋しさを知るやさしさも、私を惹きつけた。それは、彼を遠くから見る人の想像とは別のものであった。彼は、法師蟬の鳴き声に人の苦悩を感じ、自分をそれに重ねる人でもあった。

「つくつく法師」と題して、生徒会報の創刊号に寄せた彼二年の散文詩がある。第二号にも「苦悩と煩悶」という文字が眼を刺す「流謫」なる一文が載っている。学生時代、その多くを聞くことはなかった。惜しい人は、『おーい、楠の木よ』を遺して逝ってしまった。あの見事な割付は、彼の繊細な神経に負うところが多いのであろう。彼がふと漏らした一言に私はそれを確信した。盛られた諸氏の文章とはまた別に、あの本自体が平岡と映る。『楠の木』を手にするたびに、私は彼を思い起こしている。

一直線のスプリンター　平岡泰之兄を憶う

五十嵐　統　祥

農具をしまっていた小屋に棚をぶっつけただけの部室のすぐ前が走り幅跳びや棒高跳びのピットだった。その助走路に並行して、取りこわされた建物の礎石に仕切られるように百メートルのトラックがあった。スタートダッシュを繰り返したところだ。五十メートルを過ぎる辺りから広いグランドに出、飯田先生の碑の前ではスピードが最高になる。フローティング走法に挑むゾーンだ。加速を信じ、トライする。そして、忽ち野球部員の声が弾けるバックネッ

ト裏のフィニッシュへと突っ込んでいく。棒高跳びの練習をしながら、疾走する貴兄等を目で追った。

一直線のスプリンター。貴兄の走りは決して器用とは言えなかった。硬い走りだった。スタートと同時に、あっという間にあの独特の腰を据えた厳つい中間走に入っていた。加速中も、ゴール間際も、胸を張って疾走する姿は一様だった。フローティング走法なんて関係なかったのかも知れない。ひたぶるに突っ込んでいった。

なぜかカーブを走っている姿が浮かんでこない。

話っ振りもそうだった。一直線だった。芒鋭に触れるような、あるいはぐきっと深奥に突き刺さるようなきつい言葉もあった。そうそう言えない事もずばずば言ってくれた。そんな時でも多少は加減しているような躊うような様子が見えなくはなかった。真底の優しさが覗く。ずばっと来たとしても、いつも貴兄特有の思考のあとが見えていたから、拒絶の情動など無縁でいられた。それよりも、その言葉の真実をじわっと自覚させられていた。

あの時もそうだった。はにかむごと、躊うごと、ではあっても遂に止まることはなかった。貴兄は『処分が論じられたあの頃』の中で、口が滑ったとか弾みという言葉を交えて振り返っていたがそうじゃないよな。時の移りがそんな風に言わせたのかも知れない。今日こそは言おうと朝礼台に立った筈。貴兄の思念と意気が奔ったと思っている。様々なものを見据えながら、なおかつ貴兄の進めるチャンネルは唯一、一直線しかなかったのだ。たしかにある種の目いっぱいの励起状態だったかも知れない。壇上にいる貴兄の肘を引っ張る術を知るものなどいるはずもなく、その時は一陣の風を巻き起こして過ぎていった。

文集の原稿を送ったとき、内心貴兄に斧鉞を振るってもらえるなと思った。貴重な機会だから強烈なやつをと期待した。しかし編集方針が違ってたんだってな。原文を尊重して直さぬことを基本にしたとか。何となく残念さにつきまとわれた。でも何度か電話をもらって本当にうれしかった。

貴兄は、文集作成の中心になってその大仕事をやり終えると、回顧の語らいもそこそこにあっという間に何処か虚空へと飛び去ってしまった。今はフローティング走法よろしく、慣性に乗ってふっ飛んでるんだろうが、もう追いつけるスピードではない。そっちではまた独鈷(とっこ)でも振るっているのだろうか。胸を張る姿勢はいよいよ重みを増しただろうな。誇り高い男だった。そう、その誇り高さがひたぶるに直進するエネルギーだったのかも知れない。己の道はいつの間にかさっさと決めておいて、あとは皆に交じってやたらと方向付けをしては共に歩いた。それがまた実に愉快そうだった。笑みを湛え、てらてらに光らせていた得意げな面が浮かぶ。呵呵なんて言葉がとても好きだったな。

想いを巡らしていると、貴兄から声をかけられたかとそっちに気を逸らされたり、ああそうかもう何も届かないんだなと思い当たったりの小さい乱れが入る。それもまた追憶の伴。何時でも会えそうな話せそうな気持ちの止むことはない。

思い出すこと

平岡昭子
故 平岡康之君夫人

酒と本と旅を愛し、いつも少年の心を持っていた彼は、忙しい仕事の合間にも、ふっと旅に出かけたりすることがよくありました。そんな時、どこへ行くのかも分からず後について行くだけでしたが、よく電車の中で行先を知ることもありました。

二十年程前のことですが、ヘルマン・プライの「冬の旅」をどうしても聴きたかったのですが、幸い切符が手に入

りましたので、日比谷公会堂へ二人で出かけました。ちょうど夕方でしたので近くの松本楼でカレーライスを食べてから中に入り、二階の席で念願の全曲を聴くことが出来ました。全曲、途中で休憩なしで最後まで歌い続けてのコンサートで、少しばかり疲れてしまいました。

その翌日、朝早くから「行くぞ。」という声に起こされて旅支度。その時は、冬の琵琶湖周辺のお寺めぐりで、うっすらと雪化粧の風景だったのを思い出します。今思い出すと、本当によく小さな旅をして、山にもよく登りました。ちょっと私にはきつかったけれど……。

最後に歩いたのは、顔振峠でした。三月中旬というのに肌寒くて、折角見に来たのに梅の花が見られず、越生から黒山までバスで、そこから歩いていくのですがなかなか着かず、途中で後ろから来た中年のご夫婦の方の車に同乗させて頂き、加藤康夫さんの「富士見小屋」へ着いたのは三時過ぎだったでしょうか。名物のおそばを食べて帰り際、じっと遠くの山々を見ながら、「晴れた日はここから富士山がよく見えるんだ。」と言っていました。

亡くなる三週間前までは本当に忙しく仕事をしていましたのに、急に腰の痛みがひどくなり、一ヶ月足らずの入院で帰らぬ人となってしまいました。

あれから二年半、毎日一緒に歩いた山や町、語っていた言葉など、忘れていたことが思い出されます。もし、許していただければ、加藤さんの庭の片隅に、好きだった桜の木を一本だけ植えさせていただけないでしょうか。

そして、その下でときどき集まって、彼の愛聴したフィッシャー・ディスカウの、シューベルト「冬の旅」から「菩提樹」を歌って下されば幸いです。

遺稿

二人の米兵

(故)平岡泰之

昭和二十年の一学期のある白昼、近くの新河岸の土手にB29が撃墜されたとかで、搭乗員が学校へ連行されてきた。外国人を初めて見ることになる。落下傘で降りて捕まったらしい。上半身裸の大男だった(二人だったかも?)。

当時、川中には東部軍の部隊が居座っていたから、まずここで取り調べたようだ。市中から大人達が何人も駆けつけてきたが、みんな興奮していた。

B29の空襲が頻々とあり「帝都」は既に焼野原となっていたから、無理もない。中の一人は木刀を振り上げて「叩っ殺せ! 殺っちめえ!」と大声で叫んでいた。

「勤労奉仕」がなくて、たまたまその日学校にいてこの場面に出くわした私は、重苦しい雰囲気に呑み込まれて声も出なかった。これで軍国少年気取りだったのだからだらしがない。

敗戦後二年ぐらい経って、私は下校時熊野神社の裏手辺りを本川越駅に向かっていた。前方からジョンソン基地の黒人兵がひとりやってくる。イヤな奴が来るなと一瞬思った。当時川中は戦闘帽から学帽に変わりつつあったが、学校側は生徒の家庭の事情を考えてか一遍に切り替えなかった。私は何度も洗って白茶けたあの戦闘帽をまだ被っていた。

近づいてくる黒人兵はすれ違いざま、私の頭の戦闘帽をばしっと叩き落とした。戦闘帽に、つい先年まで戦争のおぞましい思い出でもあったのか。私は呆っ気にとられて立ち向かうどころでなかった。いや、そんなことはできやしない。二年前から彼我の立場は逆転していたことを身をもって知らされたわけだ。親は間もなく学帽を買ってくれた。

遺稿

黄粉(きなこ)事件

(故)平岡泰之

昭和二十年四月に川中へ入学しても上級生は軍需工場へ動員されていて学校へは滅多に来なかった。私たち新入生も農家の玉ねぎ掘りの手伝いなど「勤労奉仕」が多かった。日清製粉川越工場へ一年五つの組が交替で働きに行ったのもこの頃のことだ。小麦粉の袋でも運んでいたんだろうか。空腹の毎日だった。弁当持参で行ったのだから午後も引き続き働いたようだ。構内には黄粉の匂いが漂い、その在りかも分かっていた。

通ってきて何日めかの昼食後、一年某組のかなりの人数が申し合わせたかのように空の弁当箱に黄粉を詰め込んでいた。無断で貰って帰ろうとしたのだ。だが成功しないでその日の帰る頃に発覚してしまった。組の誰かが付き添いのI先生に知らせたらしい。やがて全員が弁当箱を出させられ、詰めた者は元の場所へぶちまけさせられた。そのあと建物の陰で先生のお叱りがあったのは言うまでもない。

先生は多分「銃後のみんながこんな情けないことをしていて前線の兵隊さんに申し訳ないと思わないか。『欲しがりません勝つまでは』の精神でこの戦争を勝ち抜かなければ……」と声を張り上げたのではなかったか。「事件」にならな

ずに済んだのだからこれでよかったのかもしれない。
前に並んでうつむいている同級生の中で私は、腹が減ってどうしようもないんだ、ここにこんなに黄粉が余っているんだから少しぐらい貰ったっていいじゃないですか、と声には出さずに思っていたのではなかったか。
I先生とはこの後卒業まで体育の授業で親しく接してきたが、この時のことにはお互い一言も触れなかった。

一つ釜の茄子　新井澄夫のこと

長江　不二男

スキンヘッドのナウい姿で、彼は静かに眠っていた。
平成九年正月の松もあけない七日だった。前の晩、淙平（新井）からの突然の訃報を受けて、見舞いに行かなかった悔いに駆られながら、もどかしくたどり着いた彼の家の一室で、私は茫然と立ち尽くしていた。

一昨年の暮れ、突然ビールが飲めなくなったことをキッカケに、彼が浦和市立病院に入院していると聞いて、淙平と二人で見舞った。抗ガン剤の何クールかを投与された頃だった。周囲の人たちはみな「彼がガンに侵されている」ことを知っていた。本人告知はしない方針の病院とか、ご家族の悩みを思うと心が痛んだ。
しかし、本人は「明日は、薬も一区切りついて外泊できる。」と、すでに失いつつある声だったが、嬉しそうに言い、闘病開始以来の記録を我々に見せてくれた。それは、何故か胸を衝かれるほど実に克明に記されていた。

帰途、淙平と私は、強いて明るい見通しを持とうとしていた。「彼、あんなに几帳面だったかな。」何気ない調子で淙平が言う。確かに大胆な体操の演技の裏に秘められた綿密、繊細な神経は知り過ぎるほど知ってはいたが、二人とも、克明に過ぎる記録が心に重くわだかまっていたのだ。

それから数ヶ月が過ぎ、彼から「声はまだ正常ではないが、一応、治療生活から離れることが出来た。懸案の飲み会の計画はもう少し時間を貸してほしい。」という便りが届いた。何人かの仲間でスキーと酒飲みの集まりをやろう、という話があり、彼が幹事役を買っていたのだった。やはり杞憂だったか、ほっとした思いで、唐突なことだが、茄子の真っ黒な煮込みが頭に浮かんだ……。

それは高校三年の時の体操部の合宿でのことだった。合宿の日程は無事に――いや、必ずしも無事ではなく、酒を飲んでストームをやったのがばれたりはしたのだが――兎も角も終了して解散した。だが、最後の合宿、ちょっと物足りない思いが二人にあったのだろう、もう一晩泊まろうということになった。だが、そうでなくとも食糧事情のよくない時分のこととて、もう米など一粒も残っていない。あるのは誰かが調達してきた茄子の一山だけだった。「ま、これだけあれば一泊二食はいけるさ。」といったことで、たちまち話はまとまった。芸もなく、ただただ真っ黒く煮込んだ茄子を頬張って、練習を延長し、秋の県体で彼は優勝した。……奴が元気になったら、ぜひとも茄子で一杯やらねばならぬ。

勝手に彼の不死身を信じて、年賀状を出した。早くみんなで飲もう……。しかし、彼からの年賀状は来なかった。

平成九年一月六日、八時二十分だったという。

ご冥福を祈る。　　合　掌

遺稿

石原裕次郎のスタンド・イン

（故）新井澄夫

「新井先生が石原裕次郎の代役をしたことがあるって、本当ですか？」

この質問を受けなくなって久しい。

浦和通信制高校勤務時代に保体科の教員仲間に話したことは記憶しているが、聞いたどなたかが生徒に話したに違いない。そのころは、質問に応えることさえうるさく感じたものだった。その後、時が経過するとそんな話も忘れられたし、自らも話し出すことは避けてきた。

たいして誇らしいことでもないが、あまりできない経験なので、拙文ながら記録しておこうと思って、ワープロのキーボードに向かうことにした。

それは、日活が石原裕次郎と北原三枝とのコンビで、「嵐」シリーズの映画を五、六本連続して制作し、世に送り出していた、昭和三十年代の初頭であった。

ある日、大学の体操部に、日活から問い合わせがあった。裕次郎・三枝の共演で、「嵐」シリーズの最後の映画『嵐の中を突っ走れ！』の撮影にあたって、裕次郎が高校の体育教員として授業で器械体操を指導する場面があって、裕次郎の鉄棒師範演技のスタンド・イン（代役）を探しているとのこと。既に日本体育大学体操部には問い合わせたが

断られたので、ぜひともお願いしたいとのこと。一日五千円を予定しているとのこと。

候補者が容易に現れなかったのは、「その他大勢」でなく「スタンド・イン」として映画に出演すると、その後「アマチュア資格」を失って、公式競技への参加が閉ざされると判断したことによるものであると聞いた。

東京教育大学の学生時代は、茗荷谷の大学本部と幡ヶ谷の体育学部に、所沢の自宅から通学していたが、故あって四年間では卒業できなくなり（この理由はまた別の機会に述べることにしたい。）、自宅を飛び出して一人住まいをしながら、バーで働いたり、謄写印刷・製本をしながら、大学卒業を目標に苦学？　していた。もちろん経済的に余裕などあるはずはなかった。

この話を聞いて、ただちに立候補した。もちろん今後の競技生活はすっかり断念してのことである。当時は、ビデオはもちろん、八ミリカメラでさえ世に出回っていなかったので、自分の演技をぜひ客観的に見たいと思ったからであったが、より強い欲求は別にあった。ガリ版の下請けで八日八晩徹夜したり、ひとつのコッペパンで三日も喰いつないだりしたころだったので、「一日五千円」がなんとしても欲しかった。対立候補者はなく、見事当選した。

たしか翌々日だったと思うが、日活本社に打ち合わせに行った。

監督と助監督とに面接して、映画の台本をもとに、場面と演技の内容について説明を受けた。その内容は、映画の「字幕タイトル」が終わると、ただちに裕次郎がグランドに立てられた鉄棒で「大車輪」をしている場面から、「車輪宙返り下り」をするまでであるとのこと。こんな演技内容であるなら朝飯前のことであるし、これで五千円では「結構ないい収入」だと思った。その他の条件として、頭髪を「慎太郎刈り」（裕次郎の兄の名のついた刈り方で、当時若者の間でかなり流行していた）にしてきて欲しいとのことであった。

その打ち合わせの途中に、石原裕次郎を紹介された。彼はたしか一つ年下であったはずだ。背が高く、室内でもサ

ングラスをはずさずに応対した彼には、あまりよい印象を受けなかった。五千円が脳裏にちらついていたから、そんなことはどうでもよかった。監督からひととおり説明があった後、彼は、貧しい服装をしたスタンド・インの留年大学生に、

「私は器械体操は大の苦手なんです。よろしくお願いします。」

と言って、軽く会釈した。撮影の途中だったのか、呼び出されると、

「終わったら、銀座で一杯やりましょう。」

と言いながら、右手で別れの合図をして出ていった。

打ち合わせは、出演料の支払い方法と撮影日の確認で終わり、日活本社を後にした。

翌日、幡ヶ谷で初めての散髪屋に行った。条件づけられた「慎太郎刈り」にするためである。店には、見習い上がりとおぼしき二人の若い女性の従業員と客一人だけだった。事情を話して「慎太郎刈り」をして欲しい旨を伝えて椅子に座った。担当した女性はやおら業務にかかったが、もう一人の女性がその仕上がり具合が気になって仕方ないらしく、しきりにのぞき込んでは批判したりしていた。やがて二人のけんけんがくがくの意見交換の中で、結果二人の合作による「慎太郎刈り」ができあがった。裕次郎の最近の刈り方は少しニュアンスを変えているような話をしていたが、あまり興味深く思っていなかったし、そんなことはどうでもよかった。ただ、若い女性による作品であることで、まあまあのセンスであったのだろうと思った。

日活本社にも社員用の散髪屋があったが、散髪代が五千円に含まれていることに不満があったのと、そこの散髪代がいくらかかるか分からなかったこと、そして、初めての店に入ることで躊躇したのだった。幡ヶ谷の散髪屋を出ながら、日活本社でやってもらった方が、適切に「慎太郎刈り」をしてくれたかもしれなかったなと思ったが、遅すぎた。

いよいよ撮影当日を迎えた。快晴の秋晴れであった。前夜は、納品期限の迫った安請負のガリ版の仕事を気にしながらではあったが、十分睡眠をとったので、体調はよかった。

会場は、日本体育大学のグランドであった。日体大と教育大との体操部は全国インターカレッジで覇を争っていた時代で、両校体操部の交歓競技会の開設時には、四年生のとき体操部のマネージャーとして、打ち合わせのため何度となく訪れた所であるし、日体大体操部には多くの知人がいた。

撮影は午後からだった。早めに正午近くに行ったころは、授業中であったせいかグランドは閑散としていた。いざこれからという時間となったとき、昼休みになったのであろう、たくさんの学生がグランドに出てきた。日活の撮影と聞いて、軽食やジュースを手にしながら学生の群がりは、ますます増えていった。その中で、撮影が始められた。競技会に出場し演技待ちをしている競技者と同じような緊張と何となく恥ずかしい気持ちとが交錯して落ちつかなかった。

撮影は、「車輪の連続」の場面と「車輪宙返り下り」の場面との二回に分けて行われた。

「車輪の連続」は遠景で撮影された。車輪を五回ぐらい廻ることを多くとも五度も繰り返せば終わると考えていたが、生まれて初めての出演者は、映画の撮影手順や回数や時間など知る由もなく、予測は全くくつがえされた。経過と共に分かったことだが、車輪の時間を計ること、カメラ・アングルとフレーミングを決めること、ライティング効果を決めること、などなどで、十度以上も繰り返しやらされて、やっとOKが出されたときには、手のひらがすっかり痛んでしまい、熱をもち、厚いタコも剝げそうな状態であった。フィルムが回転していないのも知らずに、最初の演技から競技者のようにひたすら真剣に演技した。「テスト」が何度か繰り返され、「本番」は一度で終わりと思っていたが、何度も繰り返される「本番」という言葉が恨めしく、いったいいつ終わるのかと思いながら、五千円には見

合わないなどと感じたものだった。そんななかで、日体生の観衆の目を気にするほどの余裕は全くなくなっていた。監督が満足するまで何度も繰り返し撮影するということが当然のことなのだと思ったのは、かなり後になって映画についての知識をある程度得てからだった。

「車輪宙返り下り」の撮影に移った。

近景での撮影なので、代役の顔が写っては意味がない。車輪の技術は、倒立の姿勢から、振り下ろして真下を通過し上昇する過程では、腕の間に顔をおいて地面を確認しているが、次の倒立になる過程で瞬間いち早く鉄棒を見るように首を上向きの体勢にする。この瞬間の首の転向を利用すると顔を撮らないで済むため、演技者の後下方にカメラは据えられた。鉄棒のわきには、どこから集められたか分からない生徒役の「その他多勢」がお揃いのTシャツで整列していた。

鉄棒にかかる時間が比較的短いことと、「車輪の連続」での無知による誤解を経験したこととがあって、手のひらが痛んでいたものの、気軽に演技できた。比較的少ない度数でOKが出たように感じた。

五千円の労働は終わった。

疲労した体を休めながらほっとした代役に、助監督から予定になかった内容の依頼を受けた。

一つは、裕次郎先生の師範演技後の生徒に与える「指導の台詞」をどう言わせたらよいかということだった。少し専門的なそして難しくない言葉を選択してほしいとのこと。しばらく考えてから、

「あおりのタイミングに十分注意してやれよ。」

という言葉を提供して、落着した。

もう一つは、その場面に続いて裕次郎の、

「それでは、次の者やってみろ。」
という台詞に続いて演技する生徒の役を引き受けてほしいとのこと。体が疲労していたし、手のひらの状態は最悪に近かったので、応じられないと断ったが、あまり熱心な懇願に負けてしぶしぶ承諾した。ランニングからTシャツに服装を替えて、その他多勢の生徒の列に入った。
裕次郎先生指示のあと、
「はい。」
と返事をして、鉄棒に懸かった。代役でやった時より下手にやってほしいとの要望があったので、わざと膝を曲げたりしたが、極端に下手にやることは難しかった。でもその程度がよりよかったのか、監督は満足したようだった。着地するときに片腕の付け根を支える裕次郎先生の補助動作は、代役が指導することになった。この撮影は、二度で終わった。
次は、裕次郎による「宙返り下り」から「着地」の場面の撮影に入った。
助監督は、いい絵を撮るためにどのようにしたらいいか、代役に撮影方法について質問した。現場で試行錯誤しながら、場を設定することもあるのだということを知った。グランドに鉄骨の指揮台があるのを見つけて、砂場の前に移動し、そこから飛び降りて着地姿勢をとらせたらと提案した。代役は、裕次郎の演技指導にあたることになった。この撮影は比較的簡単に終わった。
その後、2階のバルコニーから、岡田真澄が身を乗り出して、
「よう、やってるな。」
とかなんとか言って、授業中の裕次郎に声をかける場面を撮影していた。裕次郎先生も約束していたような応対を

する台詞があって、あまり長い時間をかけずに、その日の撮影は、全部終わった。

賃貸しの四畳半に帰り、銭湯に行ってから休んだ。若かったので、体は一晩過ごしたらほとんど回復した。手のひらの痛みは三日ほどしないと復元しなかったことを思い出す。

最初の打ち合わせになかったことを承諾するときに、「五千円以外に手当してほしい。」と言わなかったことを悔やんだのは、やはり後日のことだった。結果的には、千円程度はあってよかったように思った。そうすれば、ちょうど一年間の授業料になったはずだった。五千円をどうもらったか思い出せない。また、どのように使ったかも今では思い出せない。

代役は、試写会には招待されないことを知って、住まいの近くの映画館で上映された初日、入場料を払って観に行った。自分の演技を客間的に観るということが初めてのことなので、興味深く神経をとがらせて見入った。打ち合わせで聞いていたとおり、字幕タイトルに続いて、車輪の連続が映り、転じてクローズアップで車輪宙返りの演技が映された。演技中の自分の体感とは合っていない。自分が理想としていた車輪に近いはずと思っていたのに、首をかえす瞬間に、ほんのわずか両肘がゆるむように見える。専門的な目でもわからないほどのことだったが、ずいぶんがっかりした。その後この教訓から、車輪の技術はかなり上達したと思っている。せっかく観覧料を支払ってのことだからと思って、映画は最後まで観たが、今でもそのあらすじをおぼえていないくらいだから印象的なものではなかったようだ。

公式競技会の参加を閉ざされることについては、承諾にあたってアマチュア規定をくわしく調べたりはしなかったが、本名を出して出演するわけではないし、全く問題にはならないことがあとで分かった。同年輩のものよりも五年遅れて埼玉県公立高校の教員になってから、県内公式競技会の一般の部に何度も参加し、個人優勝したことさえある。

あの容易だったスタンド・イン当選と五千円の収入は、金額的に不満はあったものの、逆に残念に思った体操部員がいただろうと思って、少しほくそ笑んだものだった。

石原裕次郎はしばらく闘病生活ののち、数年前惜しまれて他界した。たくさんの同業者やファンが集まっての盛大な告別式がテレビで報道されたりした。代役をしたことがあるだけで、特別な関係ではなかったが、同時代を別の世界に生きた俳優石原裕次郎に、ひそかに弔意を示す気持ちにはなった。「銀座で一杯」は、忘れられたのか機会がなかったが、果たされないまま他界されたことは、心残りとなってしまった。

その後、日活が倒産？したニュースに接した。若き日の記念にビデオにでもして、自分で見たり子や孫に見せたりしてもよいかなどと思っていたが、日活がなくなってしまっては、その希望も断念しなければならないのかと思った。

ごく最近、小樽に裕次郎記念館が出来たと聞いた。小樽には、義兄が住んでいるし、全国インターハイが開催され役員で従事したり、通信制教育の全国研究大会に参加したりして、何度も行ったことがあるが、記念館はその後の開設であったようだ。日活がなければ、貸しビデオ屋か小樽記念館に問い合わせればきっと残っているはずだと言ってくれる知人がいたが、まだそれはしないでいる。

永田　正君の追想

浅倉　昭

昭和二十四年高校二年生の秋十月、バスケットボールの練習試合中コートに倒れ、そのまま帰らぬ人となった。彼には先天的な心臓弁膜症という持病があった。あの時以来約半世紀の歳月が流れた。

彼との付き合いは、埼玉県北足立郡馬宮村立馬宮東小学校（現、大宮市立馬宮東小学校）の入学式から始まった。彼は当時、色の黒いやせた子だった。入学式当日の席が私達の横で、最初は母親同士の挨拶から始まった。彼の家は大きな農家で、五人兄弟の次男坊であった。翌日、一年生の教室で私と彼は隣同士の席に決まった。そして、金子千代先生が担任に決まり、二年生まで持ち上がってくれた。その日に級長、副級長が発表され、私が級長、彼が副級長となった。これは当時、私の父が村役場で収入役をしており、金子先生のご主人が村役場に勤務していた関係で決定したことだろうと思う。このことは三年生になり担任が勝山先生に替わったと同時に立場が逆になり、彼が級長、そして私が副級長となり、以後小学校卒業まで変わらなかった。

小学校時代は彼の本家筋の永田本家によく出入りしていた。永田本家は旧武家屋敷で、映画のロケ地となり、映画人が多く出入りしていたものだった。日曜日には、この広い屋敷内でチャンバラごっこをしたり、鬼ごっこをしたりして、一日中遊んでいた。

彼は算数が得意で、将来は数学の先生になりたいといつも話していた想い出がある。六年生の担任は柳田先生で、埼玉師範学校出身の大変厳しい先生だった。特に川越中学へ入学すべく補習授業を始めてからは、放課後毎日二時間ぐらい勉強させられた。例題として、問「あなたの尊敬する人物は誰ですか。」、答「楠正成です。」「どうしてですか。」「忠義の心が厚いからです。」などと、口頭試問を中心に勉強した記憶がある。また、入室の際は四十五度の角度で「礼」をし、席の脇に進み、試験官の合図を待って着席することなど、非常に細かいことまで注意するよう指導された。この結果、首尾良く二人共合格することが出来た。

川越中学校入学後の想い出は数多くあるが、一つは佐藤徳四郎先生が指導された俳句の勉強会で、芭蕉の『奥の細道』を輪読して俳句や文章の内容について検討し、それぞれの意見を発表しあったことである。例えば、『奥の細道』の最初の句「草の戸も　住み替わる代ぞ　ひなの家」、この解釈について、芭蕉は三月二十七日に深川を出て東北へ旅立ったので、この時期が「雛祭り」に当たり、後に住む人が雛を飾ってくれるであろうと推測したのではないか。いや、これは実際に雛人形を取り扱う商人が後に住んだのではないか、などいろいろの意見が出て、みんなで討論した記憶がよみがえってくる。この句の中心は「住み替わる代ぞ」という芭蕉の人生観にあり、流転してやまない現実世界の例に漏れず、世捨て人の住むこの草庵にも、住人の代わるべき時節がやってきたのだという感慨が、「草の戸も」の「も」にこめられていると思う。

また吟行句会の想い出としては、一色君の父上が東京電力に勤務されていた関係で、秩父の東電の山荘を借り、十日ぐらい合宿して句会を催したことなどがあった。これらを初めとして、我々川越高校生の句が、吉田冬葉先生主宰する句誌「獺祭」に数多く掲載された。

昭和二十五年二月に開催された「埼玉県高校駅伝」に出場したことが強く印象に残っている。この駅伝は、熊谷市から浦和市まで七区間で争われ、川越高校はダークホース的存在だったが、一区で大きく出遅れ、二区五十嵐統祥君、三区宮崎敏昭君、そして私が四区「桶川」から「上尾」まで八キロを松本先生の伴走で走った。この時、私は永田君の遺影をズボンのポケットに忍ばせて、彼の力を借りながら走ったことが昨日のことのようによみがえってくる。その時の成績は、全員よく頑張ったものの五十校中十二位だったと記憶している。特に、二区で五十嵐君が十五人抜きしたことが、翌日の新聞に大きく載ったのが想い出される。

いろいろ想い出は尽きないが、「紫匂う武蔵野の大地で、ゆるぎない秩父の嶺々」を眺めて過ごした六年間は決して

忘れることが出来ない。それに親友の永田君が一緒ならば、どんなによかったことか、悔やまれてならない。彼の冥福を祈りながら拙文を閉じたい。（旧姓・蔚島、台北在住）

永田　正君のこと

森下　貞夫

『おーい、楠の木よ』で、島田眞三君が「円空仏」という題で、亡き永田正君の思い出を書いたものが心に残りました。自転車で通学した仲間で、とりわけ親しい間柄でしたので、今でもたびたび思い出し、夢に見ることがあります。私の家の川越（福原）から十五キロも離れた大宮の彼の家に、自転車で行ったり来たり、それも遠く感じることもなく、よく泊まりがけで遊んだもので、ご家族にも親しくして頂きました。

在学中の急逝という形で十六歳の永田君と別れて四十八年目の平成八年九月、永田君の兄上がひょっこり私の家を訪ねてくれたことがあります。玄関のチャイムが鳴って出てみると、そこに円空仏のような慈愛に満ちた骨相の方が立っていました。

「森下さんですか？　昔、川中の……」と言葉が終わらぬうちに、その人が永田君の兄上であることがすぐに分かりました。彼には二つ上の、そっくりな兄さんがいてよく覚えていたからです。

「永田さんですね！」自然に言葉が出て互いに感激し、それから積もる話に花が咲きました。兄上も私の家はうろ覚えで、「よく見付かったものだ。」と、その縁の不思議を感じました。

「きっと、正(たー)さんが導いてくれたのだろう」。

それが縁で、一週間ほどして私は大宮の永田さんの家を訪れました。昔自転車で走った畦道は、広い舗装道路となり車が激しく行き交い、田圃は街になり、全く昔の面影はありません。先方に到着した時、兄上は物置の片付けをしておられた様子でしたが、出てくるや私の顔を見た途端、「いま整理していたら、三十分くらい前にこの写真が出てきたんだよ。」と言って、大きな一枚の写真を見せてくれました。それは十六歳で逝った永田君の葬儀の写真で、すでに五十年近い歳月の中で、セピア色に変色していました。永田君の霊が、私が家を出た時に待っていてくれたのかなあー、と感じました。さっそくお線香を上げさせて貰いました。

その折の話によると、永田君のお母さんは平成八年九月の彼岸前、九十一歳八ヶ月の長命で逝かれたとのことですが、「正(たー)さんの所に福原からよく自転車で遊びに来た森下という子はどうしているかなあ。」と、度々言われていたとのことでした。お母さんがお元気のうちにお会いしておけばよかったと後悔しました。

新しい本が出来たら、お供えして永田家の皆さんに思い出して頂こうと思っています。

石井精治君の思い出

水口重雄

石井君は、子供の頃は「荷田(はすだ)」といいました。父親が川越市鴨田(かもだ)の出身でした。荷田家は東京に出て、米穀商を営んでいましたから、荷田一家は戦争さえなければ、裕福な生活が出来たはずでした。戦争のために疎開して、鴨田に

帰って来たために、大変な苦しみを味わいました。私は宮元町（川越市）に住んでいましたから、帰りはいつも一緒で、荷田君は私の家からは、一人で二キロほどの田圃の中の細道を歩いて帰っていったわけです。その頃から私はずっとお付き合いをさせていただきました。

石井姓となったのは、高校を卒業して小学校の臨時教員になった時に、隣の中学校の独身で高齢になっていた石井という女の先生が、老後が心配だということで、家を造ってくれて、両家にとって親戚筋に当たる人と荷田君が結婚して、夫婦養子として石井家に入った時からでした。

荷田君は、川中併設中学校を卒業すると、荷田家の生活が大変だったので、製図の仕事をしながら川高の定時制に通いました。定時制というと、幾分暗いイメージがありますが、持ち前の負けん気と器用さ（特に書が上手）といたずら心で、楽しくやっていました。定時制には女生徒がいますから、ある時四、五人の悪童どもと相談して、同学年の気の合いそうな男女生徒の組み合わせを作って、双方にラブレターを出したわけです。

「よろしかったら○月○日に氷川神社に来て下さい。」

と書いて、自分達は氷川神社で見張りをしていたわけです。そのうち二組が引っかかって楽しかったということでした。しかし、後で先生に呼び出されて、こっぴどく叱られたそうです。また、運動会の仮装行列では、農家の娘さんがおやつの道具を持って田圃に行く様子を演じて、見事グランプリをとったりしました。

高校を出ると、小学校の臨時教員をやりました。当時は教員が足りなかったので、校長先生が、頼みに廻ったほどでしたから、高校卒の先生は珍しいものではありませんでした。かくいう私も臨時教員として荷田君の近くの学校に勤めていました。荷田君は負けず嫌いで、何事もやり抜く軍人精神の持ち主でしたから、子供たちにたいへん慕われる良い先生でした。川越市立泉小学校を出発点として、芳野小学校、川越小学校と転勤しました。此の頃になると石

井先生になっていて、私も同じ学校（芳野小学校）に勤めるという大接近をしたわけです。石井君の突撃精神は、一例をあげれば、教員のレクリエーションのソフトボール大会で、キャッチャーをやった時に、ボールが目に当たって真っ赤に腫れてしまいました。それでもキャッチャーをやめないで、最後までがんばり抜きました。これ一つを見ても、必死の努力をする人であることが分かると思います。子供たちの球技大会にしても、書初大会にしても、一等賞をとるまで練習をさせました。今では考えられない滅私奉公の先生でした。

その後富士見市に転勤して、勝瀬小学校、関沢小学校と異動、この間、関沢小学校の時に過労で、肺に腫瘍が出来てしまって右肺を切除しました。石井君は、よく「片肺飛行」で呼吸がたいへん困難だと言っていました。次は川越に帰って南古谷小学校勤務、ここでたいへんな勉強して教頭試験に合格、次の年に大東西小学校の教頭に栄転しました。このとき私は隣の大東中学校勤務になりましたから、またまた大接近で、石井君の勤務にはいつも敬服し、いろいろと御教示をいただきました。ここでまた石井君は猛勉強をして校長試験に合格、上福岡市立第五小学校校長に栄転しました。ここでも石井君は元気で、研究発表をしたり、良い学校経営をして無事定年を迎えました。

退職した時に「職務を全うできてうれしい。」とつくづく述懐していました。途中に大病をしたのが心配だったのだと思いました。私も一緒に平成五年三月末日の定年退職でした。

私には再就職の話が何一つ来ないのに、石井君には休む間もなく再就職の口がかかり、所沢市の若草幼稚園の園長として、第二の人生を踏み出しました。ここでも石井君は大奮闘して良い園長さんでした。幼稚園の子供たちですから遠慮がありません。先生のお弁当箱に指を入れて「園長先生これなあに。」と聞かれても、にこにこ笑って答えられるというような好々爺の優しい園長先生でした。

幼稚園長の一年目が終わらない平成六年三月に身体に異常を感じて入院。十年前に関沢小学校勤務中に切除した右

肺とは反対側の左肺に病巣が転移して発病、今度は左肺で心臓に近く、ですから手術が出来ません。放射線による治療をしたわけですが、平成六年九月十一日に永眠されました。

石井君は常に戦場に在る思いで、一生を戦い抜いたと思います。私は教職生活の間、石井君の近くで勤務させていただき、あらゆる面で指導をいただきました。感謝をこめて御冥福をお祈り申し上げます。

石井家には叙勲の額が掲げられています。

戒名は「求道院釈覚精居士」、菩提寺は川越市宮元町の「真行寺」

日本国天皇は石井精治を
勲五等に叙し瑞宝章を授与する
平成六年九月十一日皇居おいて
爾をおさせる
平成六年九月十一日
内閣総理大臣　村山富市
総理府賞勲局長　石出宗秀
第二一〇四七六号

石井精治
従六位に叙する
平成六年九月十一日
内閣総理大臣　村山富市

小沢昭治君を悼む

清水良平

人生八十年、平均寿命延びたりといえども我々川中（川高）同期生たる者、いずれはお互いに追悼し、あるいは追悼される日が来る訳であります。しかしながら、小沢君とはあまりにも早く幽明相隔てることになりました。

ともに銀輪を駆って太郎右衛門橋、釘無橋を渡り、川田谷村から川越まで通学した日々から、はや半世紀が過ぎ去りました。真に懐旧の情を禁じ得ません。

君は学業優秀、身体強健の士であると同時に「ライ魚」のニックネームが相応しい好少年でありました。当時、村内の青年有志や川越に通う中等学校生を中心として結成された「黎明クラブ」なる野球チームで、君は不動の四番打者として鳴らしたものであります。なお、このチームは、やはり村内から川中に通っていた君の親友の永沢誠一君を主戦投手に擁しておりました。小沢君は常に洗いたての純白のユニフォームをまとい、颯爽と振る舞っておりました。チームは小沢君が川中を去るのと前後して自然消滅しましたが、これも君の求心力の強さを物語るものであります。

後年の君は家業の傍ら地域や市の要職を歴任される人望を備えていたが、川中時代からその片鱗がありました。

真にこれから円熟というとき、惜しい友を失った感に堪えません。小沢昭治君、どうか安らかにお休み下さい。ここに深く哀悼の意を表し、心からご冥福をお祈り申し上げます。

吉野正武君との友好接点

新井淙平

吉野正武君の訃報に接したのは、かなり後になって澄夫君（新井）からだった。当の澄夫君もいない今、吉野君については、早速『おーい、楠の木よ』を引っ張り出し、彼の記事「当時の思いで」を再読した。小学校を七回、中学校を三回転校、そして一年以上住んだのは所沢だけだというのには改めて驚き、戦後の苦しい生活は彼もまた例外ではなかったようだ。そこに描写されている西所沢の家に、澄夫君と一緒に行ったことがある。そのきっかけは、近くの東川が厳冬には凍り、満州帰りの彼がそこでスケートをしていたからだ。靴を借り、滑ってみたが、その頃には、気温も上がり氷が解けて割れ、近くの屠殺場から流れ出た赤い水に濡れたことを覚えている。

クリスマスだったか、澄夫君と彼の家で夜明かししたことがあった。お母さんが鉄板で焼き餅を我が子に与えるかのように、何の惜しげもなく次から次へと焼いてくれた。彼の言う当時の生活苦とは全くの裏腹なものだった。奇妙なことに彼はそこにいなくて、相手をしてくれたのは一つ上のオケンのお姉さんだった。彼女はとてもグラマーで魅力的な人だった。当然、澄夫君もそう思っていたに違いない。

スケートの次なる接点は「カムカム英語」だが、『楠の木』には澄夫君と土金達雄君の名はあっても、淙平の名はない。第三の接点は短い期間ではあったが、ジョンソン基地で一緒だったことだ。そのグループは土金君と早逝された塩野和雄・中村喜代治両君で、とりわけ追想することはないが、彼には勉学上負けていた分を一週間、先輩風を吹かせたことで嫌われたに違いない。その後、心臓が弱いとかねがね聞いていたが、かくも早くと悔やまれる。それにも

増して残念なことは、彼には誠に申し訳ないが、お姉さんに再会できなかったことだ。

吉野君のご冥福を祈る。

（編注……淙平君は澄夫君についても当然書いていただくべきでしたが、他の方に譲っていただきました。）

級友謙ちゃんの死を悼んで

丹沢　鋭次郎

〝謙ちゃん〟こと渡辺謙君が黄泉の国へ旅立ったのは平成八年八月十二日、再度の致命的脳梗塞に見舞われた八月五日、奇しくもその日、私は己の不注意から右脚を骨折、脚半分をギブスで固定して身動き出来ない状況だった。八月十二日、奥様からの突然の訃報に接し、驚くと同時に因縁なるものを感ぜずにはいられなかった。前の月、七月二十二日病状いかがかと謙ちゃんに電話、言語障害のため会話は一方通行、奥様の媒介で意思の疎通がはかられ、近々会うことを約束したばかりだった。しかし約束を履行することなく彼は逝った。

遡る昭和二十五年五月、川高に転入学した私は、東も西も判らぬ上、学力面から服装に至るまでまさにコンプレックスの固まりだったが、その中で謙ちゃんは永年の知己同然の対応を見せ、親友としての交際が始まった。美形である上に家庭環境の良さも加え、性格は社交的であった謙ちゃんに比較し、他力本願、内向的な私では本来親友となる要素は認められなかったが、互いの欠点を補い、互いの主張を認め合うことによって親友としての交際が続いたと思っている。

大学は異なったが、卒業するまで常に一緒に行動、互いに学校に紛れ込み講義を受けたこともあった。立教大学の応援団に入部した謙ちゃんは、社交術にますます磨きをかけ、ジャズ、社交ダンスと大いに青春を謳歌していた。日頃「太く短く生きる。」と宣言し、当時のスター鶴田浩二に憧れ、私もその影響を受け、GIカット、ポロシャツ、マンボズボンのスタイルで池袋界隈を歩き回ったものである。

四十年前のそんな〝謙ちゃん〟の姿が鮮明に想い出される。賑やかさを好む反面、寂しがり屋で、常に人に接していなければいられないといった面も感じられた。

川高三年の時、校内の英語弁論大会に参加、「プリーズ　ギブミー　カインドリィ　アテンション　ツウ　マイスピーチ」の出だしで始まった謙ちゃんのスピーチを、演壇目前に陣取って囃したてた悪友の数々が想い出される。そんな彼らと、〝謙ちゃん〟の墓前で語り合いたいと、私は夢見ている。

作家井上靖の「星の祭り」の中で、ある実業家がヒマラヤの僧院を訪れ、僧院の上にひたすら地上を照らす満月の下で「永劫」という思いにとらえられる話で、作家はその思いを「あの大地の夜には太古からの時間が流れていた。月も、雲も、山も太古と少しも変わらない姿でそこにあった。永劫の前には人間はただ生き死んでゆく。太古からそれを繰り返しているだけだ。永劫という時間は、わけへだてなく等しく人々をその中に呑み込んで行く。」と表現している。

この年齢になると、いやでも永劫という思想が実感として迫って来るものがあるわけである。しかし反面、永劫という思いの前に、過去の人生が一寸変わった意味を持って蘇ってきたのも事実だ。永劫の流れの前の一瞬の人生だからこそ、私達がひたぶるに生きて過ごした学生時代の日々が、一層輝いたものとして蘇って来た。それぞれの個性が絡み合って過ごした日々を思うにつけても、一切のしがらみに関係なく、お互いにただ一度の生涯で出会った懐かしい人間として、もう一度話し合ってみたいものだ。

合　掌

青木安さんを偲んで

新井貞夫
宇都野正章

平成八年四月、川越小学校・昭和十九年度卒業生の同窓会が、川越東武ホテルで開催された。実に卒業後半世紀を経ての同窓会で、恩師をはじめ五十一名が出席、思い出のトルコ行進曲をバックに旧交を温め合った。元気で活躍している仲間の多いなかで、既に物故者四十七名を数えるが、その中に青木君がいる。

「気を付け（キツ）イ」「頭右（カシラミギ）イ」「直（ナオ）れ」、体に似合わない大きな、歯切れのよい声で、朝礼や野外の集まりで号令をかけていた姿を思い出す。家が郭町の学校の北側にあり、父上は市役所に勤務しており、何度か遊びに行ったこともある。小学校時代の彼は「品行方正」「学術優秀」、絵に描いたような優等生で、男子のトップクラス、大きな期待を持って川中に進学した。

中学一年は二組、その後も高校を卒業するまでの六年間、同じクラスになったことはなかったが、科学部等で活躍、趣味の将棋でも非凡な才を見せていたことは仄聞していたが、次第に疎遠になっていった。

（新　井）

安さんこと青木安雄君と親しくなったのは、川高卒業後の一浪時代である。東大受験に失敗、捲土重来を期して猛勉すべき二人であったが、将棋・麻雀、高梨宅での駄弁り等々にうつつをぬかし、二度目の挑戦もあえなく破れた。

二人で相談、取り敢えず職安を通じて本田技研工業成増工場に就職した。私は総務課、彼は出荷係に配属になった。その頃、大島和道君は組立工場にいた。五ヶ月くらい勤務したところで、私は暫定的に籍を置いていた大学に本格的に通うこととし、同社を退社した。安さんは東大三度目の挑戦をすべく、同時退社した。

一時期二日にあげず会って傷口を嘗め合っていた二人であるが、私大生と浪人生との道が異なり、会う頻度は減少した。しかし安さんは極めて付き合いのいい男で、遊びの誘いを断ったことはなかった。高梨と山へ行こうかと相談しているところに、彼が来たので誘うと、付き合うという。行く先は飯能の奥の有馬山、その頃は道が荒れていて、有馬山へ抜ける道は笹藪と化していた。藪こぎ数刻、三人とも泥まみれとなった。アルバイトを口実に家を出た安さんは困ったという。後日訊ねると、大掃除のアルバイトと誤魔化したとのことであった。

高梨の店を根城にとぐろを巻いていた仲間で作った「沈澱党」八名で、裏磐梯キャンプ旅行した時のことである。几帳面な安さんは会計幹事であった。持ち金が乏しくなって帰途につくことになり、バスに乗った。バスは満員溢れんばかり、悪童連、目で安さんに合図、「最後に降りろ。」と指示する。終着で皆は幹事が払うと申告、可憐な車掌は未払いの者を捉えておこうとするが、皆混雑にまぎれ逃げてしまう。最後に悠然と降りてきたのは安さん。いくら儲かったと聞くと、きょとんとして「八名分支払った。」という。皆に散々こづかれた。とにかく純真な男であった。

聞くところによると、小学生時代は卒業生総代であったとか。彼は結局東大をあきらめ、何年かして埼玉大に入ったが、志を得なかったことの挫折か、はたまた親の過大な期待への反抗か、生活が荒れ出したとの噂とともに、我々の前に姿を見せなくなった。一時あんなに傷を嘗め合っていたのに、会うことがなくなって四十年経った。

過去の傷は傷、往時茫々である。「そろそろ同窓会に出てこいよ。」と声をかけようと思っているうち訃報を聞いた。残念の一言につきる。

（宇都野）

第三部「続・青嵐篇」——川越時代の私たち

仮装行列の思い出

朝久野　貞　郎

多分、川越高校卒業の前年、秋の運動会の仮装行列で一等賞になった時の写真と思うが、昨年、家財整理中に発見した。新郎・大川解君、新婦・私、僧侶・川崎匡君であり、「蚤の夫婦の仏前結婚」という題で参加した。これには次の思い出がある。

ちょうど、受験勉強をすべき時期に、私の家の二階で婦人雑誌の写真を見ながら、なんと徹夜で準備したものである。まず、私が新婦になれよということで、川崎君の学生帽を逆さにかぶり、これを土台にして大川、川崎両君が慣れない手つきで針、糸、裁断した布切れを持って、出来るだけお嫁さんに似せるように縫い付け、写真のような角隠しのカツラに化けた次第。

この学生帽は後年、菅間君の弟に引き継がれたと聞いている。新婦の着物は大川君のすぐ下の妹さんのものを、僧

侶の袈裟は当時国語の先生をしていた近藤鉄城先生のお寺からの借り物を利用した。運動会の当日、私の化粧は高校の女子事務員さんが白粉を塗ってくれたが、肌ののりが悪くて苦労したことなどを覚えている。

昨年、私の現在の仕事の関係で富山医科薬科大を訪問した際、同大学教授をしている川崎君に会って一杯やった。その時、仮装行列の話が出て「受験期の徹夜の代わりに結婚準備で徹夜したから見事に二人共受験に失敗したな。」ということになった。

思い出

中沢　益次郎

編集者諸兄のお骨折りに少しでも応えるために、何か書き残さねばならないと、常に自責の念にかられていても、いざペンを取ると金縛りにあったように、何も書けない無能を今更ながら恥じ入っている。

高度化された物質文明社会に生きる今日になって、論語を熱心に説いた徳さんの精神文化の真髄に漸く触れることが出来たような気がする。

それに比較して、突如として異常な目付きに変貌し、大した理由でもないのに（と誰でも思った）しばしば狂ったように無抵抗な生徒を張り倒す生物の先生、本来の物理の講義よりもビンタを正当化することが得意な先生、己の劣等感の憂さを晴らすかのように、一列に並べてのドミノ的ビンタを見舞って満足していた某先生など、人間形成の最も重要な思春期が余りにも空しかったと思うのは、小生だけだろうか？

その中にあってせめてもの救いは、常に飄々として世の中を達観したかのような風貌で、机に座ったままで行う木島先生の英語講読であった。極く短期間であったにも拘わらず、他の英語教師にはない格調を感じ、今なお体の何処かにその知性が残っているように感ずるのが不思議だ。

もし当時、司馬遼太郎の書く歴史小説のような歴史の時間があったら、全く異なった生き方をしていたかも知れないと想像することは飛躍か。幻の初雁城の歴史について文献があったら教えて下さい。

終戦前後、川中時代の思い出

荒田光男

あれは朝から暑い日だった。近所の悪童どもと、昔、村の大尽の隠居所だったという別荘の池に水浴びに行き、昼食に帰宅すると、お袋が台所でラジオを聴いていた。「忍び難きを忍び……云々」いわゆる玉音放送である。「日本が負けた。」とポツリお袋が言った。その時お袋は、敗戦の悲しみと支那に出征中の兄貴が無事に帰れそうだとの喜びと、こもごも複雑な思いであったようだ。

近傍の村や町は多かれ少なかれ米軍機の襲撃を受けたが、軍事施設が全然なかったわが村は安全地帯。戦争末期にはわが家の土蔵も、軍事物資の退避倉庫として使用されていた。当時、担当官として出入りしていた富山県出身の大居兵長は、それが縁で毎年訪れ、しばらくの間わが家の二階に逗留し、近傍へ薬の行商をして歩いた。戦後軍事物資の処理をめぐって隠匿物資として摘発され、何軒かが警察の取り調べを受けた。幸い、わが家の荷物はいつの間にか

引き揚げられており、問題とはならなかった。

わが村から川中に入るのは数年に一人くらいであったが、あの年は、地元から小生と加藤敏一君、疎開組から森田一樹と高橋秀吉両君、計四人が合格し、随分話題となったようだ。家から鶴瀬駅まで二キロ、東上線に二十分乗り、また川越駅から川中まで二キロ、計四キロを徒歩で往復した毎日。当時、東上線は単線で三両編成、一両目が男子学生、三両目が女学生の指定席であったが、勇気ある軟派の連中は三両目に乗っており、随分羨ましく思ったものである。先輩たちは勤労動員で減多に顔を見せなかった。たまたま通学途中に会うと、八幡神社の境内に連れ込まれ、問答無用でただ「お前ら新入生は生意気だ。」と往復ビンタを食わされたのが、苦い記憶として残っている。

川中での悩みは田舎っぺ言葉である。「だっぺ」を真似され恥ずかしい思いをしたが、まだ愛敬があり（?）、特に支障はなかった。しかし、「ひ」と「へ」、「い」と「え」の混同は問題で、「アエニカワゴエヘエク」（＝会いに川越へ行く）では通じやしない。完全に自信喪失だった。また英語の授業で、ゲール先生に何時当てられるか戦々恐々。RとL、SとTH、さらにHとFの区別が加わり、ほとほと困ってしまった。

わが家からほど近い角家の離れに、一家で疎開していた徳さんこと、佐藤徳四郎先生が居られた。川中に転任されたのはその頃であった。食糧難時代、農家であったわが家のお袋は時々野菜やイモなど季節の進上物を届けていたようで、先生も二、三度家にもみえた。その後、川越の木屋製作所の中に移られてからもお袋の使いで伺ったが、いつも徳さんは威張ってお説教をのたまわり、小柄な優しい奥さんが済まなそうにしていたのが印象に残っている。俳句は苦手であったが、秩父への合宿には何故か参加した。当然米持参であったが、普段麦飯が常食で、くすんだ陸稲がご馳走であったわが家、大沢（米）君の持って来た白米がとっても旨そうに見えたのが思い出される。

鬼軍曹教官殿の教練でのオリシケ、ナオレでゲートル巻いた足が棒になって立つのに苦労した記憶。こんな小さな

国が大きなアメリカに勝てるはずはないと言った非国民。否、先見の明のあった原田先生。鬼畜米英と言っていたのが、ある日民主主義とは、と言わざるを得なかった松田先生。併設中学校になって同じカリキュラムを平然と教えた忍田先生。あの頃は本当にカオスと激動の時代であった。

楠の木の独白

平岡義男

川高三期生の記念文集のタイトルに「俺の名」が取り上げられて、ちょっと面はゆい思いをしているが、皆の心の片隅に俺の姿が青春時代の共通のものとしてあると知ると、やはりうれしいよ。

思えば終戦の年、お前たちと初めて会って、もう五十年以上になるんだね。木造の明治の風格のあった校舎は現代風になってしまったし、言われてみれば、昔のよすがはあまり見当たらなくなってしまったな。そこで、俺の存在意義もあるというわけか。昭和二十年四月、旧制川中の新入生として俺の前を通っていったのを憶えているよ。

俺も若かったといっても、周囲の木たちに較べれば、いっぱいの枝葉をつけて根を下ろして、お前たちから見ると大木に見えたろうね。

だんだん昔の記憶がよみがえってくるよ。終戦から戦後にかけての激動の時代だったなあ。何しろ不敗と云われ精神教育をしてきた国が無条件降伏の羽目になるんだから、精神的にも物的にも混乱が続き、特に戦後の生活はひどかったね。日本陸軍の払い下げの軍靴、布製の雑嚢、毛皮の背嚢などを身につけて通学していたね。

食べ物だって、育ち盛りのお前たちにはきつかったろうな。お金の価値も変わるし、コッペパンなど売ってはいたが、買えない生徒もいたね。冬の寒風に唇を紫にして、殆ど栄養失調の生徒も見かけたよ。でも先生方には恵まれたと思うよ。名物先生も多く、教育に熱心だったね。先生方も決して楽ではなかった生活の中で、お前たちの人間形成に努めてきたのを見てきたよ。

俺は口はきけないが、背が高いので遠くまでよく見え、豊かな葉やどっしりとした根が耳になって、いろんな情報が入ってきたよ。ところで、お前の家の古くさい床の間に今かけてある軸の漢詩は、徳さん（佐藤徳四郎先生）から習ったのだろう。なかなか味わい深い詩だね。飽食の現代の子供たちにもよく教えたいね。

鋤禾日当午　　汗滴禾下土
唯知盤中餐　　粒粒皆辛苦

あの軸は、お前が北京で求めたんだって言うが、徳さんは手作りで漢文のフレーズ集をまとめ、教材として配っていたね。いつも軍隊払い下げのカーキ色の服を着て、厳しくも熱心に教鞭をとっていたね。俳句の手ほどきをし有志を集めて、高麗で句会に参加させたのも知っているよ。教科書といえば、戦後はGHQのお達しで軍国思想らしい文言はすべて墨で消され、先生方も苦労してご自身で教材を作っておられたね。徳さんに限らず、先生方も、それぞれ特徴もった人格形成の教育をされたね。

終戦までの教育では、軍隊から配属教官も派遣されたね。そう「バカタライ」教官の教練は厳しかったね。不評だったが、軍国主義の道を歩んだ当時としては「バカタライ」軍曹だって日本の必勝を信じて、強い青少年を育てるため、生徒たちの不出来を「バカタレ」と言いながら鞭を振ったのだろう。そういつまでも恨むなよ。そう、戦時下の一つの想い出だね。

川越が戦火を受けなかったのは幸いだったね。動けない俺なんてひとたまりもないものね。また戦時中の想い出だが、B・29爆撃機が東京目がけてよく飛来したね。日本側も応戦したが、高射砲の届かない高度の飛行ではどうしようもないよね。でも、たまには日本の戦闘機と空中戦になり、B・29が撃墜されたこともあった。その時落下傘で脱出して助かった白い飛行服の米軍の捕虜が、日本兵に連行されて川中に来たのを憶えていたかい？　生徒たちも校舎の玄関で見ていたが、お前もその中にいたのかい。英語の先生が通訳されていたが、学校側の応接は紳士的に見えたよ。とにかく戦争なんていやだね。でも、あれから日本もよくここまで発展したもんだ。平和をじっくり味わわないといけないね。

さて今日は久しぶりに喋りすぎ、ちょっと疲れた。この辺でひと寝入りするよ。まあみんな元気でな！　俺はまだ頑張って、来世紀を眺めることにしよう。

続、芋校出……反省記

沼田芳造

芋校といっても、私の家は大昔から川越駅の近くで、小学校は川越市立第四国民学校でしたが、当時は駅や学校付近でさえほとんど芋畑が大部分で、戦前は東上線にSLの貨物が走り、電車にも手動ドアがあった時代を経てきましたので、私たちがそう呼ばれるのはともかくとして、東京から疎開してきた同窓諸兄にはあるいは「実に失礼な話」と感じられたかも知れません。ともかく私個人に限っていえば、卒業後何日たっても、何年たっても（今でも？）川

越の芋校出と呼ばれ続けてきたわけです。

さて、この中で懐かしく思い出すのは、良かれ悪しかれ一番強烈に、しかも社会に出てからも意外と役にたっている、あの佐藤徳さんの授業その他の活動だったことは前回にも書きましたが、その通勤姿はまさに「裸の大将」そのもので、軍の払い下げの軍服に下駄履きというファッションは、現在なら相当な強心臓でないと、これで東京銀座はおろか、川越の中央通りも歩けませんが、彼はそれを押し通し、個性的なファッションとしていたようです。

全国どこでも、進学校で大切な授業科目は英、数、理というのが通り相場なのに、私はこれがまるでだめ。体育、作業、国語だけがまあまあという落ちこぼれですが、ここで前回書き残した名画を一つ補足させてください。

デュヴィヴィエの「舞踏会の手帳」……これを落としたら罰金ものですので。

それから偶然のエピソードを一つ。前回書き残した「あゝ海軍」（もちろん戦後の映画、村山三男監督）の制作に関わった時のことです。川中在学中、同期のO君の兄さんが海兵の生徒として母校へ立ち寄った時、数学の坂田先生がこれを恩師として迎えるという感動的な一場面がありました。その場面を実際に目撃し、その師弟愛、カッコよさがいかにも絵になっていて目に焼きついていましたので、兵学校の校長役・森雅之と坂田先生のイメージが重なってしまい、背景も川高こそがピッタリだととっさに思いついて、川高にロケハンに行きました。しかし、実際カメラの目で見ますと、楠の木以外は絵にならず、またスケールもあまりにも小さいので、とうとう本物の江田島まで出かけ、大ロケーションを行ったという思い出があります。

偶然というのは、私が第四小学校の同窓会に出席した時で、久しぶりにT・Sさん（旧姓、川女卒）にお目にかかり、いろいろお話をしたところ、彼女がなんと、あのカッコよかったO先輩の奥さんになっておられたことです。T・SさんがT・Oさんに変わったのは、同期のO君のその「O」だったのです。偶然とは……とにかくビックリした思

いで、世の中は実に狭いもんだとつくづく思い知らされました。

それから、ランニングホーマーで有名な川合敬三君、頭も良く、加えてスポーツマンシップと人情を持つ友人ですが、彼から「あゝ海軍」の参考写真集をプレゼントされたのは誠にありがたかったこと、紙上にてお礼申し上げます。

私の中学、高校時代

角谷文昭

昭和二十年三月、集団疎開をしていた長野県から中学受験のために東京都杉並の家に帰った。家族は、父を除いて母の実家のある山形県に疎開していた。

受験の結果、東京高等師範付属中学校に合格した。京王線の代田橋から新宿を通って大塚にある学校まで電車通学したが、空襲があると電車の運転が中止された。その時はよく電車の線路を歩いて帰った。

昭和二十年五月、杉並の自宅が空襲により焼失した。私も母の実家に疎開することになり、山形県立鶴岡中学に転校した。

家から歩いて三十分、汽車で三十分、鶴岡駅から学校まで歩いて三十分、通学するために毎日二時間歩いたことになる。冬には吹雪の中を今から考えるとよく通ったものだと思っている。終戦後しばらくは通学定期が発売されず、毎日切符を買って通学した。（**編注**・当時は定期の購入手続が厳しかった。）

昭和二十三年夏、飯能に住んでいた知人の紹介で父の仕事が見つかり、飯能に転居することになった。私は、学年

の途中のため、高校の一年が終わるまで鶴岡の親戚から学校に通うことになった。

昭和二十四年四月、埼玉県立川越高校二年に転校した。鶴岡も川越も城下町であり、学校の敷地も城跡であり、駅から遠いことなどでもかなり共通点があった。私見ではあるが、学校の位置づけにおいても、鶴岡の場合は、山形、米沢、鶴岡となっており、川越の場合も浦和、熊谷、川越といずれも三番目という点も同じである。

町並みも落ち着いており、人情も細やかで生活するのに適しているところもよく似ていると思う。このような環境からなのか、転校についてもあまり違和感がなく、卒業までの二年間、先生や同級生に大変お世話になった。心から感謝している。

昭和三十年、就職と同時に東京に転居したが、昭和五十二年、父の死亡によって飯能に戻った。東京で生活している時には、川越高校の卒業生であるということをほとんど意識することはなかったが、飯能初雁会の活動が活発で、市内の役所や企業等にも多くの卒業生が活躍しており、川越高校の卒業生であるという意識をもつ機会も増えている。

進路変更と佐藤先生

長谷川　栄

年をとると、過去の想い出に生きることが多くなる。一般にこのように言われるけれども、六十歳を越えた今日だが、私は過去に生きたくない。まだ将来を見つめて前向きに進みながら、現在を充実して生きたいと思っている。これが、若さを保つ秘訣のように考えるからである。

このために『おーい、楠の木よ』の投稿を求められても、川越中学・高校時代の若い頃のことを書く気持ちが強く起こらなかった。再度の依頼に応じなくてはなるまいと思って、つくば市から三鷹市へ転居した際に見つかった川越時代の日記を開いてみることにした。

日記は、高校一年の終わり頃の昭和二十四年二月から書き出し、高校の三年まで書いてある。初めは紙質の悪いノートブック二冊に汚い字で書かれてあったが、昭和二十五年からは旺文社の学生日記二冊にやや丁寧に記されている。日記を毎日つけていた串田孫一は、かつて「日記とは自分が生きていることを自分に向かって確かめることではないだろうか。」と述べていた。文がなっていないところも見られる自らの日記を読んでみると、川越時代に学校で学びながら、その都度いろいろな思いをしつつ確かに生きてきたんだ、ということがわかるのである。この日記に依拠しつつ、高校時代に一番思い悩んだ進路変更のことについて書いてみたいと思う。

高校時代は、これからどんな人生をたどろうとするか思いめぐらして、選択し決定する時である。私も自らの進路の選択・決定に迷い悩んでいた。私は高校一年生の時には、理科系に進もうと思っていた。日記によると、「数学的に考えることが好きだ」からであった。しかし、二年生になると理科系から文科系へと気持ちが変わり始めていた。そして、二年生の十二月には、「どうも将来は文科の方に薄々決まった」と書かれてある。

なぜ理科系から文科系に変更したのだろうか。自らの日記を読みながら回顧してみると、家庭の事情もあったが、佐藤徳四郎先生の影響が一番強かったと思う。

佐藤先生については、一年生の時の日記にこんな文がある。

「国文の先生は、佐藤先生という。ひげをはやして、額にしわをよせ、たこというあだ名そっくりに、怒った時など真っ赤になる。大きい声を出し、小さなつばきをぱらぱらとはき、私は一番前に席を取っているので、ちょっと嫌だ。し

かし面白い先生だ。ただし機嫌のよい時だけである。悪い時は我々をどんどん指して、出来ないとえんま帳に三角だと言ってつける。そして、隣の教室にも聞こえるような大きな声を出して怒る。だから、皆に嫌がられている。私も嫌だが、その話は面白くかつ為になる。よって、印象に残る先生だ。俳句を非常に好み、芭蕉を崇拝している。我々に俳句をやるように勧めて、一月に一回毎に「獺祭」の雑誌に十句ずつ出させている。そして、一週に一度俳句愛好者が俳句大会を開いている。」(昭和二十四年三月九日)

佐藤先生の影響で、私の日記には自作の俳句がところどころに書かれてある。うまいとは思えないものだが、苦労して作った思いが強い。

二年生の六月のことである。授業でシェークスピアの「ヴェニスの商人」の法廷の場を読んでいた時であった。佐藤先生に大変ほめられたのである。日記にこうある。

「今日は、Congratulations!という日であった。それは国文の時間であった。国文は、国語教科書の手引きにある色々な課題を各グループに当てて調べる方法をやっているが、私は『ヴェニスの商人』の法廷の場の構成とクライマックスについて調べるグループに入り、私は発表させられたのである。それで私は虎の巻の区切りを見、その解説を見て、自分で色々考え、まとめたものを発表した。それが先生の意にかなったのであろう。手を打ってほめられた。私は大変嬉しかった。私はこの頃文学に対する自信をなくしているようであったので、この賞賛は新たに私の希望を前途あるように思わせるものであった。」(六月九日)

発表した内容は覚えていないが、どんなことを述べればよいか学校の行き帰りや家の仕事の手伝いの中で、本気で考えぬいていたことは確かである。翌日の日記にはこう記されている。「また国文の時間にほめられた。他の組では、私を文学的才能があると言われたそうだ。君は文学評論家になれと言われて、益々心喜ばしくおもった。」

このようにほめられたことが、私の理科に進もうという希望をぐらつかせたのである。こうして私は佐藤先生の勧めによって、国文学部に途中から入るようになった。「国文の時間、私に国文学部に入れと言った。再三再四言われたので、遂にイエスと言わざるを得なかった。」（七月五日）

こうして二年生七月から国文学部に入部して、火曜日の源氏物語研究会に参加して、源氏物語を途中から読むようになった。また確か水曜日に去来抄研究会に入り、俳句を勉強するようになった。さらに、国文学部研究会にも参加して、研究発表を聴くことにもなった。十月十九日の研究会に出た時、先生から「現代文の批評をやれ」といわれた。そこで、日記によると、藤村作『国文学史総説』や高橋恵『明治大正文学史』などを読み、それに関連して何人かの小説を読んだりして、十月二十七日に幸田露伴の『五重塔』の小説を取り上げることを決めている。そして、十一月十九日の研究会にその作品について調べ、考えたことを発表したのだった。

「露伴の略歴、五重塔についての著作動機、梗概、内容の検討、結論。これらのことを、原稿を省略したり、あるいは付け加えたりして、夢中で喋った。聴講者は僅か二十人よいとこ。皆に後で『どうだった』と聞いたら、お世辞のためか、『よかった』などといわれた。これでどうやら落ち着けた。」

その三日後に日記では、先生に批評をいただいた。「先生に研究発表会の批評をしてもらった。『幸田露伴の作品は漢文を大いにやらなければ、理解出来ないと心配していた。しかし五重塔一つの作品に限ったことがよかった。現代文の感覚には鋭敏なところがある。大いに勉強せよ。』まとめればこうだった」（十一月二十一日）

私はこの頃かなり多くの小説を読んだ。昭和二十四年二月から十二月末までに、石坂洋次郎『若い人』や志賀直哉『暗夜行路』など、日記によって五十一冊を数えることが出来る。これは、ひとえに佐藤先生のお陰だと思う。このために、入学試験のための勉強はおろそかになり、それを心配する気持ちも日記の随所に書かれてある。

こうして私は佐藤先生の大きな影響によって、初めは理科系希望だったのだが、文科系希望に変更したのである。誰でもほめられると、嬉しいものである。ほめることは人間の人生を変えるきっかけとなる、とつくづく思う。まして教育的影響力を強く持った佐藤先生であるだけに、私は大きく左右されたのである。私はこのことを大変ありがたいことだと、思い起こす時にはいつでも感謝の念で一杯である。

私は文科系の道を歩むことになったが、残念ながら文学の道を歩むことができなかった。その後、教育学研究者の道をたどり続けている。

光陰似（タリ）二逝（ク）水（ニ）一

安田孝一

川中へは、一年生の二学期からだったと思う。疎開した仙台の祖母の家が、再び強制疎開で立ち退く羽目になり、私立中学校から転校することになったのであった。川高へはその後、六・三・三制になったこともあって、ほとんど無試験に近い形で進学した。

敗戦の混乱期で、米軍の占領下、皆「堪ヘ難キヲ堪ヘ、忍ビ難キヲ忍ブ」生活を強いられていた。高校の三年間は大切な時期だったと思うが、実にいい加減に過ごしてしまった。軍国主義から一転、民主主義の世の中になり、誰も彼も、教師も学生も頭をすげ替えた訳ではないので、懐疑的で右往左往していた気がする。世の中の急変、大人たちの変節が、とにかく気に入らなかった。しかし、ぶつける力も反抗する力も無く、ずるずる通学し続けた。在学出来

たことだけでも幸せだったことに気が付かなかった。

沖縄で、広島・長崎で、東京で、言葉に尽くせない戦争の悲惨さが、身近に一杯あることを知らなかった。それに比べると、私の疎開と敗戦の経験など、取るに足らぬことではあるが、その後の性格と生活に少なからず影響し続けた。学業には身が入らず、何事にも自信が持てず、大学へは全く行く気を失った。

体育の思いでの一つにマラソンがある。みな素足であった。物不足で運動靴など買えなかった。校門を出てしばらくは砂利道で、田の畦道になると速度を落とし、ほっと一息ついた。往復で四、五キロメートルの距離だったろうか、戻って来ると、必ず踵や指先がささくれ立って血が滲んでいた。嫌ではあったが仕方なく走った。

英語は戦時中に、敵国語として使用が固く禁じられていた。敗戦後、急に教科になっても、おもねるような感情と反抗心が先に立って面白くなく、全く身に付かなかった。これも後になって、この国がかつて侵略した朝鮮や台湾で姓名まで変えさせて日本語を強制した事実を知った。その屈辱は比較にならないし、情況も違うが、意識の上ではかすかな共通点があったかも知れない。今、英語は、分刻みで否応なく目や耳に入ってくる。鼻にかかった舌足らずな歌など聞くと、媚びているような恥ずかしい気持ちがする。

数学・理科・音楽・美術など、何を習ったのか、教師の顔も思い出せない。誠に残念で恩知らずなことである。国語も成績が悪かったが、一番興味を持った。激しい気性の先生だったので、授業も当然厳しかったが、全身から自信と熱心さが伝わってきた。論語や漢詩を身を固くして教えて貰った。孔子は曰(ノタマワ)くで、弟子は曰(イワ)くで、一字一句おろそかに出来なかった。「獺祭(ダッサイ)」という俳句誌へ投稿することなども勧めてくれたりした。神田の古本屋で池田蘆州の『故事熟語大辞典』などを探し求めてきて予習したりした。この辞典は今でも書棚にあるが、三キログラムもあって重過

ぎるのと小さな活字のために、利用するのに手こずっている。しかし、俗な人生を送ってしまった自分自身を振り返り、恥ずかしい思いをさせる、真摯な生き方をされた先生を思い出させる辞書でもある。

一九六七年、ちょうど三十年前、三十四歳の時、身体の不調に気づき、進行性筋ジストロフィーと診断された。幸いに病状の進行は遅いが、旅行先などは車椅子の生活である。しかし生来のいい加減さで、今では病ともあっさり妥協している。唯一の趣味は読書であり、なるべく熱量を消耗させないよう心掛けて生きている。

世の中が社会などと言われるようになって騒がしく、忙しくなっている。今の国のあり様、未来について、不満や不安が増すばかりである。　かつて高校生であった私たちの誰が、このような社会を想像できたであろうか。光陰似逝水で、悔やまれることしきりで、しかも愚痴ばかり多くなる毎日である。

川越は懐かしく忘れられない街である。在学時代、駅までの帰り道を毎日変えて、わざわざ細い露地を抜けて歩いたり、菓子屋を覗いたり揚げ立てのコロッケを頬ばったりしたことを思い出す。今は車椅子はもちろん、ゆっくり歩くことすら出来ない街になってしまっているであろう。無理なことではあるが、いつまでも古い静かなただずまいであって欲しいという思いがあって、ごく近いのに再び訪れることをためらっている。

作文し、活字になるのは、これが最初で最後だと思う。このような機会を与えてくれた諸兄に、心から感謝しながら頼りないペンを置く。

ご好意に甘えて

吉川紀一

川越中学校、昭和二十年四月入学の皆さん今日は！

私は、皆さんと一緒に関門を突破し、晴れて入学はしたものの、たった二ヶ月で父の転任に従い、不本意ながら松山中学校へ転校してしまいました。早いもので、あれから半世紀という時間が経過したのですね。

去る三月初め、松村祐二君から会社へ電話があり、記念文集『おーい、楠の木よ』を増補別冊を作るので、是非投稿してみないかと、夢のようなお誘いをいただきました。瞬時、参加する資格があるのだろうかという想いがよぎりましたが、願ってもない機会だと、厚かましくも筆をとることにいたしました。

五十年前、たった二ヶ月の川中生活ですから記憶も薄れてしまい、ほんのわずかな断片のようなものですが、想い出すままに箇条書き形式で綴ってみます。

表題になった『楠の木』は、もっぱら通用門を使っての登下校だったので、殆ど覚えていません。周辺を掃除させられたような気がします。

川越三小からは、クラスも一緒だった水村君（故人）、奥平君、青山君らと入学しました。通学路が同じになるため、尋常小（現一小）高等科に通う悪童同窓生からいじめられぬよう、抜け道探しに苦心したものです。また先輩に敬礼する習慣から、見分けにくい川商の連中に挨拶してしまい、冷やかされたこともしばしばでした。

入学式では、新入生を代表して佐々木君が堂々と宣誓文を読まれた姿は印象的でした。教室は、正面玄関の突き出た部分の上ではなかったかと思います。B29が撃墜され、パラシュート降下して逮捕されたアメリカ兵が目隠しされ、血まみれになって憲兵たちにトラックで運び込まれてきたのを、教室の窓からこっそり覗き見たこともありました。

学校農園の芋畠の手入れ、校庭の隅での塹壕掘り、軍事教練では匍匐前進で悲鳴を上げ、手榴弾投げでは距離が出ぬため味方を殺すのかと配属下士官にどやされ、肝を冷やしました。

学徒動員で三年生以上が留守なのをよいことに、二年生が気晴らしに私たちを武徳殿の板の間へゲートルを巻いたまま正座をさせて喜んでいた情景も浮かんできます。もっとも私は、ご存じの教頭――ポンチャンの息子ということで、この制裁からはずれ、皆の後ろで胡座をかいていることが出来ましたが、剣道では卒倒寸前まで竹刀で打たれまくりました。

空襲警報がでると市内在住の生徒は帰宅が許され、友達とおしゃべりしながら帰路についていたところ、いきなり雲の間から姿を現したグラマンに機銃掃射を浴びせられ、瞬間、道路脇の民家へ飛び込んで命拾いをした鮮明な記憶も残っています。

入学してからの友人では、松村君、吉崎君、鶴瀬から通学していた横田君。彼の家には、維新戦争時代？　だという柱に残された刀疵に非常な感銘を受けたのを覚えています。文集によりますと、既に他界されたとのこと、非常な衝撃を受けました。

短い川中生活ではありましたが、私にとって非常に大切な宝石箱のような時間であったと、自信を持って断言することが出来ます。その証拠に、転校先の中・高校時代の三年間は記憶に残るようなことは全くないと言えるほどで、川中の校歌である「紫匂う武蔵野の……」はすらすらと口をついて出てまいります。

以上、走馬燈のように思いつくままに川中にかかわる想い出を羅列しましたが、その後について簡単に報告しますと、高一で静岡県韮山高校へ転校、静岡大学を経て読売新聞社（広告）に就職、出版局次長で定年退職、ジェイアール東日本企画、現在は太陽エージェンシー（広告代理店）顧問として、日々元気に過ごしております。

最後に、松村君を始め、私の参加を認めて下さった方々のご好意に深く感謝申し上げ、わずかな時であっても共通の時を体験した皆様のご多幸を心から願って終わりとします。

戦後埼玉初駅伝

木村定雄

夢を見ている。十六歳と、六十五歳の私が同じ場所にいる。十六歳の少年は高校代表の駅伝選手で、熊谷から浦和の県庁までのコースの、吹上から鴻巣までの区間を走るため、吹上の中継点に、校名入りの紫のハチマキ、校名入りの白いランニング、白いランニングパンツ、白のランニングシューズ、全てメーカー物、その上にトレーニングパンツとウェアーを着て、出番を待っている。周りを見ると、赤、青、黄色等々、カラフルな駅伝スタイルで身を包み、派手な色のボアー付きのベンチコートを着ている選手もいる。

昨今の選手は恵まれている。身に着けている物はメーカー製、道路の整備、交通整理、練習量は豊富、コースの下見、試走、役員、選手の控所等、駅伝に関する全てが万全の上の大会である。

各選手は二、三十分前から、入念にウォームアップを始めている。十六歳の私も柔軟体操とともに顔が紅潮してき

ている。六十五歳の私は、「なかなかのものだわい！」と微笑みを浮かべて眺めている。さていよいよ一区の選手がやってくるぞ！　年齢の違う二人の私は、寒さと興奮のため身体が震えている。ブルブル、おっとっと、ここで夢が覚め、一挙に五十年前の昭和二十三年、私が高校一年の時代に戻っている。

私の記憶が間違っていなければ、この駅伝は戦後初駅伝で、コースは熊谷から浦和までであった。ともかく、陸上部でもないのに石川正男先生に引っぱり出され、駅伝を走る羽目になり、第二区の吹上から鴻巣までを走った。何しろ、練習もチーム全員で走ったのは一、二回、本川越駅近くまで走った程度と記憶している。当時の世情からして、吹上、鴻巣は全くの未知の土地で、当日初めて来て、初めて走る次第だった。そんな地区を唯々夢中で走り抜けた。

出場メンバーは、所沢出身（高二）の田中恒夫先輩、狭山出身の落合先輩、私と同学年の五十嵐統祥君のみ覚えているが、他のメンバーは全然思い出せず、大変失礼なことで、ここにお許しを願いながら筆を進めていきたい。

まず当時の情況は、道路は旧中仙道だが、すごい砂利道で、トラックでも走ると、前が見えぬくらいのホコリがたつほどでした。走るスタイルといえば、紫のハチマキ、白いランニング、白パンツ、白半タビ（諸兄はどんな物かご存知と思うが……）、その上に兄のお下がりの通学用のオーバーを羽織り、震えながら田中先輩を待っていた。

タスキを受け取り一目散に鴻巣に向かって走った。走りながら風景を見る余裕などなく、周りの選手は十六歳の私に比べて、オジサンだな！と思いました。後で分かったのですが、この駅伝は青年団も一緒で、年齢も上で、大きい選手がいた次第です。私は小柄で体重も三十キロ台から四十キロ台前半だったと思う。（体重は今は六十キロくらいあるけれど、小柄ダゾー！）

やっと走り終わり、タスキを渡し、石川先生の乗っているトラックの荷台に拾われ、やれやれ役目も終わりとひと安心して着替えを始めると、先生がブドウ酒を小さなグラスに一杯、気付け薬として下さった。その頃ブドウ酒は、

まだ貴重品で、調達上手の石川先生が私の家（酒屋）から仕入れた物だった。着替えも終わり、半タビを見ると、底が抜けて血が滲み、脱いでみると足の親指の腹がすり切れ、出血していた。誰にも知られぬように靴を履き、帰宅して調べてみると、両足の爪も、左右で五本死んで青くなっていた。

振り返ってみると、あの悪条件の世代に、石川先生は監督はもちろん雑役など一人でこなされ、メンバーも全員よく頑張ったと思う。戦後三年目の物資の少ない大変な時期の駅伝に出場したことは、物の豊富な今の駅伝と比べて、また違った感慨に耽るものである。

まだまだ書き残したこともあるが、拙文はこの辺でストップ。

これからは無理をせず、苦労をかけた愚妻とともに、余生のマラソンをゆっくりと走り続けたいと思う。末筆ながら投稿に当たって、散策中よく逢う水野洋策君の再三の勧めと、小林洋左君の電話に、深く感謝申し上げたい。また、役員諸兄のお世話に感謝し、皆様のご健勝を心からお祈りしたい。

青春時代

前田行雄

日本橋育ちで江戸っ子の小生が、戦禍を逃れるために疎開することになり、静岡市、山梨県塩山市と転々とした。昭和二十年秋には遠縁を頼り、埼玉県の入間川町に落ち着き、入間川中学校より推薦で、昭和二十三年川越高校に入

学出来たことが、人生の最高の思い出となり、また青春の始まりでもあった。

皆さんには申し訳ないけれど、最初は田舎の学校とタカを括って入った川越高校でしたが、入ってから驚いたことに、みな頭の良い生徒が揃っていた。小生よりはるかに頭脳明晰な人が多いので、これは「イカン」と一生懸命勉学に励んだのは、今考えると一年生の秋までした。麻雀という面白いというより、滅茶苦茶面白い遊びが流行り、青木勘輔君、青柳安彦君、深井康弘君等、相手変われど主変わらずで、毎日毎日学業そっちのけで麻雀に明け暮れました。そのうちに、今度はハワイアンギター、ウクレレなどに凝り出し、高山恵介君や彼の弟さんたちとハワイアンバンドを作り、遊びではなく、入間川公民館、豊岡公民館でギャラを貰って大変良いアルバイトをしましたが、結構儲かりました。

また、もっと面白いことが出来たのは、女子学生よりラブレターが来るようになり、学校の帰りに稲荷山公園でよくデートしました。もっともまだ高校二年生でしたので、そんなに過激なものではありませんでした。何人かの女生徒との想い出や、山田和宏君と一緒にナンパをしたりと、本当に楽しいよき時代だったと思っている。

こう書くと遊んでばかり居たようだが、勉強も結構していたので、今になっても漢字は人一倍読めるし、テレビのクイズなども結構分かるし、周りの者には物知りで通っています。それもこれも、天下の川越高校での良き先生方のご指導の賜と深く感謝している次第です。

取り留めのない想い出ばかり書きましたが、川越高校時代の三年間は我が人生の最良の青春時代であり、楽しく過ごさせて頂いた学友の皆さんにもお礼申し上げたいと、常々思っています。

充実と感動の一年間

竹内春男

私は、昭和十九年に東京から疎開で川越に移り住むことになった。そのとき川中に入っていれば問題はなかったのだが、川工へ入ってしまい、しかも家庭の事情で二十四年に川工を卒業（旧制五年、新制二年修了）してしまったので大学受験も出来ず、川工の助手を一年勤める間に進学を考えて、川高三年への編入を企てた。内申書だけでは当然のことながら編入させてもらえず、特別に一人で編入試験を受けさせられた。これをどうにかクリヤーしたので、二十五年春に三年への編入が認められて入学できることになり、皆さんと机を並べることが出来た。当時似たようなことはあったらしいが、川工二年から川高三年へストレートというのは、レアーケースであったらしい。

四月に授業が始まると、思わぬ試練に出合った。第一番目の英語の授業が始まってすぐ、西川先生から「工業の生徒はどのくらい出来るかな。」と言って数回指されて実力をテストされたりした。五年間お世話になった川工に恥をかかせないようにと、私自身が必死に追いつき追い越せと励んだ充実した一年間だったと思っている。

現在は都合でまた都内に住んでいるが、親戚の結婚式や法事などで時々川越を訪れることがある。本川越や川越駅周辺は再開発などで新しいホテルやビルが多くなり、昔の川越らしさが失われているが、幸町辺りの「卯建」のある蔵造りの街並みや菓子屋横町周辺には、私達が川工や川高に通っていた青春時代の匂いが溢れていて、通る度に懐かしく昔を思い出させてくれる。殊に、入学するのに苦労した川高時代の一年間は思い出が多く、感覚的には数年間学

んだような気がしてならない。そしてそれ以後の私の人生に、大いに自信と活力を与えてくれた貴重で感動の一年間であった。

楠の木の母校よ、ありがとう。

思い出

津坂宗茂

歳月の流れは早いもので、川高を卒業して四十七年が経過した。青春時代の思い出を断片的であるが、印象に残っているものを一部記載することにした。

私は中学時代を愛媛県松山中学・新居浜中学で学んだ。松山中学一年の時、大東亜戦争で戦災にあって勉強も出来ず、毎日毎日焼け跡の片付けばかりで、苦難の道を歩んだことは今でも忘れられない。

(一) 戦後、父の転勤と本籍地が川越市ということもあって、川越高校に転校した。転校してきたその日の一時間目の授業のことである。○○先生が「宿題をやってこなかった者は立て。」と言われ、教壇の前に座っていた私ともう一人の転校生××君は、何も知らないので起ったまではよかったが、教壇から先生が下りてきていきなり鼻をつまみ、ゆすられ叱られた。その時「今日から転校してきたので、何も知らなかった。」と言うひまもなく「ビックリ」した。短気で厳しい先生だなあと思った。

(二) 川高庭球部に所属して高校一年の時、埼玉県代表として一年先輩の芹沢さんとペアを組み、全国高校庭球選手

権大会（大阪・中モズテニスコートで開催）に出場した時のことである。当時は食糧難で、お米を「一升」持参して旅館に出して食事を作って貰った。ところが、雨が五日間も降り続き試合が延期された。当然持参したお米が底をついたため、コーチであり先輩である笹田さんが名古屋まで行って、知人からお米を都合つけてきてくれ、試合に出場することが出来た。今では笑い話のようなことだが、当時は本当に感激したものだった。試合でコーチ・先輩の笹田さんへの恩返しと自分の実力を試したく、一生懸命試合に臨んだ結果、ベスト32まで残ることが出来、満足する試合であったと思っている。

（三）テニスの練習を毎日やりたくて、試験中は川高のテニスコートでは出来ないので、オケンのテニスコートを借りて練習したことがあった。ところが、各校の先生方の会議がたまたま女子校で開かれており、勉強もしないでテニスの練習をしていたことが「バレテ」しまい、大分叱られたことがあった。

（四）テニス部だったが、陸上競技部から駅伝競走のメンバーに借り出され、鴻巣～上尾間を走ったことがあった。その関係で走ることに自信がつき、社会人になって会社のマラソン大会で三年連続優勝することが出来た。

（五）昭和二十五年秋、県民体育大会兼国体予選で高校総合優勝したことも思い出の一つである。

還暦の記念文集で青春時代を回顧させて頂いたことを感謝します。

青春期の経過

柴崎　明

大東亜戦争も末期が迫り、「一億火の玉」、「一億総決戦」、「男子たるもの軍人」になることが最大の生き甲斐であり、次男・三男坊は甲種・乙種予科練に入隊することが誉れであるよう、早くも洗脳されていた。

昭和二十年三月には東京大空襲、四月に晴れて川越中学校に入学。在校生はわずか、新入生のみの入学式。学校には軍隊が駐留し、楠の木の下を歩いて通学することが出来ず、通用門には守衛兵二、三名が立哨していて、挙手の礼にて通過する。正門は、軍関係の車などが通過するのみで、学校なのか？兵舎なのか……。浅間神社の堀の中に防空壕があり、B29一機が煙をはいて落ちていくのを見た。（高階地区に落ちた。）

やがて終戦。兵隊連中は皆去り、入れ替わりに上級生が戻ってきたので、やっと学校らしくなった。部活動も始まり剣道部に入ったが、マッカーサー指令により中止された。その後、私は郷土部に入り「小鹿野町・長瀞町」に土器などの採集に出かけたことが何よりの思い出である。

教科書も参考書もない授業が始まった。佐藤先生の白文の漢文は理解するのに苦労した。普通の辞書にはない語句を解釈する。予習どころではない。授業の当日に謄写版刷りを渡され、先生が読み、それに返り点をつけ、理解せねばならない。

世の中は「学制改革」、「農地解放」、「財閥解体」と戦後の政治は新しく変わり始めた。川越中学校から併設中学校、

そのまま川越高等学校へと変わった。「農地解放」で弟分も農業に従事することにより、持分（財産）を取ることが出来る、と父親は判断したのだろう。高校を中退させられ、農業に携った。しかし自分では満足できず、父親の死亡と同時に海員学校に入学。卒業後、海運会社に三年勤め、兄が死亡したので実家に帰り、家の農業を引き継いだ。現在も農業を続けている。

美術部の思い出

小鷹邦夫

美術部からは優秀な画家たちが生まれている。我が同期生、リョウちゃんこと・大野良三画伯は、版画に打ち込んで一九六八・六九・七四年に郵政省年賀状版画コンクールで、日本版画協会賞や郵政大臣賞を受賞している。

当時の美術部員は大野君を始め、伊藤明君、小畑温治君、秋山輝一君、安田孝一君、阿川洋君など、みんな朗らかで冗談を言い合って面白かったが、こと絵を描いている時は全く真面目な画家（のタマゴ）たちであった。

美術部が使用していたアトリエ（部室）は、木造校舎の二階の階段を上がった、西隅のガランとした大きな教室であった。それでも白壁の教室には、部員の描いた石膏デザインや水彩画などが所狭しと掛かり、何か自由に描きたいという雰囲気が自然に醸し出されていた。当時はピカソ展、マチス展など大規模な展覧会が、東京で相次いで開催され始めた時代であった。

そうした時代、美術部を熱心に指導して下さったのは大澤寛先生。あの、こもったような独特な口調で、生徒たち

に抽象絵画への視点や考え方をトツトツと語る先生の講義は、不思議なほど説得力があり、芸術への夢を大いに駆り立ててくれた。

私は当時、校外の日曜美術教室にも通っていた。そこには将来を夢見る芸術家（のタマゴ）たちの集う社交場でもあった。もちろん、オケンの美術部員がいたことはいうまでもない。この教室には、川高の美術部員も多く通っていたので、まるで美術部が校外に居を移して、絵を描いている雰囲気さえあった。

美術部では上級生とも親しく口をきくことが出来た。特に一年先輩の方々は、いつも隔てなく話しかけてくれたし、親切に指導もしていただいた。今でも何人かの先輩とはお付き合い願っている。本当に嬉しい限りである。

その中のおひとり横田先輩は、現在、日高市の高麗山聖天院の住職としてご健在だが、過日はお伺いして大変良い話を聞くことが出来た。また森住先輩は、やはり日高市で、立派なギャラリー「モズ山房」を経営され、時々個展も開かれ、私も何度かご招待にあずかっている。

それもこれも美術部のご縁か、と絵筆を持つ度ごとに思い出すのである。

川中・川高の思い出

日新　豊

川中二年から川高二年までお世話になり、楽しい少年時代を過ごさせていただきました。父・日新義虎は校長として奉職しておりました。

記憶に残っているクラス仲間を列記しますと、松村祐二、吉崎　聡、高橋光一、西川正則、西川　博、堀　陽、斉藤　恒、柴野昭信、島田眞三、深井康弘、松岡章次、柳沢　隆、山下文司、青柳安彦、一色　勲、奥平守男、木村定雄、石倉俊治、塩野和雄らの諸君です。

亡友・塩野和雄君は人柄がよく、早世が悔やまれてなりません。豊岡町の家に西川君と遊びに行き、ウドンをご馳走になりましたが、あのウドンが美味しかった。

当時の遊びといえば、映画と野球でした。学期末や中間試験が終わると、鶴川座や松竹館などへよく見に行きました。また、当時は映画館で実演があって、テイチクレコードの専属新人歌手・菅原都々子の歌は印象に残っています。

野球少年の時は良く捕手をしていました。投手高橋光一君の剛球はやや（?）制球にかけ、キャッチャーは苦労しました。三塁手・松村祐二君、左翼手・吉崎　聡君らの守備や巧打ぶりも思い出します。

あの頃は物はなかった時代でしたが、今までの人生の中で一番楽しかったのではないか、と思います。みんな仲良くしてくれてありがとう。

川中への思い

細沼利輔

川中に憧れ、誇りに思い、胸ふくらませて入学し、終戦を迎え、六三制が実施された後、併設中学校卒業を選んだ私だが、今にして時おり見る夢は、あのころの川中付近の風景だ。古びた明治校舎、鬱蒼と聳え立つ楠の木、その南

側に新しい講堂があり、北側に満々と水をたたえた堀がある。川越城のお堀のイメージとダブルのだろうか、ここだけはまったく実在しない。今だからいえるのだが、学校の近くに行くこともためらったこともあった。やはり大多数の皆さんと一緒に川越高校卒業への思いが残る。が、最近は違う、もう大分前になるが、川越駅を降り学友と共に歩いたせまい道路を、横切り横切り歩いてみた。当時のことが鮮明に懐かしく思い出される。学舎もあの楠の木を残してすっかり新しい校舎になっていた。

三年間でも川中の門をくぐったことを、周囲の人に話すこともある。それで十分認めてもらえる。私にとってもすばらしい母校なのである。

同じ道をたどったのは、森下貞夫君、松岡亀雄君、小沢昭治君などで、よく覚えている。川田谷の小沢君とは二年ほど前近くに行く機会があって尋ねたところ、折悪しく不在で、またの機会にと思っているうちに昨年急逝されたと聞いて、驚いている。

森下君とはよく往来する間柄だが、今回の増補版の企画は彼が紹介してくれたもので、深く感謝している。喜多院に出かける機会もあるが、立派になった境内を見て、川中時代の塩入君をよく思い出す。

川越の思い出

須川賢司

昭和十八年の中頃、親父の転勤（川越警察署長着任）に伴って浦和から移り、終戦直後の九月に熊谷へ再度転出す

ることになるまで、約二年間、川越にお世話になった。その間、学校生活は、家のすぐ裏手にあった第二国民学校卒業までの一年半と、川越中学での四月から九月までの六ヶ月を経験した。川越での生活は短いものではあったが、多くの思い出が凝縮されて、そのいくつかは今でも鮮明に心に焼きついている。おそらくあの時期が、戦中から戦後にかけての激動の二年であり、歴史の大転換期にあったためであろう。

◇川越の街の印象　古い落ち着いた文字通りの城下町。曲がりくねった迷路の両側に、歴史を刻んだ黒っぽい蔵造りの家々が立ち並んでいた街。

◇やがてこの町にも、戦争の荒波が押し寄せ、米軍のB29が連日のように来襲した。

◇食べ盛りの年頃であったから、食糧難でのあの空腹感は未だに忘れられない。

◇学校生活では、小・中学を通して勉強らしい勉強をした記憶はない。授業のことよりも、農家に駆り出され草むしりをやらせられて辛かったことや、中学での軍事教練でしぼられた思い出が強く残っている。

◇七月も終わりに近づいていた頃、川中への通学途上、毎朝すれちがっていた陸軍中尉殿といつものように朝の挨拶を交わして登校。夕方帰宅の途中、中尉殿の家の前を通ったら、玄関先にあの中尉殿が英霊として写真に飾られていた。ものすごいショックを受けた。同時にいいようのない空しさが込み上げた。そして、その二週間後に戦争は終わった。

◇終戦後、思いのほか早く、川越にも進駐軍が入ってきた。どんな乱暴も避けられないと噂されていたが、現実は意外に平穏だったと記憶している。

あれから早くも五十年が過ぎてしまった。楠の木で覆われた正門の先に建っていた、あの古い中学校舎は今はない。でも小生の記憶の中にはそのまま残っている。

大学卒業後、三井物産に勤務した。三十数年間、東京、大阪をはじめ、アジアや米国、南米の国々で生活を送った。日本にいる間も仕事柄海外に出かけることが多く、訪れた国は五十ヶ国以上にも及んだ。めまぐるしく変わる日々の生活の中で、じっと自分を見つめる機会などなかった。今はそのような生活も終わって、三鷹に落ち着いている。

このたび、松村祐二君や関係者諸兄のお骨折りで、同窓の一員に復帰させていただいた。『おーい、楠の木よ』も読ませていただき、五十年前の思い出を蘇らせてくれたことに深く感謝している。そのうちに折をみて、あの頃の思い出を秘めて、独り静かに歴史の跡をたどってみたいと思っている。川越の街の中の古い家もあの狭い迷路も人々も、あの頃と少しも変わっていないことを願いながら。川越は、青春時代の古里として、今も心の中に生き続けている。

消えたバット

菅間　昭

昭和二十四年夏の県営大宮球場、この年、埼玉県から初の甲子園出場を果たした熊谷高と、県大会二回戦で対戦した私たち川越高は、卒業後プロ野球に投じた熊谷のエース荻原投手に連打を浴びせて、四回まで六対一と大きくリードを奪っていました。

押せ押せムードの私たちのダグアウトの中で、思わぬ事態が発生しました。物資欠乏の時代で、数本しかなかった

バットのうち、もっともバランスがよく、各選手が愛用していた一本が見えなくなったのです。多分、熊谷の方に紛れ込んでいるのだろうと聞きに行きましたが、「そんなものはない。」という冷たい答えのまま試合は進みました。

熊高の執拗な反撃により一点差に追い上げられた九回表、二死セカンドに走者を置いて迎えた打者は、五番、二年生ながら強打の細谷捕手でした。勝負の一球を痛打されて同点、延長戦の末、私たちは敗れてしまいました。

逆転負けの悔しさをこらえてグランドを去ろうとした私たちに、勝ち誇った熊谷の学生応援団がスタンドからバットを投げて寄こしたのです。試合中に消えたあのバットに間違いありません。その途端、チームきっての激情家である上級生の一人が、脱兎のごとくバックネット裏へ駆け込んでいきました。「あ、あんな、ス、スポーツマンシップに反することをしてもいいんですか。」涙を拭いながら激しく迫る抗議の前に、顔青ざめて立ちつくす熊高荻原主将の姿がありました。

勢いに乗って千葉県勢を倒し、実に三十年ぶりに埼玉県民の甲子園の夢を叶えてくれた熊谷高に対する、各方面からの称賛の声を聞かされる私たちの気持ちは複雑で、その後、長く胸中にしこりとなって残りました。

四十年余りを経た平成四年、たまたま熊谷高昭和二十六年の卒業生が作った還暦記念文集を開いた私の目は、「早く逝った栄光の球友」という一文に吸い寄せられました。内容は問題の試合での主役、荻原隆投手と細谷英治捕手の二人ともが、若くして亡くなったことを惜しむもので、二年生、左翼手として出場した石丸寛という方が寄せられたものでした。川越市で医院を営む石丸さんに電話して当時のいきさつをお話ししたところ、「バット事件のことは全く記憶にありませんが、事実だとすれば、本当に申し訳ないことでした。」と、きわめて丁重な言葉が返ってきました。その一言を聞いた瞬間、長年の心のわだかまりがすっと消え去り、改めて、青春の情熱をかけて、ひたすら野球に打ち込んだ喜びを強く感じたのでした。

稲荷山歩き

青柳安彦

入学当時、飯能方面から通う場合、上級生は所沢回りができたが、下級生たちは武蔵野線(今の池袋線)の稲荷山公園から西武線の入間川（狭山市）までの約二キロを歩くことになっていた。これを「稲荷山歩き」と呼んだ。横着して所沢回りをやって上級生に見つかるとたちまちお説教を食った。

稲荷山歩きは下級生だけというわけでもなかった。飯能から先の高麗、吾野方面に帰る人たちには一時間おきの吾野線に合わせて稲荷山歩きで帰る人もいたし、飯能の人でもそれに付き合ったり、歩くことの好きな人もいた。あるいは所沢回りの四年生を避けて、歩く三年生もいたと思う。また、吾野からご通勤の横田ゲジ先生もよく歩いていた。だが、歩いている間は比較的和気あいあいで、先生や上級生とも冗談を言いながら歩くことも多かった。

戦争が終わって、所沢回りが自由にできるようになってからも、みんなでよく歩いた。

数年前になるが、稲荷山での花見の帰りに久しぶりに「稲荷山歩き」をしてみようと思い、狭山市駅まで歩いてみたが、景色も、道そのもののコースも、スッカリ変わっていたのには驚いた。

私たちが歩いていた頃は、舗装はされていなかったが、比較的、両駅を最短距離で結ぶようなコースだった。稲荷山公園駅を出て右へ曲がり、入間川の方に向かってすぐ右手は航空士官学校（ジョンソン基地）の一部で、春には桜が満開のトンネルを作った。今でも稲荷山は花見の名所とされているが、今の花見の中心地は左側で、当時は畠だっ

た。稲荷山公園ももう少し入間川に寄った、鵜の木の上あたりが中心だったように記憶している。桜はきれいだったが、桜の名所になるほどのものではなかったような気がする。あるいは時代が花見どころではなかったせいかもしれない。

航空士官学校を過ぎると、右手に茶畑を隔てて飛行場があった。今はこの辺が一番変わってしまっているが、入間川の市街へ降りて行く坂があり、それを左手に見てさらに行くと道が小高くなって、また桜のトンネルがあった。この小高い数十メートルの部分からは滑走路の平面が見え、基地のかなり奥まで見通せた。この桜は進駐軍の大型トラックの邪魔だというので、間もなく切られてしまった。そしてまた少し行くと下り坂になり右手に入間川ゴム、左手の小高い所に入間川の小学校（中学校？）があって、最後にホンの少し、坂を上がると入間川の駅だった。その坂の下は雨が降ると大きな水溜りとなって、自動車もエンコするほど深く、回り道をしなければならなかった。

だが、こう描写してみても、ああ、これはいつの風景だったかな？　と思ってしまう。考えてみればその飛行場にオレンジ色、後退翼の日本の高等練習機が発着していた頃から、そこに銀色のP51（F51ムスタング）、ネーヴィ・ブルーのF6Fとかガルウィングのコルセアとかが、誇らしげに飛来した頃、そしてアメリカ兵が友だちとなり、時にはジープやトラックに乗せて送ってくれたり、洋モクやチョコレートがすっかり日常のものになるまで、私たちはそこを歩いていたのだ。朝、まだ霜の解け切らないような、飛行機のエンジンも寒さに震えているような風景もあったし、夜、行き交う進駐軍のトラックのライトに自分の影が大きくなっては後ろへ前へと、まるで映画の場面のように動いて行く風景もあった。

（風景・1）

最初の風景は戦争中、つまり、一年の一学期の時だ。当時私の家はなんと疎開先の豊岡町で空襲に会い、東吾野に

再疎開していたので、豊岡～入間川間の自転車と稲荷山歩きを併用していた。だから、夏も間近、あるいはもう夏だったかもしれない。服装はもちろん、戦闘帽にゲートル。ズックのカバンを斜めに掛けていた頃だ。帰宅途中の私の後方からやや年配の大尉ドノに引率された五十人ほどの兵隊さんがやって来た。

やがて小隊は右手の小高い丘に上がり、そこの木陰で小休止をとった。私はなんとなく見ていたのだが、その中の一人の兵隊がシャツを脱いで汗を拭こうとした。とたんに、

「オイッ！　○○二等兵。こっちへ来いッ。」

と大尉ドノの一喝が飛んだのだ。やや年配のその兵隊の顔には「しまった」というよりも「なぜ？」という当惑の表情が読み取れた。「誰が、いつ、服を脱いでよいと言った！」ハダカになったところへ敵襲があったらどうするんだ？上官がその辺を判断して許可するまで、ハダカになってはイカン！　というようなことを言った。でも林の中で、暑いからこその小休止だ。汗くらい拭いてもいいじゃないか！　難問、いや、難癖に近いと、私も思った。

あとは、鉄拳の雨だった。私は正規の帝国陸軍の正式のビンタの音を初めて聞いた。その音は学校で日常的に聞いている、ピシャッとかバシッとかいうようなナマ易しいものではなかった。濡雑巾でなにかを叩くような、あるいはなにかが骨にぶつかるような、重く、今でもハッキリ耳に残っているほどの嫌な音だった。家に帰れば良いお父さんであろう年配の二等兵の、歯を食いしばり、足を踏ん張って張り飛ばされていた姿がいつまでも胸に焼きついている。

あのお父さんにとっては、あれが「大東亜聖戦」のすべてだったことだろう。元気に復員されただろうか。

（風景・2）

進駐軍がやって来た。進駐軍との対応については学校はなにも教えてくれなかった。ただ、「何か怒鳴られたら止まれ。止まらないで撃たれた人があるそうだ。」と誰かが注意してくれただけだった。

秋だっただろうか、その頃はまだゲートルを巻いていた。航空士官学校もジョンソン基地になって、裏門にも番兵が立つようになった。私たちは何となく敬意を表しておくに越したことはないということで、どうすればいいかということになり、そうなればそれしか知らないんだからしかたのないことだが、その衛兵の前を整列行進し、「カシラーッ！右ッ！」とやったものだ。上級者に対し整列・敬礼は当時の学校の決まりだった。

すると米兵はカチッ！と音を立てて踵を合わせ、銃を立て直し、それはカッコよい敬礼を返してくれた。バカタレ（学校の教官のアダ名）の歩兵操典にはとてもこうは書いてない、見事なものだった。

おッ！　ウケた、これでいこうということになり、随分それをやった。その度に米兵はカチッ！と敬礼を返してくれた。美しい「日米親善」の一コマだった。（と思った）

ところがある日、前方から将校と兵隊の二人連れがやって来た。下士官だったかもしれない。私たちはソレッとばかりに隊伍を組んだ。今度は将校だゾ、果たしてどんな敬礼が返ってくるだろうか、ワクワクしながら…？「カシラーッ！右ッ！」

……ところが、将校ドノは敬礼どころか烈火の如く怒ってしまった。でも何を言っているのか私たちにはサッパリわからない。当たり前だ、私たちの英語の先生だって、学校へ連行されて来た捕虜のアメリカ兵に一言も通じなかった。その先生の生徒だもの……。

しばらく事態を飲み込めないでいた私たちに、連れの兵隊がちょっとコミカルな身振り手振りで私たちの敬礼の真似をして、NO！　ファッキングゥ、とか何とか言った。それでどうやらわかった。

翌日、私たちは学校に報告した。いや、ほとんど泣きついたに近かった。校則に従えばアメリカ兵に叱られる。撃たれるかもしれない。どうすればいいんだ？　今では考えられないことだが真剣だった。そして学校の返事も今では

考えられないようなスバラシイものだった。

「とりあえず、稲荷山区間に限っては整列・敬礼を省略してヨロシイ。」

という感じのものだった。もちろん、まもなく全校的に整列・敬礼そしてゲートルも廃止されたけれど……。

（風景・3）

ジープで通るアメリカ兵に「ヘーイ・ギブミー・チョッコレート」とやったら、本当にくれた時期があった。昭和二十一年頃だっただろうか？　アメリカ兵も私たちに道を尋ねたり、ラッキー・ストライクの一カートンを出して「テニエン（十円）ＯＫ？」などと聞くようにもなり、稲荷山の「日米親善」は多少軌道に乗りかかっていた。

でも生活のかかっている大人はチョッコレートではなく、もっと大物が欲しかったようで、メードとして基地内の将校宅に勤める女性がわざわざ和服を着て行き、帯の太鼓の中に「進駐軍物資」を隠して持ち帰ったりしたという話もあった。ゲートでの検問も相当厳しくなったようだった。

ある日、ゲートのほうから母娘らしい女性が二人、真っ青になって走って来た。娘は二十代だっただろうか？　まだ色気には目覚めていない私たちの目には、いずれにしてもオトナだったが、美しい人だった。背中にリュックを背負って、いわゆる買い出しの恰好だった。

何だろう？　と思って立ち止まった私の横を母娘は転がるようにすり抜けて右手の畠のほうへ上がっていった。あ、その先は林で、そのまた先は稲荷山公園の崖の上じゃないかと思う間もなく一台のジープが追っかけて来た。ＭＰではなかったかもしれない。どうも違ったような気がする。急ブレーキの音がしてジープは止まった。

何と言ったか知らないが「止まれ！」とか「待て！」とか言っているのはわかった。無論、母娘は耳もかさずに必死に走り続ける。私は「逃げると撃たれることがある」と言った教師の言葉を思い出し、ハラハラしながら見ていた。

果たしてその時「ターン」という大きな音がした。
意外に乾いた感じの音だった。それが私が初めて聞いたピストルのナマの音だった。空に向けての威嚇射撃だったのだが、さすがに母娘の足は止まった。
母娘を乗せたジープが砂煙を上げてゲートの中へ去った後も、私はしばらくそこに立っていた。不思議なことだが、どこかが疼くような、甘酸っぱいような気持ちを感じていた。
「何で、どこへ連れて行かれたんだろう?」
という母娘、とくに美しい娘さんへの心配と、
「あぁ、撃たれなくってよかったな。」
と思う安堵感とが入り混じった複雑な気持ちだった。かわいそうに、生活を賭けた盗みが発覚したんだろうか、それとも買い出しに出かけた途中で道に迷い、美しい娘さんが目をつけられたんだろうか? そのどっちもが考えられ、実際にあり得る時代だった。

(風景・4)

「歩き」ではないが、稲荷山ではこんなこともあったっけ。歩いたことは歩いたけど。……朝礼の時、寺島テンカイ教頭が、
「差し当たってですねェ、来週あたりにインソクをやりたいと思うン。」
と言って私たちを喜ばせた遠足が、蓋を開けてみれば稲荷山への行軍だった。電車で行っても入間川〜南大塚が四キロ強、南大塚〜本川越が四キロ弱、学校から奥富を通り、稲荷山まで歩いて行けば多分片道十キロ強の、まさに「遠・足」だった。結構遠くてくたびれた。担任は佐藤トクさんだったから、二年E組の時だったんだろう。

トクさんは別のアダ名をタコとも言った。それは他の学校では大抵、タコというアダ名の先生がいるのに本校にはいないなァという話から、いや、いるじゃないかという訳で、私が付けたてのホヤホヤのアダ名だったから、当然本人はまだ知らないはずのものだった。

昼食後、私たちのクラスはノド自慢になった。その時、小野テンが本人の目の前で本人の知らないアダ名を歌ってカラカッテやれという、チャメっ気を出した。「オタマジャクシは蛙の子、鯰の孫ではないわいな……」という灰田勝彦の歌をモジって「タコ入道は八つ足、イカの兄貴じゃないわいな……」

威勢よくやったまではよかったのだが、後が出て来ず、立ち往生してしまった。そしたらトクさんが、

「ヤメロ！ そんなデタラメな作り歌。思いつきで歌う奴があるか。面白くもない！」

と言って、タコのように真っ赤になって怒った。やっぱり敵もサル者、ひっ掻くモノ。いや吸いつくもの。タコは早くも自分のアダ名をちゃんと知っていたのだった。

（追記）

当時、稲荷山歩きをした同期生の名前を思い出してみよう。六年間のうちには、変動もあったし、全部思い出せるといいが、間違っていたら、お許し頂きたい。

（敬称略・駅ごと五十音順）

〈吾野〉浅見　岡部（タマに加藤康）　〈東吾野〉青柳　鈴木徹　山本繁

〈高麗〉新井治　関口、比留間（内海は時々国鉄も利用）

〈飯能〉赤田　内沼　加藤博　角谷？　金子武　君塚　土屋　双木　峰岸（潟沼）渡辺謙

〈元加治〉鈴木　岡田　（もう1人）　〈仏子〉石田　平岡義

（豊岡・金子は豊岡―入間川間、自転車を併用）川上　塩野　柳沢　池谷　豊泉　中村喜　石川（自由学園へ復校）

（本稿は、前回、スペースの都合で保留になっていたものを採録したものです。）

豆事典

ポツダム宣言

終戦の詔勅を聞いて直ちに敗戦を理解した人は少なかった。ポツダム宣言を受諾したといっても、ポツダム宣言そのものが知らされていなかったのだから仕方ない。だから、当日の朝、ラジオが正午に重大放送があると告げた時も、天皇がなにか激励の言葉を放送するのかな？　くらいに思った人も多かった。

敬礼

この頃、職場などで若い人にキチンと挨拶されると気持ちが良い。それだけ日常の挨拶が行われていないのだろう。戦時中はこれが厳しかった。いや、厳し過ぎた。上級生、先生、軍人に会うと必ず敬礼をしなければならなかった。帽子を被っているときは挙手の礼だが、特に上級生に対してこれを怠ったら大変だった。うっかり相手を見落としてもエライ目に合わされた。敗戦後もしばらくは続いた。習い性となって、ある日進駐軍の将校にこれをやったら大目玉を食い、せっかく敬礼したのに険悪な雰囲気になってしまった。このことを学校に直訴して間もなく、やっと敬礼は中止となった。

♪逢いたさ見たさに

逢いたさ見たさに恐さを忘れ、逢いに来たのになぜ出て逢わぬ、出るに出られぬ籠の鳥…（「籠の鳥」大正十年、鳥取春陽詞・歌、千田かほる曲）。昭和二十年、石川蚕糸に勤労動員に行った生徒が、アタマだけ覚えて帰って来た。意味がサッパリ分からない。後を思い出そうとしても、当時恐いものといったら敵機と上級生と先生しか思いつかないものだから「恐さを忘れ…」と言っただけでトクさんの顔が出てきてしまい、とうとう思い出せなかった。

第四部「続・華甲篇」――還暦を超えた私たち

入学時の想い出とサリン事件

石倉俊治

私は、当時北足立郡平方町という辺地の出身で(現在は上尾市平方ですが、辺地であることには変わりません)、川中には約三十分ほど自転車で通うほかに通学方法がありませんでした。

私の兄三人が川中に入っていて、皆、入学時には新しい自転車を買ってもらいましたが、私の時にはもう新しい自転車が手に入る時代ではありませんでした。私ばかりでなく、自転車通学の新入生のほとんどが古い自転車でした。

体が小さかった私は、吹きっさらしのビュウビュウと吹く「空っ風」に飛ばされそうになり、橋の上など自転車から降りて渡りました。空っ風は冬だけでしたが、タイヤもチューブもすっかり老化していて、殆んど毎日パンクするのには泣かされました。

入学して、しばらくすると米軍の空襲が始まり、運動場の端に掘られた防空壕に避難したことを思い出します。ア

メリカの飛行機は爆弾ばかりでなく、宣伝ビラとともに不思議なものを撒き散らしました。それは飛行機が飛んでいってからも、しばらく空のあちこちに、ふわふわしながら漂っていました。その正体はアルミニウムのテープの絡んだものでした。今にして思えばレーダーの目くらまし用だったわけですが、当時は何のためにそんなものを撒き散らすのかは全く判りませんでした。

当時一年生だったわれわれは、幸せに毎日授業を受けられましたが、二年生より上級生は工場に勤労奉仕として動員され、土曜日だけしか授業を受けられませんでした。一年生だったわれわれも、あの運命の八月十五日は農家の勤労奉仕でした。雑音の多い天皇の詔勅を聞いた後、誰かが「戦争をしっかり続けろと言うんだな。」と言いました。今にして思えば遠い思い出です。

松本・地下鉄サリン事件

九四年六月二日の松本サリン事件の翌日、大学に行く前、突然ＮＨＫから電話があり、松本の中毒事件についてコメントが欲しいから、自宅におじゃましたいとのことだった。同様な電話がテレビ朝日、フジなどと続いた。一九九一年当時、湾岸戦争でイラクが国連軍やイスラエルに対して、化学兵器を使用するのではないかとの懸念から、化学兵器に関する関心が高まったことがあった。

その当時にも、ＮＨＫをはじめ、多くのテレビや週刊誌などで毒ガスの解説をしていたので、テレビ局は私が毒ガスの専門家であることを知っていた。

松本サリン事件の死者の中には、失禁を起こしながら、または床を爪で掻きむしりながら、息絶えている人もいた。また、中毒者はクシャミ、鼻水、瞳孔縮小などの症状を呈し、コリンエステラーゼの活性が著しく低下していたという。窓から毒物が入り、睡眠中の人を死なすというような高毒性の物質は、まさしく毒ガスである。症状はコリンエ

ステラーゼ阻害の典型的なものだ。有機リン系、カルバメート系殺虫剤もコリンエストラーゼを阻害する。しかし、現在の殺虫剤は昔のパラチオンなどのように毒性は強くない。

裁判化学と農薬学を講義

私は理科大学薬学部に就任以来、三十七年間裁判化学を講義してきた。裁判化学とは、薬学の分野において、法医学、法歯学に似た学問であり、化学的に毒物などを分析して、裁判、法律上の諸問題を解決することを目的とする。また、大学では農薬学も数年前から講義しているので、有機リン系殺虫剤もそのリンの構造から六種類に分類さること、そしてそれらは人に猛毒を持つ神経ガス・サリンなどの化学構造とは異なるから、低農薬の農薬から、偶然の操作で猛毒の神経ガスに似たものが出来る可能性はほとんどあり得ないことを考えていた。また、化学兵器、生物兵器に関する本を書くつもりで、長年膨大な資料を集めていた。

今回の大惨事の原因は？

神経ガスは特別の化学構造（リン原子にメチル、フッ素が直接ついている）をしているから、偶然にありふれた化学薬品を混ぜ合わせただけでは絶対に出来ない。私は、松本の中毒事件ではこれらの情報から、今回の惨事は毒ガス中でも神経ガスに近い物質に違いないと確信した。

私は、テレビのインタビューでこのことを、「今回の事件は神経ガスによるものである。例えていえば、空に向けて鉄砲を撃って、鳥が落ちてくるような確率でしか、神経ガスが偶然には出来ることはあり得ない。変質者が初めから毒ガスを造る目的で、意図的に特別の化学薬品を反応させたものである。」とコメントした。

いくつかの放送局、新聞などでは、すぐに私の見解が発表された。しかし、ＮＨＫは、録画はしたものの、当夜のニュースでは他の学者の間違った見解を紹介し、私の見解は放映されなかった。翌日、ＮＨＫからまた、見解を録画

したいとの連絡があったが、いったん断ったが今度は必ず放映するとのことで、前日と同様な見解を述べた。今度はすぐに放映された。

解毒剤、治療剤をテレビで発言

私の講義で有機リン化合物の毒性機構や、解毒剤、治療剤は、例年試験の山であった。神経ガスにはＰＡＭという解毒剤があり、また、症状を軽くするにはアトロピンが有効であることなどがある。神経ガスの解毒剤については、松本事件当時は医者でも知っている人は少なかった。これらを早期に使えば、かなり効果があることから、これを一刻も早く中毒患者に使ってもらいたかった。そこで、生番組の際に、これらの医薬品を至急使用すべきであることを追加発言した。この発言が、患者の治療に大いに役立ったと関係者に聞き、専門分野のことで、現実にお役に立てたと満足している。

※追　記

オウムが悪用したサリン、ＶＸ、青酸、塩化カリウム、ＬＳＤ、ボツリヌス毒素、自白剤などに加えて化学兵器、生物兵器の歴史、麻薬など悪用される薬物などについて、わかりやすく、かつ面白く？『オウムの生物化学兵器』を読売新聞社出版部より出しました。定価八百円です。ご一読、さらにご推薦下されば幸いです。

ドイツ近況

馬場尚世

最初に日本を出国したのは一九五七年で、行き先はスイスでした。それから今までドイツに主に滞在しております。その間今まで、もちろん年に数回日本に帰国しているので、浦島太郎のようにはなっていない、と少なくとも自分では思っています。

外国で長く生活していると、日本人よりもそこの国の人に近くなっているのではないか、と思う方も多いようですが、それは、昔のように旅行、通信手段の遅れていた時代のことと思います。

例えば、私の住んでいるドイツのハンブルグでの生活をお伝えすると、次のようです。

朝、事務所に出勤する前に、売店に寄って日本の新聞を買います。私は「朝日新聞」（一部・七ドイツマルク、日本円で五百円位）を読んでいますが、国際衛星版ですから日本と同日（これは時差によるものです）の新聞です。日本で読む新聞と同様に、テレビ番組から広告まで出ています。

事務所から日本との連絡はファクスか電話で、日本語で行われます。こちらの朝は日本の夕方になります。ドイツの会社との通信は、もちろんドイツ語でやらなければなりません。

十二時から好みによってドイツのレストラン、または日本のレストランに行くことが出来ます。この街には日本のレストランが十軒くらいあり、それぞれが日替わりランチメニューを出しています。大体千円ぐらいです。その他に

も中国人、韓国人の人たちがやっている日本名のレストランもあります。ここで知り合いの日本の人たちと会って話が出来ます。

午後から時間があれば、日本の本屋に行って日本語の雑誌、本を買うことが出来、または日本の食料品を、このハンブルグにいくつもあるアジア食料品店で見て歩いてもよいわけです。私は米国から輸入のお米を買っていますが、日本米と変わらず、袋には既に日本語で、「大黒米」「ローズ」「ぼたん米」「みのり」とか印刷されています。袋詰、缶詰、乾燥品、冷凍の物、ほとんど全て揃っていて、日本にあってこちらに無い物は何だろうと考えるくらいです。昔はパンにビールをかけて糠味噌を作ったりしましたが、今では、糠も売っています。

家に帰れば、特別料金を払わなければなりませんが、日本のテレビも見ることが出来ます。衛星を使ってのロンドンからの放送だと思いますが、NHKのニュース、連続ドラマ等、見ている人が多いようです。

以上のように、日本から来ている人たちは、この街のシステム、電車、バスの乗り方、街の地理、どこに何があるか覚えれば、言葉はあまり重要ではなくなります。何曜日にどこそこのデパートで良い生のマグロとかイカが入荷する、とかが判ればよいわけです。売場で日本人が働いているデパートもあります。昔はどこかで日本の人と会うと声を掛け合っていましたが、今では大きなヨーロッパの街で日本人に会わないことはなく、何時、どんな飛行機に乗っても、日本の人を見かけます。最近では、声を掛けて見ると、相手が韓国人の場合が多くなってきています。

ドイツ在住の日本人相手の日本の会社が多くなっています。例えば、たくさんの日本の旅行会社がドイツ・日本往復の飛行機のチケットを販売しています。安いのでは十万円以下位のもあり、昔と比較すると夢のようです。

このように外国でも日本に近い生活が出来るようになったとはいえ、しかし、やはり日本ではないのです。日本か

ら来る方にいつも言っているのですが、やはり日本で生活して、時々ヨーロッパに旅行できるのが一番だと思います。外国に長く住んでいる人には、日本から離れてそこの国の人になりたがる人と、ますます日本的になる人の二種類あると聞いたことがあります。私はどちらかと言えば、後者に属すると思います。

どんなにそこの国の言葉が出来るようになっても、自分だけでドイツ人になったと考えていても、顔つきとか体型は変えられず、ドイツ人から見れば、やはり、その人は日本人です。家族との縁が切れないように、生まれた国と故郷との縁は切れないものと考えます。

何かの時に川越の名前を聞くと、いつも、昔の川高のことを思い出しております。楽しいことしか思い出さないのが妙だと思います。

皆様ともお目に掛かって、一度、昔の話をしてみたいと考えております。（在ドイツ国ハンブルグにて）

ふるさと講座

――人生は短く歴史は長い

斉藤　恒

故郷、山田公民館（川越）へ『おーい、楠の木よ』を贈呈したのが縁となり、館長から講座へ誘われた。講師は恩師の小泉功先生、願ったり叶ったり、四十五年ぶりの聴講であり、心が弾んだ。講義は初回六月七日、「古代の川越」から始められた。

当地方は周りに河川が流れ、集落が発展するのに極めて良い条件が整っていた関係で、関東地方でも比較的早く拓けた。従って、各地で古墳が発見され、数多くの土器や装身具等、価値のある遺品が出土しており、一部は市立博物館にも展示されている。旧市内から関越インターへ乗る右側の小さな森は、関東最大の上円下方墳である。

約六千年ぐらい前には、気温が二度ほど上昇していたため、氷河が解けて海が川越付近まで迫り、東京湾の一番奥が仙波の先であったことが貝塚の遺物等で分かる。人々は山の方から降りて川辺にやって来たと思われ、入間川が本流であったが、戦国の世、河川改修が行われ、今では荒川の方が有名になっている。

中世の当地方に関係の深い人物に、入間宿弥物部広成が文献で知られている。武蔵国は広大な稲作地帯で労働力も潤沢にあった関係から、朝廷に権力が及ばない蝦夷対策の補給基地の拠点となっていた。我が故郷・入間郡山田郷については、平安時代の「和名抄」にも記されている。この時代は、藤原氏の勢力が強く、皇族や貴族は居心地のよい地方へ流れ、そのまま根付いて豪族として勢力を伸ばしていった。その中の一人、桓武平氏の流れを汲む秩父重綱がおり、長男・重弘（畠山）、次男・重隆（河越氏）、三男・重遠（高山氏）、四男・重継（江戸氏）は山を降りて、それぞれの地方を支配した。

『伊勢物語』に、三芳野の里として記されている武蔵野台地の上戸（うわど）、河越氏は館を構えて源頼朝と戦ったが、関東武士をまとめようと努力した頼朝の説得を呑み、和睦した。その頼朝が最も敬愛したのは乳母の比企尼で、三人の娘がおり、次女は河越重頼に嫁いでいた。頼朝は、子供・頼家が誕生すると、重頼の妻を乳母に選び、河越氏を重用した。頼朝の弟・義経の正妻は重頼の娘であり、頼朝の仲人によって鶴ヶ岡八幡宮で義経不在のまま挙式し、上洛した。義経二十六歳、妻十九歳のことである。

頼朝に無断で西国検非違使に任命された義経は、激怒した頼朝に追われる身となって奥州へ逃れたが、衣川の館で

藤原泰衡に襲われ妻子を殺し、自害した。河越氏は身内ということで表舞台から消えたのであるが、後に畠山重忠の乱、承久の乱等で活躍した功により、重頼の子・重員が武蔵国留守所総検校職に任ぜられ再起した。

室町幕府を開いた足利尊氏は、次男・基氏を鎌倉に残して武蔵、相模、伊豆までも支配させた。武蔵国で勢力を誇る河越氏ではあったが、幕府からは思うような処遇をされなかったことを、日頃から不満に思っていた矢先、基氏没後、若くして氏満が後継者になったのを機に、周囲で平氏の流れを汲む武将と計り平一揆を起こしたが、上杉勢に破れ伊勢に背走した。現在でも、三重県に川越町があり県立川越高等学校が存在している。

因みに河越館は約二町四方に及び、足利氏、武田氏館にも匹敵するほどのもので、新田氏の反町館の二倍はあったと思われ、勢力の大きさを窺い知ることが出来る。平一揆で功績を挙げ台頭してきた扇屋上杉氏は、家臣・太田道眞、道灌親子に命じて、江戸、河越、岩槻の三城を築かせたが、築城二十九年後、有能な戦術家なるが故に、道灌は主君定正に殺されたのである。しかし、その上杉氏もこれが禍して滅亡の途をたどった。

戦国大名は領土拡大のため相争い、北条早雲は武蔵国を手に入れようと考えていた。北条氏綱は上杉朝興と戦い江戸城を攻略し、上杉氏は河越城を撤退させられた。ややあって、朝興の息子・朝定の相続の際、氏綱は上杉軍と戦い勝利、破れた朝定は難波田氏の居城・松山に身を寄せ、河越城奪還の機会を窺っていた。のち、北条氏が今川氏と争っているのを見て、扇屋と山内の両上杉と古河公方とが協定を結び、八万余の大軍で河越城を包囲した。守るのは、北条方・福島綱成と援軍・北条氏康の総勢八千余。激しい夜戦の末に勝利、これが桶狭間（信長）、厳島（元就）と並び、後世に伝えられる日本三大奇襲戦の川越夜戦（東明寺合戦）である。

河越城主は上杉六代・北条三代と続いたが、秀吉の北条攻めに破れ、徳川家康が関東を支配した。河越城は江戸に近く最重視され、藩主の多くは幕府の要人が任命されている。初代は三河以来の酒井重忠、また三代は「酒井の太鼓」

大老・酒井忠勝、五代は「知恵伊豆」老中・松平信綱、将軍綱吉に重用された大老・柳沢吉保は八代。家臣に学者を登用し、今の裁判所付近（現在の宮元町）に荻生徂徠を住まわせ、赤穂義士の処分について吉保を通じ、綱吉に切腹を進言し採用された。遡り、家康は藩主・重忠に街道整備を命じ、信綱により完成されたのが川越街道である。家康が鷹狩りに来た際には、清水町（東京電力付近）の水でお茶を点てたという。また、秀光も鹿狩り等で頻繁に往来していたことが、屏風絵にも残されている。

参勤交代は、寛永十二年、三代将軍・家光によって始められた。その行列は西大手門（市役所前）から正装で南下し、菅原神社まで「下にー、下にー」と槍を突き立てて進み、見送る町民は砂敷きに正座、額の下に砂を盛り、頭が高ければ咎められ、見えぬ果てまで土下座する。烏頭坂から略式で江戸へ向かった。

「河越城炎上」　十六代藩主・松平斎典不在中、弘化三年（一八四六年）四月一九日午後八時半ごろ、長男・駒七郎（秀御殿）居所付近から失火、明白にはされなかった。駒七郎は病弱のため、十七代藩主を継いだのは弟の誠丸（典則）である。駒七郎の墓は養寿院にある。

「市内散策講座」　最初は夜戦のあった「東明寺」。隆盛時には山門が札の辻付近にあったそうです。次が神仏混淆「広済寺」。ここは、時の鐘の鋳造者・矢沢氏、お台場の大砲を作った小川氏、両家の菩提寺であるとともに、社側には江戸時代後期の文人絵師・谷文晁の天井龍画が最近発見され、文化財の指定を受けるそうである。

河越太郎が祀られている「養寿院」。上戸から移された河越氏の八百年祭には、奥州から代表が来て盛大な供養が行われた。また特筆すべきは、日本に国会議事堂を建設しようと、大隈重信、高田早苗、福田久松等による第一回の会合がこの寺の大広間で開かれ、激論が交わされた。豊田新田出身の久松は、勝海舟とウマが合い、海舟は久松の選挙

応援にも熱心であった。今でも久松の実家・仲家には海舟の書が保存されている。恩師の近藤鉄城先生の「光西寺」も、この寺の門前にあったが、その後現在の仙波に移築され今日に至っている。

平成八年「日本の音百選」に選定された「時の鐘」。二人の鐘守りがいて時を告げていたころ、NHKラジオの時報にもクレームを付けるほど正確なものでした。市立川越商業高校跡地に建設された「市立博物館」には、川越高校郷土部員によって、老袋の入間川から掘り出された約六千年前・縄文時代の丸木舟も陳列されているが、当時存在していた櫂が紛失、行方知れずということで残念至極である。

最後に「星野山喜多院」。寛永一五年の大火で正門を残し焼失したが、家光の命により江戸城・紅葉の間が移築され、現在では江戸城唯一の遺構となっている。戦時中は荒れ放題で、雨漏りもしていた建物を保存・修復に尽力した塩入亮忠・亮善父子の偉業は、昭和の再興者として後世に高く評価されるものである。

数多い研究の成果をお聞きして、改めて我が町・川越が歴史の未曽有の宝庫であることを認識した次第である。

追伸

川中二〇（ふたまる）会百回記念に備え、候補地の下見をし、特訓も重ねていましたが、当日は講座の七回目「川越の祭りと大名行列」に当たり、残念ながら欠席いたしました。

二〇会の祝賀パーティーは伊香保の五月亭で六時から予定。四時半まで山田での勉強では無理なので固辞したが、顔振峠の加藤康夫氏が一日聴講を志願、その足で陸送出席することが出来たのですが、その御本尊様が所用でトンボ帰り、申し訳なくお詫び申し上げます。

富める小国ブルネイ

山田和夫

アセアン加盟の東南アジア地域で、観光やショッピングのツアーが盛んな香港・シンガポール・フィリピン・バリ島・タイなどは、皆さんが既に旅行してご存知であろうと思いますので、比較的日本人観光客の少ない「ブルネイ王国」に、仕事で行った時の体験を紹介します。

まず、世界一の大富豪は、誰でしょう？　それは多分、毎年世界長者番付に名前が載るブルネイのサルタン・ボルキア国王でしょう。このブルネイ王国は、ボルネオ島西部のマレーシア領の西北部分、南シナ海に面する一画にある小国です。沖合で産出される石油と天然ガス（大部分を日本に輸出している）の恩恵を受けて、枯渇するまでは裕福この上なく、外国の大学に留学する国民には、全額、国で面倒をみると聞きました。

一九八三年、約十五年前になりますが、王宮建設中に防火シャッター納入するため、行く機会がありました。この王宮は、バチカン宮殿より大きいといわれ、総工費約四十億ドルをかけて、一九八四年に完成したものですが、部屋数が千八百くらいあり、国教であるイスラム教のモスクを備えた建物です。

さて、ブルネイへの国際線は、現在は関西空港から直行便があるようですが、当時は香港経由でロイヤルブルネイ航空を利用するのが最短ルート。この往復航空券を購入して出発したわけです。途中乗り換え経由地の香港で、ブルネイ$に両替し、ブルネイまでの三時間を機中で過ごしたのですが、この航空機に乗ってまず驚いたのは、B737

型機の通常ファーストクラスに当たる部分が荷物室になっていたことでした。これは国王がポロ用の馬が好きで、前部荷物室は馬用、乗客は後部座席だそうです。しかも航空機が小さいこともあって、揺れて気分の悪くなる人が出るありさまでした。

夕刻、ブルネイの国際空港（といっても日本の地方空港程度）に到着すると、王宮工事の元請けであるフィリピンの建設会社のマネージャーが迎えに来てくれており、車で予約してあるダウンタウンに近いシェラトンホテルに案内してくれました。現在は外国人が宿泊するホテルも数軒出来ているようですが、当時はシェラトンだけで、その夜落ち着いてから料金を聞くと、競争のないこともあって非常に高価、さらに食費などを加算すると規定の出張旅費では心配になるような料金でした。

翌朝、まだ暗いうちからスピーカーで流れてくる近くのモスクのコーランに起こされ、朝食後、前日のマネージャーの迎えの車で建設現場へ行くと、二十ヘクタールもの広い敷地で工事が進行しておりました。関係者に挨拶後、コンクリートの打ち上がったシャッター取付箇所を実測して、設計図の修正をしたのですが、実測中には、現場の裏手のブルネイ川岸に林立するマングローブを見ることが出来ました。

この工事のコンサルタントとして、人工衛星も手がける米国の技術関係大手企業であるベクテル社が監理しており、設計図はベクテル社の現場米国人監督員の承認が必要とのことです。数日間の現地滞在中に数回この米人監督と協議する過程で、シャッターにも日本流と米国流では多少異なるところがあり、各々一長一短があるのですが、短期間の滞在で承認を得る手段として、郷に入れば郷に従い、無事目的を達成することが出来ました。わずか数日間でしたが、昼食は現場の食堂で米国人、フィリピン人と一緒に食べましたが、皆親切に面倒を見てくれました。

ある朝、ホテル食堂での朝食時に、ベクテル社の米人監督夫妻と一緒になったおり、夫人が「もう半年もホテル住

まいで、夫の仕事中はホテルのプールで泳ぐ程度しかやることがなく、飽きてしまった。」と話すのを聞き、出張旅費内で納まるか心配している当方とは大違いで、高価なホテルに夫婦で半年間も滞在するとは、さすが世界のベクテルと感心したものです。

数日間の滞在期間中に一日だけ現場の休日にあったため、市内周辺を観光して歩いたのですが、ダウンタウンにはきれいに洗車された高級車（日本車も多い）が行き交い、樹木も多く整然とした感じで、富める国を実感しました。観光スポットとしては、モスク、イスラム美術の博物館、海かと思うようなスケールの大きなブルネイ川に浮かぶ大水上集落と対岸へ行き交う自家用モーターボートなどですが、これは皆さんが自分の目でご覧になるとよいと思います。当時は日本のゼネコンも進出して、山の手の方では建築を盛んに行っていたのですが、最近は十五年前とは比較にならないほど便利になっていると思います。

さて、出張目的を終了し帰国するに当たって、復路フリーとなっている香港経由の航空券で、週三便のブルネイ航空の座席予約を試みたのですが、四日後の便しか空席がないというので(往路の揺れも嫌だった)、前述のマネージャーの助言もあって、現地のシンガポール航空の事務所に行き聞いたところ、ブルネイとシンガポール間は毎日エアバスの便があるので、明日の午前中に出発する便でシンガポールへ行き(約二時間南下する)、明後日の朝出発する成田までのシンガポール航空の直行便に搭乗すれば、日本円での一万円追加支払で、シンガポール空港と新宿伊勢丹があるホテル間の往復タクシー代、ホテル代及びホテルでの夕食と翌朝食はシンガポール航空が負担することで交渉成立しました。お陰でオーチャードロードで土産物を物色することが出来たし、残ったブルネイドルを使い切ることが出来(ブルネイドルとシンガポールドルは同じレートで双方の国で使える)、さらに二日早く帰国することが出来て、実質どうかは判りませんが、何か得をしたような気分を味わったものです。皆さんもパックツアーでない個人旅行の場合

には、現地で交渉してみてはいかがでしょうか。

とりとめのないことを書き連ねましたが、十五年前とは異なり、現在はブルネイもかなり便利になっているようですので、東南アジアへの旅行の際は、一度足を延ばしてみて下さい。私も王宮の完成後を見ていないので、もう一度機会を作って行ってみたいと思っています。

（一九九七年五月十五日記）

この頃の雑感

石井保行

二年前、子機つきの電話機を買った。

それまでは一つの電話機のため、ベルが鳴るとこちらから飛んでいくのが当たり前だった。階段を駆け下りたり、庭にいる時など駆けつけるのが常であったが、年のせいかあるいは体調を崩したためか、億劫になり、古い電話機とはおさらばとなった次第である。

「便利だ。二階にいても、庭にいても、布団の中にいても電話ができるし、相手からの電話を聞くこともできる。電話はコードレス化したんだ、こんなに便利になっていたんだ。」と、たかが電話のことで感動した。

新しい機器が入った当初は、今までの電話機との長年お付き合いから自由になれなかった。子機の置いてある充電器の前にへばりついて電話をしたり、親機の方へ行ってしまったり、電話が鳴ったらこちらから飛んでいくのが常識だったから、頭で分かっていても身体がついていかなかった。

そのうち、一階で取った受話器で二階とインターホーン代わりに使ったり、仕事中の植木屋さんに電話がかかってきたので、子機を庭に持っていったりと、便利に使うようになった。

しかし、この頃は新聞や折り込み広告で見ると、携帯電話が全盛になっているようである。二年前に便利だと感動したのがもう遅れたヤツになっている。世の中どんどん進んでいるんだなあーと、思うこの頃である。

文集に寄す

橘田敏之

私はプレストレストコンクリート橋（ＰＣ橋）を主とする専門技術者として国鉄、㈱熊谷組、大日本土木㈱に勤務してきた。

（長文を書く習慣は多いものの、短文を書く機会が少なく、つい余計なことを考えて、同窓の皆さんのような素晴らしい文章にまとめられず、今回のトライも長文となり書き直した次第である。）

川中・川高時代

ひ弱なガリ勉派であった。文系は、理解は容易であったが何か物足りなく、化学、物理に興味があった。これは先生の影響ではなく、本来理学系の科学の持つ神秘性へのあこがれからであったと考えている。

継続して付き合っている友人は極めて限られ、文系の中村喜代治君と、同じく文系に進んだが、幾何に秀れた才能のあった秋山輝一君である。お二人とはよく私の家で、将棋や、人生観、進路等の話に熱中した思い出が懐かしい。

中村君は教育大を苦学して卒業し、アメリカの航空会社のリザベーションをやっていたが、日航に転職、私の職場にも数回顔を出していたが、まもなく亡くなった。人生の華を開くことなく残念なことである。

職　歴

私を知る同窓の皆さんに、私の職歴をご紹介して一興に供する。

都立大学で土木工学を学び、国鉄に入社、同在職三十年の内十八年間は設計(構造)、施工の指導などの業務であった。東北新幹線の建設のため盛岡に駐在した五年間は、主として盛岡市内の新幹線構造物に新形式の橋梁を設計し、盛岡市の新幹線構造物の景観を一変させた。ある日、同窓の森田重敏君が来盛され、一日を楽しく共にした思い出がある。国鉄最後の三年間は鉄道技術研究所の主任研究員として、コンクリート内の鋼材の腐食研究などを行っている。

昭和六十年、三十年間に及んだ国鉄を退き㈱熊谷組に入社、続いて平成六年大日本土木㈱に入社した。両社においては、国鉄で培った技術を活用し、両社のＰＣ部門の立ち上げに最高責任者として、ＰＣの施工会社作りに働いた。

この間、東京大学農学部においてコンクリート材料学を五年間にわたり、また都立大学土木工学科においてコンクリート設計法について二年間にわたり非常勤講師を勤めた。プレストレストコンクリート橋（コンクリートの中に鉄筋、ピアノ線を入れて補強した橋）の技術者、研究者として四十年に及ぶ職歴を重ねたが、官庁出身者としては極めて稀なケースを歩み、このことは私自身喜びとしているが、考えてみると、中高時代の友人の影響と大学の恩師の御指導の賜である。

趣　味

現在、趣味はゴルフだけである。ゴルフは仕事にも必要なことが多く、加齢とともに熱心になっている。道具は進歩に合わせて購入してきたが、Ｓヤードから四代目として「カムイプロ」を使っている。三月末日購入、数回の使用

で、極めて優れていることが判明した。

平成九年五月十六日、大栄C・Cアウトで38を記録した。ダブルボギー1、ボギー1、バーディ1で、あとはパーである。アフターナインは44であった。当日は距離、方向ともよくパーオン率77%、フェアウェイとセミラフキープ率77%、なおフロント9のパターは16打であり、まだ改善の可能性がある。まだまだ楽しみを残している。なおこの値は特異値であることをお断りしておきたい。

最近の自画像

「一隅を照らす」、「ベストよりベター」をモットーとして自らを処し、後輩の指導に当たってきた。その積み重ねが一昨年（平成七年）土木学会のフェロー会員に推されることになった。

会社では次第に直接手を下すことは少なくしているが、特別の案件については、まだ細部にわたり新しい提案を行うようにしている。

本年（平成九年）五月、宮崎県高鍋町に建設した「トンボのはし」は日本最大、世界第三位のPC連続吊床版橋であるが、PC技術協会の技術開発賞の栄誉に浴した。私の全力投球の成果であった。この賞は三年前、熊谷組在職中に続いての受賞である。

私は仕事に当たり、モットーの具体的成果として一業務一発明を提言してきた。熊谷組在職中九年間の特許出願件数はちょうど五十件に達し、この目標を十分にクリヤーできた。熊谷組が発明を奨励する体制が出来ているからである。

国鉄時代からの発明の件数は大変な数になる。これらの発明はほとんど全て自分が直接関与し、発明の明細書を書いてきたものばかりである。発明を心掛けることで仕事を計画的、効率的に進めることも出来るようになった。

このような見方で仕事の進め方を眺めると、不十分なところがやたらと気付き、ついつい理由をつけて仕事に直接手を下すようになる。

終わりに当たって

増補版への執筆要請の電話を多数いただき、ようやく責を果たすことが出来ました。精一杯思い出をたどりながらの執筆になり、原稿を破棄したい気持ちにもなりました。駄文ご勘弁いただきたいと願う次第です。

我が青春は悔い多き

原島　淡

埼玉県でも西南の端、片田舎の宮寺村、そこの百姓の七人兄弟の四男として生まれた。毎日、野原を真っ黒になって飛び回っていた私は、「宮寺小学校から二、三年間に一人ぐらいしか合格しない、川中を受けてみろ」と担任に煽てられた。当時、宮寺小学校には兵隊が駐屯し、六年生は農家の茶摘み、桑摘み、麦刈り、山へ薪拾いなどの手伝いをさせられ、勉強どころではなかった。たまたま紛れ当たりの見事合格はペーパーテストがなかったことと、面接だけはハキハキ受け答えが出来て、軍国少年もどきだったからに違いない。

憧れの白線帽をつけて入学してまず驚いたことは、同級生が大人で秀才に見えたことです。昭和八年三月早生まれのチビには、ローマ字はもとより英語も全く見たこと、聞いたこともなく、驚きだらけ。数学も何が何だかチンプンカンプン。村の秀才も、川越では鈍才でタダの人。これではいかんと思って、己にネジを巻いたかどうか記憶がない。

耳順の年を過ぎた今でも、ゴルフでブービーになっても、賞品がないより有る方がましという呑気屋の性かと思っています。

西武線入曽駅まで細淵君と自転車通学、砂利道で穴凹だらけで尻の穴が疼いたことも。将校が騎乗した軍馬に、自転車ごと蹴飛ばされ、溝に落とされ泥まみれになって登校したことも。

バカタレ軍曹に木銃で突っつかれて、二・三メートルあとに吹き飛んだこと。橋本先輩に訳も分からず（生意気に見えたようだ）ヤキを入れられ、目から火花が飛び散ったこと。

川中二年の頃より西武線狭山ヶ丘駅からの通学に変更。四キロの畑道を駆け足で通ったが、それでも電車に乗り遅れ、遅刻常習者の汚名を頂戴したこと。

中（秀）、守谷、東、長谷川の諸兄からノートを度々借りて、試験を無難にすり抜けたこと。登校途中、H兄と初めてタバコを吸い、クラクラと目が回り、林の中で寝転んでサボって学校を休んだこと。いろいろ挙げれば、枚挙にいとまがない。

川高三年の六月、中間試験の最中喀血し、私の人生もこれで、THE END かと思った。父親が野良着のまま、二時間半かけて学校まで迎えに来てくれた。帰りのタクシーの中で父親のキラッと光る涙は、私の脳裏に焼きついて今でも忘れることはない。昭和二十五年当時は、どこの病院も満員でなかなか入院出来ず、やっとその年の暮れ、国立村山療養所に入ることが出来、闘病生活が始まりました。健康保険制度も完備していない時代で、アメリカからの特効薬で高価なストレプトマイシン、ヒドラジドや、胸に五、六㌢の長い針を刺し空気を入れる気胸療法など、貧しい農家の経済を圧迫したことはいうまでもなく、畑と山林を切り売りし、治療費に充てられたようです。その間、若気の

至りといおうか、情熱のほとばしりといおうか、事務員M子、看護婦A子、K子との恋の遍歴は、青春の一ページであったと思う。

入院中に、中（秀）、中（義）、守谷、豊泉、東の諸兄が見舞いに来てくれ、生きる希望を与えてくれたが、あんなに嬉しかったことは、生涯そうあるものではない。

入院生活五年余り、その間父と兄を亡くし、精神的疲労と経済的理由で、川高復学も大学進学も断念するしかなかった。しかし今振り返ると、囲碁の世界でいう大きな劫のようなもので、腹を括って打ち抜いてしまえばよかった、と思いましたが、後の祭りでした。

病弱な私の必須科目の健康管理は、前記の看護婦K子が今も愚妻として側にいてくれるが、口やかましいことこの上なしだ。昭和六十年、新所沢より現在の仏子ニュータウンへ越してきて間もなく、飯能より加藤（博）君が奇遇にも斜向かいへ転居して来ました。それ以来、ゴルフに囲碁に良きライバルとしてお付き合い願っている。川中二〇会に入会できたのも、いうまでもなく彼の尽力によるものである。今ではゴルフを通して大勢の仲間が出来、スコアよりも五十年ぶりの友情を深める方に力を入れている次第である。

同窓諸兄の健康第一を祈り、私は第二の青春を後悔しないよう歩みたいと考えております。

豆事典

校章入り表札

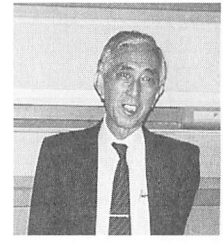
川越市内を歩いていると、川中の校章のついたやや小振りの表札が目についた。市外の人はどうだったかは忘れたが、当時は表札を出すこと自体、何だか大人びたことであり、それに校章が入っていると晴れがましく、責任感さえ感じたことだろう。

お説教

教室でちょっとでもガヤガヤやっていると上級生が「黙想ォーッ」と怒鳴りながら入ってきてお説教。時にはビンタも食った。本当は優しい人なのにこういう時の上級生は恐ろしかった。あとで思えば卒業すれば兵隊だもの、あんなことでもしていなければ遣り切れなかったんだろうと同情さえ感じてしまうのだが……。

私の略歴

臼井　龍



戦後のドサクサの十年余りの川中時代、すっかり忘れて居りましたが、『おーい、楠の木よ』を読ませていただき、非常になつかしく思いました。

川越中学在学期間、昭和二十年五月より二十一年九月まで、以後は都立五中、小石川高校、千葉大学理学部、群馬大学医学部。卒業後、第二外科在局八年、国立高崎病院外科医長二十二年。平成二年より、医療法人昭和病院院長として現在に至る。

家族は妻、一男二女、皆結婚して孫四人。趣味はゴルフ、囲碁、麻雀いずれも中級。

大島渚（＊映画監督）・小山明子（＊女優）妹夫妻と青柳安彦君との関係で、昨年新たに発掘されました。川越中学には終戦をはさんで一年五ヶ月の在籍、しかも卒業生ではありませんでしたので、『楠の木』の会員の資格があると思ってはいませんでした。昭和二十年四月に、東京本郷で戦災に遭い、鶴瀬の遠い親戚を頼って、やっと生きていた時代でした。それにもう五十年以上経ち記憶も薄れ、恩師も漢文の佐藤先生、英語の仲先生と数人しか思い出せません。

鶴瀬、上福岡から通学生として、登校・下校を毎日共にしていましたが、名前が出てきません。是非お会いして昔話をしたいものです。

昭和二十二年に母を胃癌で亡くし、横浜に転居、転校しました。母の死に直面し、医学の道に進みました。昭和四十二年乳癌のテーマで博士号を取得し、四十三年より国立高崎病院外科医長、大学の非常勤講師兼任で二十二年を過ごし、平成二年に現病院に院長として迎えられ、現在に至っています。外科、内科、整形外科、皮膚科、麻酔科、歯科で百七十床の中小病院です。まだ手術までして頑張っています。

この度は青柳君よりお手紙をいただき、川中時代がとても懐かしくなりました。集まる会がありましたら、是非参加させていただきたいと思います。

注…（＊）は編集室記入

お守り

鈴木徹也

「キャップ、行きますか。」

ささやくような声で言う中年のハイヤーの運転手に、「うん。」と、これも小声で答えながら、目をやる時計は、もう午前二時半を廻っていた。

場所は、成田市のとある旅館の一室。

その頃、「成田空港」建設は、もう着工予定日ギリギリで、連日反対派支援の学生と警官隊が死闘を繰り広げていた。マスコミ各社は北総台地に大取材陣を投入したが、激しい〝戦闘〟取材にケガ人が続出。当時、社会部記者として警視庁記者クラブのキャップ（キャプテンから出た新聞隠語、責任者）を務め、毎週のように〝成田通い〟をして

いた私は、「苦しいときの神頼み」とばかりに〝丑の刻参り〟に出かける羽目に相成った。

成田信仰をしている訳でもなく、神や仏に最も縁の薄いマスコミ屋。ただ亡くなった母親がやたら信仰深くて、幼い頃から神社やお寺に頭を下げる習慣が付いていたというだけの不信心者が、いつもの伝で儀礼的に頭を下げに行ったというのが、正直なところ。

しかし、何回目かの取材の時、仕事に追われて〝丑の刻参り〟を失礼した途端に、ウチのカメラマンが大ケガをした。余りのことに恐れおののいて、以後欠かさず〝丑の刻参り〟に出かけたせいか、バッタバッタとケガ人が出る他社を尻目に、我が社だけはその後一人のケガ人もなく、五十回以上も足を運んだ成田闘争取材も何とか終了する。空港開港後は成田に行く機会もなく、お礼参りもしないうちに、いつしか歳月が流れて、定年を迎えることになるのだが……。

相変わらずの不信心者。「お札」を貰う訳でもなく、護摩を焚いて貰うでもなく、ただ真夜中に頭を下げに行くだけの、あの〝丑の刻参り〟の意味を知ろうともしないうちに、成田闘争から数年後、突如ヨーロッパ勤務の話が持ち上がる。そして忙しさにかまけて、十五年も（社の）健康診断をサボッた「天罰」か（マスコミの健康管理なんて、当時はその程度だったのです）思いがけない検査結果が出て、進行が早いからと即日入院。三日目に胃袋とオサラバ。長年の不摂生と大酒食らったムクイで、ガタガタになった体は術後の傷口がふさがらず、その後一ヶ月以上病院暮らしを余儀なくされる始末。

ヨーロッパ赴任の夢も消えて、呆然とする病床で、しかし、「天啓」のように脳裏を横切ったのは、あの時の〝丑の刻参り〟の意味だった。

あのまま外地へ行っていたら、間違いなくオダブツになっていただろう。だとしたら、こういう展開も「何か目に

見えない」もの、〝お守り〟とか〝加護〟とかいうものじゃなかったか。そんな言葉が違和感を持つのだったら〝摂理〟とか〝機縁〟とか〝偶然〟と呼んでくれてもいい。神か仏か知らないが、あるいは老子の言う「超自然の絶対者」でもいい、人間には〝そういうもの〟から、何か〝お守り〟みたいなものが生まれながらに、何枚か割り当てられていて、いつも陽の当たるべく生まれた奴には少なく、もうどうしようもなくドジで人の世を生き難く過ごす奴には、多少枚数が多くなっているのじゃなかろうか……と。

それまでの節目、節目の我が身を振り返ってみると、不思議に際どい状況を切り抜けてきているみたい。戦争中、空襲で火に囲まれて辛うじて逃げ切ったり、艦載機の機銃掃射で九死に一生を得た中学一年の時も。意地とヤセガマンを張り通した社会部記者が、いつも上司ともめながら何とか定年を迎えられたのも……。そして、川高を卒業してほぼ半世紀ぶりに、皆さん方の前に老醜をさらすことになったのも……。

家庭の事情で、川高を卒業して転々と棲家を替えたのと、無茶苦茶な仕事のお陰で、一度も学校からの手紙を貰ったことがなく、同窓会とは全く縁無し。戦災で廃校になった小学校は当然として、六回も転々とした旧制中学校、更には大学からも一度も通知がなく、大学の名簿にも「消息不明」となっているほどだから仕方ないにしても、いささか度が過ぎるというものだろう。

敬愛する木島平次郎先生と佐藤徳四郎先生に、卒業後、一度ご挨拶をと思いながらそれも果たせず、お二方が幽明境を異にされたのも知らずにいた不肖の弟子の悪念さを、今更嘆いてみても詮方ない仕儀……。そういえば（民放最長記録の）警視庁時代、川越近くの殺人（ころし）（?）の取材に出かけたことがあり、懐かしの初雁城址に足を向けたら、あの古雅な木造三階建ての校舎が鉄筋コンクリートの安アパートのような（失礼っ）校舎に変わっていたのを知って一驚したのを、かすかに覚えているけれど……。

そんな私が思いがけず、再び川高と縁を持つことになったイキサツはこうである……。私のドラ息子とドラ娘の通う墨東の一小学校に、教頭として、同窓の浦部俊久君が着任された。その頃、誰もなり手のないPTAの副会長に嫌々押された私のカカア（嬶）と彼が仕事でお近づきになり、それから大分たってから、彼と私が……同窓と判った時の二人の驚きをご想像願いたい。まして私と同じクラスで、私のことを覚えていると言われるのだが、申し訳ないが私には全く記憶がない。同じクラスではわずか一人、中沢益次郎君だけ覚えていた。中沢君は本物の秀才で、早くに大人の風格があり、いつも穏やかな笑顔を絶やさなかった。もっとも時には、嫌な物理のN先生に喰ってかかっている私を、いささかの皮肉をこめた微笑で見ていたこともあったけど。（そのN先生も、もう鬼籍に入られたのだろうか。若気の至りで、先生ごめんなさい。）とにもかくにも浦部君のお骨折りで、川高時代に〝ワープ〟出来たのは夢のような気がする。

定年と同時に三流大学の教師になり、あろうことかフランス語を教える羽目になったのも、やはり「お守り」のせいなのか……。でも、もう「お守り」の割当て枚数も尽きたみたいだ。後は静かにローソクが燃え尽きるのを待つだけだろう。

まだ「お守り」の残りが沢山ある同窓各位の弥栄を祈って、拙い思い出噺に幕を引かせていただこう。

校歌の歌いかた、歌われかた

——官製校歌か、正調・川越節か……

青柳安彦

私たちの歌っている川高校歌が譜面と違っているということに気づいたのは、九十七年春の顔振峠コンサートの合奏練習の時だった。私たちの同窓会でハーモニカで校歌の伴奏を受け持っている松岡と二人で、私の友人でポーランドのチェリスト、マルチン・パビフ君の家で合奏練習をやった折、せっかくの機会だから、オープニングにチェロと尺八とハーモニカで校歌をやろうという私たちの提案を、マルチンが快く受けてくれ時だ。

私はマルチンに『おーい、楠の木よ』から採った譜面のコピーを渡した。このコピーは平成元年の同窓会名簿から採ったもので、いわば公式楽譜である。マルチンはグダニスクの音大を出てキルツェ・フィルハーモニーのコンサート・マスターを務めたほどの人だ。初めて見た譜面を弾くなど、易々たるものだ。松岡がいつも通りに吹く。出だしはウマクいった。ところが「教えの庭」のところで、マルチンが先に飛び出してしまう。松岡は「川高の校歌をオレが間違うはずはない。」と、自信満々に吹いていたが、譜面を見ずに吹いているため事態が飲み込めず、ハーモニカをくわえたまま、目を白黒させて立ち往生。……それで気がついたというわけだ。

校歌というものは現役の生徒の歌いかた、現存するOBの歌いかたをもって正しい歌いかたと考えるべきものだろう。もちろん、この二つは一致していることが望ましい。しかし川高の場合は、それがちょっと違っている。いま、私の耳の中には複数の歌いかたが残っている。

①私たちが在学中歌っていた歌いかた。

②五月顔振峠コンサートの帰りに本校の同窓会総会でチェロの伴奏でOBと一緒に歌った歌いかた。

③数年前、初雁球場のスタンドで聴いた応援団の歌いかた。

④今年、朝霞球場で聴いた応援団の歌いかた。

⑤『おーい、楠の木よ』に使用した公式の譜面による歌いかた。(同窓会名簿にも掲載されている)

それらの、どこが違うのだろうか？

①と②は基本的には同じだった。ただ、②の場合、私たちが最初に二コーラスを私たちの歌いかたで演奏し、その伴奏で三コーラス目を合唱して頂いたので、私たちの歌いかたに引っ張られているかも知れない。私たちの歌いかたは「川越に」をややリタルタンド（次第に遅く）気味に十分引っ張って歌い、「教えの庭」のピョンコ節（ターンタ、ターンタ、と跳ねるようなリズム。日本人の好むリズムとして、明治の西洋音楽導入期に盛んに使われた。例、「箱根八里」「鉄道唱歌」など）の部分はアウフタク（Auf Takt＝校歌でいえば四拍子の第四拍から始まる）でなく次の小節のアタマから入り、しかも、少し加速して一種の緊張感を持って歌っていた。そしてピョンコ終わり部分の「学び舎は……」も譜面よりは一拍余計に取って、思い入れタップリに延ばし「秩父の嶺」に入るのである。我が三期の校歌シンガー（斉藤）恒さんの歌いかたではここを思いっきり引っ張り、ひとつの見せ場にさえしている。

考えてみると、私たちは校歌を譜面では教わっていない。譜面の読み方そのものをロクに教わっていないのだ。専門の音楽教師が来たのは高三の頃だったが、男子高校に初めての女性教師で、校歌の勉強どころではなかったように覚えている。校歌は知らないうちに自然に覚えたか、あるいは「応援歌練習」の一部として講堂や玄関前の広場で先輩からの口伝で教わった。いずれにしても譜面はヌキだった。五月の同窓会の総会には私たちよりも、もっと先輩の方もおられたが、先輩方もやっぱり譜面ではなく、代々の口伝で歌っておられたのだろう。ところが、その歌いかたが実は公式の譜面や現在の応援団の歌いかたとは違っているのである。

③の初雁球場は数年前、菅間に誘われて母校の野球の応援に行った時のことだ。これは現代の現役の歌いかたというわけだから、基本的には④の朝霞球場と同じかも知れない。しかし、初雁の時はピョンコ節が加速されておらず、妙にかったるかったことだけが印象に残っている。私たちより現代っ子である彼等が意外にノンビリやっているのに

気を取られて「教えの」の入りがアウフタクだったかどうだったかは記憶にない。ともかくちょっと間延びした、迫力のない演奏だと感じた。しかし、その時はまだ、譜面に照合してみようなどとは思わなかった。

④の朝霞球場で聴いた校歌もピョンコは遅かった。野球の応援なんだし、そこの部分はもっと早めてくれないかな、という印象は初雁のときと同じだった。しかしこんどはこちらが注意する気持ちがあったからか、ピョンコの立ち上がりはアウフタクになっているのが確認できた。つまり、「オッシ・エッノ・ニッワ・ノォ」の部分で私たちは「オシ」、「ニワ」にアクセントを置くのだが、彼等は譜面通りに「エノ」、「ノォ」にアクセントを置いているのだ。しかも、ピョンコの部分だけでいえば、このほうが、はるかに現代的に聴こえる。

ただ、この歌いかたでは「川越に」のあと間髪を入れずに「オシエノ」に入らなければならない。我々には「ツマズク」感じになり「もう一拍、待ってくれ」みたいに感じる。マルチンと松岡が合わなかったのもここのところだった。その時は、私たちはどうしてもツマズクのでマルチンに「譜面ではなく、伝統的な歌いかたでやってくれ。」と頼んで、峠のコンサートでも本校での同窓会でもそれでやってもらい、少なくとも三期やOBにはそれで通った。

しかし朝霞で聴いた限りでは、若い応援団諸君はツマズカなかった。また私たちの歌いかたでは「秩父の嶺の」に入る時、アタマを一拍待った分だけのシワヨセが来る。しかし朝霞ではその辺もごく自然にこなしていた。今の高校生は、譜面など平気で読んでしまう。だから譜面の指示通り、迷わず、平気でやってしまうのだろう。

⑤の公式譜面は、多分、作曲者の原譜を写し写しして伝えられたものか、あるいは途中で譜面に写し取ったものだろう。その段階で小節数を整えたこともあるかも知れないが、まア、それなりに正確な形で写されたものと考えてよい。小節数は整っており、「川越に」のところにはリタルタンドとかその他の速度変化の指定はないし、「オシエノ」のピョンコも、早く歌えとは指定していない。そのまま歌うと④の朝霞のが一番近いのかも知れない。そうすると、

朝霞で聴いた歌いかた、つまり「オシエノ」で私たちをツマズかせ、ピョンコを加速もせず、「秩父の嶺」にスグ入る、あの歌いかたが作曲者の描いたイメージには最も近いという可能性も十分ある。

私たちにとって校歌がもっとも自分のものになるのは同窓会の席上だが、現役の人たちにとっては入学式か、野球応援の時ではないだろうか。とくに卒業してから数十年後まで覚えているのは、スタンドでの校歌だ。これは多分スポーツ現場特有の高揚した気分と、それ以上に他校の人たちの前で「オレたちの歌」として歌ったことによる仲間の連帯感から来るのだろう。菅間と久しぶりに初雁球場に行った時にそれを実感した。この時は、選手は知らない人ばかりだし、ユニフォームもどこか変わっている。スタンドでは、我々の時代にはなかったブラスバンドやオケン？から来援の女子学生の黄色い声も交えて、私の知らない応援歌が鳴っていた。なんだか他人の学校を応援に来たみたいだった。選手がどこかのラグビー・チームかなんかで見たのか、ベンチの前に並んで両手を広げ、片足を上げてのけぞるパフォーマンスも何やら相手をバカにしているみたいだったし、何よりもその格好が敵弾に当たった兵士みたいで気に食わなかった。しかし、応援団が「私たちの」校歌を歌いはじめた時に、何かがひとつになった。彼等も「私たち、OBの」校歌を「オレたち、現役の」校歌として歌っているのだ。歌いかたに若干の違いはあったが、その瞬間に私たちはあるものを共有する仲間なのだという実感が持てた。校歌の存在価値はこれだと思った。

平成十一年、川高は百周年を迎える。百年間、絶えず次代を担う若者を世の中に送り続けたということは素晴らしいことである。それが川越城趾の地霊に守られて続いたことも誇るに足ることではある。といっても、目に見える学校はすっかり変わってしまった。先生や生徒が代わるのは仕方ないとしても、そこに流れる「教育理念」「校風」は時代とともに、とくに戦前、戦後でガラリと変わった。古い学校がよく自慢する「伝統」だって今の川高に百年続いた伝統なんてあるだろうか。年中行事も変わり、校門も、校舎も、校庭も付属物も変わり、それどころか川中から川高

へと名前が変わって、生徒の年齢も変わり、校章も変わり、帽子の白線の数も変わってしまった。目に見えるもので考える限り、いったい何が百年続いたんだろう、という気もしなくはない。

しかし、そう考えて見たとき楠の木と校歌に気がついた。百年貫徹とはいえないが、古くからあった母校のアイデンティティは今やこの二つしかないといってよい。しかも、楠の木には自然の寿命というものがあり、やがて枯れて行くものだとすれば、残るのは校歌しかないのだ。

つい先だっての新聞に、京都のある有名大学が新しい校歌を募集したところ、「教え」とか「学ぶ」という強制型や「伝統」「歴史」を謳歌して「新しい」という主旨にそぐわないもの、あるいは土地柄、付近の神社仏閣を歌い込んだために、特定の宗教が邪魔になるというような作品が多く、とうとう諦めたという記事が載っていた。

そのことについて、「そんなことより、もう校歌の時代ではないのだ。」という声も聞いた。確かに、校歌に限らず、社歌とか団体の歌には何となく時代にそぐわないものを感じるのも事実だ。とくに、古い校歌は難解なもの、観念的なもの、あるいは当時の教育理念への迎合の産物で、今の時代には通用しないものも多い。

しかし、校歌を思い出としてではなく、現役の生徒として歌っていた頃は、その人の人生において最も輝かしい時であり、懐かしい時期ではないだろうか。だから、校歌はみんなの心のかなりよい場所に住みついている。歌い合い、歌い継がれるほどの、よい校歌を持った学校は幸せだ。それにもし、ほんとうに校歌の時代ではなくなって、これ以上、新しい、よい校歌が出て来ないとすれば、昔作られて、今なお歌い継がれている校歌はその学校だけに残された貴重な文化遺産ということができる。その意味からも大切にしたほうがよい。安易な改作、改定はしないほうがよいと思う。毎年、テレビの甲子園でいろんな高校の校歌を聴かせてもらうが、川高の校歌ほど音楽的に格調を持った校歌はそうザラにはないと思うのは、あながち身びいきばかりでもないと思う。川高の校歌をテレビで全国の人に聴か

せてあげたいものだ。（野球部。頼むゼ！）

校歌の詩的価値や音楽的価値は時代時代によって評価も変わって当然だが、幸いなことに川高の校歌の歌詞は分かりやすい。もう一つのシンボルである楠の木が歌い込まれていないことは残念だし、校風が三芳野神社の梅と香ったりすること、二番の「セッシの友誼」あたりが気にすれば気にならないでもないが、詩文はさほど難解でもないし、時代に迎合の跡もみない。しかも作られた時代の美意識もかなりハッキリしている。もっとも、楠の木が歌われていないのは、校歌ができた頃には楠の木がなかったか、あるいはまだ、シンボルといえるほどの大木になっていなかったのかも知れないが。

メロディも、前記のように多少歌いかたが変わった部分もあるが、明治四十二年に作曲されたこの曲が、改めて味わってみると、意外に格調が高いことに気がつく。作曲者の内田粂太郎という人がどういう音楽家であったかは、非学の私にはわからないが、おそらく当時の県立校の校歌は県か文部省の斡旋で、エッケルトとかそのへんの流れを汲む外人作曲家、あるいはその門下生といった、西洋音楽を勉強した人に依頼されたものだったろう。もしかすると滝廉太郎などと同門だったりするのかも知れない。このメロディの出だしの日本的な美しさは、「荒城の月」に匹敵するものだ。しかし、よく聴くと意外にドイツ的であり、西洋音楽的にもレベルが高い。そして曲中の「教えの庭」のところにいわゆるピョンコ節を取り入れ、当時としては新しい和洋合体の試みがなされ、それがまた現在も曲のアクセントとして生きている。まさに「大和心に西の才」というべきか。

ところで、もし私たちの歌いかた通りに譜面を書くと、今の公式譜面とは少し違ったものになり、どこかに二拍分

を追加しなければならなくなる。あるいはピョンコの前後にフェルマータ(自由に音を延ばせる記号)を置かなければならない。川高校歌ができた明治四十二年に、そんなややこしい作曲をするわけもないから、多分、譜面の読めない当時の先輩がたが、原曲を歌いやすいように歌い替え、それから何十年、口から口へと伝えられて来たものだろう。だとすると、中央お仕着せの校歌に川越民族が無意識のうちに反発し、自分たちの風土に馴染んだ川越民謡に歌い替えたことになるのだろうか。つまり、もしそうだとしたら私たちの歌いかたのほうが川越民族に合った「正調・川越節?」であるということになるのかも知れない。

「譜面帰り」した現在の型か、譜面離脱の「正調・川越節」か、どっちが本当の川高校歌なんだろう。もちろん、校歌はその時代その時代のものだから、今の人が歌いやすいように歌ってかまわないとは思う。無理に統一する必要もないだろう。しかし、ともかくタッタ数十年の差で先輩と後輩が一つの校歌を、同じリズムで唱和できないというのは、先輩、後輩の連帯感の上では何となく淋しいことだ。それに一種の歌い難さとか合わせ難さが、安易な形で「校歌無用論」に発展しても……と心配にもなってしまう。

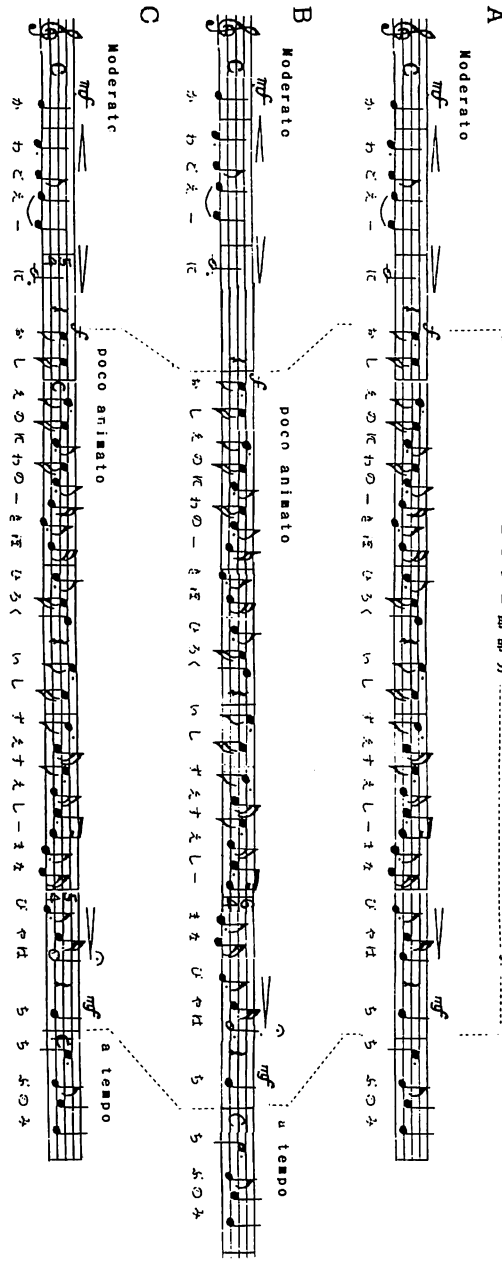
内田先生の書いた肉筆譜面はどこにあるのだろう? 私も十分な追跡をしたわけではないが、在学中にもその存在の話を聞いた記憶はないし、多分もう散逸してしまったのではないだろうか? 一度見てみたいものだ。

本稿に関して、専門部分には内海君の多大な協力を頂きました。

参考 A (官製校歌) 公式楽譜のピョンコ節部分前後。平成元年同窓会名簿より。

B (正調? 川越節) ピョンコ節部分前後の私たちの歌いかた。採譜・内海俊郎/青柳安彦

C AとBの折衷型(これなら両者で合唱できるか?)



豆事典

真相はこうだ

NHKという呼び名はもう少し後になってからだったかもしれないが、NHKラジオで「真相はこうだ」という戦争批判キャンペーン番組があった。GHQの指示によるものだろうが、南京虐殺などという事件を我々はそれまで知らなかった。そういう意味では印象深い番組ではないかと思う。このテーマ音楽が「ジャ、ジャ、ジャ、ジャーン」という、ベートーヴェンの第5番、「運命」の冒頭のテーマだった。我々はまだほんものの音楽に接する前のことだったから、このテーマが番組のために作られたものだと思った人も多かったはずだ。

ある日、校内放送で第5全曲が放送された時、このテーマが繰り返されるたびに牛窪君が

「真相は、こうだ！」といってはみんなを笑わせた。

俳句　遠野・浄土ヶ浜

宮崎敏昭

みちのくや棚田たなだに秋薫る
山かげの畑に豆干す遠野みち
はや暮るる陸奥の痩畑黍を刈る
暮るるとも陸奥に明るき溪紅葉
籾殻(もみ)焼きて陸奥の峡田を農帰る
秋しぐれ遠野のみちの馬つなぎ
ひとりゆく遠野のみちや紅葉風
木の実落つ民話の里の屋敷神
民話きく旅籠の蔵や秋の蝿
裂織や納屋の明るき秋の昼

旅果ての港はるかや秋灯す
岬鼻の霧の中より船帰る
かじき船朝日に向きて出航す
糶(せり)終り秋刀魚片手に蜑(あま)帰る
鱧(はも)釣の竹瓮(たっぺ)に蜑の息しろし
隧道を出て秋光の浜白し
水澄みし陸奥の白砂に貝拾ふ
岸壁に錆びしクレーンや鰯雲
体育の日や海光る練習船
夕紅葉谷渡りゆく一輛車

レクイエム

金島壯行

平成四年、退職を半年後にひかえて、私は十年来の闘病生活をいつも明るく頑張っている妻に、もろもろのねぎらいの意味をこめ旅行に誘った。

深刻な肝臓病を患っていた妻は、ともすれば落ちこむ気分を外出で紛らわしたがっていたので、たいへん喜んだ。

医師は何年も前に、いまのうちに旅行でもと言ってくれていたが、いまのうちの旅行より、なんといっても治すことが先決だった。

十一月十一日、鬼怒川(きぬがわ)を訪れた私たち夫婦は、日光猿軍団の子猿たちの愛嬌いっぱいの演技を満喫し、鬼怒川温泉に泊まった。

翌日、妻が是非行きたいと言うので竜王峡へ向かった。がん患者だってアルプスへ挑戦しているではないかと、私は不安を打ち消そうと自分に言い聞かす。

渓谷への降り口に立った。雑踏する観光客のなか、この急勾配をはたして妻は降りられるだろうか。

妻は大丈夫だと言う。意を決し、私は妻の先になって後ろを振り返りながら手すりにつかまらせて降りて行った。

ぞろぞろ下から戻ってくる熟年団体客の声がする。

「見てよかったよ。見られるのも生きているうちだからな。」

また少し降りると、かなり年配のおばあさんたちが華やかな女の子のグループに囲まれて写真を頼まれている。
「おばあさん、いくつ。」「八十だよ。」「へえっ、元気！」
はしゃぐ若者たちに囲まれ、おばあさんは幸せそうにカメラにおさまった。
竜王峡にまたがる橋に辿りついた。全山錦の渓谷が大きく広がっている。渓谷を見つめる妻の顔は喜びに輝いていた。
「パパ、写真を撮ってもらおう。」と、となりの人に頼み、橋の中央に並んでシャッターを押してもらう。
帰りは上りである。今度は私が後ろになって妻の背中を支えるかっこうで一歩一歩確かめながら登る。前の年の春、妻は難病に追い打ちをかけるように高血圧で倒れ、一時半身不随になった。懸命にリハビリに励み、ちょっと見にはわからぬほどに回復したが、一歩一歩が努力である。「リハビリ、リハビリ。」と唱えながらとうとう登りつめた。
「やったね。」
「やった。歩き通せたわ。きょうはとても調子がいいの。」
妻の言葉に安堵の胸をなでおろすが、目は赤く、気力ではおおい切れぬ疲れが見えた。
よかったのか、悪かったのか。それから三カ月、精一杯明るく生き続けた妻はこの世を去った。あの一年七カ月前の山のいろどりと、妻の満ち足りた表情は、永久に目に焼きついて離れない。
——平成四年、プリンスホテルの同窓会だったと思うが、皆が賑やかに歓談している中、聞いてもらえるかどうか解らなかったが、司会に頼んで文集の提案をさせてもらった。私達の履歴書が欲しいと以前から思っていたからだった。徳門の連中が代表して書いてくれればと、酒席で大沢米吉君に事前に意向を聞いた。彼は酔顔をほころばせ、「いいよ。是非提案してくれよ。」と力づけてくれた。その後、私は提案したままで、妻の病状に一喜一憂の状態で、編集

委員に入れてもらいながら一つの協力もできなかった。紆余曲折はずい分あったと聞き、申し訳なかったと思うが、多くの優秀な友人が貴重な時間をさいて珠玉の文集が出来上がり、増補別冊まで誕生することになった。

編集・校正を引き受けてくれた平岡泰之君が、私が独り身になって編集委員会に出た時、数ある草稿の中で、私が一行足らずで入れた妻の死の間接表現を察し、席を立ち上がって、「金島君、どうも……。」と真剣な顔で弔意を表してくれた温かさも忘れることはできない。彼は人一倍妻を愛し、校正の仕事でも奥さんが一緒にとび回っていたと聞く。今、かの大沢君も編集途中で倒れ、この平岡君も完成した文集を病床でくり返し見ながら没し、人生無常とは思うが、それぞれの最終楽章、どれだけ人のためにしたかが大事かなあと思うと、全く汗顔の至りである。

豆事典

休学

今なら簡単に治るような病気がすぐ大病につながり、長期欠席や、休学につながった。肋膜炎で一級遅れる人は珍しくなかった。今に比べれば医学のレベルも低く、医療設備、医薬なども十分でなかった。その上我々も保健、衛生の知識が乏しく、何よりも体力がなかったのだから無理もないが、勉強の他にもうひとつの大きな敵がいる感じだった。

異装届

戦後服装も自由になり、長髪も自治会と学校のすったもんだの揚げ句に許可になった。しかし履き物は当時かなりの人が下駄ばきだったにも関わらず、禁止が建前で異装届が必要だった。やがて下駄ばきは言わば当然のこととされ、届はどうでも良くなったような気もするが、それでもしばらくの間はキチンと提出させられた。

エジソン・バンド

飛行機の廃材だろうか、ジュラルミン板を折り曲げ放熱面積を大きくしたものをつなげて作った鉢巻き。頭の空冷式冷却器。受験生がこれを頭に巻き、頭を冷やしながら勉強していた。

アンチョコ

教科書にそって資料や解答が書いてある学習書。予習・宿題などが安直にできるのでこういう名前になったのだろう。清水書院のものが人気で、発行者の清水権六の名前から「ゴン六博士」と呼んで盛んに愛用した。

カタヌマの紹介

「浅草法人だより」にカタヌマの紹介が出ています。少し字が小さくなりましたが、全文を転載させて頂きます。

法人会だより

支部を訪ねて ⑩

第17支部

元浅草七軒町会

大病を乗り越える

警官のひと言から飛躍

潟沼支部長

潟沼　稔さん

第十七支部は元浅草七軒町会の区域で、浅草地域では一番西寄りに位置し、清洲橋通りを隔てて田下谷区と向きあっている。

支部長プロフィル

清洲橋通りに建つ木馬マークの㈱カタヌマ本社

効いた自然水健康法

支部長の潟沼稔氏は、家具総合商社㈱カタヌマの社長で、支部長を引き継いでから五年目になる。昭和七年四月生まれだから、ことし六十五歳、経営者として働き盛りだ。顔の張り、色つやも良く健康そのものという印象だが、実は平成二年から四年にかけて、二度目の心筋梗塞と動脈瘤の大病に見舞われ、一年半で十二回も入退院を繰り返したという。「よくそんな大病から回復できましたね」と訊ねたら、こう応えが返ってきた。

「友人に奨められて自然水健康法というのを始めて、四年になります。電子でチャージする自然水製造器で作った水を一日二リットル飲むのです。一度に飲むわけではありません。一日を通じて二リットル飲めば良いのです。これを始めてから心電図がピタッと安定したので、以来一日も欠かさずこの健康法を続けています」という。いまはゴルフにも出かけて、人並み以上に陽焼けし、とてもそんな大病を経験した人には見えない。「友人たちは、〝五年前は見る影もなかったよ〟と冷やかすのですよ」と笑いとばした。

潟沼支部長

片仮名店名のはしり

㈱カタヌマは現在従業員一五〇人を擁し、東京はじめ関東・東北一円をエリアとする和洋家具総合商社である。創業は昭和二十二年、先代の潟沼栄太郎さんが、清洲橋通りを隔てて浅草七軒町と向きあった下谷西町で開店した。戦前栄太郎さんは日本橋の府川漆器店の一番番頭を勤め、家具部門を担当していたことから、戦後家具卸販売の店として独立したものだった。間もなく現在㈱カタヌマ本社のある浅草七軒町に店舗を移した。店の名はカタヌマ商店。片仮名名前の店のはしりだった。潟沼と漢字店名だと「ゆぬま」「がたぬま」と誤読されるので、当時としてはまだ数少い片仮名店名を採用したという。当初個人商店としてスタートしたカタヌマ商店は昭和二十三年に合名会社に、二十八年には株式会社に組織を変更した。

稔社長は、埼玉県飯能市の生まれで、田姓峰岸、立教大学経済学部を卒業後、会社勤めをしているうち、昭和三十二年仲に立つ人があり、男の子のなかった栄太郎さんの養子となった。「会社勤めを始めて一年くらい、商人になろうという気はなかったので、初めはお断りしていたのですが、強引にねばられて養子が決まったのですよ」と照れた。二年後に栄太郎さんが死去した。

現社長の稔氏が社業を引き継いだ昭和三十年代は、日本経済が狂瀾怒涛の成長を遂げた時期であった。昭和三十二年は神武景気、三

浅草 法人会だより
1997 7

特集
◇第31回通常総会ひらく
理事100人体制が発足
◇支部を訪ねて⑩ 第17支部
◇相次いで研修会

法人会だより

草加に流通センター

十六年は岩戸景気に沸いた。㈱カタヌマ商店が㈱カタヌマに商号を変更したのは昭和三一八年だった。和洋家具でもタンス、食器棚といった木製の家庭用家具は業者間では〝ハコもの〟と呼ばれる。これに対してベッドや応接セットは〝アシもの〟といわれる。カタヌマはどちらかというと、得意分野は〝ハコもの〟である。家屋の新築や婚礼が大きなターゲットになる。景気上昇は商機を拡大する。

草加の第二流通センター＝草加には流通センターが一円にある

オンライン網を確立

カタヌマが業績を大きく伸ばすきっかけになったのは「実は蔵前警察の警官のひと言でした」と稔氏が回想する。「昭和三十九年の東京オリンピックの時、店の表の清洲橋通りに駐車禁止の黄色いラインが引かれました。本社の両隣はびっしり建物があり、裏手は高校の塀になっていて、商品の出入りも、人の出入りも表を使うしかありません。そこが駐車禁止では商売ができません。まして家具は商品が大型で、おいそれと出し入れすることができません。そこで蔵前警察署を訪ね、交通係に積み上げてしどろもどろいは何とか大目に見てもらえないか、と相談に行ったのです。その時の交通主任が大変威勢のいい人で《潟沼さん、あんたは家具屋さんだったね。あんたの商売あんな一等地でするのは無理だよ。田んぼの中でやんなさいよ》といわれました。これがヒントになって、昭和四十一年に埼玉県草加市に流通センターを開設することになったのです」という。以後元浅草の社屋はショールームのほか、経理と総務の本社業務部門だけが置かれている。

カタヌマは工場を持たないメーカーである。全国のメーカーから製品を集めて、専門店や百貨店、量販店などに卸す。得意先との繋がりも大切だが、それ以上にメーカーとの連係が欠かせない。そこで全国に拡がる関連メーカーを組織してカタヌマ木馬会を結成した。草加流通センター開設と同じ昭和四十一年のことである。カタヌマは木馬の商標を決め、年に数回、カタヌマ木馬会主催の新作展示会を開いて、メーカーとがっちり共同して営業を推進している。

一方で稔氏は、家具商社の大切な要件は、物流システムの確立にあるとして、日本家具生産の一大基地である福岡県大川市と北海道旭川市に流通センターを設置、福井にもデポを持ち、仕入れ商品は、各流通センター[illegible]え、草加市の流通センターに直結、草加市流通センターから取引先に届ける体制を整備していった。

また情報通信システムの目まぐるしい進歩に対応して、コンピューター利用に取り組み、取引先と仕入先メーカーとの間にオンライン網の確立に努めてきた。

こうしてカタヌマは流通革命を早くから企業の柱に取り入れてきた。昭和四十年代に入って、日本経済はいざなぎ景気と呼ばれた長期の好況を現出した。家具の景気は一般の景気からやや遅れて波がやって来る。昭和五十年代からカタヌマの業績は五年ごとに倍増する見事な成長を見せた。昭和五十九年には八階建ての現本社新社屋を完成、家具卸業から家具総合商社へ飛躍をとげた。カタヌマ商店の創業者は先代の栄太郎さんであったが、家具総合商社㈱カタヌマの創業者は稔氏といって良いかも知れない。

平成不況に立ち向かう

しかし平成に入って、バブルの崩壊とともに大きな不況の波がやって来た。景気が悪くなると、この業界は打撃が深刻だ。食い物や[illegible]点家具類は[illegible]ます手[illegible]れる。婚礼家具も控え目な地味なものになる。

この長期不況を乗り超えるために稔氏は、さまざまな対策に取り組んだ。まず平成二年にオフィスや店舗、住宅の多様な要請に対応して、内装から家具調度に至るまで、全体を統一した考え方で需要に応えるコントラクト事業に対応するため子会社㈱ケーディックを設立した。

一方、円高時代の到来で、企業の海外進出が盛んだ。家具メーカーも例外ではない。カタヌマもタイに協力工場を持ち、アセアン諸国での生産拠点づくりを進めている。家具の流通も、次第にインターナショナルに向かう傾向が強まっている。海外で生産された家具は、全長四〇フィートもある巨大なコンテナに詰められて、海上輸送されて来る。長距離の国内輸送よりかえって輸送費が安くつくという。

こうしたさまざまな不況対策への取り組みが、稔氏の体に大きな負担をかけたに違いない。五年前の大病は、この容易ならぬ不況に身体を張って立ち向かった結果かも知れない。いま見事に大病を克服した稔社長に、なお続く不況の大波は厳しい。大病克服に奇跡的な効能を見せた自然水健康法のような妙手は、不況対策にはまだ見つかっていない。健康に自信を取り戻した稔社長は、あせらず、気長に、この巨大な不況の波に立ち向かう。

第五部「樟籟篇」——最近の活動から

*「樟籟」は造語です。若さの熱気に満ちた「青風」に対し、爽やかな松風の音を表す「松籟」（しょうらい）をイメージし、松を楠に置き換えました。楠の木が私達の活動の風に騒ぎ、葉音で応援してくれるの意です。楠を樟で表して同じ「しょうらい」と読めば、明るい「将来」にも通じることになります。

川中二〇会第百回記念大会

山田　和宏

早いもので、昭和四十七年六月一日、第一回ゴルフ大会が川越初雁カントリークラブで開催されてから、すでに二十五年になる。その間、川越カントリークラブ・武蔵野ゴルフクラブなどで、旧友諸君と楽しい時間を過ごさせていただいた。そして、平成六年三月七日の第九十回大会のパーティの席上で、

「第百回は盛大にやりたいな。」

「一泊でやろうよ。」

などの声が上がった。その時、生来の出しゃばり心が頭をもたげ、

「ぜひ盛大にやろうよ、私が世話人をやっても良いよ。」

と言ってしまった。

さてそれからは、どのような形で記念大会を行うか、頭から離れなくなってしまった。全く自分の愚かさを思い知ったのである。幸いにも、世話人をお願いした佐々木、青木、浅見、加藤（健）、新井（治）、中村、松村、宮崎、岸の諸君が快く応援してくれました。

そして、青木オーナーの経営する三菱カープラザ狭山の会議室を借りて、七・八回、準備会を行い、それぞれの分担を定め、ゴルフ場、宿泊旅館等を検討した。

その結果、ゴルフ場は青木君の紹介で、伊香保ゴルフクラブ岡崎城コースに、旅館は小澤君の紹介で、「石亭」で有名な伊香保温泉の「さつき亭」に決まった。（小澤君には、世話人一同本当にお世話になり、感謝に堪えませ

ん。）

さらに記念大会なので、今まで不参加の旧友諸君にも広く声をかけて是非参加をしてもらうため、今まで通りのハンディキャップ戦とは別に、初参加者も含めた新ペリヤ戦の二通りを行うことにした。そのため入賞賞品なども二通り用意することになり、その経費の捻出などもいろいろ検討した次第である。また、ゴルフはやらないが会の主旨に賛同し、この会を祝って下さり、パーティだけに参加される方々もいるのではと、同期生全員に呼びかけることにした。また記念品をあれこれ考えたが、最終的にはそれぞれの名前入りのタグにすることになった。これの作成については、松村はじめ、青柳、松岡の諸君が大変な時間と知恵を絞ってくれました。

また初めての一泊でのゴルフ大会ということで、費用は出来るだけ安くをモットーに交渉したことは、参加諸君はご存知のはずである。

平成八年九月六日、快晴の中、若々しい？旧友が元気にプレーを行い（大会結果等については別表を参照されたい）、その夜は盛大に祝宴が開かれた。特筆すべきは、はるばる北海道から田村君が初参加してくれたこと。そして宴会では、正統の「江戸カッポレ」を見せてくれたが、なかなかの圧巻であったことを記しておきたい。

微力な私に、世話人はじめ、参加された方々のご協力があり、無事、第百回記念大会が盛会裏に終了出来たことを心からお礼申し上げます。さらに個人的になりますが、最多出場（単なるゴルフ狂？）として表彰状（別記）及び記念品までいただき、感謝に堪えません。

さらに、今大会に多数の方々より過分なるご芳志をいただき、本当にありがたく、改めてお礼申し上げます。

この川中二〇会が末永く百五十回、そして二百回と続き、旧友が元気な姿で参加下さるよう、切に希望いたします。最後になりましたが、本会が長く続いたことは新井（治）君のお力添えが大きかったと、会員総てが思っており、心より感謝する次第です。

（追記）

思えば第一回川中二〇会の開催の前日、昭和四十七年五月十五日は、沖縄が本土復帰となった日でした。そして今、平成九年五月十五日は本土に復帰してから二十五周年、何か歴史的因縁を感じるが、我々の生きてきた時代の象徴でもあるような気がしてなりません。

川中二〇会　トピックス

①　昭和47年6月1日　第一回コンペ開催

プレイ参加…青木勘輔・稲川義彦・小澤孝志・斉藤　恒・佐々木雄司・西川正則・

堀　陽・松村祐二・丸田邦夫・
（故）水村哲也・宮崎敏昭・山田和宏
の12名であった。

②　一〇回毎の優勝杯取切戦の勝者

第10回　山田和宏　　第20回　（故）水村哲也
30　潟沼　稔　　40　小澤孝志
50　松村祐二　　60　＊
70　深井康弘　　80　青木勘輔
90　加藤　健　　100　小澤孝志
＊第60回は記念大会として団体戦を実施。
加藤　健・小島一雄・斎藤清一・益子弘道チーム
が団体優勝。

③　水村哲也の死

この会の提唱者。第8回迄は水村が役員をしていた初雁カントリーで開催された。以後彼は逝去される迄の8年間に22回出場、高ハンデにも拘らず、毎回上位入賞を果たした。彼の豪快なショットと巧みなアプローチは、今も球友達の脳裏に深く刻まれている。水村の命日は、昭和54（'79）年8月2日である。合掌。

④　松村祐二のホールインワン

第50回大会で、彼は川越CC西コース8番ホールでホールインワンの快挙。この時の取切戦にも快勝した。

⑤　大会スポンサーに感謝

青木勘輔（入間三菱自動車社長）・小澤孝志（狭山人形社長）・新藤邦泰（油新石油社長）は折に触れてコンペに副賞を寄贈。参加者の励みになっている。

青木からホールインワン達成者に、三菱車贈呈の話もあるが、未だこの恩恵に浴した者はいない。松村のホールインワンは、この声明以前の出来事で、達成が早過ぎたので、念の為。

⑥　コース提供に感謝

開催コースはスタート時の8回を除き、新井治雄が要職にある総武都市グループの川越CC・武蔵野CCのお世話になった。コースを提供頂いた回数は実に89回にのぼる。プレイ費についても数々のご配慮を頂いた。当時は、コースをとるのが大変だった。

⑦　国際的なコンペ

第17回コンペは、南米ベネゼラから須永徳明が参加した。彼はマラカイボに四十年以上居住、手広く雑貨商を営んでいる。この時は初参加にも拘らず堂々の準優勝、颯爽と帰国して行った。毎年ベネズエラ・オープンにも出場するシングルプレイヤーだ。

⑧　平成8年9月6日　第一〇〇回コンペ

伊香保ゴルフ倶楽部で賑々しく開催された記念の一〇〇回大会参加者は、わざわざ一杯やりに来た酔狂も含めて総勢38名。

プレイ参加……青木勘・青山幹・浅見茂・新井淙
新井貞・新井治・荒田光・内沼一・宇都野

岡田立・小熊忠・小澤孝・糟谷熊・加藤健
加藤博・金子武・川合敬・岸　智・北崎詔
佐々木・沢田明・新藤邦・田島晃・田村武
中村生・沼田芳・野口八・原島淡・深井康
益子弘・松村祐・宮崎敏・山下文・山田和
吉田景

懇親会参加……加藤康・斉藤恒・松岡章

⑨ 第一〇〇回記念大会スカチン表彰

表彰状に曰く「第一回以来風雨炎天厳寒にめげず、女房の嫌味子供の冷やかしに耐えた努力と友情は会員の範であり、この記録は燦然と頭上に輝く（確かに）」ことを顕彰され、スカチン・山田和宏が最多出場殊勲賞を受賞した。

⑩ 和光市在住者（名を秘す）の独白

一〇〇回開催を聞いた同期随一の粋人、Y・Aは、しばし絶句の後、感想の一句

百回も　やってしまった　ゴルフ〇〇

きっと誉めているんだと思いますよ。

（文責　岡田立彦）

川中二〇会　全記録

記録　斉藤　恒・各回幹事
編集　阿部新一・岡田立彦
監修　松村祐二・山田和宏
制作　岡田立彦・岸　智
平成八（九六）年九月六日

古い大学ノートが三冊ある。昭和四十七年六月一日の書き出しで始まるゴルフコンペの記録簿である。

そのコンペは、斉藤恒、松村祐二、（故）水村哲也の呼び掛けで始まった。

初回、働き盛りの十二名が呼応して出場。爾来、男たちは、己れの健康・社業の盛衰・家庭の調和すら超越して集まり続けた。

今、かつて社会の先端を走って来た仲間たちも、共に白髪を頂く熟年となったが、あいも変わらずニックネームで呼び合いつつプレイに興じ、遂に平成八年九月六日、盛大に一〇〇回開催を迎えた。

コンペ名を「川中二〇（フタマル）会」という。

プライベートコンペが一〇〇回続くのは稀有の例だ。正に《継続は力であり、記録は宝》である。一〇〇回開催を記念して、ドキュメントの数々を一挙公開する。ご笑覧願いたい。

川中20会ゴルフコンペ

歴代優勝者全スコア

延参加者数　1,565名

参加者　68名

回数	開催日	コース	参加者	優勝	NET
1	S47.06.01	初雁	12	山田　和宏	64
2	11.08	〃	12	堀　陽	
3	48.02.15	〃	19	中村　生秀	
4	06.07	〃	8	西川　正則	70
5	09.10	〃	10	益子　弘道	
6	11.28	〃	22	沼田　由造	
7	49.02.21	〃	13	加藤　健	69
8	05.23	〃	14	稲生　義彦	59
9	08.22	川越	17	松村　祐二	71
10	11.14	〃	25	小澤　孝志	73
11	50.02.13	〃	15	山田　和宏	81
12	05.22	〃	16	新井　治雄	74
13	08.20	〃	11	中島　正博	74
14	11.12	〃	20	益子　弘道	75
15	51.02.18	〃	13	新藤　邦泰	78
16	04.21	〃	14	小澤　孝志	80
17	07.15	〃	14	青木　勘輔	73
18	09.16	〃	10	水村　哲也	77
19	11.18	〃	10	森田　重敏	62
20	52.02.03	〃	17	小野　則彦	76
21	05.18	〃	13	石田　照雄	72
22	08.04	〃	14	小野　則彦	70
23	10.06	〃	13	中村　生秀	73
24	12.08	〃	13	山田　和宏	74
25	53.02.23	〃	10	深井　康弘	80
26	04.19	〃	13	丸田　邦夫	69
27	06.07	〃	15	新藤　邦泰	71
28	09.05	〃	15	石田　照男	73
29	11.16	〃	12	潟沼　稔	68
30	54.04.20	〃	14	益子　弘道	73
31	S54.06.14	川越	11	高橋　幸男	76
32	09.06	〃	14	堀　陽	69
33	11.15	〃	10	小島　一雄	74
34	55.04.03	〃	18	北崎　詔彦	81
35	06.12	〃	14	奥田　誠	71
36	08.21	〃	13	森田　重敏	77
37	11.20	〃	13	新藤　邦泰	77
38	56.03.11	〃	7	新井　治雄	81
39	06.03	〃	20	小澤　孝志	72
40	09.09	〃	20	青木　勘輔	78
41	11.13	〃	11	青木　勘輔	79
42	57.02.17	〃	14	小澤　孝志	72
43	05.20	〃	17	糟谷　熊	79
44	09.09	〃	13	青木　勘輔	79
45	11.18	〃	13	山田　和宏	75
46	58.04.20	〃	16	小澤　孝志	77
47	06.02	〃	18	松村　祐二	72
48	09.02	〃	21	新井　貞夫	73
49	11.17	〃	13	新井　貞夫	77
50	59.02.16	〃	12	松村　祐二	79
51	05.17	〃	15	丸田　邦夫	78
52	07.12	〃	16	加藤　健	78
53	10.31	武蔵	11	小澤　孝志	81
54	60.03.06	武蔵野	14	宮崎　敏昭	79
55	05.15	〃	14	宇部野正章	76
56	07.17	〃	19	糟谷　熊	75
57	10.16	川越	14	奥田　誠	86
58	61.04.17	武蔵野	14	高橋　幸男	77
59	07.23	〃	15	斎藤　清一	82
60	10.16	甘楽	14	益子　弘道	78

61	S62.01.22	武蔵野	13	加藤　博	69
62	03.19	〃	9	谷　巌	73
63	05.21	〃	13	深井　康弘	80
64	09.17	〃	9	小熊忠三郎	91
65	11.26	〃	15	沼田　芳造	75
66	63.04.14	〃	16	新井　治雄	73
67	07.12	〃	17	浅見　茂男	81
68	09.29	〃	15	山田　和宏	85
69	12.07	〃	19	原島　淡	66
70	H01.04.06	〃	21	中村　生秀	67
71	06.22	〃	15	谷　巌	62
72	09.28	〃	10	沼田　芳造	71
73	12.14	〃	17	深井　康弘	68
74	02.03.08	〃	15	小島　一雄	77
75	06.07	〃	18	新井　貞夫	66
76	09.12	〃	17	青木　勘輔	68
77	12.18	〃	19	益子　弘道	70
78	03.03.07	〃	20	山田　和弘	78
79	06.17	〃	13	佐々木雄司	70
80	09.12	〃	16	加藤　健	69

81	H03.12.12	武蔵野	19	糟谷　熊	64
82	04.03.12	〃	16	岡田　立彦	74
83	06.11	〃	17	加藤　博	79
84	09.17	〃	20	小澤　孝志	73
85	12.10	〃	12	宮崎　敏昭	76
86	05.03.11	〃	16	斎藤　恒	74
87	06.02	〃	20	斎藤　清一	73
88	09.16	〃	18	原島　淡	75
89	12.08	〃	13	糟谷　熊	68
90	06.03.07	〃	15	加藤　健	74
91	06.06	〃	16	加藤　健	63
92	09.06	川　越	19	深井　康弘	68
93	12.12	武蔵野	17	山田　和宏	68
94	07.03.06	〃	16	小澤　孝志	71
95	06.06	川　越	26	内沼　一雄	72
96	09.05	〃	27	北崎　詔彦	70
97	12.15	〃	25	岡田　立彦	69
98	08.03.04	〃	28	荒田　光男	72
99	06.17	〃	25	佐々木雄司	72
100	09.06	伊香保	35	宇部野正章	68

入賞得点

優勝3点・準優勝2点・第三位1点として計算。

順位	入賞得点	氏　名
GUINNESS	47	山田　和宏
2	33	小澤　孝志
3	32	沼田　芳造
4	31	新井　治雄
5	30	青木　勘輔
6	27	宮崎　敏昭
7	22	加藤　健 深井　康弘
8	17	益子　弘道
9	16	堀　陽
10	15	森田　重敏
次点	14	中村　生秀 松村　祐二

出場回数

順位	出場回数	氏　名
GUINNESS	88	山田　和宏
2	84	加藤　健
3	77	新井　治雄
4	75	中村　生秀
5	74	沼田　芳造
6	68	益子　弘道
7	64	深井　康弘
8	55	奥田　誠
9	54	小島　一雄
10	52	宮崎　敏昭
次点	50	小澤　孝志

ベストスコア

順位	ロースコア	氏　　名
GUIN NESS	76	沼田　芳造
2	78	新井治雄 (故)水村哲也
3	80	山田　和宏
4	81	青木勘輔
5	82	新井　貞夫
6	83	小澤孝志・加藤　博 原島　淡
7	85	岸　　智・堀　　陽

ベストグロス

順位	獲得回数	氏名(　)内はベストスコア
GUIN NESS	24	山田和宏 (80)
2	23	沼田芳造 (76)
3	13	新井治雄 (78)
4	9	(故)水村哲也 (78)
5	8	小澤孝志 (83)
6	5	青木勘輔 (81)
7	4	原島　淡 (83)
8	2	新井貞夫(78) 石田照男(89) 加藤　博(83) 堀　陽(85)
9	1	稲生義彦(91) 岸　智(85) 宮崎敏昭(93)

ニァピン

順位	獲得回数	氏　　名
GUIN NESS	19	山田和宏
2	18	沼田芳造
3	16	新井治雄
4	14	小澤孝志
5	10	青木勘輔
6	9	森田重敏
7	8	益子弘道
8	7	加藤　健・宮崎敏昭
9	6	奥田　誠
10	5	浅見茂・稲生義・小野則 糟谷熊・北崎詔・小島一 深井康・松村祐
次点	4	(故)水村哲・石田照 宇都野・谷巌・原島淡

ドラコン

順位	獲得回数	氏　　名
GUIN NESS	26	山田和宏
2	13	小澤孝志
3	11	高橋幸男
4	10	松村祐二 (故)水村哲也
5	9	新井治雄・加藤　健 沼田芳造
6	7	稲生義彦・岡田立彦 谷　巌・堀　陽

※ホール・イン・ワン　1回　松村祐二（川越 c. c 西 8）

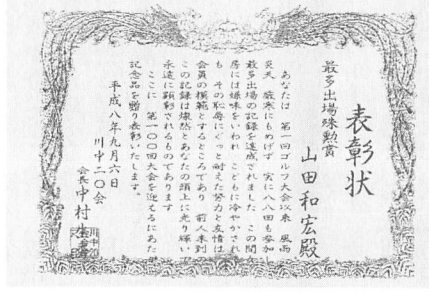
ブービー幹事

順位	幹事回数	氏　　名
GUINNESS	13	中村生秀
2	8	加藤　健
3	7	糟谷　熊・高橋幸男
4	6	新井淙平
5	5	小島一雄・深井康弘
6	4	宇都野正章・奥田誠 沼田芳造・益子弘道
7	2	小野則彦・原島淡 堀　陽・松村祐二 丸田邦夫・丸田謙三 吉田景美・岡田立彦

GUINNESS　7位までの方で83回の大会を支えました。

優勝者とブービー者が次回の幹事を務めるのは、概ねゴルフコンペの世のならいである。高額賞品を手中にした優勝者が、次回のお世話をするのはごく当たり前。気の毒なのはブービー幹事さん。調べているうちにご苦労願った方が意外にも集中していることが判明した。

ご本人の名誉もあろうかとは思うが、ここはあえてこの方々のご尽力で、長寿コンペが継続されたことを顕彰して公表する。


表彰状

最多出場殊勲賞

山田和宏殿

あなたは　第一回ゴルフ大会以来　風雨
災天　盛衰にもめげず　実に八八回も参加
最多出場の記録を達成されました　この間
席には様々をいわれ　ことも今やされ
も　その恥毎にぐっと耐えた努力と友情は
会員の模範とするところであり　前人未到
この記録は燦然とあなたの頭上に光り輝い
永遠に称賛されるものであります
ここに　第一〇〇回大会を迎えるにあた
記念品を贈り表彰いたします。

平成八年九月六日
川中二〇会
会長中村生秀

川高三期生同窓展

大野良三

平成七年四月、上福岡の画材店「アートミレー」に立ち寄ったところ、店主に「うちの画廊で個展をしませんか。」と言われ、「文化の日を中心にやろう。」と決めた。だが、初夏の頃になって、とても新作二十点以上もできないので、加藤（康）君の「顔振峠」に宿泊したとき、グループ展にしようと、青柳、金島両君に応援を頼んだ。そして、小鷹、遠藤、松岡君も加わり、第一回打ち合わせ会を開いた。計画はどんどんふくらんで、私としては考えてもみなかった大きな同窓展に発展してしまった。

第一回展

平成七年十月三十日～十一月四日

上福岡「アートギャラリー」

恩師、鈴木楽山先生の書「以和爲貴」の色紙の下、同期の原君の遺作をはじめ、絵画・写真・俳句・書・切手など、出品者十九名、出品点数二十七点となり、会場に

溢れんばかりであった。また楽山先生のご息女、平山和子さん、鈴木里子さん姉妹、原夫人がご来場になり、加えて、多数の同期生のご支援・ご協力により、最初から盛大な同窓展になった。伊東市に住む加藤（敏）君から、鯵の開き百枚という意外なプレゼントもあった。これは、同窓展開幕にふさわしく、百回も開いてみろ！　ということなのか。「甚五郎」での二次会も四十五名の参加をみて、これまた盛会であった。地元の村山（利）君には、二次会から三次会まで大変お世話になった。この席で、新井（澄）君と岡田（立）君が肩を寄せ合って、楽しそうに歌っていた姿が脳裏を離れない。

さらに、この年度の同窓会幹事長岡田（立）君が進んで協力して下さり、感謝に堪えない。

青柳・松岡・岡田三君のお骨折りで「美術タイムス」を発行し、全員に配布できたことも、楽しい思い出を残して頂いた。

記録といえば、阿部君がビデオカメラで飾り付けから展示、搬出まで、終始撮影して下さったのも頭が下がる思いです。第二回、第三回展も撮ってダビングして頂き、その後も時々楽しんでいる。

第二回展は、同窓会が十月十九日、川越の「プリンスホテル」ということで、岡田・西川両君が加わり、同窓展併催の方向で数回の打ち合わせと画廊探しをした結果、岩沢・奥田君のお骨折りで、「県民ギャラリー」と決定した。岩沢君は搬入を手伝ってくれた。

第二回展

平成八年十月十六日～十月二十二日

県民ギャラリー

「プリンスホテル」と斜向かいで、会場も広く、来場した同期生、関係者も、前年の二倍にもなった。

恩師、鈴木楽山先生、大川明治先生の隷書の大作、大沢史峰先生の書、小泉功先生の著書をはじめ、川中二〇会ゴルフコンペ百回記念のデータパネルを発表（山田・岡田・岸君）、絵画では、サロンデボザール展奨励賞の金島君の「妙義錦秋」、写真では相変わらずプロ級の柴崎・新藤・宇都野君、それに病床から新井（澄）君が二点出品し、出品者二十三名、作品数四十八点となった。

そして、第三回展は青木君の友情と厚意に甘え、同君所有の扇形の芸術的画廊にて青木幹事長の「同窓会」と同時併催することになった。

第三回展

平成九年十月九日～十月十二日

入間三菱自動車販売（株）カープラザ狭山

表に大きな看板を掲げ、二階のホールまで赤いカーペットを敷きつめ、左右を紅白幕で飾り賑々しい雰囲気を作っていただいた。青木・浅見・岸君には、会場設営

から案内状、搬出入まで大変お世話になり感謝しています。

恩師の楽山先生・大沢先生・大川先生・小泉先生、さらに田中正雄先生が川柳を出品して下さった。

「沖縄海洋博、絵画部門」で入選した青柳君の五十号の大作、小鷹君の写実、遠藤君の絵画に対する厳しい眼が印象的である。小沢君の宮内庁賞を受賞した雛人形、加藤（健）君の帆船など立派な大作がみられた。写真では相田君が初出品。昨年出品した新井（澄）君の写真が遺作になってしまったのは、かえすがえすも残念だ。

奥田・松平・遠藤夫人には、花の手入れ、受付等、大変世話になった。

平成十年は十月頃、川越「県民ギャラリー」を第一候補にしている。

加藤君の「鯵の開き」のように百回までも開催したい。

文中、ご支援・ご協力を下さった方々が多く、全員の名前を出せなかったこと、ご容赦下さい。

豆事典

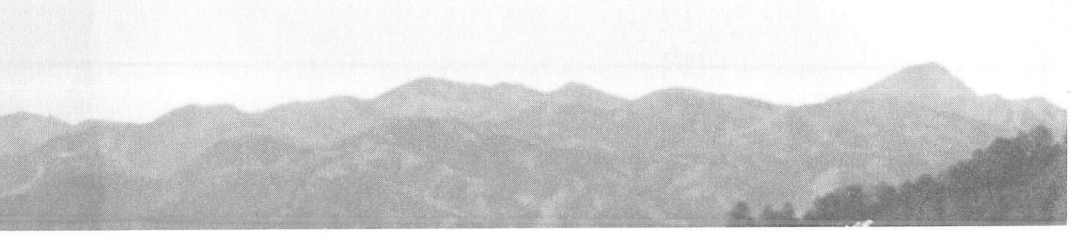
コロッケ

授業中に廊下側の掃き出し口から這い出して、コロッケを買いに行き、教室に戻って授業中に食うなんぞは、英雄的行為をして称えられたもんだ。

たしか、永井の近くにコロッケ屋があり、十時ごろになると良い匂いが井戸端の教室にまで漂って来た。あの教室は廊下がなかったから入口からスルリと逃げるしかなかった。

コロッケもだんだんエスカレートして、店は忘れたが、石川蚕糸や立門前のほうまで買いに行ったりした。そもそも、コロッケよりも「逃げ出す」（エスケープと言った）こと自体に意義があり、そのまま図書館とか映画館とかマージャンのたまり場とか、ひどいのは東京まで映画を見に行くヤツも出始めた。

掃き出し口から頭を出したところを、廊下を歩いて来た先生に見つかり、敢えなくタイホされ、立たされたヤツもいた。



〝おーい、顔振峠よ〟大集合

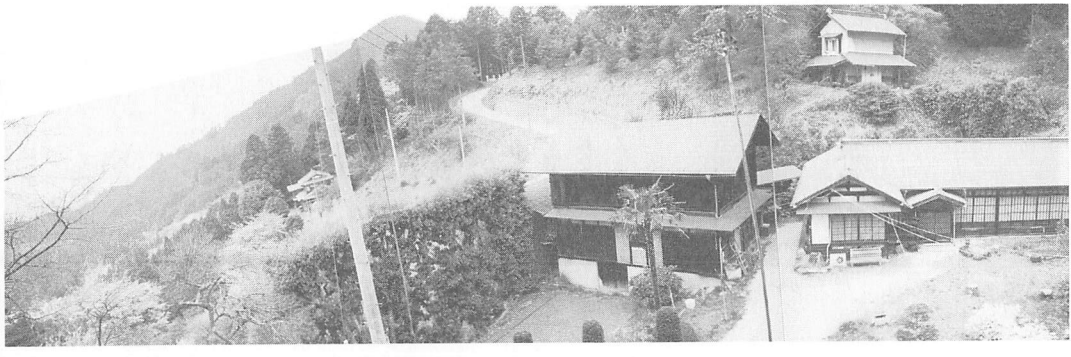
松岡章次

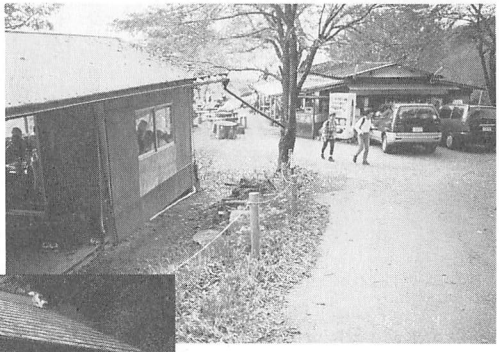
川中に入れたのは運の良いことでしたけれど、同期の中に顔振峠の山主さんが居られたことは尚幸運だった、と言わねばなりません。

互いに旧林故淵を恋うる歳ともなりましたが、遥か雲の彼方に母校の街を望みつつ、登った尾根はアスファルト道路となり、峠の冨士見茶屋にも車で気軽にお蕎麦を食べに行けるほど、奥武蔵の山々も都会化してしまいました。

五十年ぶりに訪れた加藤君の生家が、茶屋の真下の崖のふところに昔のままで建っているのを見て感激してしまいました。川中の明治校舎は今ありませんが、ここには当時と全く変わらない姿で、心のふるさとが残っております。

お許しを得て大勢で毎年のように押し掛けているミニ同窓会〝おーい、顔振峠〟大集合は回を重ねて四回になりましたが、こういう素晴らしい場所に素晴らしい友人の家を持ち、貴重なトポスでの一期一会の出来る川三会は本当に幸せな会だと言わなければなりません。





（編集部　青柳追記）

顔振峠集合は毎年一回、新緑の候に開催され、平均三十人前後の級友が集まります。焚火を囲んでのバーベキューや名物手打そばを楽しみ、夜は加藤康夫君の旧家に一泊し、シュラフに雑魚寝で学生時代の気分に戻り、毎回大いに盛り上がっています。

また、加藤君のご厚意により、富士見茶屋の入口近くに、川三会の顔振峠山荘を持つことができました。八畳ほどの小さなスペースですが、眺望も素晴らしく、冬の晴れた日には窓から富士山も見えます。風呂、炊事の便はありませんが、電気はあり、シュラフも用意してありますので、素泊まりも可能です。川三会のメンバー本人が同行することを条件に、どなたでも気軽に利用できます。

峠へは西武池袋線吾野駅から徒歩一時間の上り。車で来る人は越生側からも上がれますが、日高町から西武線沿いに川を上り、吾野駅の手前で峠道に入ります。よその茶屋の間を通り抜けて奥の左側。駐車場もあります。

（イベント問い合わせ、参加希望者は松岡まで）

武蔵嵐山スリーテンマーチ

大野　良三

『おーい、楠の木よ』発刊のお陰で、徳さんが撮った「嵐山遠足」（昭和二十一年十月十日）の写真を見ることができ、あの当時の思い出がよみがえってきた。

あれから半世紀後の今日、再びあの岩場にたってみようと思い、昭和二十一年の十月十日に因み、毎年十月十日午前十時に武蔵嵐山駅に集合し、「嵐山渓谷」まで歩こうというのが、「武蔵嵐山スリーテンマーチ」である。

平成七年（一九九五年）以来の参加者は次の通りである。

朝久野、石井、岩澤（富）、江原、大野（良）、小熊、小鷹、岡田（立）、糟谷、加藤（健）、金島、清水（良）、西川（博）、松岡（章）、丸田（謙）の諸氏。

平成九年度は、同窓会、同窓展とも狭山市内で行うため、三拍子そろって狭山市稲荷山と決めた。実に「五十年ぶりの稲荷山遠足」である。川中時代の遠足では往路は川越から稲荷山まで歩き、復路は電車に乗った。また、当時の豊岡飯能方面の生徒は、稲荷山駅。入間川駅間を毎日歩いた。

今回は狭山市駅をスタートとし、これまでのメンバーに当時このコースを通学した青柳・赤田・加藤（博）の三名が加わり、十四名となった。五十年前の道路は殆んど無く、入間基地沿いの農道を思い出を語りながら歩いた。ゴールは同窓展会場で恩師や仲間の作品を鑑賞した。

来年度であるが、当時遠足で飯能天覧山に行った仲間がいるようなので、「平成十年十月十日十時十分飯能駅集合、テン覧山」つまり、「シックステンマーチ」の予定である。

むらさき会　解散の記

宮崎　敏昭

川越を離れ、東京に住んだり就職したりした三期生の仲間が、一献傾けながら故郷を語り合う懇親の会「むらさき会」を作ったのは、昭和三十三年であった。当時の我々は、仕事に生活に苦労している者が多かったが、川中・川高で六年間一緒に過ごして、気心の知れた同期の友達と飲み、歌い、話し、最後に全員が腕を組み合って、校歌「むらさき匂う武蔵野の……」を歌って、日ごろの苦労も淋しさも吹き飛ばした。

発会から四十年たった今、同期の大半は第一線を後輩に譲り、時間と生活に余裕が出来てきた。また三期生同窓会のほかに、二〇会（ゴルフ）・れんけい万歩会・美術

展・スリーテンマーチ（ハイキング）・川高野球応援会・顔振峠そばの会・音楽会などなど、毎月どの会かが開かれるようになってきた。

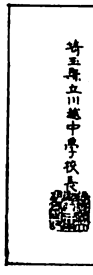
平成八年末、中村会長と幹事とで話し合った結果、「むらさき会」は所期の目的を達成したので、解散することにしました。会に出席していただいた多くの方々に感謝いたし、今後は前記のいずれかの会に参加されることを希望します。

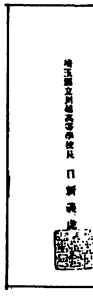
なお、平成九年一月、中村・益子・柳田・山崎・宮崎の五名が、永い間「むらさき会」の幹事長を務めていただいた故大沢米吉さん宅を訪ねて、山崎大和尚と読経し、解散の報告をして「米さん」の諒解を得ました。

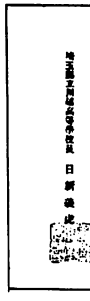
当初から会長を引き受けていただいた中村生秀さん、大変ありがとうございました。お礼としまして貴方の結婚を肴にしましての「むらさき会」記念写真を、口絵のグラビアページに載せさせていただきます。

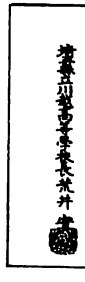
お宝？発見

比留間家でこんなのを見つけました。「向上賞」なんて、あったことも知らない人が多いのではないかと思ったので、無理矢理借りて来ました。砲丸の一位はマンモス？　ライギョ？　東？（青柳）


向上賞
第二學年
比留間和夫
右者本學年間向上顯著なるを認め仍て茲に之を表彰する
昭和十二年三月吉日
埼玉縣立川越中學校長


賞狀
対抗競技
一等　十学年B組　比留間和夫
右は本校第四十七回秋季大運動會に於て顕著の成績を得た仍て茲に之を賞する
昭和十三年十月九日
埼玉縣立川越高等學校長　日野義虎


賞狀
対抗競技
二等　十学年B組　比留間和夫
右は本校第四十七回秋季大運動會に於て顕著の成績を得た仍て茲に之を賞する
昭和十三年十月九日
埼玉縣立川越高等學校長　日野義虎


功勞賞
比留間和夫
本校生徒會協議員として功勞顯著であることを認めて表彰する
昭和二十六年十月六日
埼玉縣立川越高等學校長　荒井

顔振峠冨士見茶屋改築記念

川高三期生手作りコンサート

顔振峠コンサート実行委員会　青柳安彦

平成九年三月、顔振峠冨士見茶屋（加藤康夫君経営）の改築が完成し、営業が再開された。これを聞き付けたお祭り好きが、何かお祝いのコンサートをやろうということになった。

出演者はカントリー・ハーモニカの松岡君・琴古流尺八の武田君、武田君の関係で生田流箏曲の中野恵子さん、私の友人でポーランド・グダニスク音大卒のチェロ奏者マルチン・バビフ君の四人が揃った。曲目は邦楽、カントリー、クラシックとどうにもまとまりが付かない、そこでそれぞれのジャンルからポピュラーなものを二～三曲ずつ持ちより、小学唱歌をクッションにしてまとめることとした。

しかし、せっかくだから合奏で盛り上げようと思っても、マルチン君は五線譜、武田君は邦楽のタテ譜しか読めず、松岡君は（カントリーはそれで良いのだが）譜面が全く読めないという自己流だ。言わば、共通の言語が全くないので、仮に合奏用の譜面があっても譜面を囲んでの合奏はできない事が分かった。

皮肉なことは私は楽器も歌も全然ダメなくせに、五線譜と琴のタテ譜は辛うじて見える。まるで通訳みたいな感じで、いつの間にかまとめ役に回され、参考CDや、琴の曲を五線譜に写すために子供用のキィーボードも買うハメになった。そして、ついでに司会まで押し付けられてしまった。武田君の家で尺八、琴、ハーモニカの選曲と合奏練習。マルチン君の家でハーモニカとチェロ。充分とはいえないが、まァまァの練習はできた。

五月十日土曜日本番。前日の雨がウソみたいに晴れ、山々が良く見えた。お客さんも同期生約三十人、小泉先生他一般の方も結構見えて一安心だった。風で譜面が飛んだり、自分の選んだ曲をトチったりいろいろあったがそれはご愛敬で楽しく、大成功だったと思う。

その晩は二十人ほどが峠に泊まった。マルチン君と彼の友人、ヤブー君も一緒に一泊。夜は旧加藤家の庭でバーベキューを楽しんだ。その後はいつも通りのシュラフでゴロ寝。寝言と鼾の夜間大コンサートだった。

翌日、マルチン、ヤブー、松岡、岡田、奥田、菅間と私の七人で川越まで戻った。そこでヒラメキ、「今日は本校で同窓会の総会をやっているはずだ。そこへ行って、チェロとハーモニカで校歌を演奏しよう」ということになり、電

話でご了解を頂いた。

総会には百人以上のOBが出席しておられた。しかし、校歌をチェロで聴いたことのある人は少なかっただろう。はるかポーランドから来た外国人が埼玉県の高校の校歌を弾いてくれたことを、みんな素直に喜んで、三番は全員起立で唱和してくださった。元大学教授の佐々木先輩が英語で謝辞をくださった。

今回の顔振峠コンサートは例年行事の〝おーい、顔振峠よ〟大集合の第四回として行われた。来年以後も定例になるのか、単発に終わるのかはまだ決まっていない。マルチン君からは「他のガイジンたちに自慢できるような、本当の日本の文化イベントに参加できた」という丁重なお礼状が私のところへ届いている。

プログラム

（第一部……茶屋前　庭園にて）

●オープニング「校歌」……出演者全員

六段の調　琴・尺八（ハーモニカ・冒頭）

千鳥の曲　琴・尺八

月光弄曲　琴・尺八

手まり唄　琴

荒城の月　尺八・ハーモニカ

おぼろ月　尺八・ハーモニカ・琴

花　尺八・ハーモニカ・琴

（第二部……庭園下　旧加藤家にて）

ドボルザーク「家路」　チェロ・ハーモニカ・尺八

バッハ「ブーレ」　チェロ（無伴奏）

サン・サーンス「白鳥」　チェロ（MD伴奏）

ヘンデル「ラールゴ」　チェロ（〃）

ジョプリン「PEACHERINE RAG」　チェロ（〃）

マルチン「ONE WAY BLUES」　チェロ（〃）

●エンディング

テネシー・ワルツ　チェロ（MDハーモニカ）

「サクラ」メドレー　チェロ・ハーモニカ・尺八・琴

「校歌」　来場者全員（合奏・合唱）

れんけい万歩会のこと

宇都野　正章
斎藤　弘行

昭和二十八年頃、蓮馨寺読書会というものがあった。蓮馨寺住職久米原達丈師が先達であったが、この会の主力はわが川高三期生であった。宇都野正章、小熊忠三郎、奥平守男、斎藤弘行、佐々木雄司、長島恒雄、堀　陽、丸田邦夫、桃井良之（五十音順）などである。そのほか、川高の後輩若干と川女出身者六、七名が参加していた。この会は、我々が社会人になってからもしばらくは続いたように記憶する。しかし、高度成長社会の中の会社機構に組み込まれた我々は、このような遊びをしている余裕を失い、いつの間にか、この会は消滅した。その後も一部有志は、夏休みなどに、ＫＤＤの保養所を根拠地にして旅行をしていた。軽井沢の林間で麻雀をし、谷川で冷やしたビールを飲み、寝そべって見上げた空の無限の蒼さは、今も鮮明に記憶にある。

海外や地方に散っていた企業戦士たちも、やがて東京に集結する。うまいものを食う会として、たまに集まりだしたのが四十歳代後半である。中間管理職の情報交換の場であったが、やがて体を酷使して企業に貢献してきた我々の話題の中心は、健康問題になっていった。そのうち、ハイキングをしようということになった。平成二年から春秋、嵐山渓谷・川越七福神・長瀞渓谷・奥武蔵遊歩道・長瀞秋の七草寺・隅田川花見・向島七福神等々を歩いた。やがて時速六キロのスピードで颯爽と歩くのもいれば、末尾を気息奄々と歩くのもいて体力差がはっきりしてきた。しかし、打ち上げパーティーに魅せられてか、落伍者が出たことはない。このごろの常連は宇都野・小熊・斉藤・長島・堀・丸田・青柳安彦・益子弘道・松村祐二などである。

平成七年秋の鎌倉での紅葉狩りのとき、松村からこの会の名前をつけようと提案があった。蓮馨寺読書会が母体なので、「れんけい会」はいかがかと答え、特段の反対もないまま、以後「れんけい万歩会」と名乗ることになった。

平成八年以降の行事を列挙する。

「刺抜き地蔵から鬼子母神」参加者八名、打ち上げ　和啓塾
「鐘撞堂山から円良田湖、玉淀」参加者八名、打ち上げ　鮎飯の京亭
「尾瀬ヶ原」参加者五名、打ち上げ　百万石
「駒ヶ岳・千畳敷カール」参加者五名、深夜のため打ち上げできず
「谷川岳」参加者四名
「明治御苑からＮＨＫ」菅間君の案内で通常見られない

ところを見学、参加者十名、打ち上げはライオン
「サントリービール工場」参加者六名　打ち上げは松
なお、この頃は既述のメンバーのほか、大野良三・金島壯行・柴崎建治・竹沢靖・松岡章次・宮崎敏昭の諸君が随時参加している。

歩くことを中心に企画すると、体力に自信のない者が参加しないという事態が発生してきた。これからは歩くことは二次的に考え、ごく軽いウオーキングによる仲間の交歓の場として、続けていきたいと考えている。

（宇都野）

こういう人たちとともに、鉄道会社が主催するハイキングの会にも参加したことがある。中高年のおじさん、おばさんが列をなして山野を行く。その足の速さに驚かされ、日頃の不摂生を思い知らされたこと幾度であった。常日頃、ゴルフで鍛えた身体がおばさんの足に追いつけないとは。嗚呼(ああ)。

ハイキングのあとの楽しみは、食であり談である。どこかの手頃の店での食事とお酒は適度の疲れの体にすべて吸収される。と同時に、飛び交う冗談と笑いは、一座を盛り上げる。こうして、刻のたつのが忘れられる。その時には、もう五十年も昔の賢（?）童、悪童になっている。乏しいけれど佳き時代に、みんな連れ戻されてしまう。まさに、食って、ふざけて、時間を捨て、みんな仲良しとなる瞬間が、やっと来たのである。お互いの顔にはもはや皺はなく、頭には黒き髪が見られる時なのである。この食・冗・浪・和が、帰らぬ日々を蘇らせるのである。

この会の幹事役は特に誰と決まっていないが、二、三人の人にはお世話になってしまった。特に宇都野に、目的地の設定、希望者に対する連絡などの労をとってもらっている。これは、自然にそうなってしまったので、それがまたこの会のいいところである。しかしあちこちに勧誘する煩わしさは敢えてとらないで、その都度、出かけたくなったときに、声をかけるだけである。参加希望者は大歓迎であり、是非積極的に声をかけていただきたい。

（斎藤）

初雁球場押しかけ応援団

菅　間　昭

平成九年七月十三日、曇り空から時折小雨がパラつく市営朝霞球場。

一塁側川越高校学生応援団席の真上に接したスタンドに、笑い顔を浮かべた三期の仲間たちが、いそいそと姿を見せてくる。

前の年から、「夏の甲子園大会予選で川高の試合が初雁球場であったら、その最初の試合のスタンドにできるだ

け多くの同期生が集まって応援しよう」という、初雁球場「押し掛け」応援団の企画を、柴田、青柳、菅間の三人が発起人となって進めていたのだが、川高の試合が初雁へくる保証はないというので、急遽地理的関係などを考慮して、志木高校との第一回戦応援の召集令状を発したのだった。

野球部出身の浅井、川合、柴田、リューマチで足の痛む柴田を車に乗せてきた松岡、岩沢、柴崎、宇都野、斉藤(弘)、青柳、菅間に数人の同窓生を加えて、早速賑やかな私設応援団が組織された。野球部の活動に密着している谷は、離れたスタンドで後輩たちの試合ぶりに厳しい目を光らせている。

試合が始まると、学生応援団の指揮の下で、立って声援を送ったり、拍手したりと、なかなかに忙しい。現役時代俊敏なプレーで活躍した浅井の適切な技術評を交えて、「ここは絶対にスクイズだ。いや強攻だ。」と、それぞれがベンチをあずかる監督の心境である。

二点を追うゲーム展開の中で、ホームでのアウトセーフの判定をめぐって、相手の全選手がベンチに引き上げるという、やや険悪な事態もあったが、応援のかいあって三対二と逆転勝ちをおさめ、気持ち良く校歌を歌うことができた。

勝利の快感は、地元の柴崎が設営した和光市駅近くの小料理屋に持ち込まれ、久しぶりに見た母校の野球を肴に、大いに盛り上がったのはいうまでもない。

第二回戦は七月十六日同じ朝霞球場で行われ、対戦相手は春日部工業であった。この日は、岡田(立)、比留間、宮崎(敏)といった新手が駆けつけ、応援これつとめたが、途中四番打者のホームランで同点に追いつき、大いに湧いたのがわずかな慰めとなっただけで完敗を喫してしまった。こうして、思いがけない同級生の交歓という収穫はあったが、せっかくの初雁球場「押し掛け」応援団の企ては、今年も日の目を見ずに終わってしまった。

二日間朝霞球場に通って、試合の推移に一喜一憂し、またどんな平凡なプレーでも、一つのアウトを取る度に、「いいぞ、いいぞ。」と喜んで選手名を連呼する、やや迫力に欠ける学生応援団に物足りなさを感じているうちに、思いは、我々が高校三年生だった昭和二十五年夏の県営大宮球場、三塁側スタンドを埋め尽くした川越高校応援団席に飛んでいた。対戦相手は、前の年残念な逆転負けを喫した熊谷高校、甲子園連続出場を目指す優勝候補であった。(「消えたバット」104ページ参照。)

宿敵熊高との試合に向けて、私の知る限りでの最大の学生応援団が繰り出した理由は、皆に推されて応援団長を引き受けた大川が、全校生徒を集めて練習を繰り返し、学校内の応援ムードを高めると同時に、国鉄と交渉して、川越大宮間の運賃を団体扱いで半額に割り引いてもらう

努力をしたからであった。陸上競技八百メートルリレーのメンバーとして全国大会に出場したキャリアを持つ東、前年秋迄野球部マネージャーだった菅間の二人を正副会長とする生徒会も、夏の大会における野球部の応援を年間の重要な行事と見なし、大川応援団長の行動を全面的にバックアップする体制にあった。

勇んで乗り込んだ剣道着姿を、高野連役員の指示で白いシャツ着用に変えさせられはしたが、大川応援団長の一挙一動は、応援歌さながらに、勝利ひらかで止むべきやといった激しいもので、選手を励ますその声は球場狭しと響き渡るものであった。応援はふつう、守備の時はあまり動かないものだが、大川応援団長は、味方の攻守にかかわらず休むことを知らない。校歌、応援歌、三三七拍子と、精力的に続けまくるのだ。

疲れを知らない応援団長を助けて、生徒会長の東、副会長の菅間、更に川崎、朝久野たちが、ベンチの上に立って応援旗を打ち振るのだから、まさに全校挙げての応援だったと言えるだろう。試合の方は、途中小野の二塁打で一点差に追い上げたものの、結局前年の雪辱を果たすことはできなかった。

スタンドにあって最後まで全力を尽くした我々は、試合は負けたが応援は勝ったと高らかに校歌を歌い、胸を張って球場を後にした。実際、あの時の我々の応援は、ブラスバンドも何もなく大変素朴なものであったが、参加した学生の数の大きさと顔触れの多彩だったこと、そして何よりもその精神的な燃焼度の高さからいって、高校野球の応援としては最高のものだったと、五十年たった今でも大いに誇りに思っている。

同期生　俳句大会

宮崎　敏昭

この「増補別冊」編集会議の席上で、「徳さんを偲んで句会を開こう。」という提案が多数の賛同を得ました。早速、平成九年九月四日、川越福祉センターの会議室で句会を開きました。

急な案内でしたが、五十一名、各二句の投句があり、句会にはその中十六名（二名は選句のみ）が出席しました。

総句数一〇二句の名句・迷句の中から二句ずつ選びました。更に、「一位の実」主宰古田種子先生の選もいただきました。

同会場での懇親会は、山崎孝雄君の「徳さん」譲りの漢詩吟詠など和気藹々の中に、今後は「春夏秋冬」句会を開くことを約して解散しました。

この句会の全員の句は、十月の同窓展に出品しました。

（幹事　益子弘道　宮崎敏昭　山崎孝雄）

第一回　句会　平成九年九月四日

棕櫚の舞風吹き抜けて夏終る　益子　弘道
パラソルのうしろ姿や武家屋敷　斎藤　弘行
城あとの学舎すずし楠の風　宮崎　敏昭
初孫の目にも青葉や宮詣　松岡　章次
花まつり久方ぶりに見る羅漢　半田　登
廃工場にひまわりの花積乱雲　宇都野正章
黒雲の垂れ籠め青田に風起こる　山崎　孝雄
花火果てし川辺の道を帰りけり　桃井　良之
盆踊り孫と一緒に浴衣着て　堀　陽
花火士の技ひろがれり空の彩　加畑　栄
炎昼に芝まで庇う地這え瓜　浅見　茂男
時の鐘江戸の響きに小望月　斉藤　恒
秋の陽や日本海へ地の傾斜　清水　良平
梅雨空にショパンの曲の聞えきし　阿部　新一
立ち止まる肌に涼しや夏木立　西川　博
片蔭の蔵の列肆を辿りけり　五十嵐統祥
斎場の献花に過ぎし日を重ね　吉田　景美
アンカーに先に逝かれて早や四年　橋本　正一
もくれんに逝きにし母の盆用意　岸　智
金魚鉢水替えをして石に映え　丸田　謙三
草刈機音高くなり盆迎え　佐々木良祐
病む身にて励むゴルフや雷鳴りて　沼田　芳造
百合活けてそっと窓辺に義母見舞う　岩澤　富世

蜩や余日は未だ昏れ残る　松村　祐二
残雪にチングルマ咲く旭岳　加藤　博
電車待つ間にちょっと出す扇子　府瀬川忠芳
五十年強者どもが夏の夢　小熊忠三郎
竹藪を抜けてうしろに蟬時雨　赤田　康二
茹であがるような授業今はなし　内海　俊郎
ひょうたん池の水面の春や遠き夢　松平　理
紫陽花に父の想い出朝の雨　新藤　邦泰
我が子みて偲ぶ昔の夏休み　新井　淙平
夏過ぎて爽気増したりゴルフ場　森田　重敏
職を辞しトンボの絵など書きつづる　朝久野貞郎
空蟬や足元揺らぎ頼る杖　加藤　康夫
紙魚のいる句集に逝きし友に会う　関根　憲治
楠の蔭に思いを同期生　高橋　幸男
逆転打の球友に飛びつく汗と土　山田　和宏
敗戦忌論説年々変わらねど　長島　恒男
孫一家帰りて夏も終りけり　青柳　安彦
球音を残して遥か雲の峰　新井　治雄
ゴンドラの行きつく先や雲の峯　金子　武司
春雨に濡れて想いを栗鼠の窓　畑　喜千松
草いきれカウベル谷に鳴り止まず　大沢米吉夫人
空蟬や年金だよりに物思う　中村　生秀
夏の旅撫みて父を思い出す　宮崎　義宣
日焼けせし球児にまとう赤とんぼ　比留間和夫

菊の宿ふりむく涯に松の風　遠藤　公平
樹海はるか攀づる岩稜雲の峯　岡田　立彦
虫の声どこだどこだと倒す鉢　武田　侃蔵
鶏頭の色あざやかに時雨来る　田中　崇

（会費のみ参加……青木勘・内海）

本年一月七日、同会場にて第二回句会を開きました。三十二名、各二句の投句があり、十四名出席しました。更に一名先輩の特別参加がありました。前回と同様の句会と懇親会で、次回は四月中旬以後、武蔵野を散策しての句会を予定しました。

第二回　句会　平成十年一月七日

残照の東尋坊に冬の濤　益子　弘道
冬怒濤流木しろき浜の朝　宮崎　敏昭
灰の手の藷に息吹く落葉焚　松村　祐二
山眠るちょっと蹴りたき松ぼくり　斎藤　弘行
注連飾り今年も同じ場所で買ひ　佐々木良祐
改築の槌音忙し年の暮　斉藤　恒
熟れ残る柿の実赤し富士見茶屋　加藤　健
冬の日や父乗り越えし子を迎ふ　清水　良平
墓誌に読む兄の戦史や冬木立　川合　敬三
物売りの声ゆるゆると冬に入る　大沢米吉夫人
信濃路の嶺淡しろき師走かな　中村　生秀
高々とかかぐる熊手宵の街　西川　博
さくさくと霜柱ふむ里のみち　半田　登
蕎麦刈りや峠にひびく友の声　松岡　章次
松手入日差しの通る奥座敷　武田　侃蔵
いちよう散り夕陽に映ゆる鐘撞堂　赤田　康二
潮の香の残れる路地や冬ぬくし　阿部　新一
湯けむりの見えし湯宿や初時雨　小鷹　邦夫
初富士や先祖の墓に遠からず　山崎　孝雄
盆梅の香も高き飾り窓　加畑　栄
木くず焚く火のあかあかと朝寒し　桃井　良之
柿一つ落ちて読経の寺の朝　松平　理
初日さす茶屋新しき峠口　加藤　康夫
残り秋遅れし妻に声かくる　畑　喜千松
凛気増し筑波の山も遅紅葉　森田　重敏
父の忌もはるか昔や冬の雲　長島　恒男
除夜の鐘終わらぬうちの宮詣で　堀　陽
朝日差す花壇につもる落葉かな　石井　保行
枯れ芝を走りてゴルフ初勝利　新井　淙平
冬の夜恋しき人に逢いにけり　宮崎　義宣
月蒼し人こむ街も聖誕祭　岡田　立彦
秋の暮火球ぶるると地の果てに　宇都野正章
おでんやの屋台の上座下座かな　柴崎甲武信（育久）

（二期生、三期柴崎建治君の令兄）

（会費参加……小熊・岸・谷・松本英）

（ページ数の都合で全員各一句を掲載しました。）

文集以後のグループ活動年表

―編集室で把握した、五人以上のグループ活動―

文集打上会(94.3.26 鶴ヶ島市 タイム)

川中20会/93
(94.12.12
武蔵野GC)

額絵贈呈式
(95.6.3 阿部家)

2.13　同窓会（東武ホテル）
3. 7　川中20会/90(武蔵野GC)
3.26　文集打上会(鶴ヶ島市 タイム)
4.19　Martin 横浜リサイタル
5.27　高萩ル・ボラン カントリー・I
6. 6　川中20会/91（武蔵野GC)
9. 6　川中20会/92（川越CC)
0. 1～2　"おーい 顔振峠よ ・I"
0.30　自衛隊観閲式(村山首相)
2.12　川中20会/93　(武蔵野GC)
1. 6　れんけい万歩会 向島七福神巡り
2.17　増補版予備会議（atre)
2.17　高萩ル・ボラン カントリー・II
2.26　同窓会　(川越 山屋)
3. 6　川中20会/94（武蔵野GC)
3. 9　「弁天山美家古」を食う会
4. 9　れんけい万歩会 花見(千鳥が淵)
6. 3　祝・阿部家新築 額絵贈呈式
6. 6　川中20会/95(川越CC)
6.17～18　"おーい、顔振峠よ・II"
7.29～30 朝霧、田貫湖見学(前川産業施設)
9. 5　川中20会/96(川越CC)
0.10　スリー・テン・I(武蔵嵐山)
0.11　須永、中沢歓迎会(銀座)
0.30～11.4 川3美術展・I(上福岡)
1.26　れんけい万歩会 鎌倉散歩
2. 1　他学年文集激励会(川越・東家)
2.15　川中20会/97（川越CC)
1. 6　れんけい万歩会 雑司が谷/前川産業・和敬塾
3. 4　川中20会/98（川越CC)
4. 7　川3美術展下見(川越プリンス)
4.13　れんけい万歩会 花見(円良多湖)

朝霧、田貫湖見学
(95.7.29～30 朝霧CC)

他学年文集激励会(95.12.1 川越・東家)

須永、中沢歓迎会(95.10.11 銀座)

(冠婚葬祭及び発足以後の増補版編集会議・顔振峠準備関係は除く)

そばの会 斉藤農園集合(97.3.23 旧・山田村)

ル・ボラン カントリー・II(95.2.17高

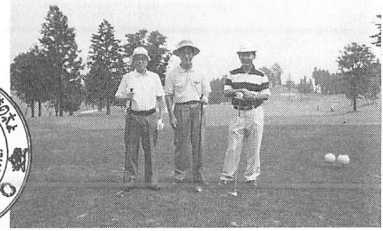
石倉教授 最終講義(97.3.29 東京理科大)

増補版記念俳句会(97.9.4 川越・福祉会館)

海上自衛隊観艦式訓練見学(97.10.22 相模灘)

96. 6.17　川中20会/99(川越CC)
　6. 8～9 "お～い、顔振峠よ・III"
　6.16　顔振山荘内装手入れ
　6.21　れんけい万歩会 尾瀬が原
　8. 7　れんけい万歩会 南アルプス(駒
　9. 6～7 川中20会/100回記念
　10.10　スリー・テン・II(武蔵嵐山)
　10.16　同窓会 (川越 プリンス)
　10.16～22 川3美術展・II(川越)
　10.24　れんけい万歩会 谷川岳
　11. 4　顔振峠旧茶店お別れ会
　11.23　横浜緑区第九 小熊、内海、沼田、
　12.16　川中20会/101 (川越CC)
　12.21　高萩ル・ボラン カントリー
97. 1.18　atre 増補版発足会議
　1.22　道又、松岡 カントリーライブ(
　2.23　そばの会 都幾川村見学
　3.23　そばの会 斉藤農園集合
　3.17　川中20会/102 (川越CC)
　3.29　石倉教授 最終講義
　4. 9　れんけい万歩会 桜とNH
　5. 2　顔振峠 ソバ蒔き
　5.10　顔振峠 コンサート
　5.11　母校同窓会総会で 校歌演
　5.16　れんけい万歩会 サントリービー
　5.21　川3美術展狭山会場下見
　7.13　初雁応援団 朝霞球場・1
　7.16　初雁応援団 朝霞球場・2
　7.23　初雁応援団反省会(所沢)
　7.29　川中20会/103 (川越CC)
　　(6.20 台風のため
　9. 4　記念俳句会(川越・福祉会館
　9.26　川中20会/104 (川越CC)
　10.8～12 川3美術展・III (狭山)
　10.10　スリーテン・III (稲荷山歩
　10.11　同窓会 (狭山 東武会館)
　10.22　海上自衛隊観艦式訓練見学(相模
　10.25　マルチン・ホームコンサート(川越・
　11. 3　れんけい万歩会 秩父の紅葉と
　11.15　ざるそばCountry25周年(
　12.15　川中20会/105(川越CC)
98. 1. 7　第2回俳句会
　1.17　東上線新年会(志木)
　3. 1　女子実業団バスケ決勝観戦
　3.14　冨士見茶屋掲額式(顔振峠)
　4.10～11 排球部同窓会 (鎌倉)

KAWA-SAN DŌKŌKAI・GUIDE
川3同好会・ガイド



同期生なら、いつでも、誰でも参加できます。
詳細は各会の幹事まで。

大野良三と川高三期生同窓展

●川3美術展

- ●95.10.30～11.4(上福岡 アートミレー)
- ●96.10.16～22(川越・県民ミニギャラリー)
- ●97.10.7～12(入間三菱 カープラザ狭山)

大野良三の個展に遠藤、小鷹、金島、青柳の作品を招待。松岡、新藤、柴崎、清水、小熊岩澤、原……と「画廊ジャック」に発展。
楽山先生の色紙「以和為貴」を毎回この会のシンボルとして掲出
(毎年1回。幹事＝大野、金島、岩澤、松岡)

高萩ル・ボラン・カントリー・ライブ

第1回・第2回について第3回は
6.12.21カントリー界のBig Name
北野義夫が来演。ジョージ.Mattも出演
又、奥田、加藤健、岩沢、水口、柴崎、青柳が客席に。
岡はこの他"はっぽん""ざるそば"等
ントリーの一流ライブにも出演。
(不定期・問合せ先＝松岡)

●ホーム・コンサート

現在はマルチンのチェロを中心に。

- ●第1回 95.1.25 沼田宅でテスト
- ●第2回 97.10.25 川越 阿部宅

聴衆14人。原夫人も伴奏に参加。
今後もいろんなジャンルの音楽をナマで楽しみたい！
(不定期。コーディネート＝青柳)

●増補版記念俳句大会

トクさんの薫陶、今甦るか？

- ●第1回97.9.4.川越福祉会館にて

(毎季開催。幹事＝益子、宮崎敏、山崎)

●川中20会

96年秋に何とビックリ
「100回も やってしまった ゴルフ○○」
四半世紀がかりの壮挙です。祝賀会には普段ゴルフをやらない人も多数参加。

- ●96.9.6 100回(伊香保CC)幹事＝山田・他

(毎年4回。幹事＝毎回交替)

●れんけい万歩会

蓮馨寺読書会が(老眼で書物が読めなくなったため?)
毎年季節々々に小グループで
散歩と昼食を楽しむ会に変身

- ●95年=向島七福神初詣で/千鳥ガ淵花見/鎌倉散策
- ●96年=雑司が谷・和敬塾/円良多湖花見/尾瀬/南アルプス/駒ガ岳/谷川岳
- ●97年=新宿御苑の桜とNHK/サントリー武蔵野ビール工場見学
  11.3 秋父の紅葉と猪鍋

(随時。幹事＝宇都野正章、斎藤弘行)

●スリー・テン・マーチ

毎年10月10日10時に武蔵嵐山駅集合

- ●第1回目；95.10.10
- ●第3回(97)は同窓会、川3展と重なるため特別企画として狭山市駅から入間市へ「稲荷山歩き」を再現。(毎年自動継続。幹事＝大野)

●初雁球場「押掛け応援団」

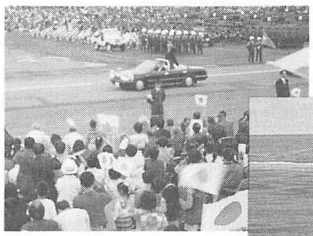
夏の甲子園予選で川高の試合が初雁に来たら最初の試合のスタンドで……もちろん、アフターがお目当て？

- ●96年(第1回)は初雁に来ず。
- ●97年は初戦が朝霞球場。大事をとって朝霞へも…が不幸的中、2回戦で敗退。

(毎年自動継続。幹事＝菅間、柴田、青柳)

●自衛隊観閲式見学

97.10.22 横須賀～相模灘
護衛艦「さわゆき」に乗艦、洋上見学
菅間、宇都野、長島、堀、松岡
94年秋、朝霞での観閲式に続いて
2度目の自衛隊イベントの見学
(単発。いずれも 紹介＝柴崎建・召集＝松岡)



←村山首相の観閲式
(94秋・朝霞)

護衛艦・さわゆき→
('97秋 相模灘)

●顔振峠

義経が奥州落ちの際、素晴らしい景色に
顔を振り振り登ったのが名前の由来とか。
標高500米 西武池袋線吾野駅徒歩１時間
(越生側からも登れる) 駐車場あり。

●顔振峠冨士見茶屋

顔振峠で富士山の見える茶屋
川３「山好き派」のたまり場。

- 手打ち「顔振そば」が名物
- 看板(濡額)・青木勘輔・書
  大野良 松岡・刻/田村・遊印
- 顔振峠パノラマ絵はがき、青柳画
  (経営＝加藤康夫)

●顔振峠・川三山荘

茶屋の入口前、約８畳の広さ
電気、シュラフあり、素泊まりも可
利用は川三メンバー本人同行のこと
(常設。管理人＝松岡章次)

●そばの会

平成９年大野の初夢「小さなソバ畑」に何かと顔振峠にコジツケたがる松岡の案が加わって、耕し、穫って、碾いて峠で食う夢に化け、会員なんと80人。現在、一部会員により、峠の南斜面の開墾に着手。80人分稔るかどうかは未知数ながらやる気マンマン。乞うご期待。

- 「斉藤恒農園 麺食い実験会」
  97.3.23ツネさんの農場(川越市山田)に押掛け、手作りソバ/うどん試食会
  岩澤富さん製麺器持参で大奮闘。宇都野の「タレ」も好評でした。
- そばの会実験農場
  97.5.2.顔振峠約30平米に実験的播種
  松岡、加藤康、斉藤恒、武田、他
  (試行錯誤奮闘中。幹事＝松岡、大野)

●定例集合“おーい 顔振峠よ”

庭園下方の加藤生家にシュラフで雑
バーベキューと名物手打ち“顔振そば”

- 第１回：94.10.1 (約30名参加)
- 第２回：95.6.17 (〃)
- 第３回：96.6.8 (〃)
- 番外編：96.11.4 (旧茶店改築お別れ会
  大野、赤田、奥田、君塚、斉藤恒、松村、松岡、竹沢、
  浅見、水口、加藤健、小熊、青柳、加藤康夫妻(４期・
- 第４回：97.5.10 (コンサートに合併)
  (年１回。幹事＝松岡、加藤

●顔振峠コンサート

冨士見茶屋改築OPEN記念
出演＝松岡章次(ハーモニカ)
武田侃蔵(琴古流・尺八)
応援出演＝中野惠子(生田流・琴)
Martin Pabich(ポーランドのチェリスト
- 企画・司会＝青柳
  ３期約30名、小泉先生、他一般来客多数
  (継続研究中。幹事＝加藤康、青柳、松岡)

●石倉俊治教授退官記念最終講

97.3.29 東京理科大にて。
別に３期の主催ではないが、大学だろ
会社だろうと、入れてくれればどこへで
…同窓会並み？の盛況でした。 (単

ザ・お祭り男

全種目制覇？

ゴルフだけは欠席かと思ったら、百回記念
出席していた。M君のいない所、イベントなし。

第六部「特集・II」——先生からのご寄稿

木村信寿先生
吉川静雄先生

巡礼で訪れたエルサレム

木村信寿先生

エルサレムは三大宗教が共存している「不思議な聖地」です。城壁に囲まれた中心部では、絢爛たるイスラム寺院（モスク）に大勢のアラブ人が集まっており、城壁の「ごく一部」（有名な嘆きの壁）では、選良のユダヤ人が、異様な黒づくめのスタイルで、長時間祈禱をしている。この壁だけの聖地で我慢しなければならないのは、「神が深考した啓示」なのか？　キリスト教徒には、城外からゴルゴダの丘までの道（ビア・ドロローサ、悲しみの道）（アラブの雑踏的繁華街道路に埋もれている）を与えられた。天は熱意と頭脳と心とを、この三つをそれぞれ強く授けたのか。寺院と壁と道とが、それに悩み、嘆き、悲しみも、妙なバランスを示す。

明治神宮境内に浅草が隣り合わせになっている？　と連想されても、それとも違う。永い宗教史のシミが、深く、広くしみ込み、墓地然として灰色光景が多い。さりとてお寺だらけの京都ともちがう。ここは「何が起こっても不思議はないの不安」はないとしても、軍服と「強引果敢な少年売子」のグループが目につく。

兵は二人連れが多く、交通整理的な役目やリラックスな巡回をしているが、「目立たない人」が要所に存在しているのかもしれない。

私達がホテルに泊まると、翌早朝から少年売子がワンサとくる。昼休みには「ラクダ連れ大人」が、「撮らないか」とくる。「ラキダ！　ラキダ！」と云いながら、ホテルのボーイや通訳と何か話している。街で私達を潜撮する「ショットカメラ」にも連絡され、帰ってみると、「自分が写っている五枚」を百枚以上から選ぶことになる。（唖然！）ホテルは小さな情報機関か？　凄いボディチェックは空港で！　この種の行き過ぎる連絡網は、ま

だ驚きの序の口か！

三歳くらいから、親からなるべく離れて、飾りものを売っている。「ハロー！　グッドモーニング」間髪を入れずに「ワンダラー」とくる。三つ子の魂は恐るべき商魂の芽を育てている。しかも仲間いじめのないグループです。

これも一種の教育なのか。（モンテッリも苦笑するような）新市街地その他のこともあるが、以上は「魅せられる都・エルサレム」の一端の話である。

元教頭・吉川静雄先生の日誌から

昭和十六年に川中に赴任され、我々の入学時直後の五月、ほとんどスレ違いに出て行かれた吉川教頭の日誌の一部が、先生の長男で同期生の吉川紀一君から提供されました。先生ご在任中、我々の入学直前、直後の興味ある部分を抜粋させていただきます。

先生ご自身が「私は旧仮名論者です」と言われる通り、原文は美しい旧かな、旧漢字ですが、一人でも多くの若い人達に読んでいただけるよう、できるだけ新かな遣い、常用漢字に近づけました。（ただし、判読できそうな旧漢字、常用漢字外はなるべく生かしました。）また、原文には句読点が施されてありませんが、適当に付けました●印、及び……はその前後を省略し、抜粋した引用部分です。また、カッコ内に適宜注釈を施しました。

文中××氏とあるのはほとんど川中職員のことです。（編集・青柳）

昭和二十年一月一日　（月）　曇　薄陽　（新年）

大化改新一三〇〇年記念の意義ある年を迎え、日米決戦も本格的苛烈、深刻の度を加え、一億総力を結集して是が非でも戦勝の彼岸に達しなくてはならぬ。そのためには私生活の追求を揚棄（ようき）して国家目的のみを念願とする皇運扶翼の戦士となるべきである。昨夜は前後二回に彌（わた）って敵機が帝都及びその周辺に来襲した。……ささやかな雑煮を祝い乍（なが）ら、家を亡（うし）なって正月を祝えない人もあるに比し、その幸福なるを話した。

●福岡の火工所（火工廠）は本日も作業があり三年生は

八時までに出勤である。●拝賀式後四・五年生は卒業記念撮影をする。●K・S両氏が立ち寄る。火工所に行ってみたものの祝酒気分でだれているそうである。……

一月三日　（水）　晴

平穏無事な日が続く。気温は降ったが風のない好天気である。寒稽古の二日である。恵まれた天候をみんな悦んでいる。お大師様の縁日で達磨を抱えて帰る者が多い。紀一と智昭はサーカスへ行った。ひさ子は縁日に行く。子供たちとお祖父さんに年賀状を書く……。

●福岡火工所から電話があり三ノ一の間仁田清が盲腸にて手術したほうがよさそうであるから父兄を呼び、所内にて行い石川・島崎両氏も残る予定とのこと。

一月四日　（木）　曇　薄陽　晴

軍人勅諭御下賜記念日であるから奉読式並に閲兵分列式を行ったが、奉読中の寒さといったらなかった。

●……の墓参に行く。居合わせた老人の話により（大正天皇の）行幸当時の模様、初雁城趾について聞く。行幸に当っては失態のないよう、慎重に奉拝者を極度に制限した為、陛下が奉拝者が少ない旨を申された趣である。

●……陛下はご病弱のため前屈みになっておいでられたので、奉拝者中には陛下と誤認して桂大将または絹帽を冠っていた御者に最敬礼をするものすらあったそうである。川越城については、此の城は城壁に石を少しも使用していない所に特長がある。石を全く使っていない城は天下に数ケ所のみでその一つに属しているわけである。言われてみると、現存する講堂脇の堀には石がないし、石を使ったらしい形跡もない。……勤労動員署の付近に黒門と赤門とがあり、それより今の武徳殿の方へかけてお堀があり、三ケ月形なる故、三ケ月堀と呼んでいた、またその付近には清水が滾々と湧き出て氷川神社のほうへ流れていたがすべて埋められ後形もなくなってしまった。この老人は川越市が喜多院宣伝に力を入れ、それ以上に古くも大切である初雁城の紹介に乗り出さないのは遺憾であると言っていた。

一月五日　（金）　晴

……M氏の話によると某社に出動している熊谷中の生徒が職場を変えてくれと訴えでた。その事情を聞くと彼等（某社重役）が物をトラックなりオートバイにて運んだ帰りには米だか藷とかを闇買いして来るので我々は重役の闇をするために動員されているのではないと言うのである。……

一月七日　（日）　晴　風

今暁五時から六時にかけて一機来襲。生田氏がラジオを修理してくださったので非常によくなる。更に望めば宿直室に持って行けること。電話が連絡できると有難い。

●……この頃の風呂屋は大混雑を呈し、昨夜などは片足を入れたばかりでなかなか入れなかったそうである。その上おばぁさんが一人、男湯に入っていた程、女湯は混

んでいたらしい。自分も何やら彼やらで大晦日に入ったきりである。

一月九日　（火）　晴（暖）

……十三時半頃から敵機が来襲する。高射砲のために二機が火を吐いて行くのが見えた。又、体当りにて火を上げる壮烈なる場面をも仰ぎみて拳を握った。……

●昨日敵は比律賓（フィリピン）のリンガエン他一ケ所に上陸を開始した。本格的決戦も近づいたと素人乍ら感ぜられる。

一月十二日　（金）　曇（前夜雪）

……第一次の銓衡の結果が大分判明したが、成績は上の部である。浦高のみは十人受けて八人通った……

一月十七日　（水）　曇　（予科練身検）

予科練の身検が本日、本校講堂にて行われる。本校生徒は五十四名受検する。

一月十九日　（金）　晴　（風邪大流行）

今日の欠勤者は島崎・白井・福島・鈴木・市川・坂田・長谷川・岡田・横田・原田の上に査閲予行で牧野・那須君も賜暇である。遅刻者に吉沢・忍田・久保田氏があり、結局朝礼に間にあったのは、校長、佐々木信、関口、山口、木村、自分の五名であり自分が赴任以来、希有のことである。……

一月二十二日　（月）　晴　（新教科書）

……文部省の人が夕刻来校する。話に聞くと辞書類の出版は停止になり、一年生は早晩、国漢・数学・物象・生物の虎の巻式のものが出版され、動員に行ってもそれにより自習できるようになる由である。浪人にて勤労動員に出ない者は上級学校に入れない方針であることも初耳である。……

一月二十四日　（水）　薄陽　（軍隊の交渉）

……富士部隊の将校二名が来て、駐屯するために六教室を提供してくれと交渉する。生憎校長不在につき現状を説明したに留まる。

一月二十九日　（月）　快晴　（入学希望者）

本年の入学考査希望者は昨年の四百名に対して六十名減の三百四十名であった。

●今度は銀座、上野、浅草がやられたそうだ。

二月二日　（金）　雪

……一・二年の動員について受入側の来校を求め折衝する。高萩飛行場にては通信・気象観測・整備をやるのだが、中食は職員以外は出ない。被服は不足を来しているので貸せない。交通機関については後に回答することになった。千賀（せんが）大尉が来られた。関東電機は……

二月五日　（月）　快晴

朝、日記をつけようとしたらインキが凍っていた。

●三年生に乾パンを四枚ずつ配給する。之は学校の農耕作業に骨を折ったからである。

二月十四日　（火）　曇　薄陽　風　（入所式）

二年一組が関東電機へ、一年が火工所へ出勤する。入

所式へは校長と自分が手分けして参列する。

二月十五日　（水）　曇　薄陽

……戦争になって我々は苦しい思いをしているが、その中には多分に教えられるものがある。先ず物を粗末にしなくなったのはその一つである。我々はできるだけ物を活かそうと工夫するようになった。……

●二ノ四が被服所（被服廠）に行く。此にて学校が全部出払ったわけである。

二月二十日　（火）　晴　風

……朝久野中将が見えて、令孫が山水中学を受ける予定であるが、此の節、長距離を通わせるのは色々の支障を予想されるので当校を受けるように変更したそうである。●敵が硫黄島に上陸を開始した。

三月七日　（水）　曇　（願書締切り）

終日曇って寒い。横田氏は生徒を使って枯枝を集めて火鉢にてもす。白井氏は木片を持って来てたく。校長と入学考査について打合す。……名栗第一からの願書が本月一日の消印で本日届いたから受領する。従って三百四十一名になった。紀一は五時半頃帰る。受付番号は一五八であるといっていた。

三月八日　（木）　晴後曇

……入学考査順位を決定し、坂田・忍田・那須・原田四氏の手を煩わして入学志願者名簿を作った。大勢いてやるものはやり、他は知らん顔しているよりも、小人数にて皆して一度にやった方が仕事の進捗も目立ち、気持ちも良い。生徒が何かしたのか吉沢氏が叱言を言い、銃の手入れを始め三時半になってもやめず四時になっても止めない。其の間にベルも入れたし、振鈴もやった。中島嬢と忍田氏が連絡にも行った。止めて来たときは四時半になり、今度は吉沢氏自らが汽車に間にあいそうもなくなる。途中より駈けたので果たしてどうなったか。……夕べは一機も来なかった。今日こそ暖かくなると思ったら冷たい一日であった。薪が欠乏して来たので小使（注・用務員）は月桂樹の枝を下ろす。……（生徒××が）帰りの電車中に内務省の役人と覚しき者が省内の超短波にてサイパンよりの放送で三月十六日に九十九里浜に上陸すると語っていたと語った。

三月九日　（金）　晴　暖

江戸町の写真館の上に一昨日飛行機一機墜落し炬燵（こたつ）にあたっていたおじいさんが即死し、おばあさんが負傷。搭乗員は即死した。●受考査順位により、個人調査書と学級一覧表を組替える。順位決定カードも出来、記入も終わった。学校順位と受考査を示す貼紙の用意も完成する。午後から入学考査に関する打合せを校長室にて行う。

●……洋傘と巻脚絆の配給がある。

三月十日　（土）　晴　強風　（東京大空襲）

あう人毎に昨夜の敵機来襲と業風について眦（まなじり）を決するような憤激を以って語る。子供の木刀一本持って避難し

て来た人もあるという。川越の駅には救護所が設置され、警防団員や産婦人科医が詰めているそうだ。昨夜の猛火や焼夷弾の落下する模様を語る者もあった。大震災に劣らない被害ではなかったかと想われる。前者は白昼であったが、今度は深夜にて空襲中なるため闇ではあり、魔風の吹荒んでいることとて生やさしいものではなかったろう。一方は夏で着のみ着のままでも過ごせるが、他方は春寒料峭と手紙の冒頭に挨拶する時機なのだ。家に帰ったら子供がどこで聞いたのか川越には十五万人が疎開して各家庭に割当てであるという。●浅草の観音様が焼けたそうである。……東武の本社もやられましたよ、とは東上線の職員の話である。

三月十二日　（月）　晴　風

風呂に入っていたら十日に東京に行って来たという青年が惨状を語っていた。靖国神社はあったが、偕行社あたりからずっと下町にかけて焼野が原になっている。又宮内大臣官邸もやけ、上野の杜に火がついているが寛永寺は安全である。死体がまだ大分残っている。女は頭髪が燃えきっていたり、髪が半分やけて唸っていたりしていて、足袋をはいているのはましの方であり、茶碗を持ってうろうろしている者もあるという。

●……三芳野村には千五百人とかが来るといっていたし、川越にては三畳に一人の割にて避難者をわり振られるという話の下から、坂戸もそうだという話も出てくる。蒲団二枚に座蒲団一枚を出す指令を受けた村もあるかと思えば、梅園などではあの大火を知らないで翌朝むくむくした雲が出ていると思ったら東京が大火であるらしいとの話であるが、東飯能へ来るまでははっきりしなかったという。……

●……入学考査の際、付添は一名のこと並に空襲警報が午前中に解除になったら登校のこと、風呂敷携行のことなどを決定する。……

●坂田氏が来て昨日、令室の浅草にいる姉妹が死亡したので屍骸を引取りに行った。しかし何も持っていなかったからそのまま帰って来た。墨田川に跳び込んで死んだ。到る所に屍体が横たわっていて目もあてられず、屍臭がしてたまらなかったといっていた。

三月十三日　（火）　晴

松山住の石川君の隣組にて葬式があるので米を求めた所、一升（一・八リットル）、十五円であった。坂田氏の話では卵一ケ一円五十銭になった。蕗は一貫につき五円から六円五十銭である。昨日の会にての話だが、少年農兵隊に行くので背負袋がいる、そこで炭を二、三俵持っていったら川越で白いズックの素敵なのが手に入ったとのことである。……

●校庭を農場としたため、体操の場合初雁グラウンド借用の件を奥平助役に願いに行き諒承を得た。……

三月十九日　（月）　晴　曇

入学考査もいよいよ明日に迫った。午後からは考査問題の銓衡（選考）及び日程の組合わせを行ったがいろいろ意見の末最後には従来の方式におちつく。第一日は医師の身検と口頭試問、第二・三日は体力検査と口頭試問、但しその間に警報発令などがあった場合には別の処置をもとれるようにした。考査問題の銓衡は紀一が受ける関係上、席を外す。

三月二十日　（火）　晴　　（入学考査）

考査第一日である。一ノ一が補助をやっているが規律厳粛にて頗るよい。今日は暖かくて考査をやるには万事好都合である。三百四十四名中三名は欠席したが一名は死亡、一名は市立川工。一名は他へ転じたものであろう。……口頭試問は百五十名行う。紀一が入って来た時は席を外した。……紀一に聞くと第一室（松田・長谷川）については南方で目下激戦を続けている島の名前とその人々の精神について質ねられ、第二室（那須・木村）は電気について、第三室（校長）は趣味と将来の希望につき聞かれた。地理が好きで将来は軍人になるといっていた。

三月二十一日　（水）　晴

第三班の後に山口・富岡・小手指等の十数名を付け、第四班に所沢の約三十名を加えて明日の五班の半数程を消化した。明日は空襲があっても川越第二と名細・山田位しか残らないので十分完了の成算はある。体力検査の方は予定より延びて明日へ川越一・四が残ったそうである。今日は実に暖かい日で体力検査をするのには好適の日であった。……本日も午後四時に完了する。記入などが終わったのは六時頃であった。体力検査は短棒投げ、低鉄棒に尻上がり三回、竹登り跳箱をこえ朝礼台に上がり障壁をこえて一五〇米位を一周するのである。東京からの疎開生にはそのひとつもが出来ない貧弱な者もいた。……

三月二十二日　（木）　晴　強風

本日の口試も体力検査もごく僅かであるから、十一時頃には万事が完了したので、坂田・白井氏により整理が進められ、午後二時より銓衡を行う。木村・松田・坂田・那須・長谷川・石川の面々である。約二時間にてすみ、合格発表の事務にかかる。……午後から猛烈な風が吹き出し、誰も過日の東京空襲を思い、不吉な念を懐いているようだ。……

三月二十三日　（金）　薄陽　　（合格発表）

一年生の教科書は七種類位来ている。今朝、合格者氏名と在学保証書を印刷して万事準備を整える。昨日は生徒を以て発表を本日に変更する旨を伝えたが相当行渡ったとみえて十時頃から大分来ている。……航空士官のK大佐が令息転入のために来校される。本日の発表に洩れた者の陳情が二、三ある。

●硫黄島の勇士が遂に玉砕する。

三月二十四日　（土）　晴

合格もれの陳情がある。……とくにS町のYは、千や二千の金は何とでもするからといった、以ての外のことを言う。金持インテリが思想的に悪い。……午後から卒業成績会議を開く……三年以下は出席日数三分の一以上になるものは全員及第することにした。

三月二十五日　（日）　晴

新入生に教科書を売る日である。午前中に大体捌けた。S氏が来て手伝ってくれたので大助かりである。

●本朝、神潮特別攻撃隊について発表があり、久住宏中尉は二年まで川越中学に在学し、その後府立第九中に転じた方で本年二十四歳である。

三月二十六日　（月）　晴

東部軍の中尉が来ていよいよ校舎を軍隊が使うようになり、貸与する校舎を決定する。約一千名が当市男子中等学校に分駐するようだ。……

三月二十八日　（水）　晴　（卒業式）

本日は卒業式である。……本年は五年と四年とが同時に卒業するので回数は四十三回と四十四回に扱った。来賓は清水・原両県議と奥平助役、伊藤市会副議長、岩沢新平、石山中尉のみであったが、生徒は珍しく全校集まり、椅子の不足を来してしまった。……午後から職員室を移動するので机の中の整理を行う。……

三月二十九日　（木）　晴　風強し

……教科書の集まっただけの代金八七〇円を明文堂に届ける。……

四月二日　（月）　晴　曇　（担任決定）

本日、担任を決定する。各人の希望を満すことになるとなかなかむずかしい。結局一年は那須・石川・原田・忍田の四氏に落着く。……

四月四日　（水）　雨　（部隊到着）

学校に行くと、今日から部隊が宿営するとのことであったから授業は止めて職員室、明治文庫、研究室の移動をする。……午後から雨にぬれ乍ら部隊が来る。

四月五日　（木）　雨　曇　晴　（厭戦ムード）

……東京に行くと軒先に家具を列べて価格を明示して売り出しているそうである。罹災者中には却って戦意が昂揚した者もあれば逆に反軍、反戦思想を懐く者もいるとのことである。一億一心にヒビが入るのが戦争下にては最も慄（おそ）るべきである。……支那では映画に孫文や将介石が出ると拍手するが汪兆銘（おうちょめい）や皇軍が出ても拍手しない。その理由を尋ねると前者の時代には米価が低廉であった、然るに今ではその数倍になっているというのだ。

●……午後七時の報道にて小磯内閣が挂冠した旨を発表する。三月まで持つかどうかと噂されていたが、とうとう投げ出してしまった。……

●佐々木雄司を新入生の代表として、宣誓の連絡をする。

四月六日　（金）　曇　雨　霙

海軍大将鈴木貫太郎男爵に組閣の大命が降下した。本

年七十九歳の老人を駆り出さねば現戦局をのりきれないのかという感じが誰の胸奥にもあるようだ。国民は、もっと若い潑剌たる推進力をもっている者を期待しているのではあるまいか。……

四月九日　（月）　曇　雨　曇　（入学式）

入学式。十時少し経った頃からボツボツ来る。生徒、父兄を講堂に入れて処置する。高山が昨夜来高熱を発した以外は全員出席する。校長の話が一時間半かかる。総代は第三校の佐々木雄司がやったが、非常によくできたといって職員からも好評であった。自分も父兄に話した。短くやったつもりだったが一時間程たっていた。今朝青山中佐が来校し、八月には大佐になり聯隊長になるので明日より千葉にて聯隊長教育が二週間あり、今日出発する故入学式には出席できぬとの挨拶である。

四月十日　（火）　曇　雨　（学力考査）

本日は国語・算数・理科・地理歴史の学力考査を行った。紀一は二年生よりポンさんの子だと言われるそうだ。

四月十一日　（水）　曇　風　（躾訓練）

新入生の躾訓練をする。……石川君は朝礼時の乾布摩擦について指導する。●学力考査の整理をする。席次も出る。奥富の岩崎が一番になる。二番は須永、三番は佐々木雄司である。

四月十二日　（木）　曇　晴　（敵弾）

桜満開である。朝十時すぎから空襲が始まる。合併教室にて室の出入りを指導していた際、タマが二発、階段教室と奉安殿前に落下した。……三番町には大分落ちたそうである。……

四月十三日　（金）　晴　（ルーズヴェルト死去）

お昼のニュウスで米大統領ルーズベルトが脳溢血にて死亡した旨発表され、関根書記がおどけた格好にてそれをもたらす。

四月十七日　（火）　晴　（原田先生）

原田君のことは兄貴又は不良という。不良とは栄養不良の謂である。先生には癖というべきか筆法というべきかがあって、年々新入生に向かって最初に切り出す話は決まっているらしい。偶々関口の話がでたら、昨年もそうだったと言っていた。昨日は小野、須永、豊田などが掃除をサボっていたため那須氏にビンタをもらったそうだ。吉沢からも川合がやられたと聞く。（編注……勇敢な川合君は教官が軍人の子を目こぼしした言って、後で教官に噛みついたらしい。脱帽！）

四月十九日　（木）　曇　風　雨　（川越空襲）

警戒警報から空襲警報へと慌ただしく移る。情報はB29三機と小型機二十機とであることがわかったので一年生を急遽下校させることにした。小康を得た時、職員に手分けして偵察に出かけてもらう。山田方面に行った久保田氏は屋根に穴のあけられたことをもたらす。岡田氏は中央通りで窓ガラスをやられたことを報ずる。生徒の

上には異常なかった。……市川氏の話によると味方機が川越を出放（ママ）れたところに落ちているそうである。……

四月二十四日　（火）　晴　（捕虜連行）

（この頃吉川教頭に小川高女校長の発令があり、その件に関し県庁に出張中）川越に帰り銀杏稲荷の所であると聞き夕刻さらに坂田氏と行き、それよりも百米位北であり空地に落ちたが付近の家は相当ひどくやられ、丁度急造りの粗末な棺が二つあった。母と十一になる子供であるといっていた。目から顔にかけて包帯をしている娘さんが兵隊に何かきかれていた。火事の起こらなかったのは不幸中の幸である。須永・坂田両氏の話によると例の銀杏よりも高く土煙りが立ち、その中銀杏が見えなくなったそうだ。落下傘で降りた三名は蓮馨寺に連行され、続いて中学に行き、更にトラックにて憲兵隊に行ったそうだ。下りた時、兵隊は何もしないが一般の者が撲るそうだ。落ちたB29は新河岸附近にあり、落し残した爆弾のために滅茶々々になっているとのことである。

四月二十六日　（木）　曇　（転任挨拶回り）

挨拶廻りの残りを坂田氏が乗って来た須永さんの自転車を借りて慌ただしくする。……

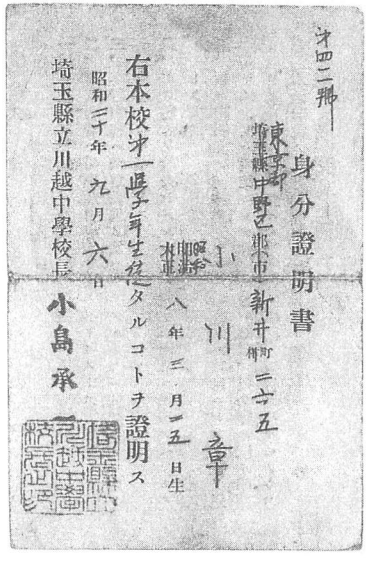
五月一日　（火）　曇　風　夜雨　（敗戦近し）

本日の報道によれば伯林（ベルリン）防衛軍司令官が降伏を申し出たが、反枢軸国全体に対し、無条件降伏をするのでなければ受諾しない旨をチャーチルが回答した由を伝えている。又ムッソリーニは逮捕されたともいう。十七時のニュウスにては已に叛乱軍のために処刑された由である。朝の電車は相当こむが時間が正しいだけは有難い……。

（この後、吉川先生は小川高女へ校長として転任されました。現在も静岡県大仁町でご健在です。）

お宝？発見

本篇の資料篇では内海君が十一学年の身分証明書を見せてくれたが、今度は小川章君がスゴイのを持っていた。終戦直後、中一の時のもので小島校長は本文に出てくる校長だ。（青柳）



三月十日大空襲

三月九日夜の大空襲という人もある。昭和二十年三月十日土曜日午前零時八分、第一弾が深川区木場二丁目に投じられた。二時三十七分空襲警報解除。この間B29約二百八十機が合計千七百トンの高性能焼夷弾を投下し、東京下町一帯はほとんど焼野ガ原となった。火は朝八時過ぎまで燃え続けた。ほとんど焼け尽くしての自然消火に近かったという。一般都民の死者は仮埋葬確認分だけで十万人を超えた。我々の小学校卒業直前のことで、下町では小学校の卒業式に疎開先から帰ったばかりの多くの六年生がこの空襲に遭遇した。

捕虜連行

昭和二十年の四月頃、B29が新河岸に落ちた。(その際に捨てた爆弾が市内の銀杏稲荷の裏に落ちた)。脱出した二(三?)人の兵士が捕虜となって学校に連行されて来た。軍には英語のできる者がいないので地元の最高学府である川中に来たのだろう、金髪の若い兵士でランニングシャツ姿だったが、目隠しされ、パラシュートの紐で後ろ手に縛られ、軍のトラックに乗せられて来た。ところが通訳を仰せつかった久保田、福島、西川の諸先生にとっては初めての米会話がまるで通じず、軍の期待を裏切ってしまった。(先生の名誉のために云えば、米兵が故意に難解な言葉を話したことも考えられるが)戦闘中の兵士がランニング姿なのを見て「おい、アメリカも衣料不足なんだゾ」と言った先生がいたとか。

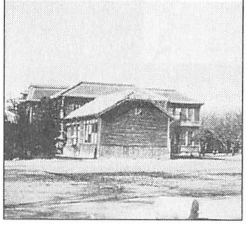
タラチク・テーヨン

戦時中、日清製粉に動員された生徒が覚えて帰って来た掛け声。粉の袋をかつぐ時、リレーする時などに使われていたという。「ハラシュク〜」「ハラヒュク〜」「ホーチク〜」等の説もある。「タラフク」とか「腹クチクシテーヨ」の訛りかも知れない。

メッチェン/スケ

両方とも「女の子」。メッチェンはドイツ語のDas Mädchenで当時の大学生や旧制高校の人が使っていたのを気取って真似た。頭文字の「メ」が「雌・女」に通じるものだから「メッチャン」「メッチン」と言うヤツもいた。「スケ」は不良用語の印象が強かった。美人は「マブイ」(眩い)「ハクイ」(良い)スケと言った。もちろん、そんな隠語社会でなく、ガール・フレンドとの明るい清らかな交際もあった。相手も地元の幼馴染みとかどこかのお姉様と言うよりは「オケン」「ハンG」の同学年生との交際が多かったようだ。交際は当時はもちろん学校には内緒。多くは親にも非公認だったが、中には付き合いが長くなるにつれて結構本物の(精神的な意味での)恋愛に昇華して行く場合もあった。しかし当時の社会常識としては「好き」だけで結婚できる時代でもなく、男子は高校を出たばかりでは経済力がない、女性は適齢期ということで、多くの場合卒業後数年までで終わったようだ。今考えればそれで良かったんだとも思うし、残酷だったとも思う。複雑だ。

第七部「資料篇」



名簿について

私達は戦争による疎開、敗戦後の疎開者の東京復帰、親の転職による移転など、人の移動の目まぐるしい時代に、六年間という長い期間を川越で学んだ。さらに塾のない当時、進学を求めて東京の学校へ進出する仲間が相次いだ。

我々が仲間の名前を探すためのデータ・ベースとなるべき名簿は、身近にある分だけでもいろいろある。今これらの名簿を丹念に読めば、その激動の様子を、少しは把握することもできるかも知れない。

共通の思い出を語る場合、「お前はあの時いたのか」「君はいなかったのか」ということは避けては通れない。場合によっては、それを明らかにしておいて語り合うことは一種のエチケットでもあるだろう。だが、私達はそのことによって個々の在学期間の長短を較べる結果になることは避けたいと思う。私達三期はそう言う激動の中を潜って来た言わば戦友であり、共にいた時間の長さは問題ではない。要は青春の一時期を川越で過ごしたことに価値があるわけだ。逆に言えば出入りが多かったからこそ、同期としての絆も強いのだともいえるのではないだろうか。

手集計による概数だが、中学入学者は二〇二名、このうち高校卒業まで在学した者は一三三名である。六十八名の人が途中で転出している。逆に卒業名簿には二一七名が載っており、八十四名が途中から転入していることになる。つまり入学から貫徹した人数より多い一五二名が途中で転出入しているわけだ。これにどちらの名簿にも載っていない、途中の短期在学者を加えるともっと多くなる。現に中学の卒業名簿に名前を残しただけで、消息の知れない旧友だけでも三十名近い。私達はそういう人の渦巻きの中にいたわけだ。その中から現在二百余名の消息を把握している。奇跡と言って良い。誇るべきことだ。

（編集部・青柳）

(1)中学入学者発表名簿

「昭和二十年度第一學年ニ入學セシム可キ豫定者左記ノ如シ」と藁半紙に手書き、ガリ版で刷られ、校内に掲示されたもの。

(2)中学卒業者名簿　（部外秘資料として学校が保存）

(3)高校卒業者住所録

(4)斉藤　恒君版

●昭和四十六年三月、手書き版

●同、昭和六十一年三月のタイプ印書版。

卒業後の級友の消息を、年賀状の積み重ねによって個人的にフォローした、驚異的な熱意の所産。いわゆる「ツネさん名簿」として親しまれ、三期の結束に大きな役割を果たした。

(5)川高同窓会、会員名簿　第一六、一七号

●昭和五十三年、川高創立八十周年記念名簿

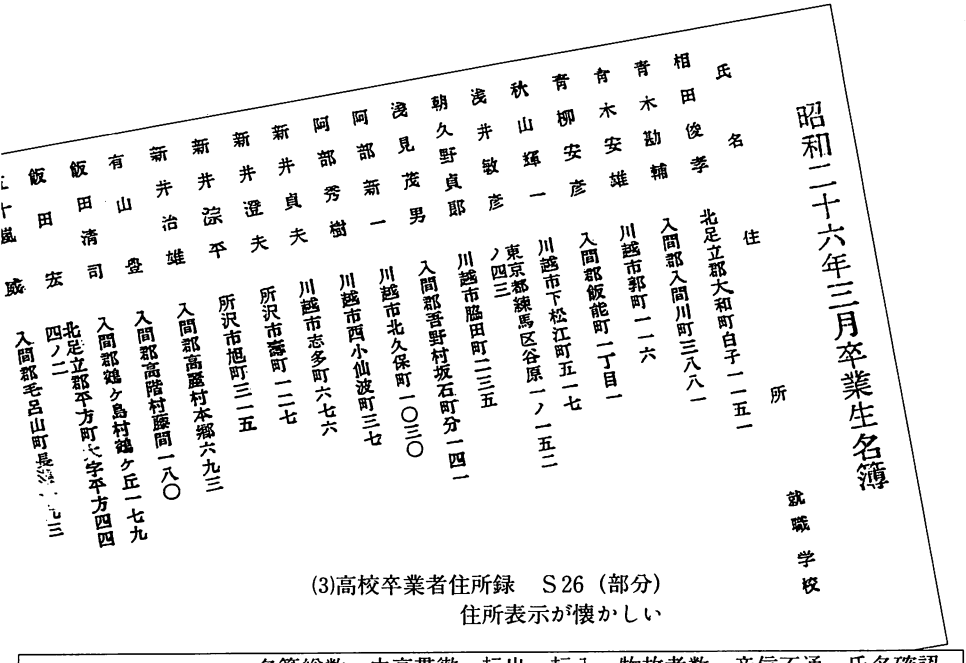
●平成元年版、川高創立九十周年記念名簿

(6)川越高校第三回卒業生同窓会名簿

●平成三年十月　●平成六年二月　●平成七年二月

●平成八年十月　●九年十月の各同窓会で配布。

最初は「ツネさん名簿」をほとんどそのまま生かしたものだったが、「おーい、楠の木よ」の制作に当り、広く情報を求め、若干の級友の消息を掘り起こした。また、この版から「パソコン新ちゃん」こと阿部新一君のパソコンによる名簿管理システムができた。現在は岸智君のパソコンも戦力に加わっている。



昭和二十六年三月卒業生名簿

氏名	住所	就職学校
相田俊孝	北足立郡大和町白子一一五一	
青木勘輔	入間郡入間川町三八八一	
青木安雄	川越市郭町一一六	
青柳安彦	入間郡飯能町一丁目一	
秋山輝一	川越市下松江町五一七	
浅井敏彦	東京都練馬区谷原一ノ一五二ノ四三	
朝久野貞郎	川越市脇田町二三五	
浅見茂男	入間郡吾野村坂石町分一四一	
阿部新一	川越市北久保町一〇三〇	
阿部秀樹	川越市西小仙波町三七	
新井貞夫	川越市志多町六七六	
新井澄夫	所沢市寿町一二七	
新井涼平	所沢市旭町三一五	
新井治雄	入間郡高麗村本郷六九三	
有山登	入間郡越ヶ島村越ヶ丘一七九	
飯田清司	北足立郡平方町大字平方四四四ノ二	
飯田宏	入間郡毛呂山町長[illegible]九三	
[illegible]嶽		

(3)高校卒業者住所録　S26（部分）
住所表示が懐かしい

	名簿総数	中高貫徹	転出	転入	物故者数	音信不通	氏名確認
中学入学名簿	202				(累計)0	(累計)0	
高校卒業名簿	217	133	68	84	1	0	
「おーい 楠の木よ」	288				33	38	
平成８年同期名簿	303				40	37	9

(1)中学入学者発表名簿　S20（部分）
飛びとびの番号の間に多くの人の泪が。

(注)●「おーい、楠の木よ」所載の名簿は平成六年データと同じ。
●(1)、(2)は最近発見され、多くの旧友の名前が分かった。
●ついでに高卒名簿と平成八年名簿の住所を比較してみたら、地名、地番変更などにより同じ住所表示の人は一人もいなかった。推定により、同一市町村内の移転は地域内移動だと考えると二百十七名中、約八十三名（約三十八%）が、現在も当時の自宅周辺に住んでいるらしい。

(4)斉藤　恒「ツネさん名簿」S61版(部分)
川3鉄壁の絆に大いに貢献した

氏名	住所	職業	電話
奥隅英夫	〒350-04 入間郡毛呂山町大類 577	教師（中）	0492 94-0170
奥田　誠	〒350 川越市中原町2-10-2	埼玉銀行	0492 22-3585
奥平守男	〒152 目黒区目黒本町 1-16-13-201	裁判官	03 716-0664
奥富弘明	〒226 横浜市緑区三保町2179-2-346	国際電信電話	045 932-8138
小熊忠三郎	〒350 川越市仙波町3-13-4	〃	0492 22-2962
小廣邦夫	〒 入間郡日高町宇原宿 259-6	教師（中）	04298 9-4553
小廣邦彦	〒810 福岡市中央区赤坂 1-2-6-805		092 771-2262
小野則彦	〒522 滋賀県彦根市長曽根南町459-25	教師（高）	0749 23-5780
小畑温治（祐谷）	〒344 春日部市大枝89	日産自動車販売	0487 34-5709
西川正則	武里団地6-23-104		0429 24-2704
糟谷　熊	〒359 所沢市小手指町1-28-4	家業（織布）	0492 22-1729
加藤　健	〒350 川越市郭町 2-2-2	興信所	0557 51-0312
	〒413-02 伊東市富戸 799-8	家業（洗）	0429 73-2935
		教師（小）	

創立百周年に関して

一八九九年に創立された川高は一九九九年に創立百周年を迎えることになる。私達の母校の百年の歴史はそのまま二十世紀の歴史だということだ。そして、その歴史は大ざっぱに言って二つの部分に分けられる。つまり旧制中学校としての歴史と新制高校としての歴史であり、軍国教育時代の歴史と民主教育時代の歴史ということになる。その変わり目に私たちは現役の生徒として立ち会った。しかもその後間もなく百年の歴史の中間点である創立五十周年にも立ち会うことができた。

即ち私たちは昭和二十年、旧制中学一年生の時に敗戦を迎え、時代の大きな転換期に遭遇、昭和二十二年四月に併設中学三年生、ついで新制高校の十年生、十一年生と、目まぐるしい学制改革の嵐の波を被った。その最中の昭和二十三年五月、十年生（高一）の時に五十周年の式典に参加しているのだ。

たかが高校の同期生にしては、私達三期の結束が堅いことに驚いておられる方も多いと聞く。それには、六年間同じ学校で過ごしたと言う期間の長さ。その間疎開、復京と移動が激しく、多くの友達と接点を持つことができた。激動の時代を共に潜り抜けてきたと言う連帯感。川越～東京間の文化のシャッフルの渦中にいた。などなどいろんな理由が考えられる。また我々世代の若い頃の窮乏貧困からくる「遊び足りなさ」を挙げる人もいる。いずれにしても私たちは百年の歴史の中の非常にユニークな六年間を経験したわけで、それが私たちの結束のバックボーンとなっており、「おーい、楠の木よ」もその結束の中から生まれるべくして生まれ、それがさらに私たちの結束の絆を強くしたと考えて良いのだろう。もちろん、欠食時代に鍛えらえた私たちの身体や頭が、なかなか歳を取らせてくれないという単純な理由も見逃せないかも知れないが。

百周年に向けて、新図書館、国際交流、（姉妹校）、記念誌、新体育館、記念碑など、実行委員の方がいろいろ努力しておられることは大変心強く、感謝に耐えない。私たち三期からも岡田、斉藤恒、松岡の川越在住の三名が窓口として連絡の労をとってくれている。私たちの結束を示すかのように、募金も他期同窓生に負けないほど好調に集まっているようだ。まずは、同慶の至りと言うことだろう。「おーい、楠の木よ」も百周年に合わせて増補別冊を完成し、これを本編といっしょにケースに入れて「記念文集増補版（仮題）」とし母校へプレゼントすることになっている。

川越高等学校創立百周年ロゴマークについて

全体のデザインは百年の１００を表しています。その００が○でなく◇になっているのは、男子高に相応しく、質実剛健という伝統的な本校の気風を表しております。また◇が右に大きくなっていくのは、本校のこれまでの１００年間の発展を表すと共に、２１世紀の新たな１００年に向けて益々発展するようにという願いがこめられております。

博報堂の常務取締役小林啓一氏（高校８回卒）のご厚意で、同社の小沢正光氏（高校21回卒）を始めとする本校卒業生によって作成されました。

埼玉県立川越高等学校創立百周年記念事業の概要

（平成10年2月5日）

川越高等学校創立百周年記念事業実行委員会

川越高等学校創立百周年

川越高等学校は明治32年（1899年）埼玉県第三中学校として川越城址に設立され、平成11年（1999年）に創立百周年を迎えることになります。つまり本校は20世紀と共に歩んできたのであります。この間、校名は埼玉県立川越中学校から更に埼玉県立川越高等学校へと変遷を経ましたが、約一万九千名の有為な人材が本校で学び巣立って きました。学制改革等による変遷は地域社会はもとより、国内各地さらには海外にまで雄飛して、様々な分野で活躍し、社会・文化の発展に大きな貢献をしております。

川越高等学校創立百周年記念事業実行委員会

この記念すべき創立百周年を迎えるにあたり、川越高校では学校、同窓会、PT会、後援会、PT教育振興会の5団体が一体となり、渋谷健同窓会長を委員長として、創立百周年記念事業実行委員会を結成し、20世紀ともに歩んできた本校百年の足跡を記念し、更に来るべき21世紀をも展望した意義ある記念事業を行うことを目指して取り組んでおります。

創立百周年記念事業

昨年11月、創立百周年記念事業基本案として記念事業の大綱が決まりました。この基本案であり、創立百周年記念事業計画としては、現在取り組んでおります。中にはすでに2・3年前から具体的に取り組みを進めているものもありますが、21世紀のマルチ情報時代にも対応した新図書館の建設を本年3月を目途に、確定したものは、川越高校百年史の編纂、記念式典・記念式典・記念音楽会、記念講演会、同窓会名簿の刊行等であります。

国際化時代に対応する国際交流の推進、美術展・書道展等、同窓会百周年記念事業の主要事業の碑建立、記念講演会、記念音楽会、記念式典・記念式典・記念式典・

川高三期生の出版物

主として文集前後からの単行本を中心に、編集室が急遽集めたもので、多分この他にもたくさんあると思います。

●古い出版物は原則として省略。

●著作多数の人は最新作または主要作品のみ。

●雑誌新聞、小冊子、同人誌等への寄稿作品、及び教育関係者や専門家の自作教材、教科書等は基本的にはカットしました。

（順不同、肩書は執筆当時のもの。文責＝青柳）

橋田敏之／斉藤　昇

●技術

「PC橋のプレストレッシングと設計施工」

S四三初版～H七　一〇版　現代理工学出版

PC橋、草分けの名著。三〇年後の今も販売中。

★小村　敏　共著「PC橋　架設工法総覧」他

佐々木雄司

●医学

「宗教から精神衛生へ」

S五六・二・二五　金剛出版

★東大医学部教授（精神衛生学）他に著書多数。「実践精神衛生学」も鋭意執筆中。乞ご期待！

中内洋一

●医学

「皮膚病の症状と治療」

S六三　初版～H八　八版　梧桐書院

我々が日常的に良く出会う皮膚病を中心にわかりやすく解説。

★国立国際医療センター（皮膚科）

川崎　匡

●医学

「めまい―臨床の基本」

……小脳の生理――片葉を中心として……

S五六　現代医療社

脳に関する研究。

★富山医薬大教授。「平衡神経科学」他

喜多　弘／佐藤温重・山上　明編

●医学

「生物学24講」

S六三・三・二五　東京・東海大学出版会

中　義智

●随筆

「腎移植　透析校長奮闘記」

H八・三・一三省堂　定価一四〇〇円

愛と健康の体験記。他人事ではありません。

長谷川栄

●教育

編著

「現代学力形成論」

H八・三・六　協同出版　定価三五〇〇円

★筑波大学教授。「教授学の対象と方法」他多数。

伊藤　明／永田　仁　共著

●ビジネス

「企業向けビジネス戦略営業の法則」

H八・四・一〇　東洋経済新報社　定価一四〇〇円

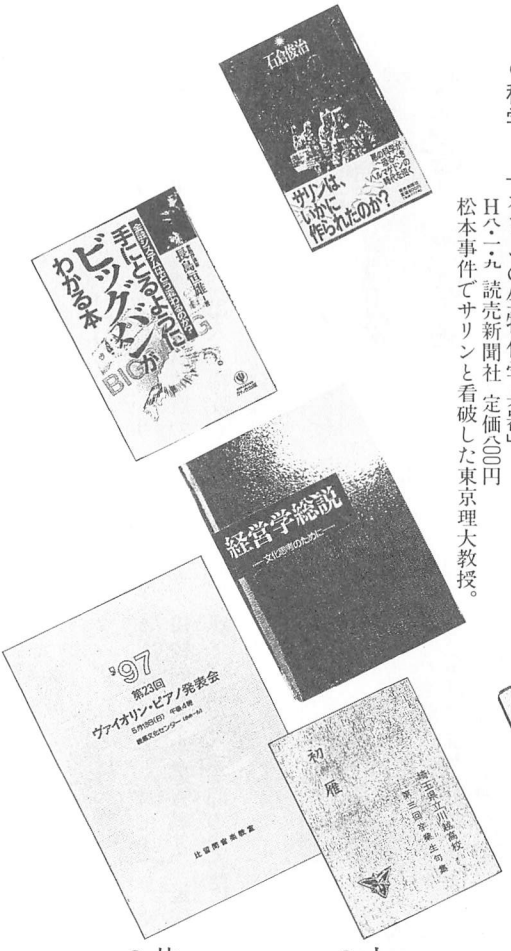
●社会
「勤労農民的経営と国家主義運動」
……昭和初期農本主義の社会的基盤……
S六三 御茶ノ水書房
★茨城大教授。「女性の仕事と生活の農村史」「村の指導者とインテリたち」他、著書多数

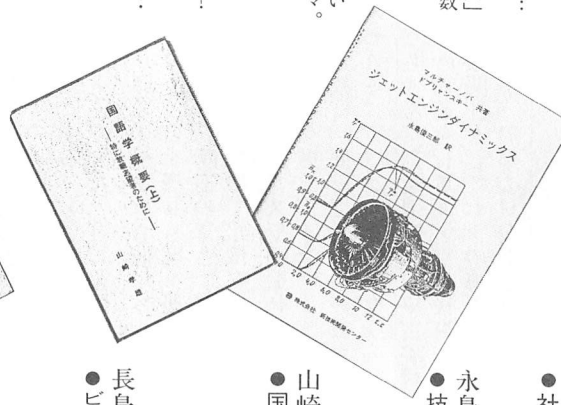
清水良平
●自分史
「重ね絵」
H三・一〇・二八 生涯教育研究所（自費出版）
引き揚げ、転入と我々がつい見落としていたような気がする、当時の級友の青春ドラマ。

宮崎敏昭／美子
●句集
「流鏑馬」
H五・四・三〇 教育出版（自費出版）
〝流鏑馬や籠手に花ふる騎士だまり〟…名句！

斎藤弘行
●経済
「経営総説」……文化思考のために……
H五・七・一〇 中央経済社
★東洋大学教授。他に著書多数。

石倉俊治
●科学
「オウムの生物化学兵器」
H八・一・九 読売新聞社 定価八〇〇円
松本事件でサリンと看破した東京理大教授。





●社会
「技術大国ニッポンの虚と実」
ブルーバックス
技術大国ニッポンへ、ドキン。頂門の一針！

永島俊三郎・訳
●技術
「ジェットエンジンダイナミックス」
新技術開発センター
同期への御無沙汰を謝して届いた二書の一つ。
★既に他に八冊出版しているが一般の書店では売っていないようだ。

山崎孝雄
●国語
「国語学概要」
——特に教職志望者のために——
H九・四・八 邑心文庫
教職志望者でなくても、普段無意識に話している日本語の再点検、再発見は必要ですね。
★盛岡大教授。吹上町 龍昌寺住職

長島恒雄
●ビジネス
「手にとるようにビッグバンがわかる本」
H九・一〇・四 かんき出版 定価一四〇〇円＋税
わかり易さで大好評！ 二月現在第六刷。
この本でわからない人は、自分のアタマにビッグバンを？
★評論 「悲観楽観」 H九・五・三〇（自費出版）
証券会社在職中に雑誌や新聞に書いた時評。評論と言うよりは、わかり易い経済入門書。

大沢米吉
●句集
「初雁」
S五〇・三・一 三期句集発行委員会
本編では、写真のみで記事がなかったので別格として紹介。在校時に「獺祭」に掲載された級友二二〇人の句を選集した句集、大沢米益子、山崎、松木の徳門十…いや、四哲の労作。

比留間和夫
●プログラム
「比留間音楽教室発表会」
S三五より現在進行中。H二〇に第二十四回を予定
これも別格。出版物ではないが、見た目に「本」なのでここに紹介。「継続は力なり」

四行小史 旧友新発見

（平成十年二月現在）

（同窓会名簿にカムバックしてくれた級友達）「どこかにいるはずの級友達」は『おーい、楠の木よ』の効果もあって、こんなに大勢の消息が分かりました。ご協力有り難うございました。

特に、小熊忠三郎・斉藤恒君の尽力もあって、母校同窓会本部も動き、最後の旧制川中生である併設中學卒業生はもとより、中途転出入の級友も同窓生の推薦を経て、同窓会本部の承認により、希望者は例外なく創立百周年編纂の名簿に記載されるようになりました。

（増補別冊四行個人史偏・しゅう人・松岡）

氏名	近影	現住所	四行小史
石倉 俊治		市川市	▽シンちゃん▽水郷平方村の醤造名家の秀才兄弟の末っ子シンちゃん兄上の自転車で五キロの道を通学▽郷土部では川越城の模型作りに没頭▽東大医学部▽東京理大教授・薬学博士、裁判化学権威として水俣病オウム事件に度々登場▽サチエ夫人一男▽同窓会で酒豪艶名轟かす▽リュウ▽本郷のお屋敷が戦災で鶴瀬に逃れ、満員電車の東上線で一年半キャリアの疎開っ子。女優〝小山明子〟の兄上で、つまり大島渚監督の義兄に当る▽医学を志し千葉大・群大を経て医博▽医療法人昭和病院長▽美枝夫人一男二女孫四▽ゴルフ、囲碁、麻雀
臼井 龍		高崎市	▽鐵兜（命名の秘密は菅間マネージャのスコアブック）▽野球部豪球でデビュー、名手浅井も度々後逸の怪投▽温室の川中に飽き足らず工学院大高校へ、新宿の舞台に登板。旧友柴田ゴローに屢々定期を貸し没収の憂き目、栗饅で賠償▽光子夫人一男一女▽釣道楽で天下睥睨
岡田 和夫		川越市	▽キツネ・フォックス▽顔振峠の麓はゲジさんの住処だったので生物班の役者を多く排出、イチローはその一人、高二から聖望高校に転校▽埼玉大教育学部▽地元の中等教育界でライフワーク。多くの教え子に慕われる。▽ヨシエ夫人二女孫四▽大好きな飯能で庭いじり
岡部良一郎		飯能市	▽シバちゃん▽剣道部郷土部▽古谷村からアナの空いた軍靴を自分で修理し砂利道を行軍通学▽卒後海の男に転進、宮古商船機関科▽三井船舶で機関長として七ツの海を浪枕▽先祖の田畑守るため上陸、大中居農協理事、農業委員会農政部会長▽一男三女孫十！▽ゴルフは名人
柴崎 明		川越市	

鈴木　徹也		
練馬区	▽テツヤ▽漢文は好きだったが、俳句は嫌いで徳門十哲入りを辞した天邪鬼▽英語は平治郎とディベートの実力▽東京外大▽ＮＴＶ事件記者でデカを煙にまき、永らく同窓会も行方不明、浦部＆ツネさんの捜査でこの程御用。帝京大教授▽淑子夫人一男一女▽自称プロ級古書通	
須川　賢治		
三鷹市	▽ケンさん▽警察署長の父上転勤で転校頻繁、川越二小組の吉崎・松村・丸田と川中入り直後、戦災の熊中に涙の転出。その後、日新校長父子と邂逅▽慶応大▽三井物産アジア北南米と転勤、お子さんも国際級転校の運命。現ジェトロ顧問▽輝子夫人三男孫三▽ゴルフはプロ級	
丹沢鋭次郎		
沼津市	▽タンちゃん▽野球部ニュータン監督の誘いを敬遠して、ゴムまりリーグの星に▽明治大でアマタ明治マンに揉まれ、新宿で腕を磨く▽静岡中央銀行入行転勤二十回の新記録▽静岡が気に入り沼津西山ゴルフにて球友来駿を待つ▽禮子夫人一男一女孫これから▽ゴルフに麻雀	
西勝　章夫		
志木市	▽ニッカツ▽国文学部▽都立二中から来た秀才疎開っ子。徳さんの授業が好きで俳句もまじめにやる。階段教室で手巻きの蓄音機で〝未完成交響曲〟を熱聴▽早大法▽堪能な実力英語を生かし米極東軍オフィサー、ＰＸマネージャー▽富士枝夫人三女孫九！▽旅行マニア	
日新　豊		
大田区	▽ヒヨちゃん▽柔道部▽父上の熊高ご栄転で仲良し松村・吉崎・高橋光と高二でお別れ▽熊高でも苦労したろうね▽お陰で両高同窓会でのスター扱いは本人迷惑？▽立大経済▽㈱キャロットで活躍▽サトル夫人二男二孫▽読書、ボーリングは名手とか（一度決めたらやり通す）	
細沼　利輔		
新座市	▽赤マン（平岡のヒラマンに対抗）由来はアノ林檎ホッペ▽柔道部で大ヨネ、森サダ、小沢雷魚と四天王に輝く▽川中卒業後伝来の家督に専念す▽新座ＪＡ理事、農業委員、二中ＰＴ会長、浦和農業研連会長、中央ライオンズクラブ会長▽千鶴子夫人二男一女孫四▽歌舞伎鑑賞	
松岡　龜雄		
川越市	▽龜ちゃん▽自転車部隊一のハンサム。空襲にも負けず芳野村から颯爽と通学▽玉音放送は行幸碑前で吉崎・中沢と謹聴▽川中卒後は家督の王道を歩む▽北田島農協役員、川越４Ｈクラブ役員を歴任▽勝子夫人一男三女まご▽野菜通年出荷の一方、県特選米一目ぼれ開発に傾注	

山田　政見	川越市	▽セイケン▽ラヂオ班・郷土部、当時文化庁の野放しをいいことに出身地の古墳をメッタ矢鱈に掘りまくった川中のシュリーマン▽明治学院大で先輩の本物の藤村の作品に触れ感激▽内田洋行広報室、産業通信社業務部長▽泰子夫人二男▽島崎藤村研究、旅行、音楽鑑賞
吉川　紀一	千葉市	▽チビポン（父上吉川教頭のアダナ襲名）▽川中入学直後父上のお相伴で松山中に転校▽当時、松中水泳部は強かった▽静岡大文理▽読売新聞広告局出版局次長、ＪＲ東日本企画、太陽エイジェンシー顧問▽弘美夫人一男一女孫一▽ゴルフ、旅行、酒と鼾は顔振峠で披露済み
吉武　靖矩	台東区	▽タケ▽野球部は籾山・内海と三ヶ月保たず、楽をしようと卓球部へその伝で早稲田高等学院で遊びを覚えたが、ずーと川越っ子とつき合った外様沈澱党員▽早稲田大▽リッカーミシン、東京メール▽現在台東は谷中に安住▽佳子夫人二男孫二▽多情多コンの自由人を標榜中

哀悼！　文集以後の物故者

平成五年、『おーい、楠の木よ』のスタート直後に私達は編集長になるはずだった大沢米吉君を喪いました。その後石井精治君、青木安雄君が文集の完成直後に亡くなりました。そして曽つてのあの堂々たる体軀からは信じられない細やかな神経で『おーい、楠の木よ』の編集を支えてくれた平岡泰之君。吉野正武君の訃報を第一番に伝えてくれた新井澄夫君も長年の公的な仕事からやっと暇を見つけられるようになり「これからは同窓会のイベントには積極的に参加するのでよろしく」と言って来た矢先の不幸でした。わずか数年の『おーい、楠の木よ』本編と増補別冊の間、この間に新しく消息の分かった旧友に会うこともなく、自ら文集のページを開いて出て行った亡友諸兄に心から哀悼の意を捧げ、謹んでご冥福をお祈りいたします。

青木安雄君	（平成六年三月三日）
籾山清一君	（平成六年三月十九日）
石井精治君	（平成六年九月十一日）
平岡泰之君	（平成六年九月十三日）
吉野正武君	（平成七年九月二十七日）
小沢昭治君	（平成八年六月八日）
渡辺　謙君	（平成八年八月十一日）
新井澄夫君	（平成九年一月六日）
飯田清司君	（平成十年二月七日）

なおこの間、横田稲吉先生、那須大輔先生、望月良平先生、松本利雄先生もご逝去されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

合掌

（編集部）

同期生住所別分布表

平成10年３月現在

◎海　外

国　名	都　市	人　数	累　計
ドイツ	ハンブルク	1	
ベネズエラ	マラカイボ	1	2
台　湾	台　北	※（1）	

※長期滞在（住所は浦和市）

◎国　内

都道府県	市区町村	人　数	累　計
北海道	札幌市	1	
	栗山町	1	2
東　京	台　東	1	
	文　京	1	
	荒　川	1	
	墨　田	1	
	江戸川	1	
	江　東	3	
	品　川	1	
	大　田	3	
	渋　谷	1	
	目　黒	4	
	世田谷	2	
	新　宿	1	
	中　野	1	
	杉　並	1	
	豊　島	5	
	板　橋	4	
（以上区部）	練　馬	6	(37)
	武蔵野	1	
	三　鷹	3	
	府　中	1	
	国分寺	1	
	小　平	3	
	東村山	1	
	八王子	1	
	町　田	1	
	福　生	1	
	保　谷	2	
	東久留米	1	53
神奈川	川　崎	4	
	横　浜	10	
	海老名	1	
	鎌　倉	1	16
千　葉	千　葉	1	
	松　戸	1	
	市　川	3	
	船　橋	1	
	茂　原	1	
	袖ヶ浦	1	8
茨　城	水　戸	1	1

※郵便番号によるソート

都道府県	市区町村	人　数	累　計
埼　玉	大　宮	7	
	浦　和	3(+1)	
	越　谷	2	
	春日部	2	
	狭　山	11	
	坂　戸	1	
	川　越	50	
	日　高	1	
	越　生	1	
	毛呂山	1	
	川　島	1	
	朝　霞	1	
	和　光	5	
	新　座	3	
	志　木	4	
	三　芳	1	
	富士見	2	
	東松山	3	
	小　川	1	
	上福岡	1	
	大　井	1	
	飯　能	6	
	入　間	9	
	所　沢	13	
	上　尾	2	
	吹　上	1	133
群　馬	高　崎	1	
	藤　岡	1	2
静　岡	沼　津	1	
	湯ヶ島	1	
	伊　東	1	
	清　水	1	4
愛　知	名古屋	2	2
滋　賀	彦　根	1	1
兵　庫	西　宮	1	1
岡　山	倉　敷	1	1
長　崎	佐世保	1	1
富　山	婦　中	1	1
合　計			228

◎その他

転居先不明		2	2
住所不明		30	30
総　計			260

集計　阿部新一

『おーい、楠の木よ』正誤表

（別紙の訂正用紙を切り抜いて、当該個所に貼り込んでください）

区分	ページ	場所	誤	正
A 口絵	6	上　生物班	2人おいて岡部、	相田、1人おいて岡部
B 〃	6	下　嵐山遠足	小沢？	岩沢（丸田謙三）
C 〃	11	上左　講堂前	○○	西勝
D 〃	13	10B	○○	吉武
E 〃	18	仮装行列	沼田、稲生、他	沼田、稲生、飯田（清）
F 〃	20	下	橋本の正面跳び	五十嵐（統）の高跳び
G 〃	21	下　競技部室前	○○	窪田氏
H 〃	24	下　四日市駅	○○	大野（良）
I 〃	30	下　校門	○○	蔀島
J 〃	40	上　3B同窓会	○○	清水（正）
K 〃	41	中　むらさき会	斎藤（賢）	高橋（幸）
L 〃	47	上　発起人新年会	山崎、新井の間に挿入	村山（利）
〃	〃	〃　（ついでに直す）	新井、大沢、柴崎、加藤、清水、大澤、平岡、斉藤、宮崎、山田	大沢（弘）、柴崎（建）、加藤（健）、清水（良）、大澤（米）、平岡（泰）、斉藤（恒）、宮崎（敏）、山田（和宏）
M 本文	21	上　「昔古城の」	○○○○○○○	勝利の旗こそ翻れ（菅間説） 正気の歌こそ蘇れ（森田賢説）
N 〃	58	10行目	逆上り	遡り
O 〃	277	下　6行目	防風ガラス	風防ガラス
P 〃	336	16行目	べ平連（ベトナム平和連合）	べ平連（ベトナムに平和を！市民連合）
Q 〃	383	7行目	「conscia mens recti」	「mens conscia recti」
R 〃	431	句集「初雁」写真下へ挿入		「徳さん」に絞られた汗と涙の結晶。3期全員の「宿題」句集　（昭和50年編集発行） 編集、大澤（米）益子、山崎、松木、宮崎（敏）
S 〃	496	左9行目	手摺に寄りながら	手摺に倚りながら
S′ 〃	499	右4行目	下から8字目の読点（、）	トルツメ
T 〃	610	職員記念写真	○○（上） ○○（下）	中島恒子（事務） 秋葉
U 〃	612	職員室松本先生	埼玉県陸連により表彰	日本陸連より表彰
V 〃	612	〃　本橋先生	俳号＝踏潮	俳号＝沓潮
W 〃	612	〃　大沢龍男先生	S60年頃歿	H1.5.26歿（73才）
X 〃	639	資料編	（図の左下へ）	（桃井良之・図）

1人5行・編集後記

●前号に続き、編集子各自に5行ずつ、後記を書いて頂いた。中には「後記だけ出席」の人もいるかも知れないが、歓迎々々。　（順不同）

●横浜から川越へ、一都二県を股にかけ編集会議に皆勤。母校愛とか郷土愛はさておき、終った後に一杯やりたい一心のあまり。お陰で親戚との交流も深まり、両親の墓参も欠かさずに済んだ。（小熊）

●皆さんの協力によって、曲がりなりにも事務局の役割を果たしてきた。原稿や写真その他の資料が予想以上に集まり、立派な増補別冊を発行する事が出来たのも皆さんの協力の賜物。多謝　（西川博）

●「おーい楠の木よ」出版記念パーティのビデオ（阿部君録画）を見た。新井・石井・小沢・吉野各兄が元気に写っていた。「人生果無し」。増補別冊への投稿を進めた諸兄から礼状が届く　（斉藤恒）

●増補別冊の話が出始めから数え、四年近い付合いとなった。本づくりは練達の諸兄にお願いし、非才はただ後方支援の内務班で精一杯。少しはお役に立てたのだろうか。楽しい日々だった。（岡田立）

●（喧嘩分かれ？）楠の木の地固まりし冬の雨（海外から原稿落葉）青嵐少年の夢吹き抜けり（新資料・旧友相次ぎ発見）友の声童顔のまま夏終わる（編集会議完了）春燈や眼を越えて杯を挙げ　（松村）

●新規の原稿提出者がこれ程多数いた事に驚いた。二ヶ月一回の編集会議、邪魔にならない程度に参加したが、これで会議を名目に飲む機会がひとつ減った事に一抹の寂しさを感じている。　（加藤健）

●別冊の発刊ご同慶の極み。編集会議に全て出席し、楠の木の絆を深めた事誇りに思う。川高三期生の諸兄相集い、相励まし、若き日の熱血、熱誠を想起し、人生九十年の応援歌を熱唱しよう。（益子）

●同窓会幹事として出ているうちに、雁首だけの編集委員に仲間入り。委員諸兄の真摯な努力に感嘆ひさし。増補別冊は小粒でも珠玉の一編となろう。ラージヒルの原田のように感動を載せて……（岸）

●折からの景気停滞とそれに伴う社業の繁多で、何のお手伝いも出来なかった。今回の企画で消息が分かり、寄稿してきた人も多いようで、ますます仲間の輪が広がり、ご同慶の至り。　（丸田謙）

●川越駅より徒歩二分に家があるため、編集会議後の小宴に呼ばれること度々、いつの間にか編集会議に参加、ついでに露出度過剰となった。一年未満在籍の転入生のくせにと恐縮しきり。　（宇都野）

●傑作だった一つ目を超える苦労は並大抵じゃなかったろうね。でもこれを肴に二年楽しく遊べました。編集子に感謝。次のネタを考えたいね。もう沢山なんて言わないでどうぞよろしく。　（松岡）

●続編を出すに及んで懐旧談も種切れの観ありと見た。顔振峠、音楽、俳句など最近事情紹介の増加もその間の事情を物語る。白寿記念文集を夢想し、生き方充実に努めたいものだ。　（清水良）

●わがパソコンも相当草臥れた。ナンでもカンでもブチ込んで、ハードディスクはパンク寸前だ。でも、その一字一句が寄稿者の誠意や熱気だし、人生のドラマが凝縮されているようだ。　（阿部新）

●編集委員とは名ばかり、旧友に会うのが楽しみで参加したに過ぎない。ただ表紙絵等には熱が入り、これまた楽しかった。今後はさらに様々な集まりでお付き合い願いたいと思う。　（大野良）

●今回は石井精治君の追悼文を書きました。これによって生老病死の人生苦が老人に集中的に現れるのを感じました。亡くなった方々の分も生きなければならない使命を感じます。　（水口）

●何も出来ず申し訳なし。宮崎君の労を煩わすのみにて。平岡泰之君が逝ってしまうとは。去りし後増補別冊に、時の重さ、覚えることしきり。所収の拙文、墓前に捧げたい。　（東）

●町内会の仕事（会計）にかまけて、今回の増補別冊の編集会議には欠席がちであった。岡田立彦君、西川博君に事務連絡と会計の御苦労を背負って頂き、感謝しております。　（堀）

●立春と共に確定申告の時がきた。自主記帳・申告の立場から書類の記入を始める。今年から老年控除適用。他の控除適用したら税額ゼロ。喜んでもいられない、寒さと同じ、生活が厳しい。　（岩澤富）

●卒業以来半世紀を経て、再び青春に還る。それぞれの人生に彩りを深めて。人生の今後に思いを馳せつつ語らい、楽しく編集作業を完了。出席あまりなく申し訳なし。多謝。（小林洋）

●増補別冊の完成は、母校創立百周年を前に、三期の結束を更に強める快挙です。昔の写真に写っている仲間の、顔と名前を一致させる手伝いをしただけなのに申し訳なく思っています。（菅間）

編集室から

『おーい、楠の木よ』のおかげで大勢の級友が発見できた。そしてそのおかげで増補版の話が具体化し、母校百周年の良い記念となったことは嬉しいことだ。こんどはこの増補別冊が果たして何人の級友の発見につながるかという楽しみと、七十歳を待たずに増補版を出せたことで七十歳、喜寿の続篇、続々篇を出す大義名分が残ったことになる。

『おーい、楠の木よ』も、あと数ページで累計千ページというところまで来た。千ページの山を超えるのは七十歳でも喜寿でも良いではないか。「過去を振り返る暇もない」人がいるのは、それはそれで嬉しいことだ。しかし我々の過去には振り返るだけの価値がある。またもし「ネタ」が足りなければ新しく作れば良いんだ。幸い我々三期生には年齢も屁ったくれもない。明日の次はまた明日であり、そのまた次も明日だ。それが延々と続くだけのことだ。簡単なことではないか。

続篇、続々篇を出すまで、みんな元気で頑張って行こう。

ただ、編纂に限って言えば、やや、ヨレヨレの感じもなくはなかった。やはり三期は元気だと言っていても、一年は一年二年は二年、それなりには駑馬の誹を免れないというのも実感だ。仕事は遅くなるし、集中力もおかしくなる。前回は楽にこなした徹夜も、ちょっと続くと応える。しかも、校正では平岡君を欠いた分だけでも大変だった。まったく、編集の期間だけでも良いから、ちょっと出て来て手伝って欲しいなと思ったくらいだ。

この別冊自体はページ数こそ前回の三分の一だが、編集の手応えは前回に匹敵するものがあった。もし、この別冊の出来が前回より劣っていたとしたら、それは我々自身の加齢の他に、平岡君を欠いたせいであり、もし勝っていたら、それは阿部君のパソコン入力、いつの間にか現場に巻き込んでしまった西川君、岡田君、そして校正にご協力くださった宮崎君の友人、榊原昭夫氏のお陰である。末筆ながら感謝を捧げたい。（青柳）

●編集委員・役員の方々のご努力に感謝。欠席が多く申し訳ない。六月六日の同窓会（東上線担当）には充分協力させて頂きます。我々の生きている良い思い出が後世に残ることはうれしいです（新藤）

●文集のお陰で拙文にも登場した思い出の人、真崎大尉と五十年振りの対面が出来た。「さよなら」が人生と言った人がいたが、「再会」こそ人生無上の喜び。同級生との再会も同じです。（柴崎）

●セピア色の懐古記、彩りに満ちた現況記、それぞれのドラマを興味尽きず読ませて頂いたが、増補別冊で一応のピリオドとなり感無量だ。さて私の楽章はどう完結するのだろうと思ったり。（金島）

●編集会議後の一杯がなくなり寂しい。前刊の後に鬼籍に入られた友の追悼文を載せるとは夢にも思わなかった。人生無情なり、されど残りし者でその分、有情に厚く生きたいものです。（川合）

●昭和二十年から少年期の六年間、あの楠の木の門をくぐった仲間が六十歳で「おーい楠の木よ」、六十五歳でその増補別冊も作った。これからも健康で七十歳で何をやるかを語り合おう。（宮崎敏）

●六十五過ぎても、まだ「隠し事？」が多いのか、女の話も恋の話もない。またしてもキレイ事だけの文集になってしまった。でも素ッ裸になれない分だけ我々もまだ若いってことかな。（青柳）

斎藤守弘　本 343
佐久間幾雄　本 564
佐々木雄司　本 436　増 38
佐々木良祐　本 294
沢田　明　本 335
塩入良善　本 256
○柴崎　明　増 98
柴崎建治　本 口扉 140
柴田五郎　本 345
島田真三　本 43
清水良平　本 座、144、610、716　増 67
新藤邦泰　本 座 278
菅間　昭　本 21、257、716　増 104、171
須川賢司　増 102
鈴木淳一　本 151
鈴木徹也　増 136
○鈴木俊雄　増 39
関口英輔　本 522
関根憲治　本 489
関根保雄　本 283
(タ行)
高橋幸男　本 149
高山恵介　本 554
○竹内春男　増 95
竹沢　靖　本 206
武長洋平　本 173
田島晃夫　本 203
田中　修　本 417
☆田中　魁　増 28
田中　崇　本 234
谷　巌　本 323
田村武男　本 574
○丹沢鋭次郎　増 69
○津坂宗茂　増 96
豊泉正次　本 311
豊田　孜　本 327
(ナ行)
中　秀男　本 236
中　義智　本 243
中内洋一　本 118
○中沢益次郎　増 74
中島喜三郎　本 248
中島正博　本 481
中田仁成　本 583
中村生秀　本 4、座、470　増 1
双木貞夫　本 251
○長江不二男　増 50
長島恒雄　本 座、391
永島俊三郎　本 180
☆永田和夫　増 26
西川　博　本 座、189、610、716
沼田芳造　本 座、250　増 79
根岸　宏　本 353
根本暎男　本 120
野口八郎　本 192
(ハ行)
橋本正一　本 524
○長谷川 栄　増 82
畑喜千松　本 129、419
早川昇一　本 389
★原　悦子　本 33
●原　武　本 29
○原島　淡　増 132
半田　登　本 285
○馬場尚世　増 118
東　敏雄　本 座、108、716　増 43
○日新　豊　増 100
平井　功　本 351
★平岡昭子　増 46
●平岡泰之　本 座、377、717　増 48
○平岡義男　増 77
比留間和夫　本 21、365
笛木勇三　本 316
福田　実　本 56
府瀬川忠芳　本 368
○細沼利輔　増 101
細谷哲夫　本 372
堀　陽　本 座、443、716
(マ行)
○前田行雄　増 93
正木一男　本 439
益子弘道　本 27、412、716
松岡章次　本 見返、21、座 84、460、618、666、716　増 164、198
松木　信　本 550
松平　理　本 210
☆松平静江　本 口扉
松村　久　本 199
松村祐二　本 40、座、133、370、716　増 3
松本英夫　本 262
丸田邦夫　本 225
丸田謙三　本 124
水口重雄　本 21、座、399、610、716　増 63
水野洋策　本 137
水村博光　本 396、515
道又正達　本 426
★三友久子　増 26
●三友善夫　本 39
宮崎敏昭　本 座、222、423、717　増 148、166、173
宮崎義宣　本 430
宮寺　威　本 332
村山英夫　本 177
村山祥男　本 212
桃井良之　本 383
森岡　昇　本 474
○森下貞夫　増 62
森田　賢　本 591
森田重敏　本 21、113
森田利寛　本 374
守谷　互　本 537
(ヤ行)
柳下　満　本 344
○安田孝一　増 86
柳沢　隆　本 310
柳田径伸　本 581
山崎孝雄　本 403
山下文司　本 401
○山田和夫　増 125
山田和宏　本 座、232　増 154
○吉川紀一　増 89
吉崎　聡　本 487
吉田景美　本 59
吉田浩一　本 315
●吉野正武　本 245

(計 201名)

「おーい 楠の木よ」本編、増補別冊 **執筆者総さくいん**

三期以外 ◎＝恩師 ☆＝ご家族・ご遺族(敬称略・50音順)

秋山康政 増 19
◎石川正明 増 9
石丸 寛 増 15
磯貝孝子 増 18
◎大川明治 増 9
大山富士夫 増 25
◎岡田幹雄 増 8
小川 正 増 17
鎌田 斌 増 16
◎北野茂夫 増 12
◎木村信寿 増10 180
☆後藤瑛子 増 13
小林茂吉 増 23
小山誠三 増 21
笹崎能輝 増 15
鹿間恭子 増 18
渋谷 健 本 1
島田道郎 増 17
庄山 愿 増 25
◎椙田英太郎 増 9
杉林 篤 増 25
◎鈴木睦雄 増 10
鈴木秀明 増 23
鈴木良栄 本 2
高橋雅雄 増 24
◎田中正雄 増 11
長島猛人 増 23
☆那須大輔・代増 9
西澤 孝 増 22
◎原田節二 増 11
☆平山和子 増 12
広田一雄 増 21
松田源治 増 26
☆間中美津子 増 14
水沢 周 増 23
山田恒雄 増 17
☆横田稲吉・代増 11
◎吉川静雄 増8 181
吉川勇一 増 27
(計 39名)

三期 (家族含) ○＝初原稿 ☆＝ご家族 ●＝物故者 ★＝ご遺族 座＝P74 座談会

(ア行)
相沢俊孝 本 265
青木勘輔 本 座、510 増 2
青柳安彦 本 座、21、46、452、610、640、650 豆事典
増 目次、106、139、168、196
青山 幹 本 227
赤田康二 本 305 増 36
秋山輝一 本 408
浅井敏彦 本 329
朝久野貞郎 本 座、155 増 73
○浅倉 昭 増 59
浅見茂男 本 312
阿部新一 本 座、526、610、716 増 202
荒田光男 増 75
新井貞夫 本 505 増 71
●新井澄夫 本 477 増 52
新井淙平 本 241 増 68
新井治雄 本 330
●飯田清司 本 253
五十嵐統祥 本 496 増 44
五十嵐甫 本 281
●石井精治 本 493
石井保行 増 128
○石倉俊治 増 114
石田照男 本 348
伊藤 明 本 414
伊藤純夫 本 545
岩澤富世 本 35、534、716
○臼井 龍 増 135
内沼一雄 本 542
宇都野正章 本 511 増 71、170
内海俊郎 本 21、座、297
浦部俊久 本 406
江原 襄 本 409
遠藤公平 本 193
大川 解 本 593、21
●大澤米吉 本 24
●大島和道 本 35
☆大野礼子 増 27
大野春雄 本 507
大野良三 本 装丁 口扉、目次カット、座、228、716、720
増 見返、装丁、161、166
大山勝地 本 164
岡田立彦 本 320
小川 章 本 187
小川司郎 本 483
荻野英夫 本 376
奥隅英夫 本 560
奥田 誠 本 570、716
奥平守男 本 556
小熊忠三郎 本 座、21、160、259、716
小沢孝志 本 263
●小沢昭治 本 287
小鷹邦夫 本 448 増 99
★小鷹文子 本 72
小高省三 本 487
小沼達之助 本 573
小野則彦 本 座
○小畑温治 本 424
(カ行)
糟谷 熊 本 589
潟沼 稔 本 585 増 152
加藤 健 本 566
加藤敏一 本 417
加藤 博 本 308
加藤康夫 本 532
○角谷文昭 増 81
金島壯行 本 座、68、716 増 149
金子勇二 本 64
金子武司 本 339
加畑 栄 本 261
川合敬三 本 324 610 増 40
川崎 匡 本 546
岸 智 本 218
喜多 弘 本 358
○橘田敏之 増 129
君塚 功 本 201
○木村定雄 増 91
★越 博子 増 26
小島一雄 本 582
小林賢造 本 175
小林洋左 本 290、610、716
(サ行)
斉木敏雄 本 482
斎藤賢治 本 167
斎藤清一 本 502
斉藤 恒 本 座 598、716 増 120
斎藤弘行 本 213 増 170

表紙のことば

大野良三

本年三月、川高に合格した近隣の生徒が初めて見学に行った時、大きな楠の木にあたたかく迎えられているようで大変魅力的な学校だと話していた。

卒業して五十年、私の記憶の中で育っている楠の木を描いた。来年は創立百周年。だが楠の木にとっては五十年、百年はへっちゃらだ。二百年、三百年と雄々しくたくましく生き、川高を、そこで学んだ人々を見守っていくであろう。

おーい、楠の木よ　増補別冊

頒価　二五〇〇円

平成十年六月一日発行

埼玉県立川越高等学校 第三期生
還暦の文集刊行委員会

代表者　中村生秀

編集　青柳安彦

制作　宮崎敏昭

事務局　西川博

〒350-0035 川越市西小仙波町一ノ七ノ一七

電話　〇四九二・二二・二九八八

印刷　東京写真植字株式会社

、阿部、岡田、西川、松岡、松村、宮崎の７人で氏名を入れてみました。
、平成10年１月、東上線の新年会でも多少チェックを入れました。
の分かれたのは多数決で強引に決めたけど、間違いも多いでしょう。
、訂正版ができるかわかりませんが、訂正があったら知らせてください。
部、バスケ、陸上がゴッソリ抜けています。映画でも見に行ったのかな？
浅井・小野・川合・菅間・谷/新井治・石田・平井・比留間・峰岸/中島・平岡泰・宮崎)

S23.4～7(高1・1学期)上野、都立美術館前

(本文、扉写真参

正誤訂正用紙

必要部分を切り抜いて当該個所に貼り込んでください。
（自信のないかたは、コピーを取って切り抜いてください）

A　横田ゲジ先生の左は井関先輩。右は橋本トラさん。後列左→原、細渕、青柳
後２列左→４人目原島、右へ斎藤（忠）新藤、宮崎（義）、相田、１人おいて岡部○○、富沢エックス大人、前２列左→３人目岩澤（富）、大山、田村、○○、山本（スコ）、加藤（康）、山田（和夫）、豊田
（S.21.3 講堂前で）

B　（空欄に貼って線を引いてつないで下さい）
[illegible]

C　S.22? 講堂前/手前から小林（洋）、市村、長谷川、君塚
村山（祥）、野口、西海、西勝、吉川

D　前左→忍田、横田、掛原、佐藤、木村（冉）、日新本橋、木村（信）、石川、野口、望月の諸先生
２列左→芳村先生、西川先生、田口、白井先生
新藤、葩島、阿川、半田、君塚、市村、金子、（武）大山、原（泰）、柴崎、吉武、原田先生。
後列中央、背の高いのは佐々木（雄）。
その他後列に武長、杉本、平岡、小峰、田中（修）小鷹（邦彦）、中島、中段に岡田（立）、松村、綿貫水口、豊田、土金、細谷など

E　仮装行列（山のかなた）
沼田、稲生、飯田（清）
沼田、この一発で名物男に…

F　万能選手、五十嵐（統）のハイ・ジャンプ（正面跳び）

G　（S.23.11）競技部部室の前で
前左２人目、宮崎、窪田氏、五十嵐（竹村氏、右端、柴藤）
中央=木村、松本両先生、後左→平岡、橋本、右３人目、中島

H　（11.14）四日市駅で　原（泰）、中田、浅井
新藤、岡田、神田、大野（良）

I　校門で　左→松岡、村山、長谷川、中沢、糟谷、吉野、東
内沼、葩島、水村、青木。前→木島先生

J　3B同窓会(掛原先生を囲んで)
後左→小川、中村、畑、根本、竹内、青木
柳沢、牛窪、塩野、豊泉。前左→越、
大沢、笛木、掛原先生、清水(正)、橋本
市村、柳下(但し女性は除く)
(S.30前後、川越にて)

K　むらさき会：大澤(米)夫妻結婚祝い(S.36)
後左→田中、畑、宮崎、根本、高橋(幸)、小島、中村
柳田、益子

L　後左→松岡、山崎、村山(利)、新井(治)、
松村、正木、江原大沢(弘)、朝久野、
中村、柴崎、水口、糟谷、加藤(健)沼
田、清水(良)、小熊、宇都野、大澤、
桃井、平岡(泰)
前左→青木、菅間、斉藤、西川、宮崎(敏)、
新井(貞)水村、奥田、堀、青柳、山田
(和宏)

M　勝利の歌旗こそ翻れ(菅間説)
正気のこそ蘇れ(森田賢説)

N　遡りますが

N　遡りますが

O　風防ガラス

P　ベ平連(ベトナムに平和
市民連合)

Q　「mens conscia recti」

R　「徳さん」に絞られた汗と涙の
結晶。3期全員の「宿題」句集
(昭和50年編集発行)
編集、大澤(米)、益子、山崎、松木

S　手摺に倚りながら

T
S.23.春　教職員　(敬称略)　(写真提供　西澤孝先輩)
後列左→中島恒子(事務)、長谷川(事務)、佐藤
後2列左→望月、野口、岡田、仲、関根、山口、田中、関根(事務)、本橋、河盛
前2列左→白井、島崎、秋葉、横田、忍田、松本、芳村、那須、掛原、原田、大護
前左→石川、鈴木(睦)、松田、市川、木村(冉)、日新、小島、西川、佐々木(信)、鈴木(楽)、佐々木(太)

U　日本陸連より表彰　V　俳号＝沓潮　W　H1.5.26歿(73才)　X　(桃井氏之・図)